

日本近代における日本漢文学史論

二〇一七年十二月

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科

沈 日中

目次

序章	1
第一節 研究動機	1
一、中国大学日本語科の日本漢文学に関する教育研究の欠落	1
二、漢文学を論考する所以	3
第二節 探求しようとする内容	5
一、三人の日本漢文学史論を論考する理由	5
二、探求しようとする内容	9
第三節 本研究の位置付け	9
一、究明すること	10
二、日本漢文学史論を論考する意義	11
第一章 芳賀矢一の日本漢文学史論	13
第一節 芳賀矢一の学術生涯	13
第二節 『日本漢文学史』を論考する動機と目的	16
一、論考する動機	16
二、論考する目的	18
第三節 芳賀矢一の日本漢文学史論	27
一、日本漢文学史の概観	27
二、上古：日本漢文学の曙光	39
三、平安時代：漢文学の第一盛期	61
四、近古：僧侶の漢文が牛耳る	87
五、近世：漢文学の第二盛期	100
第二章 岡田正之の日本漢文学史論	129
第一節 岡田正之の学術生涯	129
一、岡田正之の学術年譜	129
二、『近江奈良朝の漢文学』：日本漢文学の論述	131
三、岡田正之日本漢文学を論述する所以	132

第二節 岡田正之『日本漢文学史』について	135
一、推古朝：漢文の諸文体が備えた	137
二、懐風藻は古詩の精髓である新文学	142
三、万葉集は漢文学の精髓	146
四、近江奈良朝：日本漢文学の少壮期	148
五、平安前期は漢文学の隆盛期	150
六、平安朝後期：日本漢文学の老衰期	155
八、南北朝と室町朝の詩文は王朝に凌架し、徳川時代の文運を促す	158
第三節 岡田正之の日本漢文学史論	160
一、中国文学に比する	161
二、日本漢文学の盛衰論	180
三、縉流文学を高く評価	183
四、徳川時代の漢文学を論述せず	186
第三章 神田喜一郎の日本漢文学史論	189
第一節 神田喜一郎の生涯	189
一、神田喜一郎の学術年譜	189
二、まとめ	193
第二節 「日本の漢文学」について	194
一、日本漢文学の定義	194
二、日本漢文学の特質：日本漢文学の二面性	194
三、日本漢文学に対するとらえ方	195
第三節 日本漢文学史	196
一、飛鳥時代の漢文学：日本漢文学の黎明・萌芽期	196
二、奈良朝の漢文学：日本漢文学の成長期	199
三、平安朝の漢文学：日本漢文学の最初の盛期	205
四、五山時代の漢文学：日本漢文学の第二の盛期	215
五、江戸時代の漢文学：日本漢文学の第三の盛期	218
六、明治の漢文学：日本漢文学最後の繁盛と其の衰滅	236
第四節 日本漢文学における中国文学の受容	241

一、飛鳥時代の日本漢文学における中国文学の受容	245
二、奈良朝の漢文学における中国文学の受容	250
三、平安朝の漢文学における中国文学の受容	254
四、五山時代の漢文学における中国文学の受容	261
五、江戸時代の漢文学における中国文学の受容	264
六、明治時代の漢文学における中国文学の受容	267
第五節 日本漢文学の日本独自の展開	270
一、平安の漢文学の独自性	270
二、五山時代の漢文学の独自性	272
三、江戸時代の漢文学の独自性	272
第六節 神田喜一郎の日本漢文学論	273
一、日本の漢文学の定義	273
二、日本漢文学の特質：両面性	273
三、日本漢文学の時代区分論	274
終章：近代における日本漢文学史論	281
第一節 日本漢文学に対する定義	281
一、三人の日本漢文学に対する定義	281
二、三人の日本漢文学に対する定義の異同	284
第二節 日本漢文学史の時代区分論	285
一、三人の日本漢文学史に対する時代区分	285
二、三人の時代区分論の相違について	290
第三節 代表的漢文学者と作品	293
一、代表的漢文学者と作品	293
二、まとめ	299
第四節 本論の究明したことと今後の課題	299
一、本論の究明したこと	299
二、研究成果	305
三、今後の課題	305
主な参考文献	307

序章

第一節 研究動機

一、中国大学日本語科の日本漢文学に関する教育研究の欠落

日本語学科の教育は言語、翻訳、現代文学の講読、日本文化概論の講義を重視する。日本語文学を教育研究しようとするならば、日本の古代から近世にかけての文学を論考しなければならない。しかし、中国の日本語学科の現状を精査すると、日本文学史の教科書と研究があったにしても、不備である。

本論はまず中華人民共和国教育部学位と院生教育発展センター（China Academic Degrees and Graduate Education Development Center、CDGDC と略称する）が 2012 年に公表した「全国大学学科評価結果」の「外国言語文学」ランキング¹により、中国大学の「外国言語文学」で全国トップ 3 の北京大学、北京外国語大学及び上海外国語大学を例として、その三大学の日本語科のカリキュラムを考察してみた。考察した結果は下記のとおりである。

北京大学外国語学部の「学科別カリキュラム（2014 版）」²、北京外国語大学日本語科 2014 年のカリキュラム³、上海外国語大学の「学科別カリキュラム」⁴を考察してみよう。その三つの大学日本語科のカリキュラムから見ると、専門モジュールにおける主要な専門的科目として主に基礎日本語、聴解、会話、読解、日本語文法、上級日本語、翻訳、通訳、日本語の作文、日本語概論、日本文化概論、日本文学史等が挙げられる。

また、中国で日本語教育の基準とされている、中国「教育部高等院校外語專業教学指導委員会日語組」⁵が編著した『高等院校日語基礎段階教学大綱』（大連：大連理工

¹ <http://www.cdgdc.edu.cn/xwyyjsjyxx/xxsbdxz/mtjpp/index.shtml>（閲覧日：2017/9/12）

² <http://sfl.pku.edu.cn/show.php?contentid=2792>（閲覧日：2015/7/4）

³ <http://japan.bfsu.edu.cn/archives/1336>（閲覧日：2015/7/4）

⁴ http://infoadm.shisu.edu.cn/_s4/4b/c4/c60a19396/page.ps pp.154～171（閲覧日：2015/7/4）

⁵ 中国教育部の大学外国語学科指導委員会日本語組、現在は教育部高等院校外語專業教学指導委員会日語分会（教育部大学外国語学科指導委員会日本語分会）と言う。

大学出版社、2001) 及び『高等院校日語高年級段階教学大綱』(大連: 大連理工大学出版社、2001) により、中国大学においての日本語科の「教学目的」は次のように言っている。

引导学生**扎实学习**，掌握**日语基础知识**；训练听说读写的基本技能；培养**实际运用语言的能力**；丰富学生的日本社会文化知识，培养文化理解能力，**为高年级阶段学习打下坚实的基础**。⁶

日本語訳文：学生にしっかりした日本語に関する基礎知識をマスターさせること、聴解、会話、読解、作文技能をトレーニングさせること、日本語の言語能力を養成すること、学生の日本社会文化に関する知識を豊富させ、文化理解の能力を養成し、上級レベル段階の学習のためにしっかりした日本語基礎を築くことである。

その考察結果からみて、全体的に学生の日本語力の向上を目的とする科目が多く、言語学に関する科目も少なくない。つまり、現在中国の大学における日本語科の教育現状は、言語学を中心とし、日本文化も少し触れ、日本文学に関しては、主に日本近現代文学であり、日本古代中世文学の部分が少ないということである。

上記三大学の公表した日本語科カリキュラムにより、北京大学日本語科は「日本文学史」という授業、北京外国語大学日本語科は「日本文学解読」⁷及び「日本近現代文学史」⁸という授業、上海外国語大学日本語科は「日本近現代文学史」という授業が設けられている。

日本語科なので、日本語会話、読解、聴解等を中心とする日本語力を身に着けるのは当たり前のことであるが、このように、言語力、言語学を重視、文化、文学を軽視する日本語科における日本語教育は不完全だと思う。日本語科の教師として、このような状況を成り行きに任せたら、中国大学の日本語科における日本語教育が一方に偏るおそれがあると切に感じている。明治23年(1890)、北村透谷により、「文学史の第一着」と評された、三上参次と高津楯三郎による『日本文学史』が次のように曰く、

⁶ 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日語組編：『高等院校日語专业基础阶段教学大纲』、大連：大連理工大学出版社、2001年出版、p. 1。

⁷ <http://japan.bfsu.edu.cn/archives/1336> (閲覧日：2015/7/4)

⁸ <http://japan.bfsu.edu.cn/archives/1451> (閲覧日：2015/7/4)

文學は、邦國人民の盛衰興亡に繋がることの至大なるを見る。故に、文學史は、文學の起源發達を叙するとともに、つとめて、其中に潜伏せる元氣の活動せし跡を示すべし。是を以て、文學史は、即ち文明史なりと云へる学者あり。⁹

故に、日本語科において、日本語力を向上する一方で、日本文化、日本文学、日本思想に関することに関心を寄せるのも重要であろう。日本文学、日本文学史を軽視したら、日本の盛衰興亡に繋がることを究明することができないし、文学に潜伏する各種の活動の跡も訪れることができなくなる。

二、漢文学を論考する所以

そういう日本の盛衰興亡に繋がる日本文学を探求するために、私の修士論文は、『中国留日作家の私小説受容研究』を研究テーマとして、日本近代文学におけるユニークな存在である私小説について考察し、また当時中国から日本に留学に来て、後中国の文壇に立って、作家として活躍した人たちの作品における私小説受容について探求した。つまり、修士論文は主に日本近現代文学を中心として論考してきた。

明治維新後、西洋の思想や文化を取り入れる文明開化が推進され、文学にも大きな影響を与えたが、中村光夫は『現代日本文学史』の「明治」の序において、次のように曰く、

露伴も紅葉も、前代の戯作の糟粕をなめる人でなかつたのは云うまでもありません。しかし西鶴の發見から出發した彼等の小説が、着想の上でも文體の點でも、そのころすでにさまざまな形で紹介されていた西洋の近代小説より、江戸の文學に近かつたことは事実です。¹⁰

修士段階の研究を通して究明したのは、元々日本近現代文学の源流がその前代である徳川時代の文学、あるいは日本の古代文学から来たものである。そして日本文学の流れを遡って、日本の古代から近世、ひいては近代までの日本文学は隣国としての中国の文学から受け入れ、独特な即ち、「日本的」な展開をたどり着いたことが分かって

⁹ 三上参次、高津鉄三郎：「総論」『日本文学史 上巻』、東京：金港堂本店、1890年出版、p. 2。

¹⁰ 中村光夫、白井吉見、平野謙：「明治 序」『現代日本文学全集 別巻1 現代日本文学史』、東京：筑摩書房、1959年、p. 17。

きた。

ブリタニカ国際大百科事典により、日本文学の形態としては、詩歌（例えば歌謡、和歌、連歌、俳諧、漢詩など）、小説（例えば説話、物語、御伽草子、浮世草子、草双紙など）、戯曲（能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎ほか）、日記、随筆、評論に分けることができる。そのなかには、日本語で書かれた文学もあるし、漢文で書かれた文学即ち漢文学もある。神田喜一郎の言っているように、『日本の漢文学』なるものは、じつに世界文學史上、まったく他に類例を見ないユニークな存在と言えよう。¹¹例えば西洋において、フランス人の書いたイギリス語の小説とか、イギリス人の作ったフランス語の詩とかいうものが存在しないではないが、しかし、そういった作品は、単なる好事の徒が、たまたま自己一個の興味にまかせて創作した離れ離れの孤立した作品に止まり、「日本の漢文学」の如く国民文学の中に一つの流れを形成するものに発展していないので、全く認められていないのである。

それに、「日本の漢文学」は二重性格、即ち両面性がある。「日本の漢文学」というのはその作者が勿論日本人であり、その内容に盛られているものも当然日本人の思想なり感情であるため、本質的には間違いなく日本文学に属する文学である。一方では、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。¹²要するに、日本の漢文学は中国文学の影響を受け入れながら、日本漢文学独自の発展を成し遂げてきたものである。

また、昔の国学者の偏見より漢文を排斥することと、西洋文学史からの影響で自国語の文学のみを扱うこと、という二つの原因によって、従来の国文学史において、漢文学は排除されている。漢文学の国民に及ぼした影響が純粹の国文学より大きいゆえに、漢詩文を中心とする日本漢文学を日本の文学から除くならば、芳賀矢一が言っているように、「日本國文學の研究といふことが完全に行はれないことになる」¹³。

上述したように、中国大学の日本語科における日本語教育の言語学を重視し、日本文化や日本文学、とりわけ日本漢文学を軽視するという欠落と、日本文学をより完全

¹¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.132。

¹² 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.133。

¹³ 芳賀矢一著、佐野保太郎編：『日本漢文学史』、『芳賀矢一遺著』、東京：富山房、1928年10月15日発行、p.2。以下は芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年と略する。

的に研究するため、本論は近代日本における日本漢文学史論について論述を展開していきたいと思う。

第二節 探求しようとする内容

本論は日本近代の漢文学者である芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の「日本漢文学」に関する著作を整理して分析した上に、それぞれの日本漢文学史論を論考していきたい。

一、三人の日本漢文学史論を論考する理由

日本近代漢文学者の『日本漢文学史』著作一覧表

漢文学者	著作	出版年月	出版社	内容概観
岡田正之 (1864～1927)	『日本漢文学史』	1929年9月10日発行	共立社書店	朝神文学時代～緇流文学時代
		増訂版：1954年12月10日発行	吉川弘文館	
芳賀矢一 (1867～1927)	『日本漢文学史』	1928年10月15日発行	富山房	上古～近世の漢文学
安井小太郎 (1858～1938)	『日本儒学史』 (後半は『日本漢文学史』)	1939年4月10日発行	富山房	近江奈良朝時代～五山時代
牧野謙次郎 (1863～1937)	『日本漢学史』	1938年10月2日初版発行 1943年12月30日再版発行	世界堂書店	第一期（上古・平城朝・平安朝）～第四期（明治時代）
久保天随 (1875～1934)	『日本漢学史』	1905年	早稲田大学 出版部蔵版	王朝時代～戦国時代
神田喜一郎 (1897～1984)	『日本の漢文学』	1984年10月15日	同朋舎	飛鳥時代～明治時代の漢文学

市川本太郎 (1898～1997)	『日本漢文学史概説』	1969年4月15日発行	株式会社大 安	大和時代～江戸時代
戸田浩暁 (1910～?)	『日本漢文学通史』	1957年3月25日発行 1980年3月20日訂正9 版発行	武蔵野書院	大和時代（宮廷文学 時代）～明治大正時 代
緒方惟精 (1907～1983)	『日本漢文学史講義』	1961年10月20日初版発 行	評論社	大和時代（宮廷文学 時代）～明治時代の 漢文学
猪口篤志 (1915～1986)	『日本漢文学史』	1984年5月20日初版発 行	角川書店	上古の漢文学～大 正・昭和の漢文学

(表1 筆者作成)

上記の一覧表のように、日本漢文学史に関する著作を著した漢文学者は岡田正之、芳賀矢一、安井小太郎、牧野謙次郎、久保天随、神田喜一郎、市川本太郎、戸田浩暁、緒方惟精、猪口篤志である。そのうち牧野謙次郎、久保天随の著した著作が『日本漢学史』と名付けられたが、その内容は主に日本漢文学の歴史を論考するので、日本漢文学史の研究対象とする。

岡田正之（1864～1927）の『日本漢文学史』はその門下生である長澤規矩也・山岸徳平らの整理に基づき、1929年に遺稿として共立社書店により出版された。1954年にその増訂版が吉川弘文館により刊行されて現在に至るまで読み継がれている。その内容は朝紳文学時代と緇流文学時代との二篇となり、漢字漢書の伝来より、室町の末期五山僧侶が江戸文学の基を開くに至るまでである。第一篇を朝紳文学時代として推古朝より平安朝までを四期に分けられ、第二篇を緇流文学時代とし、鎌倉時代より室町時代までを四期に分けられている。

芳賀矢一（1867～1927）の『日本漢文学史』は明治41年度及び42年度の講義に基づき、門下生である佐野保太郎、高木武、大岡保三、柚利淳一のノートを参酌したうえで、遺稿として昭和3年（1928）に富山書房により出版されたものである。最初に著作を出版したのは芳賀矢一である。この『日本漢文学史』は、明治41年度（1908）及び42年度（1909）

の講義である¹⁴。

但し、最初に大学で日本漢文学史を講義において講述することについては、陳福康がその著書『日本漢文学史』において「日本で一番早く大学で日本漢文学史の講義を担当するのは芳賀矢一教授である」¹⁵という論述があるが、そうではないと思う。岡田正之と同じ東京帝国大学古典講習科卒業した瀧川亀太郎は岡田正之の『日本漢文学史』における序に「明治40（1907）年9月21日 東京帝国大学文科大学助教授を兼任し、日本漢文学史を担当し、上古、中古、近古、近世の四章に分け、漢文の伝来以後徳川時代に至るまでの始末を講述」¹⁶という論述がある。その故に、本稿では、近代以来日本漢文学史に関する研究において、一番初めに著作を出版したのは芳賀矢一であるが、最初に大学で日本漢文学史を講述したのは岡田正之教授である。

安井小太郎（1858～1938）の『日本儒学史』は前述の表のように、二つの内容を含んで、後半は『日本漢文学史』である。その「凡例」の一に言っているように、この書は、安井が東京文科大学及び大東文化学院における講義の草案にして、その間幾度か補訂を経たものである。古代から五山僧侶の文学までの内容を叙述した。

前述のように、牧野謙次郎（1863～1937）と久保天随（1875～1934）とも『日本漢学史』の著作を以て日本漢文学の歴史と発展などの内容について論述してきた。牧野謙次郎の『日本漢学史』は作者が昭和の初年から毎年早稲田大学高等師範部で行っていた講義ノートを基礎として編纂したものである。その「例言」の一の言っているように、この書は漢学史と題するも、内容は文学、政治、経済、教育等日本の文化と儒京都の関係を説いたものであり、草稿には「日本漢学文化史」と題したものがある。主に漢学東漸の時期から明治時代までの漢学、漢文学を講述した。久保天随の『日本漢学史』は儒学、詩学等の歴史を合わせて「漢学史」と汎称したものであり、上世期の漢学講習時代から戦国時代武人の漢詩文までの漢文学史を叙述した。

神田喜一郎（1897～1984）の『日本の漢文学』は最初に「岩波講座日本文学史第16巻：一般項目」の一冊として1958年岩波書店によって出版されたのである。後『神田喜一郎全集』第9巻の『墨林閑話』に収録されて、1984年株式会社同朋舎によって出版さ

¹⁴ 芳賀矢一「凡例」『日本漢文学史』富山房1928年。

¹⁵ 陳福康：『日本漢文学史』上巻、上海：上海外语教育出版社、2011年。p.28。

¹⁶ 瀧川亀太郎：『日本漢文学史』序『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立書店、1929。

れた。その文末の「参考文献」リストにより、神田喜一郎の「日本の漢文学」が芳賀矢一の『日本漢文学史』（『国語と国民性』と合刊 1928年 富山房）、岡田正之の『近江奈良朝の漢文学』（1929年 東洋文庫）『日本漢文学史』（1929年 共立社書店、補訂本 1954年 吉川弘文館）などの文献を参照したことが分かってきた。神田喜一郎は日本の漢文学を日本文学の一環として捉えるとともに、それを中国文学の支流として捉えるべきである日本漢文学の二重性格、即ち両面性という日本漢文学の定義、時代区分論、中国文学からの影響と独自の発展などの面について、具体的且つ全面的に論述を行った。

市川本太郎（1898～1997）の『日本漢文学史』は大学において数回にわたって講義した原稿を加除修正して、漢文、国文学の学生に対し一箇年（週二時間）教授する教科書として編纂したものである。主に大和時代から江戸時代の漢文学史を叙述。

戸田浩暁（1910～？）の『日本漢学』もと玉川大学通信教育部の教科書として執筆した「漢文学」全四冊の第四冊『日本の漢文学通史』はもと玉川大学通信教育部の教科書として執筆した「漢文学」全四冊の第四冊『日本の漢文学』を補訂改題したものであり、大和時代（宮廷文学時代）～明治大正時代の漢文学史を叙述。

緒方惟精（1907～1983）の『日本漢学史講義』は大和時代（宮廷文学時代）、平安時代（貴族文学時代）、鎌倉室町時代（僧侶文学時代）、江戸時代（士人文学時代・儒学文学時代）、明治大正時代の漢文学史を叙述した。

猪口篤志（1915～1986）の『日本漢文学史』は比較的全面的に上古から現代までの漢文学史を一貫して叙述したものである。その「凡例」の言っているように、本書の特色は数多くの作品資料を収録したことにある。読者がその文献資料入手の便宜をえられるものと作者は確信していると書かれた。

本論の研究対象である日本漢文学史研究の位置付けとしては、下記の通りである。芳賀矢一の『日本漢文学史』は日本漢文学史研究上初めての著作と言えるので、芳賀矢一を日本漢文学史研究の先駆とし、岡田正之は最初に大学で日本漢文学史を講義にして講述する学者であるので、岡田正之を日本漢文学史講述の啓蒙者とし、神田喜一郎は芳賀矢一と岡田正之の日本漢文学に対する定義、時代区分に基づき、より完備的な漢文学史論を成立させたので、神田喜一郎を日本漢文学史論の成立者としたいと思う。

二、探求しようとする内容

本論は上記三者の日本漢文学に関する著作を整理し、分析することを通して、以下の研究内容を探求して、近代日本における日本漢文学史論をまとめようと思う。

(一) 日本漢文学とは何か

本論は芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学に関する著作を整理し、三氏の日本漢文学に対する定義を探求しようとする。まずは、神田喜一郎の言っている漢文学の「二重性格」、いわゆる「両面性」を踏まえ、芳賀矢一と岡田正之それぞれの日本漢文学に対する定義を究明する。日本漢文学の定義を究明するには、中国文学からの影響と日本という土壌において「日本的」な展開を中心として考察する必要があると思う。

(二) 時代区分から見る日本漢文学史論とは何か

種々の原因で、三者の日本漢文学に関する著作の論述した日本漢文学史の時代範囲は異なっている。神田喜一郎の『日本の漢文学』は古代から日清戦争の頃まで、芳賀矢一の『日本漢文学史』は上古から近世まで、岡田正之の『日本漢文学史』は古代から室町時代にかけて、それぞれ各時代の漢文学を論述してきた。

本論は芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学に関する著作を整理し、三氏の日本漢文学史に関する時代区分論、つまり、時代区分の根拠と各時代における日本漢文学の特色ある発展とは何かということを究明しようとする。

(三) 漢文学の日本における独自の発展とは何か

漢文学の日本における独自の発展としては、中国文学からの影響を受け入れながら、日本という本土の土壌に、空海の漢文学作品である『文鏡秘府論』と『性霊集』、五山禅僧の漢文学が独特な存在とされることである。芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏も緇流文学の「日本的」な展開を重視するので、本論は三氏の日本漢文学史論に属する非常に重要な部分である「緇流文学」に関する論述を探求しようとする。

第三節 本研究の位置付け

一、究明すること

中国国内において「日本漢文学史」に関する先行研究としては、今のところ、山東大学高文漢教授の編著した『日本近代漢文学』（銀川：寧夏人民出版社、2005年）と上海外国語大学陳福康教授の編著した『日本漢文学史』（上海：上海外語教育出版社2011年）二つの日本漢文学に関する著作のみである。

高氏の『日本近代漢文学』は序言、第一章の明治漢文学復興の背景、第二章の明治前期における主な詩人、第三章の明治中、後期における詩壇、第四章の明治時代の文壇と、第五章の大正、昭和前期の漢文学という5つの章から構成される。日本漢文学の重要な発展時期である古代から近世にかけての漢文学については、論じていないことが分かってきた。

陳氏の『日本漢文学史』は3冊からなって、上巻は「第一章王朝時代」、「第二章五山時代」、中巻は「第三章江戸時代」、下巻は「第四章明治時代」というように分けられている。つまり、古代から明治時代までの漢文学を論述し、中国国内で初の史的な角度から、日本漢文学を論述する著作といえる。しかしながら、陳氏の『日本漢文学史』は主に各時代の見つけたあらゆる漢文学者の作品を集め、日本漢文学の定義、時代区分の根拠及び各時代において特色ある漢文学者或は漢文学作品などについては、ほとんど言及しなかった。北京師範大学の王向遠教授は次のように曰く、

写了许多一般化的、从别的书上也可以看到的知识或材料，或者故意使用通俗读物的架构和表述方式，而影响学术表达的严谨与科学，这恐怕是不足取的。¹⁷

日本語訳：一般的な、或は他のところからも読むことができる知識或は資料を集め、ひいては通俗的な読み物のような構成と論述方法を用いて、学術的な論考におけるの謹厳さ及び妥当性に影響を及ぼすことは不行き届きの点である。

その故に、本格的な『日本漢文学史』はある程度の日本漢文学史論に基づき、史的な角度から、中国文学を受容してから日本という本土に独自の発展を展開する流れを「日本漢文学史」の根本的な内容とするのは重要であろう。

¹⁷ 王向遠：「我国的日本汉文学研究的成績与問題」『東北亜外語研究』、2013（1）、p. 50。

本論の研究計画は、上述した高氏の『日本近代漢文学』及び陳氏の『日本漢文学史』と違って、『日本漢文学史訳注』や教科書としての『日本漢文学史』を編集して、それを以て中国大学の日本語科学生あるいは日本学研究界に真の『日本漢文学史』を紹介するには、いわゆる『日本漢文学史論』がむろん必要だという考え方である。つまり、日本漢文学史論を以て、『日本文学史』を編集する基礎として、ただの資料の集め、通俗的な読み物だけではなく、学術的な論考に基づき、史的な角度から、中国文学を受容してから日清戦争頃までの日本漢文学の発展する歴史を論考していきたいと思う。

そのため、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の「日本漢文学史」に関する著作を通して、それぞれの日本漢文学史論を究明して、近代日本における日本漢文学史論を得るのは本論の究明することである。

二、日本漢文学史論を論考する意義

博士号を取得した後、本研究を究明した近代日本漢文学史論をもとにして、『日本漢文学史』の教科書を編輯し、日本語科において、「日本漢文学」に関する専門課程を設けて、授業を行うことによって、学生がより全面的な日本語、日本文化、日本文学や日本思想等に関する知識をマスターできるように、日本漢文学あるいは完全的な日本文学史について日本語科の学生、中国の日本語学研究界に紹介しようと思う。

まずは、日本近代の漢文学者たち、例えば芳賀矢一、岡田正之、安井小太郎、神田喜一郎、緒方惟精、市川本太郎、猪口篤志などの日本漢文学に関する著作の主要論点を抜粋して、『日本漢文学訳注』という本を著したいと思う。

また、近代日本における日本漢文学史論に基づき、中国大学の日本語科に向ける『日本漢文学史』というテキストを編集して、「日本漢文学史」という授業の専用テキストとするのである。

第一章 芳賀矢一の日本漢文学史論

第一節 芳賀矢一の学術生涯

芳賀矢一（1867～1927年）は越前国福井生まれ、日本近代の国文学者である。父は国学者の芳賀真咲。第一高等中学校を経て、明治25年（1892年）に帝国大学文科（のちの東京帝大文学部）卒業し、大学院に入り、文学博士小中村清矩の指導を受けた。明治31年（1898年）に東京帝国大学助教授、1900年よりドイツに留学し、文献学を学ぶ。明治35年（1902年）に東京帝国大学教授に任じる。明治36年（1903年）に東京大学総長の推薦に基づき、文学博士が学位を授けられた。大正4年（1915年）帝国学士院会員を仰せ付けられた。昭和2年（1927年）2月6日死去。61歳。芳賀矢一はドイツの文献学を導入し、近代国文学研究の基礎を築き、国定教科書の編集にも関与した。著作に「国文学史十講」「日本文献学」「攷証今昔物語集」などがある。

芳賀矢一の年譜行状に関しては、芳賀矢一遺稿である『日本漢文学史』（富山房・昭和3年）に記載した「芳賀矢一略歴」『明治文学全集44』（筑摩書房・1984年）の「落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎集」に所載した「年譜 芳賀矢一」などを参考として略述するとおおよそ次のごとくになる。

慶応3年（1867）5月14日 福井市佐佳枝上町に生まれた。父は真咲、夙に古学に志し、平田鉄胤、橘曙覧に就いて学んだ。母は斯波迂僊の三女。

明治22年（1889）7月11日 第一高等中学校文科卒業、
東京帝国大学文科大学国文学科入学

明治25年（1892）7月10日 東京帝国大学文科大学国文学科を卒業し、
大学院に入った。

（文学博士小中村清矩の指導を受けた。）

明治27年（1894）9月14日 第一高等学校の国文の授業を嘱託された。

明治28年（1895）3月31日 第一高等学校兼高等師範学校教授に任じた。

- 明治 31 年 (1898) 12 月 14 日 東京帝国大学文科大学助教授に兼任し、博言学講座分担を命じられた。
- 明治 32 年 (1899) 1 月 28 日 高等師範学校教授に任じ、兼東京帝国大学文科大学助教授となる。
- 5 月 6 日 博言学講座分担を免じ、国語学国文学国史第四講座担任を命じられた。
- 明治 33 年 (1900) 6 月 12 日 文学士攻究法研究の為ドイツへ留学を命じられた。
- 9 月 8 日 国語国文学国史第四講座担任を免じられた。
- 明治 35 年 (1902) 5 月、ベルリン発。7 月、ロンドン発、帰朝の途に就く。8 月、帰国。9 月、第一臨時教員養成所国語漢文科講師を嘱託。9 月、東京帝国大学文科大学に任じられ、国語学国文学第二講座担任となる。爾来、大正 11 年 3 月退官に至るまで日本詩歌学、国文学史、国文学思想史、国学入門、国民伝説史、文学概論、日本文献学、日本漢文学史、歴史物語、源氏物語、国語と国民性、日本文法論その他の講義を毎年行う。
- 明治 36 年 (1903) 2 月 19 日 文部省編纂教科書の検閲を嘱託された。
- 4 月 2 日 東京帝国大学総長の推薦に基づき文学博士の学位を授けられた
- 5 月 8 日 国語調査委員会主査委員を命じられた。
- 明治 42 年 (1903) 12 月 1 日 漢文教授に関する調査を嘱託された。
- 大正 4 年 (1915) 3 月 24 日 帝国学士院規程第二条に依り、勅旨を以て帝国学士院会員仰せ付けられた。
- 大正 6 年 (1917) 5 月 26 日 国語学国文学第二講座担任を命じられた。
- 大正 7 年 (1918) 7 月 20 日 皇典講究所国学院大学拡張委員会委員を嘱託された。
- 12 月 22 日 国学院大学長に就任した。
- 大正 11 年 (1922) 7 月 27 日 帝国大学令第 13 条により、勅旨を以て東京帝国大学名誉教授の名称を授けられた。
- 昭和 2 年 (1927) 1 月 大正天皇の奉悼歌を作った。

2月6日 小石川区大塚坂下町自宅に歿した。享年61、12日
青山斎場告別式、護国寺墓地に葬った。

昭和3年(1928)10月 『日本文献学、文法論、歴史物語』『国語と国民性、
日本漢文学史』が遺稿として富山房より刊行され
る。

芳賀矢一博士の学術生涯を通して、東京帝国大学の講師、助教授、教授を歴任した
上に、大学で、国文学史、国文学概論、国文学思想史、文学概論、国学入門、日本文
献学、国語と国民性、日本漢文学史などを講じたことがあるのが分かってきた。

国文学の研究者として、「芳賀矢一略歴」『明治文学全集44』（筑摩書房・1984年）
の「落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎集」に記載した「解題 芳賀矢一」
により、芳賀矢一は日本近代国文学の開拓者であることは言うまでもない。まだ東京
大学の学生であった明治23年4月に立花銃三郎氏と共著で刊行された『国文学読本』
に日本文学史研究の先駆的成果を示されて以来、数多くの著書、編書を発表される¹⁸。
芳賀矢一の『日本漢文学史』に付録した「芳賀矢一著書目録」により、研究及び随筆
書類は15、注釈書類は6、教科書並びに文典は25、辞書類は5、年表その他は8、唱
歌類は6などがある。芳賀矢一博士の研究範囲は非常に広く、主に国文学史、国学、
国語などの分野に関するものである。

芳賀矢一の大功績は各方面の開拓にある。史的研究における新研究の開拓、ドイツ
文献学に倣った日本文献学の提唱、国民性十論による国民性考究の開拓、伝説説話研
究の先鞭等、その数は多い。国文学の研究は今が未曾有の盛時を開くことになった原
因を探るならばいろいろあるが、明治以後の新研究の範囲内において言えば、「その開
拓者としての第一の功はこれを芳賀矢一先生に歸せざるを得ない」¹⁹。

日本漢文学史も漢文学者によって講壇に講じられる前に、すでに芳賀矢一博士によ
って講じていた。佐野保太郎氏は芳賀矢一の『日本漢文学史』の「凡例」において、
「この『日本漢文学史』は、明治四十一年度及び四十二年の講義であります。但し
四十一年度は總論から近古の終まで、四十二年度は近世の部で、これは學年の關係上、

¹⁸ 久松潜一編：「落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎集」『明治文学全集44』、東京：筑摩書房、
1984年2月20日初版第4刷発行、p.428。

¹⁹ 藤村作：「芳賀博士と明治大正における國文學研究」『明治文学全集44』、東京：筑摩書房、1984年2
月20日初版第4刷発行、p.408。

特に『江戸時代漢文學史』と題してありましたが、今は便宜上兩年度分を併せて一貫したものとした。」²⁰という記載がある。つまり、芳賀矢一は早く大学で「日本漢文学史」を講じたことがある。芳賀矢一の『日本漢文学史』は明治41年度及び42年度の講義に基づき、門下生である佐野保太郎、高木武、大岡保三、柚利淳一のノートを参酌したうえで、遺稿として昭和3年（1928）に富山房により出版されたものである。以下は芳賀矢一の『日本漢文学史』に基づき、芳賀矢一の日本漢文学史論について展開していきたいと思う。

第二節 『日本漢文学史』を論考する動機と目的

一、論考する動機

芳賀矢一もその遺著『日本漢文学史』の初めに書いてある「日本漢文學史とは日本人の作った支那文學の歴史である。之を私は日本文学史の一部として見たいと思ふ」²¹通り、日本漢文学とは、日本人が中国語を使って作った文学であるということは言うまでもないだろう。即ち、日本漢文学史とは日本人が作った中国文学の歴史である。

それに、ミルトンがラテン語で作った詩を直ちにラテン文学ということはできなく、やはり英文学とみるべきであるように、作者の性格、作者の境遇、作者の思想などより見て、「日本人の作った漢詩文も之を国文学の中に入れるのが当然であらう」ゆえに、「廣い意味で日本文學を研究するには、やはり漢詩文をも併せて研究することが必要である」。つまり、日本漢文学史も日本文学史の一部である。

（一）従来研究の欠落

しかし、芳賀矢一の『日本漢文学史』という講義に基づいて書かれた本が発行される前に、従来の研究者たちは日本の国文学史、中国文学史についての研究は盛んであるが、日本人が中国語を使って作った文学の歴史、即ち日本漢文学史に対する研究はあまり見受けないと思う。

日本文学史の嚆矢は三上参次・高津楯三郎『日本文学史』（1890）とされている。ま

²⁰ 佐野保太郎：「凡例」『日本漢文学史』、東京：富山房、1928年10月15日発行。

²¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.1。

た同じ人が少しそれを簡略して『日本文学小史』というものを書かれ、その後、小中村義象、増田于信の『日本文学史』、大和田建樹の『和文学史』、鈴木弘恭の『日本文学史略』新保磐次の『中学国文史』今泉定介の『日本文学小史』というものも出ているそうである。上記の各日本文学史においても、日本の漢文学を多少触れたことがあるが、明らかに漢文学の歴史を日本文学の歴史の一部とみなすべき主張はない。

(二) 漢文学を排除する原因と結果

1、漢文学を除く原因

芳賀矢一の考え方としては、研究者は国文学史において、漢文学を除くようになったのには、主に二つの原因がある。

一つは芳賀矢一の言ったとおりに、「これまで漢學と國學とは互に相容れず、國學者は漢學を非常に排斥して、支那文明の入らなかった古代を貴ぶ風があったこと。これは時代の風潮としては已むを得ないことであるが、眞の文學研究の側から見れば、大によくないことである。」²²という理由である。

浮田真弓が「大正期の漢文科存廃問題に見る漢文観：明治期における漢文科存廃問題との比較を通して」²³に指摘したように、明治中期から末期における大きな事件としては、①明治期中等教育において重視されてきた「国文学史」、すなわち「漢学」、「儒学」、「仏教」など広く「国民思想」や「人文学」一般の変遷を扱う「国文学史」が明治43年師範学校において、明治44年中学校においてともに消滅したこと。②明治中期の教科内容としての「国文学史」確定の際、「国」文学の範囲から中国で作られた「漢文」が排除され、「漢文脈」のみが「国」文学の範疇にとりこまれていったこと。当時の国学者は漢学を非常に排斥し、漢文学を国文学史から除くようにするきらいがある。

研究者は国文学史において、漢文学を除くようになったもう一つの原因は、「西洋の文學史に於ては、自國語の文學のみを扱ひ、外國語で書いたものを入れないためである。かういふ原因から、日本文學史に於ても右にいふやうな風が生じたのであろう」²⁴ということである。即ち自国語で書いた文学作品を研究対象として取り扱うのは、西

²² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.2。

²³ 浮田真弓：「大正期の漢文科存廃問題に見る漢文観：明治期における漢文科存廃問題との比較を通して」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第41号、2010年、p.1。

²⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.3。

洋文学史の現象の一つである。従来の研究者たちはそういう現象を依拠に、漢文学を日本文学から除き、自国語の文学のみを扱うようになってきた。

芳賀矢一の『国文学史十講』緒論に述べたように、「文學といふ語は支那でも日本でも昔からいろいろな意味に用ゐられて居ります。これは西洋の「リテラツール」といふ語も同様で、其用法が種種あります。其用法の種々あることが、文學の定義を與へるのに困難な原因だと、ある西洋の学者はいひました」²⁵。「文学」という言葉は中国でも日本でも昔から各種の意味に用いられている。西洋では、「リテラツール」(literature)という単語も同様で、その用法も種々あるので、文学の定義を与えるのに困難である。西洋の文学史において、自国語の文学のみ、例えば、フランス文学においては、フランス人がフランス語で書いた文学を扱い、外国語で書いたものは一切入れない。その原因としては、芳賀矢一も指摘したことがある。西洋では、外国語で書いた文学を自国文学として採らないというのは Nationality の発達が極めて新しく、寧ろ国語の相違を以て国境を明らかにし、之によって Nationality を堅固にしようとするからである。もしそうでなかったら、Nationality の発展を妨げることになるのであろう。

2、漢文学を除く結果：日本国の研究は完全に行われぬ

昔の国学者の偏見より漢文を排斥することと、西洋文学史からの影響で自国語の文学のみを扱うこと、という二つの原因によって、従来の国文学史において、漢文学は排除されている。もとより漢詩文を中心とする日本漢文学とみなす学者がいない。しかし、広い意味で日本文学を研究するには、やはり漢詩文をも併せて研究することが必要である。そうしないと、「結局此等の文學は遂に入れるところがないこととなる。又是を日本の文學から除いては日本國文學の研究といふことが完全に行はれないことになる」²⁶。つまり、漢詩文を中心とする日本漢文学を日本の漢文学から除いたら日本国の研究は完全に行なうことができないことになる。

二、論考する目的

(一) 日本漢文学の意義

²⁵ 芳賀矢一：国文学史十講、東京：富山房、1899年12月31日発行、p. 5。

²⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 2。

上述したように、漢文学は国民に及ぼした影響が純粹の国文学より漢文学のほうが大きいゆえに、漢詩文を中心とする日本漢文学を日本の漢文学から除くならば、日本国の研究は完全に行われぬおそれがある。そういう原因に基づき、日本文学史を扱うときに、純粹の日本の国文学史を取り扱う同時に、日本人の作った漢詩漢文を中心とする日本の漢文学の歴史も併せて研究することが必要である。

古代日本において、一般の風として、漢詩文を作ることが普通のことである。一般の公文書や学校なども皆漢文で行った。漢文と漢文学は日本の文明に非常に大きな影響を与えた。例としては、奈良朝時代前後に於いては、日本語で書いたものは、古事記、宣命、万葉集のようなものだけで、其の数が甚だしく少ない。それに対して、漢文で書いたもののほうは書紀、律令、詩文集、仏教の注疏などのようなものがたくさんある。平安朝時代になると、勅撰三集の『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』がある。五山文学時代から徳川時代の儒学者の作に至るまで、「いづれも皆漢文學の形を以て遣り、純粹の国語の作は却って少く、それは寧ろ一部のものの作に過ぎない」²⁷。つまり、当時の国民は、自分の思想を表すには漢文学を用いたのである。こういう風に、漢文学はほとんど国民的となっているので、国民に及ぼした影響も純粹の国文学よりは漢文学のほうが大きいのである。

つまり、芳賀矢一の考えでは、フランス人であるシャミソーはドイツ文学者であるので、フランス文学者とみなすのは不当である。ドイツ人のグリムはフランス文学者であるので、ドイツ文学者とみなすのはやはり不当である。日本漢文学は日本文学史の一部でありながら、中国文学史の一部でもある。そういう日本漢文学は「二重性格」、つまり両面性がある²⁸。その日本漢文学の「二重性格」については、神田喜一郎はその『日本の漢文学』において、次のように述べた。

「日本の漢文学」は、本質的には間違いなく日本文學に屬する。その作者は日本人であり、その内容に盛られているものは、當然日本人の思想なり感情である。しかし、その一面において、「日本の漢文學」はまた、中國文學という一つの大きな流れから岐れ出たところの支流であることも否定することができない。日本人は、日本にはじめて中國文學が傳わって以来、これを先進の文學として崇め、その新しい傾向を追いつ

²⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 5。

²⁸ 沈日中：『神田喜一郎の日本漢文学史論』、『東亜漢学研究』2016 特別号、p. 442。

つ、ひたすら模倣擬作にこれつとめてきた。そうした事情のもとに自然と形成せられてきたのが「日本の漢文學」である。「日本の漢文學」は、單に日本人が中國の文字を用い、中國の語法に従って、創作したというだけの、單純な性質のものではない。その中國文學との關係は、極めて密接である。兩者の間には、事實、文學的にも歴史的にも劃然とした國境線が引かれていないとも考えられる。ある點、「日本の漢文學」は、むしろ中國文學に屬せしめて考えるのが適當であり、またそうしてはじめて理解しうるとも言いうるのである。ともかく「日本の漢文學」の持つて生まれた著しい宿命的な特質にほかならない。²⁹

神田喜一郎の上記の論述は日本漢文學の二重性格、つまり両面性を強調する。その日本漢文學は二重性格を持つゆえに、従来日本の国文學研究において、日本の漢文學を一種の外来文學として国文學から除き、日本の中國文學研究においても、眞の中國文學ではない理由で重視されていなかった現象に至る境遇であった。芳賀矢一の論述から見て、日本漢文學は日本文學史の一部でありながら、中國文學史の一部でもあると分かってきた。神田喜一郎はそれに基づいて、日本の漢文學が日本文學に属するとともに、中國文學という一つの大きな流れからわかれ出た支流である「二重性格」があると主張する。その理由としては、神田喜一郎の「日本の漢文學」がはじめて出たのが「岩波講座 日本文學史」の第十六卷一般項目である。参考文献において、通説的なものとしては芳賀矢一の『日本漢文學史』（『國語と國民性』と合刊 昭和3年富山房）を参考したことがある³⁰。

日本漢文學史とは、日本人が中國語を使って作った中國文學の歴史である一方、もちろん日本文學史の一部でもあると思う。しかし、國學者の漢學を排斥する時代風潮の原因や自國語の文學のみを扱うような西洋文學史を研究する現象を根拠とする原因などにより、漢詩文を中心とする日本漢文學を日本の漢文學から除く。そうしたら、日本國の研究は完全に行われぬ可能性があるので、日本文學史を扱うときに、純粹の日本の國文學史を取り扱う同時に、日本人の作った漢詩漢文を中心とする日本の漢文學の歴史も併せて研究することが必要である。

²⁹ 神田喜一郎：『日本の漢文學』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』卷9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.133。

³⁰ 神田喜一郎：「日本の漢文學」『岩波講座 日本文學史』第16卷一般項目 東京：岩波書店、1959年1月10日、p.37。

(二) 日本文学における漢文学の受容

漢文と漢文学は日本の文明に非常に大きな影響を与えた。まだ文字がなかったに上古の日本においては、祭祀や伝説などのような純国文学の根本とみなすものも漢文によって伝わってきたのである。そのみならず、日本の各時代においても、多少漢文学からの影響を受けたことがある。

1、奈良時代までの漢文学の影響：漢文学に感化

奈良時代までの文学は、主に推古朝における伊豫道後の碑文、憲法十七条などの漢文作品や万葉集や懐風藻などがある。その中に、「国学の四大人」の一人とされる賀茂真淵は最初の勅撰集である万葉集を国文学研究の根本となるものとしている³¹。従来の万葉集研究者は、主に万葉集の名前の由来と歌の部類において漢文学の影響を受けたことがあると考えられる。

①万葉の由来に関する説における漢文学の影響

万葉が「万代」「万世」の意で、文選の顔延年応詔讌曲水作詩に「其宅天衷立民極。莫不崇尚其道。神明其位。拓世貽統。固萬葉而爲量者也」とあり、呂済の注により、「万葉」というのは「萬代也」という使い方だという説がある。つまり、末永く伝えられるべき歌集というという意味である。また、「万辞」の意で、劉禹錫の秋風賦に「百蟲迎暮兮萬葉吟秋」とある。それと同じだという説³²もある。

②万葉集の各部類における漢文学の影響

そして、万葉集の歌において、漢文学が万葉集の各部類にも影響を与えることも少なくない。長歌の終わりにある万葉集の「反歌」という言葉については、荀子の中には反辞とあっており、『楚辞』には乱とあってはいるが、反歌は反辞をそのまま真似た名称であろう³³。

「挽歌」「相聞歌」などの言葉は『文選』から出ているものであるので、『文選』からの影響も明らかだろう。文選曹植の「與吳季重書」の中に「適對嘉賓。口授不悉。往來數相聞」という句がある。呂向の注により、「聞問也」と言っているため、万葉集

³¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 10。

³² 両説も鹿持雅澄：「萬葉集古義総論」『萬葉集古義』首巻、東京：国書刊行会、1898年7月1日発行、pp. 1～3 参照。

³³ 風巻景次郎：中世の文学伝統：日本文学論、1948年4月10日初版発行、p. 21。

における「相聞」という言葉はおそらくそれから出たものであろう³⁴。

万葉集の歌の序の多くは漢文で書かれたことから見ても中国の詩を味わって後に発達したものであることが分かるのである。

国学者の一般的に非常に重要視している、賀茂真淵が国文学研究の根本となるものとしている万葉集ですら、中国文学からの影響を受けてできたことにより、漢文学は日本国の研究にとって、欠かすことができない存在であろう。

2、平安朝時代における漢文学の影響：感化より模倣へ

著名な東洋史学者である内藤湖南が「平安朝時代の漢文学」において述べたように、平安朝の前半期には専ら漢文学が行はれ、後半期には国文学が興ったが、この国文学が興ったのは漢文学の刺激に依るのである³⁵。

①勅撰和歌集『古今集』における漢文学の影響

周知のように、最初の勅撰和歌集、平安時代前期の905年に、紀貫之らが勅命により編纂した『古今和歌集』は仮名で書かれた仮名序と真名序の二つの序文を持つ。「真名」とは漢字のことで、すなわち漢文で書かれた序文のこと。この真名序は『本朝文粹』にも収録されている。古今和歌集に、序があるのは中国の文選を意識したからと言われている。言うまでもなく序文は中国文化の伝統に属しており、律令制の一環として日本に入った。

この両序の関係について、真名序が正式なもので仮名序は後代の偽作とする説（山田孝雄）や、真名序より仮名序のほうが前に書かれたとする説（久曾神昇）、真名序が先でそれを参考に仮名序が書かれ、仮名序が正式採用されたとする説もある。久曾神は、「延喜六年二月乃至同七年正月の間に、貫之は仮名序を執筆したやうである。（中略）真名序は紀淑望が依頼を受けて執筆したもので、漢詩文に関する先行文献を参照してはゐるが、既に成つてゐた精選本仮名序をも参照し、殊に六歌仙評、撰集事情を述べた条などには、その痕跡が著しい」³⁶として、仮名序が真名序に先行すると主張している。が、「仮名序と真名序とは何れが正統性を持つか、何れが先に作られ何れが後

³⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.11。

³⁵ 内藤湖南：「日本文化史研究 平安朝時代の漢文学」『内藤湖南全集』第9巻、1969年4月10日初版第1刷発行1997年7月22日初版第4刷発行、p.89。

³⁶ 久曾神昇：『伊達本古今和歌集』、東京：笠間書院、1995年。

に作られたか、何れが文章としてまとまってゐるか、何れが歌論として説がまとまってゐるか、此らの問題については、古往今来諸説紛紛たるものがあるが、余が過去十年にわたる研究の結果を述べるならば、古今集の序は最初に真名序が作られ、真名序を紛本として仮名序が作られたもので、決して其の反対ではあり得ない³⁷として、真名序が仮名序に先行すると主張している。本稿の論述対象としないので、『古今集』の真名序と仮名序とはどれが先に作られどれに後に作られたかはさておき、西下経一氏の述べたように真名序を紛本として仮名序が作られたと考えられる。

②漢文学の最古純国文学『土佐日記』に対する影響

日本文学史上、おそらく初めての日記文学である『土佐日記』は純国文の最も古いものである³⁸。漢文学のもっとも古い純国文学の『土佐日記』に対する影響については、内藤湖南は次のとおりに述べた。「先づ日記類でいふと、元來日記は漢文で書くものと定つて居つたが、紀貫之が之を真似てから土佐日記等の國文日記が現れた。」³⁹日本には、『土佐日記』以前から『日記』と呼ばれる書物は存在していた。『土佐日記』以前であれば、例えば藤原忠平の『貞信公記』などが該当する。これらの日記は漢文体で書かれている。『土佐日記』の作者である紀貫之は、「男もする日記といふものを、女もしてみむとてするなり」⁴⁰と断り書きをしている。

芳賀矢一の述べたように、平安朝時代の文学は漢文学の感化を受けて発達したものである⁴¹ので、『土佐日記』のような純国文学も漢文学の影響を受けていることは言うまでもないのではないか。

③日本の散文における漢詩の影響

日本の散文については、芳賀矢一は斎藤拙堂の拙堂文話に言っている「物語草紙之作。在於漢文大行之後。則亦不能無所本焉。枕草紙。其詞多沿李義山雜纂。伊勢物語。如從唐本事詩章臺楊柳轉來者。源氏物語。其體本南華寓言。其說閨情。蓋從漢武内傳飛

³⁷ 西下経一：『日本文学史』第4巻平安時代前期上、東京：三省堂、1942年11月30日初版発行、pp. 228～229。

³⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 14。

³⁹ 内藤湖南：『日本文化史研究 平安朝時代の漢文学』『内藤湖南全集』第9巻、東京：筑摩書房、1997年7月22日初版第4刷発行、p. 95。

⁴⁰ 紀貫之著、木村正中校注・訳：『新編日本古典文学全集 13 土佐日記』、東京：小学館、1995年10月10日第1版第1刷発行、p. 15。

⁴¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 14。

燕外傳及唐人長恨歌轉霍小玉傳諸篇得來。其他和文。凡曰序曰記曰論曰賦者。既用漢文題目。則雖有真假之別。仍是漢文體制耳⁴²という言葉を用いて、「日本の散文は、もと歌から発達して来たもの」として主張する。

上記の斎藤拙堂の拙堂文話を見て、日本文学における物語、草紙のようなものは漢文からの影響が非常に大きいということが分かってきた。清少納言により執筆された『枕草子』における言葉は唐李商隱の「義山雜纂」によるものが多い。青木正児はその「支那文学芸術考」において、次の一例を挙げて比較して、旧説に言う李義山の「雜纂」と清少納言の「枕草子」との関係がある部分においては良いと思う論証もある。

(富貴相) 駿馬嘶。蠟燭涙。栗子皮。荔枝殼。落花飛。鶯燕語。讀書聲。遺下花鈿。高樓上吹笛。擣菘碾茶聲。

(あてなるもの) 薄色に白重の汗衫。かりのこ。削氷のあまつらに入りて新しき鏡に入りたる。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき児の覆盆子くひたる。

青木正児は「雜纂は單に此類の警句の羅列に過ぎ無いが、(今存する書は完本で無い。) 枕草子は之に暗示を得て出藍の作を遺したと謂ふ可きである。」⁴³として出張する。

『伊勢物語』は唐の『本事詩』や『章台楊柳伝』によるものである。『源氏物語』と白居易の『長恨歌』との関係は数多くの研究者や学者などに細かいところまで研究されている。『紫式部日記』から見ると、紫式部は「長恨歌」を読んだことがあるということがわかる。そして、紫式部は「長恨歌」を参考にして、桐壺の巻を書いたと推測できる。そのほかに、『竹取物語』や『今昔物語』なども中国文学からの影響が大きい。

3、鎌倉室町時代の文学と漢文学の影響：漢文と國文の調和

芳賀矢一の述べたように、鎌倉時代の文学には殊に漢文の影響が甚だしい。この時代は漢文と国文との調和した時代である。従来は「てにをは」を略して書いた漢文に、今は「てにをは」を入れ、日本文として書き下すようになったのである。

⁴² 斎藤拙堂：『拙堂文話』一の巻一、古香書屋版。

⁴³ 青木正児：「國文學と支那文學」『青木正児全集第二卷 支那文學芸術考』、東京：春秋社、1970年7月20日第1刷発行、p.364。

鎌倉時代に出来た軍記は漢文より出ている。戦乱のたびに語り伝えられた英雄伝などが記録され、軍記物語が誕生します。鎌倉初期の『保元物語』『平治物語』は、和漢混交文で生き生きと武将たちの活躍を描く。続く『平家物語』は平氏の興亡を語る軍記物語の一大巨編で、多くの語り手や読者の手を経て、改訂・増補が繰り返された。南北朝の内乱を中心とする『太平記』は政治や社会への鋭い批判がうかがえる。

次に、中世の室町時代の謡曲も漢文学の影響を受けたことがある。謡曲というのは、中世の室町時代に世阿弥に依って大成された能楽の詞章を音楽としての立場から言う言葉である。能楽は既に日本音楽の歴史の中で触れた通り、物真似芸からおこった猿楽能に、先行芸能の田楽能の要素を採り入れ、更に当時世間で流行していた舞楽を摂取して大成させたものである。中国北京師範大学文学院比較文学研究所教授張哲俊氏の『中国題材の日本謡曲』（2005年寧夏人民出版社出版）では日本の謡曲における中国文学の要素、史伝や小説における物語と語句を源流として、日本脚本家の独創性を論じ、研究者の触れることの少ない両国の演劇の悲劇性にも目を注いでいる。『中国題材の日本謡曲』において、張哲俊氏は「謡曲の題材の多くも既存の物語、伝説、和歌或いは漢詩、中国の歴史、文学などに関する典籍によるものである。」として主張する。

室町時代は中国では明朝の初頃に当たっている。全体的に見れば、当時は文学の衰え時代であるが、宋、元、明等の文学の影響を受けているので、見るべきものも少なくない。南北朝時代の僧、臨済宗の良佐（諱は汝霖、遠江高国に生れ少壮出家）は応安元=正平 23 年(1368)年絶海中津と與に明に入り、蘇州承天寺の記室となり、尋いで五山の諸宿老とともに、鐘山に登って大藏経を点校した。傍ら儒流に交わって詩文を研ぎ、翰林学士景濂は、良佐の文章を賞賛して、そのために其終尾に跋を作った。著作に「高園稿」「帰隠稿」などがある。

4、徳川時代における漢文学の影響：漢文に長ける文人の輩出

徳川時代に入ると、漢文が非常に盛んであり、中国文学の影響も甚だしく大きい。

① 国学の勃興と古文辞学

日本史用語研究会 『必携日本史用語』により、国学とはそれまでの「四書五経」をはじめとする儒教の古典や仏典の研究を中心とする学問傾向を批判することから生まれ、日本の古典を研究し、儒教や仏教の影響を受ける以前の古代の日本にあった、独

自の文化・思想、精神世界（古道）を明らかにしようとする学問である⁴⁴。芳賀矢一の述べたように、賀茂真淵の尽力は国文の発達に資することが非常に多かった。賀茂真淵は荷田春満を師とし、『万葉集』などの古典研究を通じて古代日本人の精神を研究し、和歌における古風の尊重、万葉主義を主張して和歌の革新に貢献した。が、樋口達郎氏の論文『継承と超克：賀茂真淵の老子受容を巡って』において、その賀茂真淵も明和4年に本居宣長宛書簡に「皇朝の古はたゞ老子の意などは似たる事あり」ところ自ら言明するように、老荘思想の影響が多分に存しているものと思われるという観点がある⁴⁵。

②擬古文と漢文学

擬古文は江戸時代中期から明治にかけて、国学者が好んで用いた文体である。賀茂真淵の著作などは奈良時代の分を模倣し、渋川春海以下のものは平安時代の語法、用語、文体を手本とし、それをまねた。この擬古文は、その題目、思想、結構などすべてが漢文によったもので、ただ言葉を国文の古文に取っているだけである⁴⁶。

③俳文と漢文学

俳文とは俳人によって書かれた俳諧趣味を帯びた文章である。簡潔、洒脱で含蓄が深く、多くは俳句を配してある。「俳文」の語は松尾芭蕉時代から使用され、「俳諧の文章」「俳諧の文」とも呼ばれた。代表的な俳文集は、貞門の『山の井』（季吟、1648）、『宝蔵』（元隣、71）、芭蕉の『幻住庵記』（90）、蕉門の『本朝文選』（許六、06）、『本朝文鑑』（支考、1718）、『和漢文操』（支考、24）、蕉門以後の『風狂文章』（友水、45）、『鶉衣（うずらごろも）』（也有、87～1823）、『新花摘』（蕪村、1797）、『蝶夢和尚文集』（蝶夢、99）、『父の終焉日記』（一茶、1801）、『蕪村翁文集』（蕪村、16）、『おらが春』（一茶、52）などがある。元来四六文から来たもの、自然的に文選などと似通い、序・節・解などの諸体をも備えている。与謝蕪村の「北寿老仙をいたむ」において全編にわたって漢詩文の影響が考えられる。

④小説と漢文学

⁴⁴ 日本史用語研究会：『必携日本史用語』、東京：実教出版、2016年五訂版第2刷発行、p. 241。

⁴⁵ 樋口達郎氏：『継承と超克：賀茂真淵の老子受容を巡って』、求真（20）、2014、pp. 15～34。

⁴⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 18。

徳川時代の小説にも中国文学からの影響を受けたものが多く、例えば、神仙談の翻案、三国志・水滸伝・西遊記などの翻訳などがたくさんある。江戸時代に中国の小説（文言・白話を問わず）を材料にした翻案作品が多く作られた。上田秋成の『雨月物語』にも、翻案の作品がある。三遊亭圓朝のレパトリーとして知られる『牡丹灯籠』が明代の『剪灯新話』からの翻案であるのも、その一例である。芳賀矢一の述べたように、当時は中国小説を読むことは随分流行して、曲亭馬琴の如きは自ら中国小説通を以て任じ、博学を標榜していた⁴⁷。

上述したように、上代以来日本の文明に中国文学からの影響が非常に大きい。芳賀矢一は次のように、「國文の盛んになった時には、必ず其背後に漢文がひそんで居る。そして漢文の傾向は常に國文に影響を與へて居る。日本が漢字を以て國字とし、儒教を以て國教のやうにして居る以上、これは當然の事といはねばならぬ。元来餘り文明でなかつた日本に始めて漢文学が入つて来たのであるから、支那のものばかりを文明と見たのも無理ではない。だから我が國に於て漢学を研究するのは、西洋に於てギリシャ・ローマを研究するよりも、もつと必要なことであらう」⁴⁸として、まとめてきた。

第三節 芳賀矢一の日本漢文学史論

一、日本漢文学史の概観

漢文学は日本の文明、特に日本文学に与える影響が非常に大きい。芳賀矢一の述べたように、日本の国文が盛んになった時には必ずその背後に漢文がひそんでいる。その故に、日本において、漢学を研究するのは、西洋においてギリシャ・ローマを研究するよりも、もっと必要なことである。それでは、日本の文明に非常に大きな影響を与えた漢学がいつ日本に伝わってきたか、日本における漢文学に関する概勢がどうなっているのか、芳賀矢一が述べているのを次の六つの面からまとめていきたい。

（一）推古朝以前：漢学の伝来、応用と帰化人による発展

1、漢学の伝来

⁴⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 19。

⁴⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 20。

日本に於ける漢籍の伝来は、一般的には『古事記』の記載に有る、和邇吉師（王仁）が『論語』と『千字文』を齎した、とするのを最初としている。日本に初めて漢学の入ったということについて、芳賀矢一は「応神天皇十六年（紀元九四五年⁴⁹）で、支那では晋の初頃である」⁵⁰と言っている。つまり、中国では晋の初頃であり、すなわち中国では春秋戦国を経て、漢魏を経た後である。その根拠としては、『古事記』の記載である。日本に於ける漢籍の伝来は、一般的には『古事記』の記載に有る、和邇吉師（王仁）が『論語』と『千字文』を齎した、とするのを最初としているが、この話は『日本書紀』には無く、『日本書紀』では、応神天皇の十六年に百済の昭古王がその臣阿直岐（王仁）を派遣して兩馬を献上させたが、この阿直岐は經典に堪能であったため、皇太子の菟道稚郎子が彼を師として学ばれたとある。応神紀十五年八月の条に、「百済王遣阿直岐、(中略)阿直岐亦能誦經典。即太子菟道稚郎子師焉。於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶。対曰、有王仁者、是秀也」⁵¹とある。かくて、阿直岐の推薦によって、翌年に王仁が来朝している。同十六年二月の条に、「王仁来之。則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。故、所謂王仁者、是書首之始祖也」⁵²とすれば五世紀の前半には、何らかの漢籍が既に日本に齎されていた、と考えられる。

まず、芳賀は『古事記』の記載により日本に初めて漢字の入ったのは、応神天皇 16 年（紀元 285 年）で、とあるが、戦後の実証史学においてそもそも応神天皇は実在の有無が不明であり、古事記の記述には事実と異なることも書かれている。

本論の考えでは、当時の芳賀がいわゆる「皇国史観」の影響を受けていた可能性があると思うからである。戦後考古学・歴史学のもとでは、在位年次の明確な最初の天皇は推古天皇であり、応神天皇も雄略天皇も実在が不確実である。千田稔の言うように、天皇号に本格的に論及したのは津田左右吉の「天皇考」である⁵³。津田左右吉は「推古天皇時代にかういふ御稱號の用ゐられたことは確實であらう。それは此の天皇の丁卯の年に書かれた法隆寺金堂の薬師像の光背の銘に『池邊大宮治天下天皇』

⁴⁹ 神武天皇即位紀元であり、キリスト紀元（西暦）に換算して紀元前 660 年とされている。皇国史観により、神武天皇が即位した年であり、日本が建国された年を基準とする。

⁵⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 20。

⁵¹ 小島憲之〔ほか〕校注・訳：「日本書紀①」『新編日本古典文学全集 2』、東京：小学館、2006 年 8 月 20 日第 1 版第 6 刷発行、p. 482。

⁵² 小島憲之〔ほか〕校注・訳：「日本書紀①」『新編日本古典文学全集 2』、東京：小学館、2006 年 8 月 20 日第 1 版第 6 刷発行、p. 484。

⁵³ 千田稔(2007)：「天皇」号成立推古朝説の系譜——もう一つの邪馬台国論争的状况。日本研究, 35, p. 406。

とあるからである。この例から考へると、かの推古紀十六年の條に見える『東天皇敬白西天皇』の語も、文字どほりに承認して差支がないかも知れぬ」と語ったことある。推古天皇の時代に「天皇」という称号が用いられたのは確実に師像の光背の銘に「池辺大宮治天下天皇」⁵⁴とあることによる。それにより、本論では、在位年次の明確な最初の天皇は推古天皇であり、応神天皇や欽明天皇などは実在が不確かであると主張する。

また、日本語表記の始まりとしては、埼玉県稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣に刻まれた銘文であると思う。五味文彦等の編著した『詳説日本史研究』により、埼玉県稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣は、その銘文から辛亥年（471年）に作られたものと考えられている⁵⁵。鉄剣の表裏に金象眼で115文字を記したもので、同時代の文献資料のまったくない5世紀にあつては、ほぼ同時期の熊本県江田船山古墳出土の鉄刀銘とともに貴重な同時代資料である。銘文の内容は下記の通りである。

（表）

辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埵其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比

（裏）

其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也

銘文の大意は、この剣をつくらせたヲワケの祖先オホヒコからヲワケに至る8代の系譜とヲワケの家が代々杖刀人（大刀をもって大王の宮を護る人）の首^{かしら}として大王に仕えてきた由来を記し、ワカタケル大王の朝廷が斯鬼宮にあったとき、自分が大王が天下を治めるのを助けたこと、この練りに練ったよく切れる刀をつくって、みずからが大王に仕えまつる由来を記す、というものである。

「稲荷山古墳出土鉄剣」の銘文は現在「日本最古の漢字」と呼ばれており、年代については、辛亥年は471年が定説であるが一部に531年説もある。通説通り471年説をとるとヲワケが仕えた獲加多支鹵大王は、日本書紀の大泊瀬幼武（オオハツセワカ

⁵⁴ 津田左右吉：「天皇考」『津田左右吉全集第三巻 日本上代史の研究』、東京：岩波書店、1963年12月17日発行、p. 475。

⁵⁵ 五味文彦等：『詳説日本史研究』、東京：山川出版社、1998年9月20日第1刷発行、2005年11月20日第10刷発行、p. 36。

タケ) 天皇、すなわち 21 代雄略天皇となる。銘文に獲加多支鹵大王が居住した宮を斯鬼宮として刻んでいる、雄略天皇が居住した泊瀬朝倉宮とは異なるものの、当時の磯城郡には含まれていることにはなる。この通説に則れば、21 代雄略天皇の考古学的な実在の実証となりうる。ただしこのじきにこうした文章をつくり、また書いたのが渡来人であったことは、江田船山古墳出土の銀象眼銘鉄刀の銘文に「書く者は張安也」としてされていることから明らかである⁵⁶。

以上のように考古学と日本古代史の現段階で漢字の伝来は早くとも 5 世紀であり、即ち漢学が 3 世紀に日本に伝来したという証拠はない。

2、帰化人による漢学の発展

①最古の漢文と仏教の導入

仏經の伝来については、いろいろな説がある。一般的に『日本書紀』によると、仏教が伝来したのは 6 世紀半ばの欽明天皇 13 年 (552) に百済の聖王 (聖明王) により釈迦仏の金銅像と經論他が献上された時だとされている。欽明天皇の朝に仏教が入って、仏教の經典が大抵漢文で書いてあるため、これを読む必要上から、漢学を奨励した原因で、漢学は更に盛んとなった。芳賀矢一の述べたように、推古朝になると、仏教も漢学もとともに非常に発展して、今日に存する日本の最も古い漢文は、実にこの時代の産物である⁵⁷と考えられる。聖徳太子は『法華經』・『維摩經』・『勝鬘經』の三つの仏經に関する解説書である『三經義疏』を書くなど、仏教の導入に積極的な役割を果たした。また、『十七条憲法』の第二条に、「篤敬三寶。三寶者仏法僧也。」⁵⁸と書くなど、仏教の導入に積極的な役割を果たした。この後、仏教は国家鎮護の道具となり、天皇家自ら寺を建てるようになった。

②使者の派遣

推古天皇 15 (607) 年、隋煬帝大業 3 年に小野妹子を使者として始めて隋へ正式に派遣した。小野妹子は聖徳太子の最も信任する幹部であったに違いなく、607 年と 608

⁵⁶ 五味文彦等：『詳説日本史研究』、東京：山川出版社、1998 年 9 月 20 日第 1 刷発行、2005 年 11 月 20 日第 10 刷発行、p. 37。

⁵⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 22。

⁵⁸ 現代日本語に訳せば、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏と法と僧となり」となる。

年の二度、命を受けて隋に赴き、それによって古代日中関係史上に赫赫たる名を残した外交官となった。当時の随行員・留学生を見ると、たいてい朝鮮人や中国人の子孫である。例えば、僧旻、南淵清安、高向玄理、福因等、いずれも皆帰化人の子孫である⁵⁹。それに関する『日本書紀』の記載は次のように、「是時遣於唐國學生、倭漢直福因・奈羅譯語恵明・高向漢人玄理・新漢人大國、學問僧、新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人廣濟等、並八人也」⁶⁰というのである。

僧旻は遣隋使小野妹子に従って、高向玄理・南淵請安らとともに隋へ渡り、24年間にわたり同地で仏教のほか易学を学び、舒明天皇4年(632)8月に日本に帰国。その後、蘇我入鹿・藤原鎌足らに「周易」を講じた。上記の『日本書紀』推古天皇16年9月11日条に「新漢人」との表現がある。

南淵請安は飛鳥時代の学問僧。大和国高市郡南淵村(現在の奈良県の飛鳥川上流の明日香村稲渕)に住んだ南淵漢人と称される漢系渡来氏族出身の知識人。遣隋使小野妹子に従い高向玄理、僧旻ら8人の留学生、留学僧の一人として隋へ留学する。32年間、隋の滅亡(618年)から唐の建国の過程を見聞して、舒明天皇12年(640)に高向玄理とともに帰国。隋・唐の進んだ学問知識を日本に伝え、開塾した。請安が伝えた知識が大化の改新に与えた影響は大きい。

高向玄理は大化改新の功労者であり、百濟系渡来人の子孫で、留学生として遣隋使小野妹子に従って渡海。645年の大化改新のクーデタで新政権が成立すると国博士に任ぜられ、政府の最高顧問となった。

上述したように、漢学が伝えられて以来、推古朝に至るまでの間には、法隆寺の仏像とか、十七条憲法とか、遣隋使の随行員、留学生なども、渡来人あるいは渡来人の子孫の手によってなったものである。日本の漢文学として認めるべきものは何もないようである為、日本の漢文学史の時代は推古朝に始まるといって良い⁶¹と芳賀矢一は主張する。

(二) 推古朝：漢文学の萌芽期

推古朝以前は、主に渡来人或いは渡来人の子孫の手によって、漢学は日本に伝わっ

⁵⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.23。

⁶⁰ 小島憲之〔ほか〕校注・訳：「日本書紀②」『新編日本古典文学全集2』、東京：小学館、2006年8月20日第1版第6刷発行、p.560。

⁶¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.23。

てきた。推古朝になると、仏教も漢学もとともに非常に発展してきた。なお、小野妹子を使者として始めて隋へ正式に派遣したことにより、憲法をはじめ、政治、教育など多くの分野において、漢学を基として、中国の思想、制度などを模倣するようになってきた。新しい政治家はどうしても漢学の素養がなければならないようになった。当時の為政者はすべて漢学者であり、僧侶もまた漢学に造詣深いものである⁶²。

この時期を代表する人物は、言うまでもなく推古天皇の摂政であった聖徳太子(574～622)であろう。聖徳太子の著作として、『三経義疏』『十七条憲法』などが挙げられる。『法華義疏』は聖徳太子の真筆と伝えられるものが御物となっており、現存する書跡では最も古く、書道史においても重要な筆跡である。『十七条憲法』は、『日本書紀』(推古天皇 12 年 (604)) 中に全文引用されているものが初出。『上宮聖徳法王帝説』には、乙丑の年(推古 13 年 (605)) の 7 月に「十七餘法」を立てたと記されている。

『内藤湖南全集第九卷』(筑摩書房 1976 年)において、「それに國書の如きも隋書に載れる 日出處天子致書日沒處天子無恙云々 の如きは、其の語氣から察するに、恐らく太子自ら筆を執られたものであつたらしく、全然對等の詞を用ひられたので、隋の煬帝の如き、久しく分離した支那を統一したと謂ふ自尊心を持つて居る天子をして、従來に例の無い無禮な國書だと驚かしめたのである」⁶³として、『隋書』「卷八十一 列傳第四十六 東夷 倭國」に記述された倭王多利思北孤による「日出處天子致書日沒處天子無恙云云」の文言で知られる國書は聖徳太子らによる創作と推定している。

聖徳太子は推古天皇のもと、蘇我馬子と協調して政治を行い、国際的緊張のなかで遣隋使を派遣するなど大陸の進んだ文化や制度をとりいれて、冠位十二階や十七条憲法を定めるなど天皇を中心とした中央集権国家体制の確立を図った他、仏教を取り入れ神道とともに厚く信仰し興隆につとめた。

(三) 奈良時代：日本における漢詩人及び作品の誕生

漢文学の萌芽により、日本における漢学も非常に進歩してきた。やがて「純日本人」の間にも、自ら漢詩文を作ることができるものが生じた。

近江奈良朝時代には、中国に名を挙げた人も少なくない。例えば、吉備真備、栗田

⁶² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 23。

⁶³ 内藤湖南：「聖徳太子」『内藤湖南全集第九卷』、東京：筑摩書房、1997 年 7 月 22 日初版第 4 刷発行、p. 55。

真人など、ほとんど当時の中国人に近い或いは中国へ渡ったことがある人である。

吉備真備（693～775）は奈良時代の漢学者、政治家である。養老元年（717）遣唐留学生として唐に渡り、天平七年（753）帰国し、朝廷に仕える。のち遣唐副使として再渡唐し、帰国後、大宰大貳、右大臣を歴任。儒学、天文、兵学に精通し、釈奠の儀式を定め、刪定付令の選定に参加するなど、文化、政治の面で貢献。著作に『私教類聚』などがある。『私教類聚』は日本最古の教訓書である。50巻。神護景雲三年（769）頃成立。子孫をいましめるために書かれたもので、「論語」「史記」などの漢籍を引く。

栗田真人は第八次の遣唐執節使であり、その容貌を中国の文献にもっとも多く記された。『新唐書』（巻四六・百官志・兵部職方）によれば、「凡蕃客至鴻臚、訊其山川風土、為図奏之、副上職方。殊俗入朝者、図其容状衣服、以聞（あらゆる蕃客が鴻臚に至ると、その山川風土を訊き、図を為してこれを奏して、職方に副え上る。殊俗の入朝する者は、その容状と衣服を図いて以って聞す）」という記載がある。とにかく、『旧唐書 日本伝』により、栗田真人はときの則天武后にもよい印象を与えたらしく、麟徳殿の盛宴に招かれたのみならず、司膳卿という名誉職まで授けられたのが分かってきた。

（四）平安時代：漢詩文発展の第一盛期

平安朝時代に入って、中国の唐との交流が益々しげくなり、嵯峨天皇の朝には儀式も中国の風に倣った。漢詩人は空海をはじめ、小野篁などがあり、殊に都良香、三善清行、菅原道真などは最も優れていた。芳賀矢一は頼山陽が『拙堂文話』の序に言っている平安朝時代と徳川時代を指している「文運両開」を引用して、平安時代は後の徳川時代と共に、漢学の最も盛んであった時代である⁶⁴と指摘した。

空海（宝亀5年（774年）～承和2年（835年））は、平安時代初期の僧。弘法大師の諡号（921年、醍醐天皇による）で知られる真言宗の開祖であり、蔚然たる漢文の大家である。漢文学的業績では、『三教指帰』をはじめ、文芸評論と作文概論を兼ねた『文鏡秘府論』や平安時代前期の漢詩文評論書の『文筆眼心抄』などの著がある。また、空海の詩文を拾集したものに弟子の真済編『遍照發揮性靈集』（『性靈集』）がある。

小野篁は平安前期の漢詩人、歌人である。小野妹の子孫で、父は『凌雲集』の撰者

⁶⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.25。

小野岑守。現存している作品はきわめて数が少ない。わずかに『経国集』以下に詩文が、『古今和歌集』以下に和歌が残されているにすぎず、大部分は散逸したようである。なお家集として『小野篁集』があるが、これは『篁物語』『篁日記』などともよばれており、実は篁説話を素材とした後人の手になる作品と考えられる。

都良香（834～879）は平安前期の学者、詩人である。叔父に『文華秀麗集』撰者の桑原（都）腹赤がある。初め名を言道（と）といったが、貞観14年（872）良香と改めた。大学寮を経て少内記に任じ、872年の渤海使入朝には掌渤海客使となる。ついで大内記、文章博士等を歴任した。『文徳実録』編纂の中心的役割を果たし、また『都氏文集』3巻に残された多様な文体の作品にその活躍がうかがえる。

三善清行（847～918）は平安前期の漢学者、文章博士兼大学頭である。経史・詩文に通じ、上奏文の「革命勘文」「意見封事十二箇条」は有名である。また、「延喜式」の編集に参加した。著作には『円珍和尚伝』『藤原保則伝』『善家秘記』などがあり、歌集として『善家集』（一卷・佚）があった。

菅原道真（845～903）平安前期の律令官人であり、政治家、文人、学者として名が高い。学者・文人としての道真は死後学問の神と崇められてきたように、当時から高く評価されていた。独自の構成をもつ『類聚国史』の撰修はとくに有名であり、『日本三代実録』の編集にも参加。文学上の業績は「文道の大祖、風月の本主」と尊敬され、その詩文は『菅家文草』『菅家後集』にまとめられている。和歌にも巧みで、配流されるとき詠んだ「東風吹かば——」の歌は古来人口に膾炙した。

上述したように、平安時代は「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」（『凌雲集』序）の文学理念のもとに、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』の勅撰三集が編纂された。当時宮廷や離宮では頻繁に詩宴が催され、また舶載された中国詩集の増加に伴って新傾向の詩風や詩体を受容され、つくられた多くの詩編は奈良時代より数段進歩した。この時代の詩壇は、嵯峨天皇を中心にして小野岑守、菅原清公など文人官僚によって構成されており、宮廷文学的性格をもっている。注目すべきなのは『遍照發揮性靈集』『文鏡秘府論』『三教指帰』などの著者で、多方面で活躍した空海である。漢文学は次の承和期（834～848）に『白氏文集』が渡来してから、従来の詩風を一変した。

（五）鎌倉・室町時代：新しい中国文学受容

平安末期より、漢学は衰えて行った。その原因としては、二つあると考えられる。一つは寛平6年(894)遣唐大使に任命された菅原道真の進言により260あまり年続いてきた日本上代の制度・文物に多くの貢献を尽くした遣唐使が廃止された。中国との直接の交通が絶え、その結果として自然漢学は衰えて行った。もう一つの原因は藤原氏の勢力が盛んで、立身などはすべて門閥により、学問を以て身を立てるようなことができなくなってしまったのも、漢学の衰頹の一原因である。

このように、漢学が衰えていったが、鎌倉時代・足利時代には禅宗の僧侶たちが中国に行き、宋の時代のもの、所謂蘇黄である蘇東坡、黄庭堅が喜ばれるようになった。室町時代に入ると、芳賀矢一の述べたように、全体的としてみれば、当時は文学の衰えた時代であるが、宋、元、明等の新しい文学を受けているので、中には見るべきものも少なくなかった⁶⁵。

例としては、上記した良佐の例を挙げたいと思う。良佐(諱は汝霖、遠江高国に生れ少壮出家)は北朝時代の臨濟宗の僧、応安元=正平23年(1368)年絶海中津と與に明に入り、蘇州承天寺の記室となり、尋いで五山の諸宿老とともに、鐘山に登つて大藏經を點校した。傍ら儒流に交わって詩文を研ぎ、翰林学士景濂は、良佐の文章を賞賛して、そのために其終尾に跋を作った。著作に「高園稿」「帰隱稿」などがある。

鎌倉・室町時代には、中国と日本との間に直接の正式的な交通はなかったが、僧侶たちの往来及び商業活動上の交通があったので、学問も引き続き中国からの影響を受けた。芳賀矢一の述べたように、徳川時代になって、朱子学が盛んになったのも、この頃五山の僧侶たちがこれを研究した結果である⁶⁶。

(六) 徳川時代：漢詩文発展の第二盛期

松下忠はその『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』における上編総論の「第一節 江戸時代師壇の時代区分と詩人の選出について」において、徳川時代の漢詩文について論じたことがある江戸時代の川合春川、津阪東陽、頼山陽、赤沢一堂、友野霞舟、笹崎小竹、広瀬淡窓(歿年順)と明治以後の中国文学者である佐久節博士、前川三郎氏、神田喜一郎博士、中村幸彦博士、青木正児博士、国文学者である芳賀矢一博士、次田潤氏、富士川英郎氏や兪樾などの説を紹介してまとめてきた。

⁶⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.27。

⁶⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.28。

各人各様の説に分かれるが、大別すると三期説と四期説になる⁶⁷。芳賀矢一はその『日本漢文学史』において、徳川時代の漢文学を次の通りに三期に分けた⁶⁸。

- (一) 草創時代——慶長・元和から元禄まで（西暦 1603 年～1703 年）
- (二) 最盛時代——享保・元文から寛政まで（西暦 1716 年～1800 年）
- (三) 渾成時代——寛政以後（西暦 1801 年～1867 年）

上記の論述により、芳賀矢一の徳川時代についての日本漢文学に関する概観を次のようにまとめていきたいと思う。

1、慶長・元和から元禄まで：漢詩文の草昧期

前述したように、藤原惺窩及びその門人が奉じた朱子学が盛んになった源は足利時代に存するのである。朱子学が盛んになると、また中江藤樹の陽明学、荻生徂徠の古文辞学というような学派も興り、儒学は益々盛んとなって、いわゆる一種の儒者という階級が出来た。芳賀矢一の述べたように、徳川時代においては、儒教を以て道徳を主とするもので、儒者は道徳家であるといってもよい。

幕府に出来た昌平坂学問所（昌平黌）は朱子学を主とする官立の教育機関であり、幕臣の子弟や林家以下の儒者の子弟の教育に携わる。その責任者は、大学頭として代々林家が受け継いで行く。幕府の文教政策の影響を受け、四代将軍家綱の頃から各藩でも学校が次々と作られる。初期は、儒学や武芸の教授が中心で、漢籍は主に朱子学で講じているが、中には陽明学や古学或いは折衷学を講じる所も有り、誰がその藩校の教官となるかに因って、同じ儒教でも解釈やテキストが異なる。また幕末に近くなると、国学や医学更には蘭学も講ずるようになる。そのほかに、学者の私塾もたくさんあるので、自然漢文学も盛んとなり、この時代はほとんど漢文でなければ文章でないというように思われ、漢学者たちは仮名文を読むのを屑しとしなかったくらいである⁶⁹。

が、藤原惺窩や林羅山は当時の大学者であったが、それでもその文には和習あるのを免れない。羅山は文を作るのが非常に早かったということで、朝鮮の使者が帰るときに送った 150 首の詩の如きは、病妻を看護しながら、一夜の中に作ったという。ま

⁶⁷ 松下忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1911 年 3 月 27 日初版発行、p. 8。

⁶⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 207。

⁶⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 30。

た、朝鮮の兪瑒という使者は羅山の学問に驚いて「日域之文章羅山を以て第一とす」⁷⁰まで褒め称えたけれども、「其の文はなほ草昧に屬すといはざるを得ぬ」⁷¹。また、「惺窩は文筆には餘り達者な方ではなかった。仁齋は少々文が達者であるが、しかしまだ語をなさない所があるといはれて居る。益軒なども文は餘り達者とはいへない」⁷²と指摘してきた。

2、享保・元文から寛政まで：漢詩文の未曾有の隆盛

文章は鳩巢・徂徠、詩は白石・南海に至って真の發達をしたのであった⁷³。室鳩巢(1658～1734)は江戸の人、江戸中期の儒学者であり、名は直清、別号は滄浪である。加賀前田家に仕え、藩命により木下順庵に学び、朱子学を信奉する。のち、新井白石の推挙で將軍徳川吉宗の侍講となる。著書に『赤穂(義人録)』(1703 序)『六論衍義大意』(1722)『駿台雑話』『不亡鈔』『明君家訓』(1692 成立か)『鳩巢文集』(1763)など多数がある。江村北海はその『日本詩史』巻四に於いて、「經儒不習文藝。文士或遺經業。能兼二者、唯東涯滄浪二儒而已。」と評している。また、斎藤拙堂もその『拙堂文話』巻一において、「其後百許年室鳩巢物徂徠出。扶桑之文始雅矣。……鳩巢才雖少遜。識見平正。至今學者作文稍知韓歐之可貴者。不可謂非其力也」⁷⁴と鳩巢の文章界における功績を讃えた。

荻生徂徠(1666—1728)江戸中期の儒学者。幼名は双松、字は茂卿、通称は惣右衛門、号が徂徠である。徂徠は早くから漢文を精密に読むことに努力し、辞書『訳文筌蹄』などの成果をあげていたが、40歳の前後から、明の李攀竜、王世貞らが唱えた文学理論としての古文辞の影響を受け、中国古代の言語や文章の実証的研究を進めるとともに、この方法を經学すなわち儒学の古典の解釈学に適用して、古文辞学という新しい学風を樹立した。著述は早く、弟子の南郭の編纂した『物夫子著述書目記』があつて、三十六部、百九十一巻を著録した。そのほか、『大学解』一卷、『中庸解』二巻、『孟子識』一卷、『孝經識』一卷、『尚書学』一卷、『孫子国字解』十三巻、『読荀子』四巻、『素書国字解』二巻、『古文矩』一卷、『文変』一卷、『周尺考』一卷、『鈐録』二

⁷⁰ 足立栗園：『近世立志伝 第1 林羅山』、福岡：積善館、1902年10月5日発行、p. 39。

⁷¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 31。

⁷² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 31。

⁷³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 32。

⁷⁴ 斎藤拙堂：『拙堂文話』巻一。

十卷、『南留別志』五卷、『徂徠集』三十一卷、『護園十筆』十卷、『護園隨筆』五卷などがある。徂徠が明詩を尚ぶ所以については、門人の南郭は「漢魏自盡漢魏，不知後有唐。唐自盡唐，未能前盡漢魏。明人並兼之，乃不能自然。即不自然，其才之盡也。其才之盡也，令人知階而及之。此集也範而出之。有漢魏有唐，其它不取也。後君子有知明而不必明者乃得焉，是亦所以知明乎，是亦所以知漢魏與唐乎。此徂來先生之所以有選也。此先生之教也」⁷⁵と言っている。つまり、漢魏の詩には漢魏の詩としての特質があり、唐詩には唐詩としての特質がある。明人の詩はこれを合せ兼ねたもので漢魏もあれば唐もある。明詩は漢魏の詩を知り唐の詩を知る階梯であり、勿論明詩を知る所以でもあるとするのが徂徠の教えである⁷⁶。それは松下忠が服部南郭の『唐後詩序』における言葉に対する解釈である。

新井白石（1657～1725）は江戸中期の儒者、政治家であり、木下順庵の高弟である。徳川家宣、家継に仕え、側用人間部詮房とともに幕政を補佐。武家諸法度の改正、貨幣改鑄、朝鮮通信使礼遇の改革などに尽力。その学問は日本古代や近世史、地理などの方面で実証を重んずるものであり、イタリア人宣教師シドッチから西洋の知識をも得た。詩は盛唐詩に学んで、その典型の再現に成功している。江村北海は白石の詩才を「錦心繡腸、咳唾成珠」⁷⁷と言い、原念斎は「其精工當世無敵」と言い、深見天漪も白石詩草に序して「吾最も善其五言絶句」⁷⁸と言っている。

祇園南海（1677～1751）江戸中期の漢詩人、名は瑜、字は伯玉。紀伊国（和歌山県）の人である。紀州藩医の子に生まれ、木下順庵に学んだ。新井白石、室鳩巢らと同門である。詩風は雅趣雅言を重んじて塵俗（の気を排する。絵もよくしてわが国文人画の先駆者の一人となり、芸術、趣味に個性を生かした生涯は、服部南郭、柳沢淇園らと並んで文人的生活態度の確立者と評される。著書に、前述の一夜百詠の詩を収めた『南海先生詩稿』、詩文集『南海先生集』、詩論『詩学逢原』などがある。祇園南海について、松下忠は「祇園南海は詩人としても詩論家としても、日本近世詩壇に於ける第一流の人物と評しても過言ではない」⁷⁹と主張した。雨森芳洲は南海が14歳木門に

⁷⁵ 服部南郭：『唐後詩序』。

⁷⁶ 松下忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1911年3月27日初版発行、p. 416。

⁷⁷ 江村北海：『日本詩史』巻四。

⁷⁸ 深見天漪：『白石詩草』序

⁷⁹ 松下忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1911年3月27日初版発行、p. 370。

遊学以来の親友で南海に詩を寄せて曰く、

吾黨祇夫子 高才本不羈
窮年唯有酒 開口便成詩

と南海はただ酒を愛するのみならず、口を開けば便ち詩を成した。

3、寛政以後：漢詩文の渾成時代

寛政（1789～1801）年間には異学の禁があった。柴野栗山や西山拙斎らの提言で、朱子学を幕府公認の学問と定め、聖堂学問所を官立の昌平坂学問所と改め、学問所においての陽明学・古学の講義を禁止した。一時は幕府の朱子学が起ったが、到底根本的に時勢を覆すことは出来ず、詩文は相変わらず盛んであって、昌平黌にも文を以て名を成した学者がある⁸⁰。所謂三博士の中で、柴野栗山が文において最も名高く、著述に『栗山文集』6巻、『栗山堂文集』22巻、『栗山堂詩集』4巻、『雑字類編』7巻。当時は経義より文章において古人を凌駕するものが少なくなかった。

徳川時代の初めから元禄ごろまでの漢詩壇のことを芳賀矢一は漢詩文の「草昧期」と言う。つまり、「まだ進歩しない、形も整わなかった時代」⁸¹との意味である。享保・元文から寛政までのいわゆる最盛時代に入ると、詩文を専門とする傾向が生じ、詩人の輩出時期であった。新井白石、祇園南海をはじめ、この時期に活躍した詩人は非常に多い。寛政以後は異学の禁があったが、漢詩文は相変わらず盛んであって、特に文章のほうに優れている。

二、上古：日本漢文学の曙光

芳賀矢一のいわゆる上古は推古天皇4年（596年）より、奈良朝（710～794）までの間を指す。最も古い漢文は推古天皇4年（596年）、道後温泉を訪れた聖徳太子（厩戸皇子）らにより建立された伊豫道後温泉碑における碑文である。

⁸⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.206。

⁸¹ 中村幸彦：「近世漢詩の諸問題」『近世の漢詩』、東京：汲古書院、1986年4月発行、p.11。

(一) 推古朝の漢文学：準漢文から純粹の漢文へ

1、準漢文

日本古代の文体については、岸俊男が編集した『日本の古代 14 ことばと文字』⁸²において、おおよそ三種に分類される。第一は「純粹漢文」、用字や用語が漢文の格にかなない、中国人に理解できるものである。第二は「和文」。漢字の倭音と倭訓を利用し、日本語の語法に基づいたものである。第三は「変体漢文」、つまり、和文を意図しながら、漢文の語法も借用したものである。その「変体漢文」「変体漢文を最初に命名し定義づけたのは橋本進吉である。「変体漢文」という呼称は、橋本進吉によって、提唱され、漢文を記すことを施行しながらもその用法を誤って「変則な書き方」になったもの、それを「変体漢文」と命名した⁸³。橋本進吉は、「日本の文語の変遷」なる項目の中で、日本「最初の文語は漢文である」と説き、「奈良朝以前から漢文が正式の文語として用ゐられ、官符の公用文は勿論、私人の手紙や記録のやうな実用的の文も漢文で書くのが正式であった。(略)しかし、正しい漢文を書くのは容易でなく、学殖の無いものは、動もすれば文字の用法を誤り、順序を違へ、漢文としては不要な文字を加へなどして、変則な書き方をした」⁸⁴として、正倉院文書の例を始めに挙げる。

上述した漢文の形式に日本語の語法を交えた「変体漢文」は、岡田正之氏がその『日本漢文学史』において、「準漢文」と呼ばれる。本稿もそのような文体を「準漢文」という名称を用いる。芳賀矢一は上述した「準漢文」の例として次の「菩薩半跏像銘」「法隆寺金堂薬師如来像光背銘」「中宮寺天寿国曼荼羅繡帳銘文」の例を挙げた。

造像銘とは、仏像の造立に関して、造立の日時、発願者、発願の動機などを記したものである。6世紀前半の仏教伝来の後、6世紀後半には仏像の制作が始まり、それに伴って造像銘を記すことも開始されたと思われる。

①金堂釈迦仏記

菩薩半跏像の台座下端の框の側面に次の刻銘があり、「丙寅年に高屋大夫が死別した夫人のために発願造立した」ことが知られる。

⁸² 岸俊男：『日本の古代 14 ことばと文字』、東京：中央公論社、1988年3月20日初版発行、p. 149。

⁸³ 毛利 正守：「変体漢文」の研究史と「倭文体」、日本語の研究 10(1)、2014年1月1日、pp. 1～15。

⁸⁴ 橋本進吉：「国語学概論」『橋本進吉博士著作集』 第1冊、東京：岩波書店、1946年、p. 155。

歳次丙寅年正月生十八日記高屋大夫為分韓婦夫人名阿麻古願南无頂礼作奏也。

(「菩薩半跏像銘」)

(歳、丙寅に次る年の正月生十八日に記す。高屋大夫、分れにし韓婦夫人、名をば阿麻古とまうすが為に、願ひなむ南无頂礼[なむちやうらい]して作り奏すなり。)

「丙寅の年に高屋大夫が、亡き夫人で朝鮮半島出の阿麻古のために造像した」と解されている。この丙寅年については、606年(推古朝)とする説と、干支が一巡した60年後の666年(天智朝)とする説とがあり、定説をみない。高屋(大阪府藤井寺)大夫とは有力貴族で何人かの妻のうち一人、韓婦夫人、つまり韓国女性の夫人と別れることとなり、韓婦夫人の名前が「阿麻古」で彼女のためにこころを込めて仏像をつくりますと書いてある。

②法隆寺薬師造像記

現存する最古の準漢文体としては法隆寺金堂に安置される薬師如来像の光背の裏面に刻された90文字の銘文である。これは推古朝15年丁卯に、推古天皇及び聖徳太子が用明天皇のために薬師の像を作った時に、その光背に刻まれた縁起の文字である。銘文の内容は次の通りである。

池邊大宮治天下天皇。大御身。勞賜時。歳次丙午年。召於大王天皇與太子而誓願賜我大御病太平欲坐故。將造寺薬師像作仕奉詔。然當時。崩賜造不堪。小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王。大命受賜而歳次丁卯年仕奉。(「法隆寺金堂薬師如来像光背銘」)

この文は、「変体漢文」つまり準漢文の特徴を顕著に示したものとして、岡田正之氏がすでに指摘されている通り、「漢文の形式に國語の語法を交へたるもの」⁸⁵であり、漢文の体を成していながら、日本語の特有の表現がみられる。例えば、「治天下」「歳次丙午」「召於大王天皇與太子」は漢文の句法である一方、「大御身」「大御病」の「大御」は、オホミという日本語を書記したものであり、「勞賜」「誓願賜」「崩賜」「受賜」の「賜」は尊敬語タマフの、「欲坐」の「坐」は尊敬語マスを表記である。また、「薬師像作」の「作」は動詞であるが、日本語の特有の語法のように、目的語の下に来て

⁸⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 26。

いる。

③中宮寺天寿国曼荼羅繡帳

中宮寺天寿国曼荼羅繡帳には、次のような銘文がある。

斯歸斯麻宮治天下天皇。名阿米久爾意斯波留支比里爾波之彌等。巷奇大臣。名伊奈米足尼女。吉多斯比彌乃彌己等。爲太后。生名多至波奈等已比乃彌己等妹。名等已彌居加斯支移 比彌乃彌己等。後娶太后弟。名乎阿尼乃彌己等。爲后。云々。

要約すると、太子の死を悲しんだ妃の橘大郎女が、太子が死後に旅立った「天寿国」の様子を直接見ることができないため、せめて図像で見たいと天皇に申し出て、それを聞き入れた天皇が画師や女官に製作を命じて作らせたものであるとのことである。

「斯歸斯麻（シキシマ）」、「阿米久爾意斯波留支比里爾波之彌等（アメクニオシハルキヒロニハノミコト）」は固有名詞を音仮名で表す。文体としては和臭の多い漢文である⁸⁶。

2、純粹の漢文

「純粹漢文」とは、前述のように、用字や用語が漢文の格にかない、中国人に理解できるものである。芳賀矢一は伊豫道後温泉碑文、憲法十七条が純粹の漢文であると主張した。特に指摘したのは、「日本の最も古い漢文としては先づ此の碑文を推すべきである」⁸⁷として、日本の最も古い漢文が伊豫道後温泉の碑文である。

①豫道後温泉碑文：日本の最も古い漢文

伊豫道後温泉碑は飛鳥時代の推古天皇4年(596)に、道後温泉を訪れた聖徳太子(厩戸皇子)らにより建立されたと伝わる碑である。碑文は次の通りである。

法興六年十月。歳在丙辰。我法王大王與二惠總法師、及葛城臣。逍遙夷與村。正觀神井。歎世妙驗。欲叙意。聊作碑文一首。惟夫、日月照於上而不私。神井出於下無不給。万機所以妙応、百姓所以潜扇。若乃照給無偏私。何異干寿国。随華台而開合。沐

⁸⁶ 市川本太郎：日本漢文学史概説、東京：株式会社大安、1969年4月15日発行、p.28。

⁸⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.36。

神井而瘳疹。詎舛于落花池而化羽。窺望山岳之巖嶠。反冀平子之能往。椿樹相廕而穹窿。冥想五百之張蓋。臨朝啼鳥而戲哢。何曉乱音之聒耳。丹花卷葉而映照。玉菓弥葩以垂井。經過其下。可以優遊豈悟洪灌霄庭意歟。才拙實慚七步。後之君子。幸無蚩咲也。以岡本天皇并皇后二軀為一度。以後岡本天皇。近江大津宮御宇天皇。淨御原宮御宇天皇三軀為一度。此謂幸行五度也。⁸⁸ (『積日本紀』卷 14)

碑文は古代金石文の 1 つになるが、原碑は早くに失われ現在は文献上でのみ知られる。中国の温泉賦や温湯碑に倣い設置されたものと見られ、碑文には推古天皇期の古色が指摘される。岡田正之氏は「石文として存するものの最も古きものは伊豫道後温泉碑文なり。(中略) 其の文は四六にして、漢魏の典故を使ひ、齋梁の文字を用ゐ、頗る苦心の餘に成れるものならん。駢儷文としては至れるものにあらざるも、尚古色を失はざるものなり。」⁸⁹と高く評価した。芳賀矢一は「支那の故事などを引き、四六體の美しい文である」と指摘した。即ち、芳賀矢一も岡田正之も上記の伊豫道後温泉碑文は「四六」体の漢文に近い漢文である。特に、上述したように、芳賀矢一はこの伊豫道後温泉碑文が純粹の漢文と主張した。

②憲法十七条：純然たる漢文

憲法十七条は日本最古の理論的政治思想を示す文章である。『日本書紀』推古天皇 12 年 (604) 4 月条に「皇太子、親肇作憲法十七条」(卷 22) とあって、その次に十七条の全文が掲げられており、これによって古来聖徳太子の作とされてきた。

憲法十七條⁹⁰

夏四月丙寅朔戊辰、皇太子親肇作憲法十七條。

一曰、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。以是、或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。

二曰、篤敬三寶。々々者佛法僧也。則四生之終歸、萬國之禁宗。何世何人、非貴是法。

⁸⁸ 碑文の内容は 1898 年に経済雑誌社により出版された『国史大系第七卷』における『積日本紀』卷 14 述義 10 第 23 舒明天皇に載せた「幸于伊豫温湯宮」という碑文である。

⁸⁹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月 10 日発行、p. 25。

⁹⁰ 小島憲之校注・訳：『新編日本古典文学全集 3 日本書紀②』、東京：小学館、2006 年第 1 版第 6 刷発行、pp. 542～550。

人鮮尤惡。能教從之。其不歸三寶、何以直枉。

三曰、承詔必謹。君則天之。臣則地之。天覆臣載。四時順行、萬氣得通。地欲天覆、則至懷耳。是以、君言臣承。上行下靡。故承詔必慎。不謹自敗。

四曰、群卿百寮、以禮爲本。其治民之本、要在禮乎、上不禮、而下非齊。下無禮、以必有罪。是以、群臣禮有、位次不亂。百姓有禮、國家自治。

五曰、絕饗棄欲、明辨訴訟。其百姓之訟、一百千事。一日尚爾、況乎累歲。頃治訟者、得利爲常、見賄聽讞。便有財之訟、如右投水。乏者之訴、似水投石。是以貧民、則不知所由。臣道亦於焉闕。

六曰、懲惡勸善、古之良典。是以无匿人善、見-惡必匡。其諂詐者、則爲覆二國家之利器、爲絕人民之鋒劍。亦佞媚者、對上則好說下過、逢下則誹謗上失。其如此人、皆无忠於君、无仁於民。是大亂之本也。

七曰、人各有任。掌宜-不濫。其賢哲任官、頌音則起。姦者有官、禍亂則繁。世少生知。剋念作聖。事無大少、得人必治。時無急緩。遇賢自寬。因此國家永久、社稷勿危。故古聖王、爲官以求人、爲人不求官。

八曰、群卿百寮、早朝晏退。公事靡監。終日難盡。是以、遲朝不逮于急。早退必事不盡。

九曰、信是義本。每事有信。其善惡成敗、要在于信。群臣共信、何事不成。群臣无信、萬事悉敗。

十曰、絕忿棄瞋、不怒人違。人皆有心。々各有執。彼是則我非。我是則彼非。我必非聖。彼必非愚。共是凡夫耳。是非之理、詎能可定。相共賢愚、如鑲无端。是以、彼人雖瞋、還恐我失。、我獨雖得、從衆同舉。

十一曰、明察功過、賞罰必當。日者賞不在功。罰不在罪。執事群卿、宜明賞罰。

十二曰、國司國造、勿收斂百姓。國非二君。民無兩主。率土兆民、以王爲主。所任官司、皆是王臣。何敢與公、賦斂百姓。

十三曰、諸任官者、同知職掌。或病或使、有關於事。然得知之日、和如曾讖。其以非與聞。勿防公務。

十四曰、群臣百寮、無有嫉妬。我既嫉人、々亦嫉我。嫉妬之患、不知其極。所以、智勝於己則不悅。才優於己則嫉妬。是以、五百之乃今遇賢。千載以難待一聖。其不得賢聖。何以治國。

十五曰、背私向公、是臣之道矣。凡人有私必有恨。有憾必非同、非同則以私妨公。憾起則違制害法。故初章云、上下和諧、其亦是情歟。

十六曰、使民以時、古之良典。故冬月有間、以可使民。從春至秋、農桑之節。不可使民。其不農何食。不桑何服。

十七曰、夫事不可獨斷。必與衆宜論。少事是輕。不可必衆。唯速論大事、若疑有失。故與衆相辯、辭則得理。

そのうちに、儒教の根本經典である易・書・詩・礼・春秋の五書という五經と論語との句がそのままに、あるいは多少改作されて取り入れられているものである。

『十七条憲法』においては、一句が四字を中心にして構成されている傾向にあるだけでなく、「以和爲貴、無忤爲宗」「或不順君父。乍違于隣里」という句のように対句もみられる。一句が四字を中心にして構成されていることは、中国の古典にみられるところである。その故に、芳賀矢一は「これは純然たる漢文で實によく出来て居る」⁹¹と述べた。

芳賀矢一は「十七條皆如何にもよくしまつた文で、意味も明白であり、政治の心得を説いたものであるが、其の句はそれゞ皆出所がある。」⁹²と述べ、具体的な例を挙げて憲法十七条の内容の出所を説明した。その出所については、武内義雄氏がすでにその『儒教の思想』⁹³にもっと詳しく述べたことがある。筆者は武内義雄と芳賀矢一両氏の論述した内容に基づき、次の表のようにまとめてきた。

条	引用文	出所		思想精神区分
		芳賀矢一	武内義雄	
第一条	以和爲貴	『礼記』から出る文句である。論語にも「用和爲貴」とある。	礼記儒行及び論語の「禮之用和爲貴」から	儒教思想

⁹¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 38。

⁹² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 39。

⁹³ 武内義雄：「儒教の精神」『武内義雄全集』第四卷 儒教篇三、東京：株式会社角川書店、1980年1月30日再版発行、p. 85～97。

	人皆有黨	左伝、「上和下睦」は孝経に見えて居る。		
	上下和睦		左傳成公十六年の「上下和睦」または孝経の「民用和睦、上下無怨」から	
第三条	君則天之臣則地之	「君則天之臣則地之。天覆地載」は禮記に見える。	左伝宣公四年の「君天也」から	儒教思想
	天覆臣載		礼記中庸の「天之所覆、地之所載」から	
	四時順行	「四時順行」は論語。	易の豫の「天地以順動、故日月不過而四時不忒」から	
第四条	上不禮而非下齊		論語の「道之以徳、齊之以禮、有恥且格」から	
第五条	有財之訟、如石投水。乏者之訴、似水投石。	文選の李蕭遠の「運命論」にある「其言如以石投水。莫之逆也」から出て居る。	「石投水」の譬喩は文選運命論の「其言也如以石投水、莫之逆也」から	
第六条	無忠於君、無仁於民		礼記礼運の「君仁臣忠」から	
第七条	人各有任。掌宜不濫	書経に「咸有一徳。曰任官惟賢材」から。		
	賢哲任官		尚書の咸有一徳の「任官惟賢材」から	
	尅念作聖		尚書の多方編から	

第八条	公事靡監	詩經の「王事無監。我心傷悲」から。	詩の唐風鴛羽、鹿鳴四牡等の「王事靡監」から	儒教思想
第九条	信是義本		論語の「信近於義」から	
第十条	如鑲无端	史記の田單傳から。		仏教思想
第十二条	國非二君。民無兩主。	禮記の「天無二日。土無二王」から来たものである。	礼記坊記の「天無二日、土無二王」から	儒教思想
第十五条	背私向公、是臣之道矣		韓非子五蠹篇の「倉頡之作書也自環者之私、背私謂之公」と左伝文公六年の「以私害公非忠也」等から	
第十六条	使民以時、古之良典。	論語に「節用而愛人。使民以時」とあるもの。	「使民以時」は論語の「節用而愛人。使民以時」から出た文句	

上記の表の通り、憲法十七条の出典の中に、易・書・詩・礼・春秋の五経と論語と孝経からとられた文字のあるのを見ると、当時五経・論語・孝経の類が読まれていたことが分かる。なお、第二条の「篤敬三寶」の条と第十の「絶忿棄瞋」の条とが仏教思想である。

この「憲法」の語は、西洋から学んだ近代憲法の訳語のそれとは違い、古代専制君主の支配層への訓示にちかき性質のものであって、内容にも仏教・儒教・法家・道家などの古典に由来する用語・観念が多くふくまれ、作者の政治的、宗教的思想の表明という側面がかなり大きい。

政治思想としては、君臣を天地に譬え、詔を承けては必ず謹めとする第三条、率土の兆民は王を主とし、所任の官司はみな王臣であるから、国司国造は百姓を斂ってはならないとする第十二条その他において、君主の人民直接支配の方針が示されており、もしこれが聖徳太子の作、あるいは太子の時代の作であるとすれば、すでに大化改新以後の中央集権的官司制度への方向をめざす思想とみることができる。貧しい民の訴

えをよく聴くことを命ずる第五条、民への仁を説く第六条、農桑の節に民を使うのを禁じた第十六条などは、君主の恩恵としての仁政の思想を示すものであって、儒教的支配者意識のあらわれと考えられる一方、賞罰を明すべしとする第十一条、私に背いて公に向かうべしとする第十五条などには、法家の政治思想の色彩がうかがわれる。

しかし、それらよりもさらに注目されるのは仏教思想であって、篤く三宝を敬え、三宝は四生の終帰、万の国の極宗であるとする第二条のほか、「我必非聖。彼必非愚。共是凡夫耳。是非之理、詎能可定。（我必ず聖に非ず、彼必ず愚に非ず、共にこれ凡夫のみ、是非の理、たれかよく定むべけむ）」と説く第十条のごとく、政治的訓示の域を超えた深い宗教的諦観の吐露と感ぜられる文言さえある。

上述したように、憲法十七条は純然たる漢文であり、広く中国の諸書にわたっていることが分かってきた。思想上から見ると、中国流の思想もあり、仏教流の思想もあり、とにかく聖徳太子は儒佛両教を混じて世を治めようとしたのであって、政治上には主として儒教、個人の精神修養は主として仏教によられたのである⁹⁴。

3、まとめ

日本には日本語の起るまでに、まず漢文が起った。現在日本において、文字によって残されている最古の文が漢文である。日本における漢文学の曙光とも見做すべきものは推古天皇の朝に現れている。推古朝にある「菩薩半跏像銘」「法隆寺金堂薬師如来像光背銘」「中宮寺天寿国曼荼羅繡帳銘文」はまだ準漢文であるが、準漢文体の濫觴である。そのうえに、日本人が早くから漢字を以て日本語を綴ったことも分かってきた。

その次の「伊豫道後温泉碑文」「隋の煬帝への国書」「憲法十七条」はいずれも純然たる漢文であり、特に「伊豫道後温泉碑文」は日本の最も古い漢文である。隋の煬帝への国書が帰化人による可能性が高いが、それも純粹の漢文である。憲法十七条は日本最古の理論的政治思想を示す文章であり、「全く太子の手一つで作られたものでないかも知れない」⁹⁵が、聖徳太子はその中に大きな役割を果たしていると思う。

憲法十七条において、聖徳太子の儒佛両教を混じて世を治めようとしたのであって、政治上には主として儒教、個人の精神修養は主として仏教によられた主義はそのあと、着々として行われた。其の精神は明治に至るまで続いたのである。とにかく聖徳太子

⁹⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 39。

⁹⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 38。

が出てから、日本「國民の思想は一變した」⁹⁶。聖徳太子はみづから十七条憲法の文章を作ってその第二条に「篤く三宝を敬え」と述べ、仏典を講説して法華・維摩・勝鬘三經のいわゆる『三經義疏』を著したと伝えられ当時の仏教文化の興隆に大きな役割を果たした。

筆者は芳賀矢一の述べたことに基づき、推古朝は日本の漢文学の黎明がきざしてきたと思う。推古朝これから何十年の発展により、漢文学はまた新しい発展を迎えてきた。

(二) 奈良時代の漢詩文：漢詩の嚆矢

次に推古朝以後、聖徳太子と蘇我一族の政権は 645 年「大化の改新」で中大兄皇子と藤原鎌足によって打倒された。天皇親政の時代となり律令制による中央集権化が一層進められた。「大化」という元号制定は日本が中国から独立した国という意味である。当時の政治情勢は、唐が朝鮮半島に侵攻し 660 年新羅唐連合軍は百済を滅亡させた。663 年百済を支援する日本水軍が白村江で唐新羅連合艦隊に敗れた。668 年唐新羅連合軍は高句麗を滅ぼした。このとき日中関係は緊張し大量の朝鮮の皇族や難民が日本に流入した。こうして多くの知識人が渡来して日本文化は漢詩文を基礎に進展することになった。

文武天皇の 701 年大宝律令を制定し唐に倣った官位制が整備され元号を大宝と改め、日中関係の緊張期が過去のものになった 702 年日本は約 30 年ぶりに遣唐使を唐に派遣した。710 年より平城京に遷都して奈良時代が始まる。日本国の自覚が生まれて国史を編むということになった。すでに聖徳大使が「天皇記」、「国記」を編纂したといわれるが焼失して残っていない。712 年国内向けに「古事記」が編纂され、720 年正式の国史としての外国向けの「日本書紀」が編纂された。「古事記」は和化漢文で書かれ、「日本書紀」は純正漢文で書かれた。万葉仮名で書くのに比べて訓読みが混じった和化漢文で書くと字数が半分くらいになる。これは偉大な進歩である。長々とした和風の呼び名を漢字で意識すれば実に簡単で短くなる。事務能率が画期的に上がった。太安万侶は「古事記」序文を純正漢文で書いた。名文だといわれている。「古事記」本文はその内容を国内の皇族、豪族、官僚に知らしめるものであるから和化漢文で書かれ

⁹⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 40。

たのである。「古事記」、「日本書紀」、「万葉集」、「懷風藻」などの書物が誕生したことは、日本古代の言葉や文法、音韻を知る上で貴重な文化遺産である。

1、日本最初の詩集である『懷風藻』

奈良朝時代に至って、官学は益々盛んとなり、奈良朝の後期、天平勝寶3年(751)冬11月成立の漢詩を集めた私撰漢詩集『懷風藻』が出るようになった。この漢詩集は日本人によってはじめて漢詩の作られた天智時代のものから奈良朝に至るまでの漢詩作を集めたものである。『懷風藻』は日本最初の詩集であり、編者が淡海三船だというのであるが、それは疑問とされている。

①『懷風藻』編纂の意義

『懷風藻』序文(編者の序文)の最後に「余撰此文意者、為將不忘先哲遺風、故以懷風名之云爾」(私がこの漢詩集を撰んだ意図は、先哲の遺風を忘れないためであるので、懷風とこの書を命名した)とあり⁹⁷、先行する大詩人たちの遺「風」を「懷」かしむ詞「藻」集であることがわかる。『懷風藻』完成の前年に死亡した詩人、石上乙麻呂の『銜悲藻』(散逸)を意識したものであるという説もある⁹⁸。

②『懷風藻』の詩人

『懷風藻』の漢詩人については、芳賀矢一は主に大友皇子、河島皇子、大津皇子、葛野王、長屋王、文武天皇等と彼らの詩に関して紹介した。当時は時々宴を催し、群臣に命じて詩を作らしめられたことがあつたのである。従って、大学の博士とか助教とかの官名を付けた人の詩がたくさんある。作者のほうから見ると、皇族・学者・僧侶・官位ある人、こういう人が其の主なものである。

まず開巻第一に弘文天皇即ち大友皇子(648-672年)の二首があり、その伝もある。これによると、弘文天皇は天武天皇に攻められて25才で夭死したが、容貌も立派、学才も優れた人であつたらしい。『懷風藻』において、「皇太子者淡海帝之長子也。魁岸奇偉。風範弘深 眼中精耀。(中略)天性明悟。雅愛博古 下筆成章。出言爲論。時議者歎其洪學。未幾。文藻日新。會壬申年亂。天命不遂。時年二十五」⁹⁹というその伝が

⁹⁷ 小島憲之校注：『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(日本古典文学大系 69：岩波書店、初版 1964年)

⁹⁸ 江口孝夫訳注：『懷風藻』、東京：講談社学術文庫、2000年、p. 377。

⁹⁹ 小島憲之校注：『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(日本古典文学大系 69：岩波書店、初版 1964年)

ある。大友皇子が呼んだ漢詩が 8 世紀の「懷風藻」の冒頭を飾っているが、これが日本人最初の漢詩である。しかし、この人の詩は五言絶句が二首あるだけである。

五言 侍宴 一絶

皇明光日月 帝德載天地
三才並泰昌 萬國表臣義

五言 述懷 一絶

道德承天訓 鹽梅寄真宰
羞無監撫術 安能臨四海

大友皇子の弟に河島皇子がある。天智天皇の第二皇子であるが、兄の大友皇子とは違っておとなしい人であつたらしい。『懷風藻』におけるその伝には、「志懷温裕。局量弘雅」という評価がある。この人の詩もただ一首出ているに過ぎない。

五言 山齋 一絶

塵外年光滿 林間物候明
風月澄遊席 松桂期交情

大津皇子¹⁰⁰ (663~686) は天武天皇の皇子で、大友・河島両皇子とは従兄弟の間柄になる。大津皇子の漢詩も「懷風藻」に収録されているが、二人はともに天皇后継者と目されながら敗れて非業の死を遂げた。『懷風藻』におけるその伝には、「狀貌魁梧。器宇峻遠」という評価がある。この人の詩も四首残っている。胡志昂の論述では、日本上代文学を語るのに大津皇子を避けては通れない。皇子は初期懷風藻詩最大の詩人であつたばかりでなく、初期万葉集歌の代表的な歌人の一人でもあつたからである¹⁰¹。また、『日本書紀』や『古今和歌集』の序などにおいて、大津皇子を以て日本における作詩の嚆矢というように書いてあることに対し、芳賀矢一は「それは誤である」

¹⁰⁰ 『日本書紀』によれば天武天皇の第 3 子とされる（『懷風藻』では長子とされる）。

¹⁰¹ 胡志昂：「大津皇子の詩と歌—大津より始め、詩賦の興り—」『埼玉学園大学紀要』、人間学部篇 2013(13), pp. 348-333。

と指摘した¹⁰²。次は『懷風藻』における大津皇子の漢詩四首の一首である「五言春苑言宴 一首」である。

五言 春苑言宴 一首

開衿臨靈沼。游目步金苑。澄清苔水深。曖曖霞峰遠。

驚波共絃響。啁鳥與風聞。群公倒載歸。彭澤宴誰論。

(衿を開きて靈沼に臨み、目を遊せて金苑を歩む。澄清苔水深く、曖曖霞峰遠。驚波絃の共響り、啁鳥風の與聞ゆ。群公倒に載せて歸る、彭澤の宴誰か論らはむ。)

律令制下において時折り催される宮中の御宴が漢詩を作る場であったことは、懷風藻の序に述べられたとおりである。だが、「春苑言宴」は宮中の御宴で作られたものではない。「言」は語調を整える語で特に意味がなく、一首は春の庭園に集う宴を歌う作であった。

「衿を開く」は寛いだ気分を表す表現、『文選』の「西征賦」には、「開衿乎清暑之館。遊目乎五祚之宮」(衣の襟を開いてくつろいで御苑之池)とある。「靈沼」は『詩經・大雅』

靈台に歌われた周の文王の御苑にある池、王の仁徳を象徴する景観の一つ。「靈」は生き物が豊かに育つ意味で池を修飾する美称となる。「金苑」の金も美称だが、恐らくは石崇の別荘金谷園を準える優雅で豪勢な庭園を表し、「靈沼」と対を為す。そして尾聯の「倒載」は魏晋の間を代表する知識人、竹林七賢の一人・山濤の息子山簡(字は季倫)の故事による。また「彭澤」は彭沢県令を最後にすっかり田園に引退した陶潜(字は淵明)の故事を用いる。

葛野王(669~706)は大友皇子の子で、母は十市内親王と言い、天武天皇の長女である。『懷風藻』には、「器範宏邈，風鑒秀遠。材稱棟幹，地兼帝戚。少而好學，博涉經史。頗愛屬文，兼能書畫」という評価がある。博学多芸で、書画にも達していたうえに、気節のある人である。この人の詩は二首だけである。

五言春日翫鶯梅 一首

聊乘休假景 入苑望青陽 素梅開素靨 嬌鶯弄嬌聲

¹⁰² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 45。

對此開懷抱 優足暢愁靨 不知老將至 但事酌春觴

五言遊龍門山 一首

命駕遊山水 長忘冠冕情 安得王喬道 控鶴入蓬瀛

長屋王（684～729）は飛鳥時代から奈良時代にかけての皇族。太政大臣・高市皇子の長男。官位は正二位・左大臣。皇親勢力の巨頭として政界の重鎮となったが、対立する藤原四兄弟の陰謀といわれる長屋王の変で自殺した。この人の詩は二首だけである。

左大臣正二位長屋王 三首 年五十四

五言 元日宴應詔

年光泛仙籟 月色照上春 玄圃梅已放 紫庭桃欲新
柳絲入歌曲 蘭香染舞巾 於焉三元節 共悅望雲仁

五言 於寶宅宴新羅客 一首 【賦得煙字】

高旻開遠照 遙嶺靄浮煙 有愛金蘭賞 無疲風月筵
桂山餘景下 菊浦落霞鮮 莫謂滄波隔 長為壯思延

五言 初春於作寶樓置酒

景麗金谷室 年開積草春 松煙雙吐翠 櫻柳分含新
嶺高閣雲路 魚驚亂藻濱 激泉移舞袖 流聲韻松筠

③『懷風藻』の詩題

『懷風藻』の詩題を見ても、『春日侍宴』『初春侍宴』『春日應詔』『春苑應詔』『征駕應詔』『元日應詔』『三月三日應詔』など、大抵宴に侍して作つたものであるから、自然作者が其の実際の感興を述べたものは甚だ少いわけである。『詠美人』『歡老』『述懷』なども少々ある。その他田「七夕」「遊吉野山」など言うのもある、大抵はやはり天皇に侍して作つたものである。長屋王は新羅の使をもてなした時には、図書頭、陰陽頭、中納言、文章博士、大学頭などが、その宴に列し、道慈という僧も呼ばれている。当時の詩には君臣献酬のものが多い。例えば、

春日應詔

正三位大納言紀朝臣麻呂

惠氣四望浮。重光一園春。

式宴依仁智。優遊催詩人。

崑山珠玉盛。揺水花藻陳。

階梅鬪素蝶。塘柳掃芳塵。

天德十堯舜。皇恩霑万民。

(春の温和な気が四方に満ち、天子の明德も重なり満ちている。仁智の御心によって宴会が開かれ、詩人を招いてゆうゆうと遊ばれている。介する詩人は崑崙山の珠玉のように多く、揺池に開く水草のように華やかである。階の梅に白い蝶が舞い乱れ、堤の柳は落花を吹き掃っている。天子の聖徳は堯舜に十倍し、万民はひとしく恩沢に浴している。)

朝廷においては、正月、曲水宴、七夕、釈奠などの際に詩の会を催され、吉野山へ行幸の際などにも、やはり詩を召されたのである。そして山水を吟詠するについて、当時の詩に最も目につくものは「仁山智水」ということである。山水を詠する時には、必ず「仁山智水」に関する句がある。例えば、

帝堯叶仁智。仙蹕玩山川。(從駕應詔、伊與部馬養)

惟山且惟水。能智亦能仁。(遊吉野宮、中臣朝臣人足)

鳳蓋停南岳。追尋智與仁。(扈從吉野宮、紀朝臣男人)

地是幽居宅。山惟帝者仁。(和藤原大政遊吉野川之作、大津首)

縦歌臨水智。長嘯樂山仁。(遊吉野川、藤原萬里)

仁山狎鳳閣。智水啟龍樓。(遊吉野宮、中臣人足)

開仁對山路。獵智賞河津。(奉和藤太政佳野之、葛井廣成)

望山智趣廣。臨水仁懷敦。(春日應詔、巨勢多益須)

『論語』雍也編には、「子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」(子曰く、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。)

知者は楽しみ、仁者は寿し)とあり、これは仁人知者の性格気分が高山流水の自然美と一致契合する所があるのを説かれたものであるが、これを詩に見たのは六朝時代としてはひとり晋の王濟の「仁以山悦。水爲智歎」(平吳後三月三日華林園詩)の句があるのみである。然るに、『懷風藻』には上記の如く、64人の作者中13人までもこれを詩材としては一首の流行でなくても、儒雅を喜ぶ思想の発露にほかならない¹⁰³。

2、『経国集』に残る奈良時代の漢詩文

奈良朝の詩は大抵懷風藻に収められているのであるが、後に出た『経国集』の中にも幾分残っている。『経国集』は、平安時代初期の天長4年(827年)、淳和天皇の命により編纂された勅撰漢詩集。良岑安世、菅原清公らが編纂。作者は、淳和天皇、石上宅嗣、淡海三船、空海ら。なお、もともと20巻あった。但し、現存している『経国集』は完全なものではなく、その一部分にすぎないから、その中にあった奈良朝時代の詩も失ったものが少なくない。現存する『経国集』には孝謙天皇、石上宅嗣、淡海三船の詩作、文章などがある。

小山賦 石宅嗣

夫四序之交代，經萬古以無私。草逢春而花錦，樹入夏而葉帷。秋氣悲兮落實，冬風急兮塞枝。觀節物之如此，覺世人之盛衰。開瀛岳兮靡覲，望帝鄉兮難期。顧為山之在進，想覆篲之不移。事孰有貴，會心無卑。構微岫於庭際，引細流於堂垂。天下有山，地中生木，小人以遠，君子所育。雖乏習坎之勢，豈謝設險之德。坐酌損之澤西，臨制節之水北。爾乃參差篲土，日度不障，皎潔坳地。風動而爰漲。松欹岸兮傾蓋，石澄流兮泛鏡。雲片覆兮嶺陰，月半出兮谿映，鳥乍鳴兮遷木，我若遺兮委命。嗟大造之珠品，誠卑細而同慶。於是攝深思於一指，跨鯤海而無居。騁幽情於萬物，據蟻垤而有餘。信夫不出戶牖而知矣，何必歷覽山水而尚諸。聊託文之在茲，式寫心之所如。亂曰：四節遞謝兮，萬物榮枯。視昔異代兮，知後同途。高尚在心兮，坳地足只。清淨委命兮，崑岳蔑爾。禽獸不群兮，何必避世。簞瓢為樂兮，聊以卒歲。為而不恃兮，孰知其德。燕處超然兮，唯道是則。

¹⁰³ 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版の「序」、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、pp. 89～90。

岡田正之氏が石上宅嗣に対し、「淹雅の才學を以て文筆を發據し、風格高華にして文氣の飛動するものあり、奈良朝末の一大後勁となすべし」と高く評価した。

棗賦 藤宇合

一天之下，八極之中，園池綿邈，林麓斗茸。奇木殊名而萬品，神葉分區以千藂。持西母之玉棗，麗成王之圭桐。何則卜深居而榮紫襟，移盤根以茂彤庭。滄地養之淳渥，稟天生之異靈。依金闕而播彩，隨玉管而流形。周本枝於百卉，植聲譽於千齡。爾其秋實抱丹心而泛色，春花含素質而飛馨。朝承周雨漢露，夕犯許月陳星。當晚節而愈美，帶涼風以莫零。石虎瞻而類角，李老翫而此瓶。投海傳繆公之遠慮，在篋開方朔之幽襟。雞心釣名洛浦，牛頭味稱華林。斯誠皇恩廣被草木，聖化實及豚魚。何必秦松授乎封賞，周桑載乎經書。

岡田正之氏が上記の藤原宇合の「棗賦」に対し、「宇合の賦は意を刻し、思を致したるものにして、錦繡の文とも稱すべし。此を我が邦に於ける賦の始となす」と高く評価した。

当時は作者の名前も中国風に読んだが、しかし懷風藻ではまだ皆普通のままに記してある。ところが、『経国集』の時代になると、中国流を採り、石上宅嗣は石宅嗣、藤原宇合は藤宇合と書いてある。

3、萬葉歌人の漢詩

奈良著時代の詩人で、『萬葉集』に歌の残っているものは少なくない。『懷風藻』の詩人で、『萬葉集』の中に其の名が見えるのは下記の通り、春日藏首老、刀利（万葉には土埋）宣令、安倍廣庭、長屋王、藤原宇合、背奈行文、麻田陽春、葛井廣成、三方沙彌、藤原房前、山前王、大津皇子、河島皇子、文武天皇。大抵の人は詩と歌とを並び作ったのであろうが、儒学など漢学に堪能な山上憶良や万葉集を編纂したとされる大伴家持などの詩が、なぜ『懷風藻』に載っていない、憶良、旅人等には詩がなく、藤原不比等には詩だけがあって歌がない。その原因について、芳賀矢一の述べたように、これは不思議であるが、あるいは失ったのかもしれない。或いはまたあまり拙

かったので、残らなかったのかもしれない¹⁰⁴。

うちま山朝風寒し旅にして衣かすべき妹もあらなくに（長屋王）

うまさけのみわのはふりがやまてらす秋のもみぢば散らまくをしも（同）

岡田正之氏が述べたように、『萬葉集』をとって仔細に漢詩文にに対照比較するならば、措辞の上においても、構想の上においても、必ずや一致するものが極めて多い¹⁰⁵。

4、奈良時代の漢文

①金石文

日本現存最古の石碑のひとつと考えられるのは宇治橋断碑の碑文である。宇治橋断碑は、京都府宇治市の橋寺放生院にある宇治橋の由来を記した石碑の断片で、大化 2 年（646 年）に僧道登が架橋したと記す。碑文は四言句二十四句からなっている。

碑文は、大化 2 年（646 年）に僧道登が架橋したと記すが、これは宇治橋を架けたのは道昭とする『続日本紀』の記述と矛盾する。他に証拠がないためどちらが正しいかは不明。『日本霊異記』、『扶桑略記』、『今昔物語集』は道登が架けたとするが、これらは当該碑文の流れを汲む文で証とするには足りない。なお碑文を載せる『帝王編年記』では大化 2 年に道登と道昭が造ったとあり、『扶桑略記』は国史日として道昭創始も併記。『帝王編年記』所載の碑文は次のとおり。ただし、太字は断碑に残る箇所『編年記』の「浼々」を断碑通りに「浼浼」に修正。

浼浼横流 其疾如箭 修々征人 停騎成市 欲赴重深 人馬亡命 従古至今
莫知航竿
世有积子 名曰道登 出自山尻 慧満之家 大化二年 丙午之歳 構立此橋
济度人畜
即因微善 爰発大願 結因此橋 成果彼岸 法界衆生 普同此願 夢裏空中
導其昔縁

¹⁰⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 58。

¹⁰⁵ 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版の「序」、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月 10 日発行、p. 105。

墓誌で最も古いものには船首後墓誌というのがある。天智天皇時代のもので最も古いものである。「船首王後墓誌」には「船氏の中祖・王智仁首」とある。『続日本紀』延暦9(790)年条の百濟王仁貞の上表文には百濟の貴須王の孫王孫王が応神天皇のときに渡来し、その曾孫の午定君の3子のひとりに辰爾の名がみえ、この時から葛井、船、津の3氏に分かれたという。『日本書紀』欽明14(553)年条には蘇我稻目の下で王辰爾が船の賦を数え録し、その功で船長となり船氏の氏姓を与えられたとする。敏達1(572)年条によると高句麗の使がもたらした鳥の羽に書かれた国書を王辰爾のみがよく解読できたので天皇に近侍するようになったという。

また、碑文として名高いものは、那須の国造碑である。那須国造碑とは栃木県大田原市(旧・那須郡湯津上村)にある古碑(飛鳥時代)であり、国宝に指定されている。書道史の上から多賀城碑、多胡碑と並ぶ日本三大古碑の1つとされる。碑文の内容から、韋提は最初那須の国造であったのが評督になっており、那須国が下毛野国(後に下野国)に組み入れられたことがわかる。また、「永昌」は唐の則天武後の時代に使用された年号であり、碑の文字が六朝の書風であること、またこの当時新羅人を下野国に居住させたということが「日本書紀」に記されていることなどから、渡来人と非常に密接な関係のある資料として注目される。

その他に、薬師寺東塔擦銘、威奈卿墓誌、多胡碑、佛足跡碑、聖武天皇銅板詔、多賀城碑、宇智川磨崖経碑などがある。

③官学と漢文学

当時の大学は全く中国の経書を授けるところであった。そして「博士」は教授ということであり、大宝令によると、この博士の下に四百を定員とする学生がある。これは大抵有位者の子弟で、教育の目的は要するに官吏の養成にある。その教授法を見るに、礼記、左伝を大経とし、毛詩、周礼、儀礼を中経とし、周易、書経を小経とし、論語と孝経とは必読とした。そしてこれに通じるか否かによって、階級を定めた。

京都に大学が設けられたと同様に、国々にはまた国学がおかれた。当時の国学とは、律令制において、官人育成のために各国に設置された地方教育機関。なお、大宰府に設置された府学もほぼ同一のものである。

大宝律令によって設置が定められ、各国の国府に1校の併設が義務付けられた。入

学資格としては郡司の子弟のうち 13-16 歳の聡明な者とされていたが、学生定員に欠員がある場合は庶民の子弟の入学を許した。これらの生徒が試験の際に作った文章は『経国集』などに残っているが、いずれも立派なもので、当時日本の漢文学がいかに発達していたかを知ることができるのである。

④ 仏教と漢文学

当時の仏教は宗教というよりはむしろ学問であった¹⁰⁶。朝廷では大学などを設けたが、これは官吏養成を目的とするもので、その教育は一般の国民には及ばない。そして、僧侶の学問はかえって一般の国民に感化を与えた。仏教の研究が盛んになったことは、同時に漢学の研究が盛んになるように影響した。仏教の盛んなことは実に朝廷を凌ぐ有様であったのである。これは仏教が社会のために貢献するところが多く、国民に非常な感化を与えたので、その勢力が段々大きくなった結果である。それは仏法の盛んな中国の文明を輸入したからである。

5、記紀の文章及び思想

奈良朝時代に出た「日本書紀」及び「古事記」も深く漢文学の影響を受けた。

① 『日本書紀』の文章および思想

芳賀矢一の述べたように、「日本」という名をはじめてつけたのは『日本書紀』である。但し、古くは「日本」をヤマト、ヒノモトなどとよんでいたのであろう。書紀の例によってみると、人名にあっては、大人物には、「日本」と書き、外は「倭」の字を使っているようである（『古事記』には全部「倭」としてある）。これらの事からみると、『日本書紀』の名は或いは中国の歴史に対して、特に名付けたものかもしれない¹⁰⁷。

『続日本紀』の養老 4 年 5 月癸酉条には、「先是一品舍人親王奉勅修日本紀 至是功成奏上 紀卅卷系圖一卷」とある。その意味は「以前から、一品舍人親王、天皇の命を受けて『日本紀』の編纂に当たっていたが、この度完成し、紀三十卷と系図一卷を撰上した」ということである。つまり、『日本書紀』ではなく『日本紀』とある。中国では紀伝体の史書を「書」（『漢書』『後漢書』など）と呼び、帝王の治世を編年体にしたものを「紀」（『漢紀』『後漢紀』）と呼んでいた。この用法にならったとすれば、『日

¹⁰⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 67。

¹⁰⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 70。

『日本書紀』は「紀」にあたるので、『日本紀』と名づけられたと推測できる。『日本書紀』に続いて編纂された『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』がいずれも書名に「書」の文字を持たないこともこの説を支持しているといわれる。この場合、「書」の字は後世に挿入されたことになる。

『日本書紀』がすべて漢文で書かれた文章で、まず開卷第一の文句についてみよう。

清陽者薄靡而爲天，重濁者淹滯而爲地，精妙之合搏易，重濁之凝竭難。故天先成而地後定。

(清陽な者は薄靡いて天となり、重濁な者は淹滯って地となるに及ぶ。精妙の合は搏とり易く、重濁の凝は竭き難い。故に天が先に成って地は後に定まった。)

これは全く海南子の天文訓の文句である。

「氣有涯垠，清陽者薄靡而爲天，重濁者凝滯而爲地。精妙之合專易，重濁之凝竭難，故天先成而地後定」(《淮南子・天文訓》)

上記のように、『日本書紀』は書名から内容に至るまで、漢文学からの影響を受けた。

②『古事記』の文章および思想

『古事記』は奈良時代の歴史書。3巻。天武天皇の勅命で稗田阿礼(ひえだのあれ)が誦習(しょうしゅう)した帝紀や先代旧辞を、元明天皇の命で太安万侶(おおのやすまろ)が文章に記録し、和銅5年(712)に献進。日本最古の歴史書で、天皇による支配を正当化しようとしたもの。上巻は神代、中巻は神武天皇から応神天皇まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事を収め、神話・伝説・歌謡などを含む。総じていえば、上巻は純粋な意味で神々の時代を扱い、中巻は神と人間の未分化の時代を、下巻は純粋に人間の時代を扱ったものといえるであろう。

『古事記』作成の目的は、諸家に伝える各種の帝紀・旧辞を天皇の権威によって整理統一し、それによって天皇の権威をいっそう強め、天皇支配の正当性を歴史的に証明し合理化しようとするところにあった。

『古事記』の本文は変体漢文で表記した日本語だが、序文は純粋な漢文で、太安万侶が編纂の経緯を記している。

③記紀に対する比べ

『古事記』も『日本書紀』も、漢文学からの影響を受け、その編纂意図ははっきり

している。皇室が日本を支配している、そのしくみと正当性を過去にさかのぼらせるのがねらいである。その両書の差異は、和文体と漢文体のちがい、また、内容面のちがいを考えあわせると、『古事記』が「私的」であり、『日本書紀』が「公記」的性格を持っているといえる。芳賀矢一の述べたように、書紀は其の名からしてすでに「日本」と言っ、中国人に見せようとしたものらしいが、古事記の方の目的は日本の古い伝や言葉を保存しようとするところにある¹⁰⁸。その故に、両書は材料の選び方についても、趣を異にし、書紀の方はいろいろの説を挙げて「一書曰」と書いたところが多く、又伝説も古事記と違ったところが少なくない。文章も古事記とは違って、中国臭味を帯び、粉飾を施したところが多い。

三、平安時代：漢文学の第一盛期

794年に都を平安に遷した中古である平安時代は唐との交流が益々しげしげとなり、学問僧や留学生の渡航、商船の来往などがあり、嵯峨天皇の朝には儀式も中国の風に倣った。寛平3年(891)ごろに成立し、日本に渡来していた漢籍の勅撰の目録である『日本見在書目録』(『本朝見在書目録』とも言われる)には、当時日本にあった漢籍1万6790巻を部門別に分類し、書名・巻数・著者名などが記されている。それにより、当時漢学は盛んになり、漢詩文も栄えたことが分かってきた。この時代には、多くの日本の文人、僧と中国の詩人が親しく交際した。例えば阿倍仲麻呂と李白・王維との交際は中日文学交流のしるしでもある。小野岑守、菅原清公らによって編纂され日本初の勅撰漢詩集『凌雲集』、小野畧守が編纂した『文華秀麗集』、藤原冬嗣が編纂した『経国集』のような勅撰漢詩三集、さらに僧空海の『文鏡秘府論』などが現れた。

平安時代が後の徳川時代と共に、漢学の最も盛んであった時代で、芳賀矢一は頼山陽が斎藤拙堂の著した『拙堂文話』の序に「余嘗謂吾國文運兩開每開輒有成敗之」と言っているのも、つまり平安朝時代と徳川時代とを指していると主張した。本稿ではそれに基づき、中古である平安時代は漢文学の第一盛期であり、近世である徳川時代は漢文学の第二盛期であることを主張する。平安時代の日本漢文学に関する考察を展開する前に、まず漢文学隆盛の背景について見てみよう。

¹⁰⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.71。

(一) 平安時代漢文学隆盛の背景

桓武天皇の延暦 13 年(794)に平安京に都を定めてから、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの約 400 年間は平安時代である。平安初期は、唐からの影響を強く受けていた。桓武天皇は中国皇帝にならい郊天祭祀を行うなど、中国への志向が強かったと考えられている。そして、漢学は盛んになった。芳賀矢一はその漢文学隆盛の背景が主に学校の設立、儒教と佛教との提携、神道と佛教との提携などであると主張する。

1、学校の設立

平安時代となり、輸入された中国文明は漸く根底の深いものとなり、思想は益々中国化して、学問の盛んとなるとともに、私立学校の設立もようやく多くなった。平安時代以来、有力氏族が一族の子弟を寄宿させ、大学で試験や講義を受けるのに便利ないように設けた学校施設は下記の通りである。

まず、藤原氏のために出来た学校は勸学院である。勸学院は弘仁 12 年(821 年)、左大臣の藤原冬嗣によって創建され、貞観 14 年(872 年)以前に大学別曹¹⁰⁹として公認された。一時大学よりも盛んであったという。次に、承和 14 年(847)、橘氏のために、嵯峨天皇の皇后によって設立された学館院である。それから、平安時代初期の平安京に和気広世が建てたとされる弘文院である。それから、元慶 5 年(881)、在原行平により、が嵯峨源氏のために設立された皇族出身の氏族学生を寄宿させる奨学院である。

それから、弘法大師空海は、庶民教育の目的で綜芸種智院という施設を建て、仏教に儒教を交えて教えていた。綜芸とは各種の学校の意である。大学・国学は身分制限があり、儒教中心であるのに対し、より広い立場で儒教・仏教・道教を教えた。空海が綜芸種智院という学校を京都に創立した趣旨は、その漢詩文集である『性霊集』に載せてある。ある人はこの綜芸種智院の設立を難じて、国家が学校を建てているのに、何もわざわざ私立学校を作る必要はないではないかと言ったに対して、彼はこう言っている。

大唐城。坊坊置閭塾。普教童稚。縣縣開鄉學。廣導青衿。是故。才子滿城。藝士盈國。今是華城。但有一大學。無有閭塾。是故。貧賤子弟。無所問津。遠坊好事。往還

¹⁰⁹ 大学別曹は有力氏族の学生のためにつくられた寄宿舎である。

多疲。今建此一院。普濟瞳矇。不亦善哉。

こうして、私立学校も多く設立され、大学寮という公的機関を巡る氏族対立の副産物のような存在で、学者が公務以外に私邸などを使って門人を教育するなど、私立学校の萌芽のようなものも現れるようになる。一般に学問が興ったので、平安朝時代の漢文学には大家が続々現れた¹¹⁰。例えば、空海、菅原道真、三善清行、都良香などのような漢文学の大家がある。

2、儒仏、神仏の提携

芳賀矢一の指摘したように、平安朝に入り、儒教と佛教とが並んで進むことはより一層著しくなった。殊に仏教の方では、才あるものは門閥にかかわらず立身することができた。証拠としては、『文化秀麗集』にある「答澄公献詩」の中に「朝家無英俊。法侶隠賢才」という句があるのである。この詩句から、当時天下の人材は争って仏門に入るようになった状況を見ることができる。一般国民は多く僧侶の感化を受けた。佛教が盛んになるとともに、宗旨も増やしてきた。新たに天台宗や真言宗が起り、いろいろの宗旨は互いに競争した結果、仏教は益々発展してきた。僧侶の間に伝教、弘法大師のような豪傑が続々として現れたので、「當時の文化は佛教の影響を蒙ることが非常に多い。」¹¹¹また、孝を本とするという儒教の思想は、仏教における弔祭の思想と合して、甚だ都合よく進んでいた。その結果、儒教と佛教とが相提携したようになってきた。

儒教と佛教とが相提携したように、神道と佛教とも亦相提携するようになった。神道には、僧侶と競争して之を圧倒するほどの実力はなかった。都が京都へ遷ったことは華嚴宗や三論宗のためには都合が悪かった。それはこれらの宗旨の本拠はならにであったからである。これに反して弘法や伝教等はこの遷都を利用してそれぞれその将来の宗旨を弘め、本地垂迹説¹¹²を唱えて成功した。かくて「熱田の寶劍も熱田権現となり、日本固有の神もいはゆる三十番神となって」¹¹³仏法を保護するものと考えようになった。権現とは、『金光明最勝王経』に「世尊金剛体権現於化身」とあるように、本来は仏教で仏菩薩が衆生を済度する方便として、権（かり）に種々の姿に化して現わ

¹¹⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 83。

¹¹¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 85。

¹¹² 仏・菩薩が人々を救うために、さまざまな神の姿を借りて現われるという教説。

¹¹³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 87。

れることをいうが、日本では本地垂迹思想の発達に伴い、平安時代には日本の神祇に適用されたのである。こうして神佛両教はよく調和し、聖徳太子憲法十七条の趣旨はここに至って益々世に行われた。

儒教と佛教とが、学問が興り、漢文学に空海、菅原道真、三善清行、都良香等錚々たる大家が続々現れてきた。日本固有の神の信仰と外来の仏教信仰とを融合・調和することにより、平安時代の日本は外来文化を積極的に摂取し、輸入の中国文明が漸く根底の深いものとなる。

(二) 空海の漢文学における功績

空海（774～835）は平安時代前期の僧、真言宗の開祖であり、弘法大師の諡号で知られる。宝亀5年（774）、讃岐国多度郡弘田郷屏風浦（香川県善通寺市）に誕生。父は佐伯田公、母は阿刀氏。幼名を真魚といい、また貴物と称された。空海は延暦23年（804）31歳のとき、遣唐大使藤原葛野麻呂の船に橘逸勢らと同乗し、途中、暴風雨に遭い、九死に一生を得て入唐、在唐中にインド直伝の密教を学んだほか、文学をも研究し、帰国後、それらの組織化、総合化に努め、『大日経』系と『金剛頂経』系の密教を両部としてまとめることに成功したほかに、詩文、経史等の書を請来してきて、嵯峨帝をはじめ、当時の文壇に寄与したことは甚大であった¹¹⁴。文学上の著書には『三教指帰』や『遍照發揮性靈集』（『性靈集』）や『文鏡秘府論』等がある。

空海の漢文学的業績では、芳賀矢一は文芸評論と作文概論を兼ねた『文鏡秘府論』、その詩文を収集して弟子の真済が編纂した『性靈集』を代表作品として論述した。

1、修辞学の本である『文鏡秘府論』

『文鏡秘府論』は弘法大師空海の創作というわけではなく、編著したものであり、六巻あり、内容は「総有一十五種類、謂聲譜、調聲、八種韻、四聲論、十七勢、十四例、六義、十體、八階、六志、二十九種對、文三十種病累、十種疾、論文意、論對屬等、是也」¹¹⁵と15種類に分けて、天・地・東・南・西・北の順で、天巻は声律、地巻は体勢、東巻は對偶、南巻は文意、西巻は文病、北巻は對屬を論ずるというように、声律と對偶を主尾に配して、主に修辞のことが論じてある。即ち、漢詩文を作成する

¹¹⁴ 山岸徳平：「中古漢文学史」『山岸徳平著作集Ⅰ 日本漢文学研究』、東京：有精堂、1972年初版発行、p.189。

¹¹⁵ 遍照金剛：『文鏡秘府論』序文、北京：人民文学出版社、1975年出版、pp.2～3。

ための参考であり、一種の詩文評論書である。

『文鏡秘府論』について、芳賀矢一は「奈良時代には作家も少なく、作品も残って
みないが、平安朝に至つては修辞の書まで出て居るのは、面白い事である」¹¹⁶と高く
評価した。中国では、六朝以後修辞のことがやかましくなり、劉勰の書いた『文心彫
龍』(10巻)を始として鍾嶸の詩品(3巻)などのような修辞のことに関する書がいろ
いろ出たので、「空海はつまり此等の書を参酌して秘府論を作つた」¹¹⁷のである。

奈良時代は吉備真備、栗田真人や阿部仲麻呂などの如き、名を挙げた人も少なくな
いが、当時の人の詩は『懷風藻』に出ているもの、文章はただ『日本書紀』『大宝令』
及び『古事記』の序文などである。平安時代に入り、輸入の中国文明が漸く根底の深
いものなり、私立学校の設立、儒教と佛教とが相提携したように、神道と佛教とも亦
相提携するようになったので、漢文学が盛んになってきた。このような状況において、
弘法大師の『文鏡秘府論』は修辞の書として出ている。これを見ると、当時の人々が
漢詩文を作るのに如何に苦心したかが分かってくる。

①『文鏡秘府論』に関する論述の展開

次に、芳賀矢一の『文鏡秘府論』の内容に関する具体的な論述を見てみよう。芳賀
矢一は『文鏡秘府論』の南卷「論文意」「論体」「定位」、東卷「論対」、北卷「論対属」、
西卷「論病」の順で、論述を展開してきた。

芳賀矢一の『文鏡秘府論』南卷「論文意」に対する説明は次のようにまとめていき
たい。「思則便來。來即作文。如其境思不來。不可作也」とは、文を作るにまず思想の
必要なことを説いたこと、「夫置意作詩。即須凝心目擊其物」とは、漫然と筆を下すの
を排斥したこと、「作文乘興便作」「興發意生」とは詩文を作るに興の必要なことを
説いたこと、「夫詩工創心以情為地以興為經。然後清音韻其風律。麗句增其文彩」¹¹⁸
とは当時流行した個人の詩句を引用して作るようなことは排斥していること、また、あ
る人が詩は苦心して作るべきものではないと言ったのに対する態度としては「此甚不
然。固須繹慮於險中。採奇於象外。狀飛動之句。寫冥奧之思」¹¹⁹であることなどを述
べてきた。

¹¹⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 86。

¹¹⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 86。

¹¹⁸ 空海：「文鏡秘府論」『日本詩話叢書』第七卷、1998年再版、pp. 348～349。

¹¹⁹ 空海：「文鏡秘府論」『日本詩話叢書』第七卷、1998年再版、p. 347。

『文鏡秘府論』南卷「論体」については、芳賀矢一は「論体」における博雅（頌論の類）、清典（銘讚の類）、綺艶（詩賦の類）、宏壯（詔檄の類）、要約（表啓の類）、切至（箴誄の類）など六種の文体を挙げた。

『文鏡秘府論』南卷「定位」については、芳賀矢一は挙げられた（一）分理務用（二）叙事以次（三）義須相接（四）勢必相依という四つの方法に対し、（一）に注意しなければ、所により、繁に失し弱に失し、（二）に注意しなければ、文意が錯乱し、（三）に注意しなければ、順序を失い、（四）に注意しなければ、文勢を失うという考え方を示した。

また、芳賀矢一は『文鏡秘府論』地巻「論体勢」「論対」などの条に対しても論述を展開する。そのうち、「論体勢」の条などは比喩的なことが多くて感服できないという結論である一方、当時の詩文には最も重要なものである対句論に関する「論対」「論対属」の条は29種に分けた対句の形、「的名対」「隔句対」「双擬対」「連綿対」などの例を挙げて説明したうえで「此の分類はあまり logical ではない」「ただ昔の人の附けた名稱を並べたくらゐるものである」¹²⁰という結論を出した。

『文鏡秘府論』西巻の詩文の病に関する「論病」については、芳賀矢一は当時中国では、これがやかましかったので、日本でもまねたという主張である。『文鏡秘府論』に挙げられた病は28種あり、つまり（一）平頭（二）上尾（三）蜂腰（四）鶴膝（五）大韻（六）小韻（七）傍紐（八）正紐（九）水渾（十）火滅（十一）闕偶（十二）繁説（十三）齟齬（十四）叢（十五）忌諱（十六）形迹（十七）傍哭（十八）翻語（十九）長擷腰（二十）長解錠（二十一）支離（二十二）相濫（二十三）落節（二十四）雜乱（二十五）文贅（二十六）相及（二十七）相重（二十八）駢拇などである。

芳賀矢一は『文鏡秘府論』の内容について、上記のように詳しく論じている。奈良時代においては、漢文学作家も少ないし、漢文学作品もあまり残っていないが、平安時代に入り、『文鏡秘府論』という修辞に関する著作まで出ているのは面白いことである。「之を見ると、當時の人が漢詩文を作るのに、如何に苦心したかがわかる」¹²¹というのは芳賀矢一が大いに褒めたたえる理由であろう。

② 詩論と歌論に与える影響

¹²⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 95。

¹²¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 88。

芳賀矢一が言っている「rhetoric の書であるが、これ亦我が國の歌學に影響した所が少ない」¹²²ように、『文鏡秘府論』は後世日本の歌論に影響した所が非常に多い。芳賀矢一は主に和歌四式、和歌の髓脳、和歌における病、古今集の六義、和歌の十体などの歌学が中国にあった修辞の書の抜粋である『文鏡秘府論』からの影響も多い。

和歌四式は平安時代の歌学書とされていた『歌経標式』、『倭歌作式』（喜撰式）、『和歌式』（孫姫式）、『石見女式』の総称である。偽書だという説があるが、名称における「式」はやはり唐の詩僧、詩論家である皎然の詩論に関する著述とする『詩式』からの影響を受けたと思う。『文鏡秘府論』天巻には「詩章中用声法式」という項目もある。

和歌の髓脳は和歌の起源や歌体の種類、歌病、作法、歌語の解釈などを記した歌学書である。髓脳が流行したことは源氏物語（1001～1014 頃）玉鬘において、「和歌の髓脳いとところせう、病ひさるべきところ多かりしかば」¹²³という記載が見える。当時既に歌論のやかましかったことが分かるのである。和歌の「髓脳」という名称は唐の元兢が著した『詩髓脳』に倣ったと思う。元兢の『詩髓脳』の内容は主に調声、対属、文病などに関する歌学である。『文鏡秘府論』天巻、地巻、北巻はその元兢が著した『詩髓脳』に影響されるのである。

和歌における病、即歌病のことである。日本国語大辞典により、歌病とは、歌の修辞的欠陥である。歌の評価基準を設定するために、中国の詩病の考えをとり入れ、四病、七病、八病などといった。和歌においても病のことを論じ、漢詩の四声八病に倣って四病、八病というようになってきた。『文鏡秘府論』西巻には詩文の病に関し、28種の病は挙げられた。和歌の四病、八病などがその影響を受けたのは言うまでもない。

古今集における和歌に関する六義も「いふまでもなく毛詩の六義によった」のである。古今和歌集の真名序には「和歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌」と言っている。それは「詩有六義焉：一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌」¹²⁴という毛詩の六義によったものである。『文鏡秘府論』地巻の「六義」はその毛詩の六義をそのまま引用して論じている。

また、芳賀矢一の指摘したように、愚賢抄、奥儀抄（藤原清輔）、悦目抄（藤原基俊）、

¹²² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 86。

¹²³ 紫式部著、阿部秋生等校注・訳：「玉鬘」『新編日本古典文学全集 源氏物語③』、東京：小学館、p. 138。

¹²⁴ 毛亨傳、鄭玄箋、孔穎達疏、龔杭雲等整理、「毛詩注疏卷第一」『毛詩正義（上）』、北京：北京大学出版社、1999年出版、p. 11。

愚秘抄（藤原基俊）等に見えている和歌の十体も中国の詩論から来たものである。例としては、愚賢抄には和歌の十体を次の通りに述べている。

（一）幽玄体（二）長高体（三）有心体（四）事可燃（五）麗体（六）濃体（七）有一節体（八）面白体（九）見様体（十）拉鬼体

藤原定家の和歌十体は和歌の体に関する各種の説を集大成したものである。

それに対し、『文鏡秘府論』地巻の「十体」は次の通りである。

一、形似體、二、質氣體、三、情理體、四、直置體、五、彫藻體、六、映帶體、七、飛動體、八、婉轉體、九、清切體、十、青花體

上記のように、各種の和歌理論も中国古代の修辞に関する著書からヒントを得たものである。それらのいわゆる歌論は中国古代の修辞理論を参酌して作られた『文鏡秘府論』を媒介として中国古代の修辞理論、劉勰の『文心彫龍』、梁の鍾嶸の『詩品』、唐の嵇皎然の『詩式』、元兢の『詩髓脳』から影響を受けている。そのうえに、本稿では、空海の『文鏡秘府論』は後世の歌論に影響した所が非常多いのみならず、中国の文学理論にとっても非常に大きな資料価値があると考えられる。なぜならば、引用した中国の六朝期から唐朝に至る詩文の創作理論に関する文献には、中国で佚した漢籍も多く、その資料的価値という側面からしても空海の『文鏡秘府論』はたいへん貴重な文献と言える。

「四声八病」は中国詩歌史上において、非常に重要であるが、「八病」は誰の説かまた、その含まれている意味が何であろうかということは上記の『文鏡秘府論』における「四声八病」に関する論述を見る前には、中国において「四声八病」に関する論述は明らかにしていない¹²⁵。例としては、紀昀『沈氏四声考』卷下「按齊、梁諸史、休文但言四聲、五音、不言八病。言八病、自唐人始」。また、羅根沢の中国文学理論に関する著作である『中国文学批評史』は『文鏡秘府論』に基づき、沈約が「八病」説の提出者であるという結論を出した。その結論は中国文学史と文学理論に関する研究者によって引き継がれている。

¹²⁵ 張伯偉：域外漢學与中国文學研究、『文學遺產』2003年第3号、p. 132。

2、詩文集である『性靈集』

『文鏡秘府論』以外に、弘法大師空海には『遍照發揮性靈集』という文学作品が10巻ある。それは空海の詩、碑銘、上表文、啓、願文などを弟子の真済が集成したものであり、最古の日本人の個人文集である。『性靈集』は全十巻であるが、ただし八・九・十巻が散逸した¹²⁶。その内容は、巻一が「遊山慕仙詩」など詩10篇、巻二は「沙門勝道上補陀洛山碑」など碑3篇、巻三は「勅賜屏風書了即献表并詩」など詩ならびに表・序・状5篇、巻四は「勅賜世説屏風書了献表」など表、啓、遺言19篇、巻五は「為大使与福州觀察使書」など唐時代の啓・書7篇、巻六から巻八は「弘仁太上奉為桓武皇帝講御札法花経達嘸」など達嘸、願文、表白、知識書42篇、巻九は「宮中真言院正月御修法奏状」など奏状、表、勅答、啓白、知識文、書15篇、巻十は「綜芸種智院式并序」など式、讃、書、詩十篇。

①社会的活動の実用文

『性靈集』について、芳賀矢一は「性靈集を通讀すると、其の文は多く実用的なもので、著者が社会的に活動した様子が分かる」¹²⁷と言っている。確かに、『性靈集』を全体的に見ると、勅語を書いたり、ほかの僧のために文を作ったり、あるいは中国人に代作をしているものである。勅語を書く例としては、巻九の「贈玄賓法師勅書」がある。

形静山水。神王煙霞。春花織錦。對之陶情。秋葉散帷。見之忘歸。求於緇素。卓爾不群。比來。時逼玄冬。序凝縞雪。想彼禪居。實勞適懷。今故存問。兼附。送饋綿五十屯。布卅端。至宜領之。¹²⁸

これは、玄賓に嵯峨天皇が綿五十屯、布三十端を下賜するにあたり、空海が代筆したものである。

ほかの僧のために文を作る例としては、巻五の「為橘学生与本国使啓」がある。

留住學生逸勢啓。逸勢。無驥子之名。預青衿之後。理須天文地理。諳於雪光。金聲

¹²⁶ 『日本国語大辞典』により、後に巻8・9・10が散逸したが、済暹が承暦三年（1079）に逸文を「続性靈集補闕鈔」として編んだものをもって補い、10巻に復した。

¹²⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.102。

¹²⁸ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、p.388。

玉振。縵鉛素。然今。山川隔兩鄉之舌。未遑遊槐林。且温所習。兼學琴書。日月荏苒。資生都盡。此國所給。衣糧僅以續命。不足束脩讀書之用。若使。專守微生之信。豈待廿年之期。非只轉螻命於壑。誠則。國家之一瑕也。今見所學之者。雖不大道。頗有動天。感神之能矣。舜帝撫以安四海。言偃拍而治一國。尚彼遺風。耽研功畢。一藝是立。五車難通。思欲抱此焦尾。奏之于天。今不任小願。奉啓陳情。不宜謹啓。¹²⁹

これは入唐中の橘逸勢が帰国しようとして、その許可を得るために、遣唐大使高階真人に書を呈するにつき、空海が囑されたものである。

また、中国人のために代作をしている詩文の例としては、巻五の「為大使與福州觀察使書」がある。その一部は次の通りである。

賀能啓。高山澹默。禽獸不告勞。而投婦。深水不言。魚龍不憚倦。而逐赴。故能。西羌梯險。貢垂衣君。南裔航深。獻刑厝帝。伏惟。大唐聖朝。霜露攸均。皇王宜宅。明王繼武。聖帝重興。掩頓九野。牢籠八紘。是以。我日本國。常見風雨和順。(中略)……伏願。垂柔遠之惠。顧好隣之義從其習俗。不怪常風。然則。涓々百鸞。與流水。而朝宗舜海。喁々萬服。將葵藿。以引領堯日。順風之人。甘心輻湊。逐腥之蟻。悅意駢羅。今不任常習之小願。奉啓。不宜。謹啓。誠是。明知艱難之亡身。然猶。忘命德化之遠及者也。¹³⁰

遣唐大使の藤原賀能が福州の觀察史の閻濟美に入国を乞うため、空海が囑されたものである。この書を見て、当時日本が中国からどういう風に見られていたかが分かる。とにかく其の博識と文才とは認められている。

②僧侶の詩文集

『性靈集』の文は多く実用的なものであり、著者が社会的に活動した様子がわかる。また、此の集の中に詩もあるが、多くは佛教に関するものばかりで、普通の人事、自然に関する者は殆どない¹³¹。その詩の題目は「見還俗人詩」「後夜聞佛法僧鳥詩」「詠十喻詩」というようなものである。次に、『性靈集』巻第一に収まる「遊山慕仙詩」を

¹²⁹ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系 71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、p. 281。

¹³⁰ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系 71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、pp. 266～271。

¹³¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 103。

見てみよう。

遊山慕仙詩 并序¹³²

昔何生郭氏賦志遊仙。格律高奇藻鳳宏逸。然而空談牛躅未説大方。余披閱之次見斯篇章。吟詠再三惜義理之未盡。遂乃抽筆染素指大仙之窟房。兼悲煩擾於俗塵。比无常於景物。何必神龜照心一足也。大仙圓智略有五十三焉。鑒機應物其數不少。今之勒韻意在此乎。一覽才子。庶遺文取義云爾。

高山風易起 深海水難量 空際无人察 法身獨能詳
鳧鶴誰非理 蝮龜詎叵障 葉公珍假借 秦鏡照真相

詩題から見ると、この「遊山慕仙詩」という詩は一見遊仙詩のように隱逸風であるが、内容においては仏教的なものが少なからず含まれている。詩には、『老子』『莊子』『神仙傳』『坐禪三昧經』と密教經典などに関する文句が出ている。冒頭において、空海は「高山、風、深海、空」というように、自然と『金光明經』の「妙高山」に象徴される仏教的空間を重ね合わせて、「遊山慕仙詩」の舞台を表わしている¹³³。この詩は、遊仙詩の形式を借りながら、いかに仏教の無常思想を導入し、仏教の立場から遊仙詩の仙境を超越する仏教的境地を構築した。

③文章家の詩文集

弘法大師空海の詩文はいずれも社会的活動における実用文、あるいは仏教に関するものばかりである。そのほかに、芳賀矢一はまた「何處までも哲學者の文學で、文學者の文學ではない」¹³⁴と「彼の作は一般に規模が大きい」¹³⁵を以て空海及びその漢詩文を評価した。彼の詩は概して理屈に走る傾きがあるが、慧果大和尚¹³⁶の碑文を作ったことなどを以て見ても、空海は當時文章家として有名であつたことが分かる。慧果の碑文に言う、

汝未知。吾與汝宿縁之深乎。多生之中。相共誓願。弘演密藏。彼此代爲師資。非只

¹³² 渡辺照宏、宮坂宥勝校注『日本古典文學大系 71 三教指歸 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、p. 159。

¹³³ 猪股清郎：空海の「遊山慕仙詩」の思想構造、『大正大学大学院研究論集』第32号、2008年、p. 123～135。

¹³⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 106。

¹³⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 108。

¹³⁶ 大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨耶恵果和上。

一兩度也。是故勸汝遠涉。授我深法。受法云畢。吾願足矣。汝西土接我足。吾也東生入汝之室。莫久遲留。吾在前去也。¹³⁷

これは806年12月15日、空海に真言宗秘密の大法を伝授した青龍寺慧果が入滅したとき、門下の俊秀千余りの中より選ばれて撰した碑銘である。規模が非常に大きい。その碑文を以てその抱負の大きかったことを知ることができる。

弘法大師空海は当時の文章家として有名であったことは何人と雖も認めている。これらの詩文を見れば、弘法大師その人の事業、とにかく日本の文明史上における大人物としての事業、またその漢詩文が日本文学史上にも大いに関係あることが分かるのである。

④天皇と応酬贈答の漢詩文

芳賀矢一は『日本後記』の記載により、嵯峨天皇が僧侶に綿を賜ったことが出ているので、「當時僧侶は大變優遇されたやうである」¹³⁸と言っている。『性靈集』巻三の「奉謝賜綿兼詩并表」に言う、

纚披天書。字勢龍盤。再三諷詩。金聲玉振。¹³⁹

これは嵯峨天皇より綿百屯と七言詩とを恩賜されたのを感謝する詩文である。

また、嵯峨天皇は度々空海に書を望まれたようである。同巻の「勅賜屏風書了即献表并詩」に言う、

作詩者。以學古體爲妙。不以寫古詩爲能。書亦以擬古意爲善。不以擬古跡爲巧。¹⁴⁰

これは嵯峨天皇の勅命により、屏風に一詩を書いて献納したときの上表文と詩である。

弘法大師空海は漢詩文を媒介として、嵯峨天皇と応酬贈答を行ったことから見ると、当時こういう風に、僧が尊ばれ、また嵯峨天皇が漢文に長ける僧を愛されたことが分かるのである。

『文鏡秘府論』と『性靈集』は弘法大師空海の代表的な漢文学作品である。

殊に平安時代に入り、修辞の書まで出ていることや、漢文に長ける僧が尊ばれたこ

¹³⁷ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系 71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、p. 205。

¹³⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 109。

¹³⁹ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系 71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、p. 219。

¹⁴⁰ 空海著、渡辺昭宏ら校注：『日本古典文学大系 71 三教指帰 性靈集』、東京：岩波書店、1965年出版、pp. 211～213。

とは平安朝漢文学の隆盛につながると思う。

(三) 勅撰漢詩三集の内容と特質

1、勅撰漢詩三集の内容

『凌雲集』について、芳賀矢一は「勅撰詩集の嚆矢であつて、延喜の古今集に先立つて一百年許りである」¹⁴¹と評価した。『凌雲集』は正式名『凌雲新集』、平安初期の漢詩集であり、弘仁五年（814）成立した。漢文学を好んだ平城・嵯峨・淳和の三天皇の中で、一番文学のために尽くした嵯峨天皇の勅命により、小野岑守・菅原清公等が撰定した。平安初期、三天皇をはじめとする当時の代表的詩人 23 人の 91 編を収録した。『凌雲集』の序文によると、延暦元年から弘仁 5 年に至る 30 年間の作を集めたものである。

『凌雲集』の詩の内容を見ると、芳賀矢一は「此の集の中には空海の作が一つも見えないから、朝廷のものを主として集めたものであらう」¹⁴²と言っている。作品の排列は爵位に従い平城上皇・嵯峨天皇から順に降って無位の巨勢志貴人で終わっているが、詩の内容に基づく分類によらず個人別官位順に排列しているのは官僚主義的な形式的排列といえる。強いて作品の内容を求めると、宴集・遊覧・餞別・贈答・詠史・艶情など多岐にわたっているが、宴集と遊覧の詩が多く、その舞台は河陽離宮と神泉苑が中心を成している。91 首のうち、詩のタイトルに神泉苑が出ているのは 10 首ある。次は御製廿二首の「重陽節神泉苑賜宴群臣 勅空通風同」である。

重陽節神泉苑賜宴群臣 勅空通風同¹⁴³

登臨初九日。霽色敞秋空。

樹聽寒蟬斷。雲征遠雁通。

晚藥猶含露。衰枝不裊風。

延祥盈把菊。高宴古今同。

¹⁴¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 113。

¹⁴² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 113。

¹⁴³ 与謝野寛等編著、校注：『日本古典全集 懷風藻、凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝麗藻』、日本古典全集刊行会、1926、p. 53。

重陽は、陰曆九月九日。「賜」は、ここでは漢詩の題や趣向を与えること。つまり、「勒空通風同」とは「各句の韻（最後の文字）を空通風同とすること」をお題として群臣に出したわけである。

『文華秀麗集』は平安時代初期の漢詩集、3巻あり、嵯峨天皇が仲雄王、菅原清公、滋野貞主に命じて撰集された勅撰集で、弘仁九年（818）に成る。つまり、芳賀矢一が「これは先づ凌雲集の出来てから、二三年間に出来たものであらう」¹⁴⁴と指摘したように、『凌雲集』の成立後二三年間に多くの詩が生まれたので、嵯峨天皇の勅命により『凌雲集』に漏れた詩と新しい詩を部門別に類聚した。作者は天皇、東宮以下26人、詩数は148首であるが、現存本は下巻の巻末五首を欠き143首である。

『経国集』は淳和天皇の天長四年（827）に出来た平安時代初期の漢詩文集であり、『凌雲集』『文華秀麗集』に次ぐ第三の勅撰集であり、20巻あったのであるが、現在は6巻しか残っていない。淳和天皇の勅命を受けて滋野貞主、良峯安世、菅原清公らが編纂したものである。

芳賀矢一の指摘したように、『経国集』は『凌雲集』出来てから14年、『文華秀麗集』が出来てから9年であり、「詩の外に文も入って居る」¹⁴⁵のである。そうすると、上記の『凌雲集』『文華秀麗集』二集は嵯峨朝文壇を中心とした漢詩集であり、『経国集』は奈良朝より平安朝に至る漢詩文集である。『経国集』の序文によると、「自慶雲四年迄天長四載。作者百十八人。賦十七首。詩九百十七首。序五十一首。対策三十八首。分爲兩帙。編成廿卷」¹⁴⁶ということである。現存するのは巻一（賦）、巻十（樂府・梵門）、巻十一、十三、十四（以上雜詠）、巻二十（策）の六巻のみであるが、それから判断して巻一賦、巻二から巻十五まで詩（七百七首欠）、巻十六から巻十八まで序（現存なし）、巻十九以下が対策（十二首欠）であったと思われる。

2、勅撰漢詩三集の特質

①天皇の漢詩好み

平城、嵯峨、淳和の三天皇は大変漢詩文をお好みになった。上記の『凌雲集』、『文

¹⁴⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.114。

¹⁴⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.114。

¹⁴⁶ 与謝野寛等編著、校注：『日本古典全集 懷風藻、凌雲集、文華秀麗集、経国集、本朝麗藻』、日本古典全集刊行会、1926、p.110。

華秀麗集』、『経国集』の勅撰三集を通覧してみると、平城、嵯峨、淳和の三天皇とも詩作があるが、そのうち「嵯峨天皇が最も優れて居られるやうである」¹⁴⁷。『凌雲集』、『文華秀麗集』は嵯峨天皇の命により、『経国集』は淳和天皇の命により撰定、編纂されたものである。勅撰集としては、延喜五年(905)醍醐天皇の勅命によって編纂され、延喜十三年(913)頃の成立とされる『古今和歌集』に先立つこと100年ばかりである。

大曾根根章介等が編纂した『研究資料日本古典文学』第11巻の『漢詩・漢文・評論』により、単に『経国集』における主要詩人と詩数は次の通りである。嵯峨天皇は96首、滋野貞主は34首、小野岑守は30首、巨勢識人は25首、賀陽豊年は19首、菅原清公は18首、淳和天皇は17首、良岑安世は14首、桑原腹赤は13首、藤原冬嗣は10首、空海は8首である¹⁴⁸。

②詩題の変化：単一より多様へと

芳賀矢一の指摘したように、「懐風藻の頃には、たゞ天子をほめたてるといふやうなものが多かつたが、今やかういふものは減じて、題目も大に變つた」¹⁴⁹のである。芳賀矢一は日本後記の「幸神泉苑。覽花樹。命文人賦詩。賜綿有差。花宴之節始於此矣」¹⁵⁰の記載と『凌雲集』『文華秀麗集』の漢詩により、嵯峨天皇の神泉苑への行幸や神泉苑での詩作が多いと言っている。

懐風藻の詩の題材から観察してみると、天皇を賛美し、宴に侍する詩、殊に天皇の詔に応じて詠んだ詩、即「侍宴」「応詔」のような詩が多いのは明らかである。平安時代に入り、勅撰三集には、題を賜って詩を作らせる「各賦一物」などのようなものがよくみえる。例えば、『凌雲集』には「九月九日於神泉苑宴群臣 各賦一物得秋菊」という詩がある。

九月九日於神泉苑宴群臣。各賦一物。得秋菊。

旻商季序重陽節 菊為開花宴千官 藥耐朝風今日笑 榮霑夕露此時寒

把盈玉手流香遠 摘入金杯辨色難 聞道仙人好所服 對之延壽動心看

天皇は「秋菊」を詠させ、群臣はそれぞれ「秋露」「秋蓮」「秋山」などを詠じたので

¹⁴⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.114。

¹⁴⁸ 大曾根章介等：「漢詩・漢文・評論」『研究資料日本古典文学』第11巻、東京：明治書院、1984年、p.13。

¹⁴⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、pp.114～115。

¹⁵⁰ 藤原緒嗣等編、六国史：国史大系、日本後記・続日本後記・日本文徳天皇実録、東京：経済雑誌社、1918年発行、p.148。

ある。詠じた詩としてはそれぞれ「九月九日侍讌神泉苑 各賦一物 得秋露 應製」
「九月九日侍宴神泉苑 各賦一物 得秋蓮 應製」「九月九日侍宴神泉苑 各賦一物
得秋山」という漢詩がある。

また、前に挙げられた「重陽節神泉苑賜宴群臣 勒空通風同」（『凌雲集』）という詩
のように、空、通、風、同等をあらかじめ決めておき、これらを用いて詩を作るよう
な場合もある。「賜」は、漢詩の題や趣向を与えること。つまり、「勒空通風同」とは
各句の韻（最後の文字）を空通風同とすることをお題として群臣に出したのである。

その他に、漢詩の会で、抽選などの方法により、席上で韻字を割り当て、それに従
って詠作させる探韻ということも大変行われた。例えば、『文華秀麗集』に「春日対雨
得情字」という漢詩がある。

春日対雨。探得情字。一首¹⁵¹

主人開宴在辺序 客醉如泥等上京

疑是雨師知聖意 甘滋芳潤灑羈情

③詩の体裁の変化：五言より七言へ

懐風藻時代の詩は多く五言であったが、勅撰三集時代の詩に関して、芳賀矢一は「七
言が多くなり、又平仄も非常にきびしくなつた」¹⁵²と論じている。勅撰三集における
嵯峨天皇の七言古体詩は43首、七語律詩は10首である¹⁵³。

以上のように、天皇と群臣とがお互いに唱和すること、賜われた字を用いて詩を作
ること、また探韻ということにより、勅撰三集時代の作詩に関する技巧の進歩が見え
るのであろう。

（四）鬼神を感ぜしむ詩才を有する都良香

都良香（834～879）は平安前期の学者、詩人である。叔父に『文華秀麗集』撰者の
桑原腹赤がある。初め名を言道とあったが、貞観14年（872）良香と改めたのである。
良香は承和元年（834）に生まれ、若くして大学に入り、貞観二年に文章生となり、文

¹⁵¹ 小島憲之校注：『日本古典文学大系 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』、東京：岩波書店、1964年初
版、p. 211。

¹⁵² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 118。

¹⁵³ 黄少光博士論文：「第六章 勅撰三集の詩人と詩律学」『奈良・平安朝日本漢詩の詩律的研究』、東京
外国語大学、2003年、p. 213。

章得業生を経て同十一年に対策に及第したが、その対策文は後世の模範とされた。その家集『都氏文集』六巻は三巻しか現存せず、他に『本朝文粹』『和漢朗詠集』などに詩文が散見される。

文才の名高い良香について、彼に関して今に伝わっているいろいろの伝説の中、芳賀矢一は次の二つの例を挙げて説明した。

一つは『和漢朗詠集』の「早春」にも収録され、「春暖」を題とする都良香の「氣霽風梳新柳髮 冰消波洗舊苔鬢」¹⁵⁴という漢詩である。良香は羅生門のあたりで「氣霽風梳新柳髮」とうたったところが、門の鬼（茨木童子）は「冰消波洗舊苔鬢」と附けたという話がある。もう一つは都良香の「晩夏参竹生嶋述懐」という漢詩の伝説がある。『江談抄』にも「故老傳云、下七字作者難思得、島主辨才天告教之」¹⁵⁵という記載がある。良香は竹生島で遊んだ時「三千世界眼前尽」という上句を読んだときに、その下句を案じえなかった時に、弁才天が下句を付けたというような伝承がある。その序文が芳賀矢一によって書かれた『通俗教育 逸話文庫 詞人の巻』には都良香について、「詩才、鬼神を感ぜしむ」と題する逸話もあるのは上記の理由であろう。

『都氏文集』は都良香の集である。全六巻あるが、今は三、四、五の三巻が残っているのみである。元慶三年（879）頃良香の門人が良香の各種散文を内容、形式により分類編纂したものである。亡失部には漢詩も含まれていたといわれる。

詩より、都良香は漢文の方が得意であったらしい。その原因については、芳賀矢一の論述したように、『都氏文集』巻三の「白楽天讃」に「集七十巻。盡是黄金」と言っている¹⁵⁶。「白楽天賛」の全文は次の通り。

白楽天讃¹⁵⁷

有人於是。情竇虛深。拖紫垂白。右書左琴。仰飲茶菽。傍依林竹。人間酒癖。天下詩淫。龜兒養子。雀老知音。治安禪病。發菩提心。爲白爲黒。非古非今。集七十巻。盡是黄金。

讃がいわゆる雑賛に属するもので、文を通読してみれば、都良香は白詩への深い内

¹⁵⁴菅野禮行校注・訳：『新編日本古典文学全集 19 和漢朗詠集』、東京：小学館、1999年10月20日第1版第1刷発行、p. 24。

¹⁵⁵ 国史研究会：「江談抄第四」『国史叢書・古事談 續古事談 江談抄』、友文社、1915年発行、p. 380。

¹⁵⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、pp. 126～127。

¹⁵⁷ 塙保己一編：『都氏文集』『群書類従』第九輯、東京：続群書類従完成会、1960年訂正三版発行、p. 134。

的接触が感ぜられるのであろう。上記の「春暖」を題とする都良香の「氣霽風梳新柳
髮 冰消波洗舊苔鬚」という漢詩の詩題も白樂天の詩題である。芳賀矢一がこの『都
氏文集』の「白樂天讚」を挙げた原因としては、良香を代表とする平安時代の漢文学
者が唐土からの外来文化に対する透徹した優秀な理解力を立証するためであろう。

上記のように、都良香は鬼神を感ぜしむ詩才を有し、文才の名高い漢詩人であると思
う。

(五)「当代の詩匠」である島田忠臣

島田忠臣(828～892)は号が田達音、島田清田の孫であり、大学寮に入り、菅原道
真の父是善に師事した。30歳ごろ藤原基経の近習となり、来朝した渤海国使の接客使
に任じられ、その後因幡権介・大宰少貳など地方官を経て帰京、兵部少輔に任じられ
たその娘宣来子が道真に嫁したこともあって、二人は終生親交あり、寛平四年(892)
忠臣が65歳をもって死去する。忠臣の詩は始め『田達音集』10巻に収められ、他に
も『百官唐名鈔』などの著作があったがほとんどが散逸し、後に弟の良臣らの詩と併
せて『田氏全集』全3巻にまとめられた。

芳賀矢一は紀長谷雄の島田忠臣に私淑して「当代之詩匠」と讃えたということ借
りて忠臣を評価した。紀長谷雄はその知遇に感ずべき人物として菅原道真について、
島田忠臣を数える。彼は『本朝文粹』巻八の「延喜以後詩序」において島田忠臣を「故
伊州別駕田大夫作当代之詩匠」¹⁵⁸と述べている。

島田忠臣の家集『田氏家集』は漢詩集であり、全3巻で200首の漢詩を収録した。
ほかに、『田氏家集』巻之中にある「自詠」の註により、「貞観元年春献年調三百六十
首」及び「齊衡三年秋製詠史百四十六首」という記載がある。詩の数から見ると、島
田忠臣は芳賀矢一の言っているように、非常な多作家である。

また、菅原道真にも島田忠臣を弔する「哭田詩伯」という詩がある。曰く、

哭如考妣苦澹茶　　哭くこと考妣の如ごとくして　茶を澹ふより苦し
長断生涯燥湿俱　　長に生涯　燥湿を俱にせむことを断てたり
縦不傷君傷我道　　縦ひ君を傷まずとも　我が道を傷み
非唯哭死哭遺孤　　唯に死を哭くのみに非あらず　遺れる孤を哭く

¹⁵⁸ 国史大系編修會編：『新訂増補国史大系第29巻下 本朝文粹』、東京：吉川弘文館、1965年9月30日発行、p.188。

万金声価難灰滅　　万金の声価は灰と滅きえがたからむ
三径貧居任草蕪　　三径の貧居は　草の蕪るるに任すならむ
自是春風秋月下　　これより春風秋月の下
詩人名在実応無　　詩人の名は在ありて実は無かるべし

「自是春風秋月下　詩人名在実応無」とは今後、春風秋月の佳興の時を迎えても、世間にえせ詩人はどっさりいても真の詩人はもういないのだと思うと寄寥に耐え切れないこの私をどうしようという意味である。それに、道真が「今後再びあのように詩人の実を具えた人物は現われまい」¹⁵⁹と痛哭したという記載もある。

そのほかに、芳賀矢一は『田氏家集』巻中に収録された島田忠臣の序が附いた詩を挙げ、島田忠臣の詩人として尊ばれていたと見えることを立証する。その詩の内容は次の通りである。

元慶五年冬大相國以拙詩草五百餘篇始屏風十帖。仍題長句謹以謝上
常嗟雅頌聖時空　收拾博偏報國功　雖識骨輕無足買　恐拋石質有堪攻
蓬蒿獻草任垂白　菅蒯開花欲奪紅　曾在昌齡成帝號　不言詩上玉屏風¹⁶⁰

序文にある「大相國」とは関白基経のことである。島田忠臣は関白の藤原基経にも仕え有能な官吏としても知られる。「常嗟雅頌聖時空」の「雅頌」は『毛詩』（大序）の六義に言う「雅」と「頌」のことである。「雅」は周王室の宮廷の楽、「頌」は宗廟の祭祀の楽。ここでは単に詩の意に用いている。

また、芳賀矢一の指摘したように、島田忠臣の詩には、詠史などが多いのである。その『田氏家集』巻之中に収録され、自らの境遇を詠む「自詠」¹⁶¹という七言律詩である。曰く、

不厭吟諷欲終年　　厭はず吟諷して年を終へんと欲するを

¹⁵⁹ 国史大辞典編集委員会：『国史大辞典』第7巻、東京：吉川弘文館、1986年11月20日第1版第1刷発行、p. 102。

¹⁶⁰ 塙保己一編：「田氏家集」『群書類従』第九輯、東京：続群書類従完成会、1960年訂正三版発行、p. 171。

¹⁶¹ 塙保己一編：「田氏家集」『群書類従』第九輯、東京：続群書類従完成会、1960年訂正三版発行、p. 170。

自課初知自性然 自ら課して初めて知る 自らの性然るを

祝着聖年三百首 聖年を祝着して三百首

(貞觀元年春。獻年調三百六十首) 貞觀元年春、年調三百六十首を獻ず

贊來良史半千篇 良史を贊來たつて千篇に半ばせり

(齊衡三年秋。製詠史百四十六首) 齊衡三年秋、詠史百四十六首を製す

學耕何必逢元吉 學耕何ぞ 必ずしも元吉に逢はん

詩癖曾無入十全 詩癖曾て十全に入ること無し

形相亦非飛食肉 形相も亦た 飛びて肉を食らふに非ず

欲拋筆硯更何縁 筆硯を拋たんと 欲して更に何にか縁らん

それは島田忠臣が宮廷詩人として、貞觀元年春、天子の御代を祝って年ごとの貢物として 360 首の詩を献上していることを言っている。「齊衡三年秋。製詠史百四十六首」とは齊衡三年秋、詠史 146 首を製作したということである。優れた史官を讃えて約 500 首を作ったこともある。

上述したように、島田忠臣は 500 首余りの漢詩を持っている、実を具えた非常な多作家である一方、詩人として尊ばれた真の詩人である。その故、紀長谷雄は島田忠臣を「当代の詩人」と讃えたわけであろう。

(六) 漢文学者である菅原道真

菅原道真 (845~903) は平安朝廷喜時代を代表する作家の一人である。芳賀矢一は「道真はただ延喜時代の大學者といふばかりでなく、實に徳川以前に於ける唯一の漢文學者といつてもよい人である」¹⁶²と高く評価した。

1、菅原道真の生涯

菅原道真は承和十二年 (845) 生まれ、父が菅原是善である。菅原氏は奈良時代の古人以来代々の学者の家であった。道真の祖父清公、父是善はいずれも学者の誇りとする文章博士、式部大輔に任じ、公卿の地位に列した。詩文集に『菅家文草』『菅家後集』、編著に『日本三代実録』『類聚国史』などがある。

道真は幼少より父の厳格な教育を受け、11 歳で詩を賦した。初めて作った「月夜見

梅華」という詩は『菅原文草』第1巻に収録されている。三・四句「可憐金鏡轉 庭上玉房馨」は空には黄金の鏡のように月の光が眩く地上の園には白玉の花房から梅の香りが香ってくるという意味で、素晴らしいことである。芳賀矢一がその『日本漢文学史』において述べた菅原道真の生涯については、次のようにまとめていきたいと思う。

承和十二（845）年	1歳	京都に生まれる。
齊衡三（856）年	11歳	島田忠臣の指導のもとに初めて「月夜見梅華」という詩を作った。
天安二（858）年	14歳	七言「臘月独興」を作った。
貞観二（860）年	16歳	「残菊詩」を作った。
貞観四（862）年	18歳	文章生に及第した。
貞観十二（870）年	26歳	進士に及第した。試験官は都良香であった。この時の題は「明氏族」「辨地震」、共に『菅原文草』巻八に出ている。
元慶三（879）年	34歳	文章博士となった。
寛平六（894）年	47歳	藏人頭、やがて遣唐大使を命ぜられたが、行かなかった。
延喜元（901）年	57歳	九州に貶された。
延喜三（903）年	59歳	大宰府で没した。

上記のように、道真は幼少より父の厳格な教育を受け、11歳で詩を賦した。貞観四年（862）文章生に及第した。同九年（867）文章得業生となり、元慶三（879）年34歳で文章博士に任じた。菅原道真は一儒臣から起こって、大臣まで上がった。儒臣は三位以上に進んだものは、吉備真備と菅原道真があるばかりである。

2、菅原道真の漢文学作品

そればかりでなく、道真は文学においても非常に優れている。その著作としては、『菅原文草』12巻、左遷された後の作を集めた『菅家後集』が1巻あり、類聚国史200巻も、現存する者は僅かにその一部に過ぎない。その詩は『菅原文草』『菅家後集』の

¹⁶² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.129。

ほか、『扶桑集』や『本朝文粹』にも見える。

『菅原文草』は昌泰三（900）年八月、道真が年若い醍醐天皇に献上した菅家の家集であり、それまでの自己の作品を集めて時代順に配列したものである。『菅家文草』を見ると、当時の決まり文句が多く、作者の個性のあらわれたものはあまり多くないが、実際のことをうたったものが少なくない。その原因について、芳賀矢一は作者の境遇に変化があるので、その境遇が然らしめたためであると言っている。次に、その境遇に関する実際の事を記録した漢詩を見てみよう。

元慶六年夏の末に「有所思」という詩を作った時に、次のように、註してある。

元慶六年夏末、有匿詩誹藤納言。納言見詩意之不凡、疑當時之博士。余甚慙之。命矣、天也。¹⁶³

元慶六年夏の末、匿詩有り。藤納言を誹る。納言は詩の意の凡ならざるを見て、当時の博士かと疑ふ。余甚はなはだ慙づ。命なるかな、天なるかな。

この「藤納言」は藤原冬緒のことである。上記の言葉から菅原道真は自分の冤罪を蒙ったことをいかに心痛しているか分かってきた。この「博士難」「有所思」のような作者自身実際の事を詠む詩作は『菅原文草』にある詩の特徴である。文学において非常に優れている菅原道真は漢詩を作ることを通して我が衷情を訴える。

『菅原後集』は「五言自詠」に始まり、「謫居春雪」に終わる太宰府流謫時代の作品のみを集めたものである。『菅原後集』は概して悲哀の詩であるが、君を怨む声を聞かない。芳賀矢一は「彼の詩は、境遇の爲に自然な所が多く、これは當時一般の作家とは異なる点である」¹⁶⁴と指摘した。『菅原後集』第1首の「五言自詠」は次のように曰く、

離家三四月 落涙百千行 萬事皆如夢 時時仰彼蒼

意訳：家を離れて三か月、いや四か月が過ぎたであろうか。もう百すじも千すじも涙を流した。何もかも夢のように思えて、あの青空を仰ぐばかりだ。

これを詠んだのは、四月か五月ごろであろう。主にわが身の運命を訴える作品である。そのほかに、「種菊」のような佛教を詠じるものも少なくない¹⁶⁵。「種菊」に言う

¹⁶³ 菅原道真著、川口久雄校注：『日本古典文学大系 72 菅家文草 菅家後集』、東京：岩波書店、1966年 第1刷発行、p. 184。

¹⁶⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 138。

¹⁶⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 140。

「未曾種處思元亮。爲是花時供世尊」とは釈迦世尊に供えるためであって菊を愛した陶潜（陶淵明）にちなんでのことではないという意味である。元亮は陶潜の字である。この詩を通して、ひとえに花の時に釈迦牟尼世尊にお供えしようと思う作者の仏教に対する態度が分かってきた。

3、漢文学者としての菅原道真

前述したように、芳賀矢一は菅原道真が延喜時代を代表する大学者ばかりであり、非常に優れている漢文学者でもあると言っている。そういうことについては、次の二つの例を挙げてみよう。

まず、紀長谷雄は「延喜以後詩序」において菅原道真の左遷後は文を知る者が一人もいなくなってしまったことを述べ、その死を「紀相公獨煩劇務。自餘時輩盡鴻儒」¹⁶⁶という文で嘆いている。鴻儒というのは学問の深い人、儒教の大学者である。即ち、大曾根章介の言っているように、鴻儒とは「超而又超」たる大学者の意である。菅原道真が学問の深い大学者であるといえるのは少しも違わないことであろう。

また、『日本三代実録』元慶7年4月21日丁巳条により、「縁饗渤海客。諸司官人雜色人等。客徒在京之間。聽帶禁物。以従五位上式部少輔兼文章博士加賀権守菅原朝臣道真。權行治部大輔事。従五位上行美濃介嶋田朝臣忠臣權行玄蕃頭事。爲對渤海大使裴頌。故爲之矣。」¹⁶⁷という記載がある。それは元慶7（883）年、前回の渤海使来朝より11年後、道真は初めて直接渤海使の接伴に加わっている。彼は、仮に「禮部侍郎」（治部大輔の唐名、外務次官にあたる）と称され、元慶7年4月28日より5月12日にかけて、島田忠臣や紀長谷雄等とともに、渤海使裴頌一行を接伴し、漢詩の唱和を繰り返した。それに関する詳しいことについては、『菅家文草』巻七「鴻臚贈答詩序」において、次のように曰く、

余以裡部侍郎、興主客郎中田遠者、共到客館。……始自四月二十九日、用行字韻、至於五月十一日、賀賜御衣、二大夫、兩典客、與客徒相贈答、同和之作、首尾五十八首。更加江郎中一篇、都慮五十九首。¹⁶⁸

¹⁶⁶国史大系編修會編：『新訂増補国史大系第29巻下 本朝文粹』、東京：吉川弘文館、1965年9月30日発行、p.188。

¹⁶⁷国史大系編修會編：『新訂増補国史大系第四巻 日本三代実録』、東京：吉川弘文館、1966年4月30日発行、pp.534～535。

¹⁶⁸菅原道真著、川口久雄校注：『日本古典文学大系72 菅家文草 菅家後集』、東京：岩波書店、1966年第1刷発行、p.543。

その序文より、鴻臚贈答詩が礼部侍郎である道真と主客郎中田遠音(嶋田忠臣)が裴頌らの滞在する平安京の鴻臚館で宴会を行い、そこで贈答された詩 58 首に江郎中の 1 首を加えた 59 首を一軸にまとめたものであることがわかる。宴席を設けて裴頌の即興で詩を作れる才能に対して、自身らも即興で詩の贈答をしたことは菅原道真が作詩の才能も優れている漢文学者である証しだと考えられる。「七歩之才」を有する裴大使に対し、菅原道真らは才に富んでいるから選ばれたと言えよう。

菅原道真の詩才に対して、裴頌大使は「禮部侍郎、得白氏之體」と言って褒めた。つまり、道真の作品は風体が白樂天に似ているということである。それは『菅家文草』巻第 2 に収録された「余、近叙詩情怨一篇、呈菅十一著作郎。長句二首、偶然見誦。更依本韻、重答以謝」という詩にある長い自注である。曰く、

「来章曰、蒼蠅旧讚元台弁。白体新詩大使裁。注云、「近来有聞。裴頌云、『礼部侍郎、得白氏之体』」。余、読此二句、感上句之不欺、兼下文之多詐。誦和之次、聊述本情。¹⁶⁹

来章に曰く、「蒼き蠅のごとき舊びにたる讚は元台ぞ弁へたまへる。白が体の新しき詩は大使こそ裁りたまへ」といへり。注に云はく、「近来聞きしこと有り。裴頌の云はく、『礼部侍郎は、白氏が体を得たり』と」。余、此この二句を読み、上句の欺かざること、と兼ねて下文の詐り多きことを感じたりき。誦和の次に、聊かに本よりの情を述べにき。」

この長い注から見ると、裴頌により道真の詩が白居易に通じるものと評されたことが話題となった様子を伝えている。その意味で、柴田清継氏はその論文「平安時代国際交流の一齣——菅原道真・嶋田忠臣と渤海使裴頌との贈答詩を読む」において、道真と忠臣のこの時の作品は、「日本漢文学史上、特筆に値するものと言っても過言ではないだろう」¹⁷⁰と高く評価した。

芳賀矢一の述べた通り、菅原道真は幼時から才智に勝れていた。11 歳で詩を賦し、34 歳で文章博士となり、詔を奉じて、陽成天皇に後漢書を講じ、学問の深い大学者である「鴻儒」である一方、渤海の使者、裴頌等を饗応する任に当たった。裴頌は道真

¹⁶⁹菅原道真著、川口久雄校注：『日本古典文学大系 72 菅家文草 菅家後集』、東京：岩波書店、1966 年第 1 刷発行、p. 204。

¹⁷⁰柴田清継：「平安時代国際交流の一齣——菅原道真・嶋田忠臣と渤海使裴頌との贈答詩を読む」『武庫川国文』(78)、2014-11、p. 30。

の詩を賞して白楽天のようだと称揚した。それは菅原道真が延喜時代を代表する大学
者であり、非常に優れている漢文学者でもあると芳賀矢一が言っている理由であろう。

(七) まとめ

上記のように、平安朝時代に入り、学校の設立、儒仏及び神仏の提携は平安朝にお
いて漢文学の第一盛期を迎えてくる背景である。儒教を教える私立学校、弘法大師が
建てた総芸種智院という仏教に儒教を交えて教える学校の設立により、学問が興った
ので、平安朝には『勅撰三集』のほかに、空海、菅原道真、都良香、島田忠臣など錚々
たる漢文学大家が続々現れてきた。芳賀矢一は、主に空海、勅撰三集、都良香、島田
忠臣、菅原道真を中心として平安朝の漢文学に関する論述を展開してきた。

『勅撰三集』は天皇が漢文学者に命じて編纂した漢詩集である。『凌雲集』『文華秀
麗集』二集は嵯峨朝文壇を中心とした漢詩集であり、『経国集』は奈良朝より平安朝に
至る漢詩文集である。勅撰三集には、題を賜って詩を作らせる「各賦一物」などのよ
うなものがよくみえると芳賀矢一は言っている。天皇と群臣とがお互いに唱和するこ
と、賜われた字を用いて詩を作ること、また探韻ということにより、勅撰三集時代の
作詩に関する技巧の進歩が見えるのであろう。

空海の漢文学における功績については、芳賀矢一はその代表的作品である『文鏡秘
府論』と『性霊集』を中心とした論述を展開した。『文鏡秘府論』は中国の六朝から唐
の詩論を参酌して編纂した修辞の書であり、作文作詩の参考の書である。奈良時代に
おいては、漢文学作家も少ないし、漢文学作品もあまり残っていないが、平安時代
に入り、『文鏡秘府論』という修辞に関する著作まで出ているのは漢文学が盛んになる一
つの証拠であろう。芳賀矢一の『性霊集』に関する論述により、『性霊集』は社会的活
動の実用文としては勅語を書いたり、ほかの僧のために文を作ったり、あるいは中国
人に代作をしているものであり、僧侶の詩文集としては、仏教の無常思想など宗教的、
哲学的なものばかりに関する作品でもある。また慧果大和尚の碑文を作ったことなど
を以て見れば、空海は当時文章家として有名であつたことが分かる。そのほかに、弘
法大師空海は漢詩文を媒介として、嵯峨天皇と応酬贈答を行ったことが何度もある。
そういうことから見ると、当時こういう風に、僧が尊ばれ、また嵯峨天皇が漢文に長
ける僧を愛されたことが分かるのである。即ち嵯峨天皇を中心とする宮廷の貴族は漢

文学を好んで、平安朝漢文学の隆盛に非常に大きな貢献を尽くしたと思う。

良香は羅生門のあたりで「氣霽風梳新柳髮」とうたったところが、門の鬼（茨木童子）は「冰消波洗舊苔鬢」と附けた話や、竹生島で遊んだ時「三千世界眼前尽」という上句を読んだときに、その下句を案じえなかった時に、弁才天が下句を附けた伝説がある。また、『都氏文集』の「白樂天讚」から見ると、平安時代の漢文学者である都良香は唐土からの外来文化に対し、透徹した優秀な理解力を有する。それに基づいて、都良香は鬼神を感じしむ詩才を有し、文才の名高い漢詩人であると思う。

島田忠臣は全3巻で200首の漢詩が収録された『田氏家集』とその他計500首を超える漢詩を有する非常な多作家であり、実を具えた詩人として尊ばれて、真の詩人であり、詩匠である。

最後に、芳賀矢一は延喜時代を代表する漢文学者である菅原文草の漢文学における功績を述べた。菅原道真は幼少より父の厳格な教育をうけ、11歳で島田忠臣の指導のもとに初めて「月夜見梅華」という詩を賦し、14歳で七言詩「臘月独興」を作った。16歳で「残菊詩」を作り、18歳で文章生に及第した。それから34歳で、文章博士となり、文学において非常に優れている漢文学者である。その漢文学作品は12巻ある『菅原文草』と、左遷された後の作を集めた『菅家後集』である。『菅原文草』の詩の特徴は「博士難」「有所思」のような作者自身実際の事を詠む詩なのである。『菅原後集』は概して悲哀の詩であるが、当時一般の作家と異なって、君を怨む声を聞かない。文学において非常に優れている菅原道真は漢詩文を作ることを通して我が衷情を訴える。道真は平安朝延喜時代を代表する作家の一人であり、徳川以前に於ける唯一の漢文学者でもある。

天皇が漢文学者に命じて編纂した漢詩集である『勅撰三集』のほかに、修辭の書である『文鏡秘府論』と詩文集の『性靈集』を有する空海、鬼神を感じしむ詩才を有し、文才の名高い漢詩人である都良香、「当代の詩匠」である島田忠臣、平安朝延喜時代を代表する漢文学者である菅原道真のような錚々たる漢文学大家およびその優れている漢詩文集の現れは平安朝の漢文学が盛んとなってきた。上述した理由により、本稿は中古の平安時代は漢文学の第一盛期であるということを主張する。

四、近古：僧侶の漢文が牛耳る

鎌倉時代に入り、衰えかけていた学問がさらに衰頹した一方、仏教は益々盛んとなった。学問はひとり僧侶の手に帰し、僧侶の漢文が牛耳る。また新しい文明は僧侶の手によって輸入された。芳賀矢一は主に虎関師錬、雪村友梅、義堂周信などを中心とする漢文学大家について論述を展開してきた。

(一) 僧侶の漢文が牛耳る背景

1、漢学の衰頹

芳賀矢一の述べたように、鎌倉幕府が出来てからは、朝廷には全く学者がいらなくなった。

平安朝廷喜時代から、仮名文がだんだん発達してきて、京都には大江、菅原両家が学問を掌っていたのであるが、だんだん衰えかけていた学問は、ここに至ってさらに衰え、漢文学においてはほとんど見るべきものはない。当時は日記や歴史のような実用的なものが幾分あるが、「純文學として見るべきものに至つては全くない。」¹⁷¹

例えば、平安時代末期に信西が編纂された歴史書『本朝世紀』は全 20 巻あり、1150 年～1159 年に成立し、『史官記』『外記日記』ともいわれ、同時代の歴史、世相風俗を伝える好史料であるが、漢文とはいうものの、和習を帯び、やはり当時の日記体の文に過ぎない。

また、幕府の方も、ただ武芸ばかり奨励したので、学問はそっちのけとなり、大学も国学もすっかり衰えてしまった。

2、僧侶の漢文の全盛

芳賀矢一の言っているように、鎌倉時代になって朝廷も衰え、漢文も衰えたが、その間にあってひとり益々盛んとなったものは佛教である。それは佛教が朝廷でも重んじられ、幕府でも重んじられたためである。

鎌倉時代は、武士が貴族から権力を奪い、力を着々とつけていた時代でもあった。この時代には臨濟宗と曹洞宗という二つの禅宗が、相次いで中国からもたらされた。

¹⁷¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 154。

力をつけつつあった武士に好まれた事から、鎌倉などに多くの禅寺が建てられ、大いに栄えた。

当時、朝廷も漢文も衰えたが、仏教は朝廷でも幕府でも重んじられたので、ひとり益々盛んとなったのである。その時、表面上儒者の中国への留学ということもなかったが、僧侶の往来は相変われず盛んであった。平安末期から鎌倉時代すなわち南宋（1127～1279）に於ける入宋僧特に栄西、俊芿、圓爾の諸僧と宋学との関係は非常に深い。栄西は28歳の時、仁安三年（1168）すなわち南宋孝宗、乾道四年四月に入宋し、天台山や育王山で修行し、同年九月、『天台章疎』60巻を携えて帰朝した。俊芿は34歳の時、正治元年（1199）に宋に渡り、雪竇山で禅要を問い、径山の蒙菴元聡らに参禅。翌年、四明山にて戒律を学び、更に天台、浄土、悉曇（梵語・音韻）を究める。『元亨釈書』十三巻、俊芿伝によると、俊芿は帰朝に際して「佛舍利三粒。律宗經書三百二十七卷。天台章疎七百一十六餘圖畫碑帖器物等」というものを将来している。圓爾は嘉禎元年（1235）34歳の時に入宋し、戒律・天台を学び、在宋七年間、仁治二年（1241）40歳の時、多くの典籍をもたらして博多に帰朝した。木宮泰彦の著した『日中文化交流史』第四章「帰化元僧と文化の移植」に於ける「帰化元僧一覧表」により、中国から来て史上に名ある僧は一寧一山をはじめ、13人ある。其の13人は史籍に名の残れるものであるが、このほかにも事跡の伝わらないものは少なくないであらう。つまり、当時僧侶の往来が頻繁になり、仏教が非常に盛んとなった。

3、禅宗の新興と五山の繁栄

時代が変わり、新機運に催されたので、禅宗という新しい宗派は起こってきた。芳賀矢一が言っているように、「新に起った禅宗は新しい支那の影響である。」仏教に対して、禅宗は新たに中国からもたらされて、鎌倉武士に迎えられた。日本の禅宗は、建仁寺の栄西（1141～1215）が黄龍宗¹⁷²を伝え、永平寺の道元（1200～1254）が曹洞宗を伝えるのに始まり、鎌倉に歓迎された。その原因は主に不立文字、以心伝心の禅宗が簡易直截にして学問のない武士にちょうど適合したためであった。

¹⁷² 黄龍宗とは禅宗五家七宗の一つであり、臨済宗の第七祖である石霜慈明の弟子に当たる黄龍慧南が祖。宋の景祐三年（1036）隆興府黄龍山に住んで宗風をひろめたことから、この宗の名がある。その後200年ほどして絶えたが、日本には栄西によりもたらされた。黄龍派という呼び方もある。

五山とは、中国宋代、官寺たる径山寺・広利寺・景德寺・靈隠寺・浄慈寺をいう。日本において、五山とは中国の五山十三刹を模倣し、中世の禅宗官寺制度での寺格の一つである。十刹や諸山の上に位置する最高の寺格。原則として幕府が公帖を発行して住持を任命した。京都五山と鎌倉五山があり、五山位にあった諸寺は、時期によって多少の異同がある。将軍足利義満の代の至徳三年（1386）の制度では、京都五山として、天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺があり、鎌倉五山として、建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺があった。

初めは、京都と鎌倉とを混じて、五山と言っていたが、後には両方に全く分かれた。そしてこの五山においては、僧侶の人物により、寺格に変動があったのである¹⁷³。官寺として認められた禅宗寺院を五山、十刹、諸山の三段階に分けて管理する五山制度が成立したことは、かかる禅寺に属する禅僧の漢詩文の作製熟を一層助長し、詩文壇の形成を促し、この漢詩文を「五山文学」と言い、日本漢文学の黄金時代を形づくるとともに、中世文化の形成のうえで重要な役割を果たした。

要するに、芳賀矢一の述べたように、鎌倉室町時代を通じて、新しい文明は常に僧侶の手によって輸入された。僧侶は単に旧文明の維持者であったばかりでなく、同時に又新文明の輸入者であったのである。かくて五山は一面新しい宋学の研究所たると共に、また一面文学の方面においても、唐宋の新潮流を輸入し、自然当時における日本の漢文学の中心となった。

（二）学問は僧侶の手に帰す

こうして仏教は盛んであったが、漢文学はすっかり衰え、学問はひとり僧侶の手に帰し、僧侶は大抵儒仏を兼ね学んだ。芳賀矢一の述べたことに基づき、本稿は次のようにまとめてみたい。まずは、禅林文学の第一人者として扱われる虎関師錬、そして五山文学における白眉である義堂周信、多作家である中巖圓月及びそれらの漢文学作品について論述を展開していくことにする。

1、五山文学の第一人である虎関師錬

虎関師錬（1278～1346）は宋から来た、五山文学の起こる初の人と言われる一寧一山の門人である。虎関、名は師錬、道号虎関のほかには風月主人と称した。鎌倉後期・

南北朝初期の臨濟宗の僧。京都の人。幼より読書を好み、文殊童子と称せられた¹⁷⁴。学問は内外に通じ、文才に長ずる。著作に『元亨釈書』30巻のほか、語録『十禅支録』『続十禅支録』3巻、詩文集『济北集』20巻、『楞伽経』の注釈『仏語心論』18巻、四六文の作法を説いた『禅儀外文集』2巻、日本における最初の韻書『聚分韻略』5巻などがある。

芳賀矢一は「文學の方面から見ると、虎関は先づ當時の禪僧中第一の人であらう」¹⁷⁵と言っている。以下は主に虎関師錬の『元亨釈書』、『济北集』という二つの作品を中心として述べる。

①漢文学中最も注意すべき『元亨釈書』

芳賀矢一は『元亨釈書』が「鎌倉時代の漢文学中最も注意すべきものである」¹⁷⁶と高く評価した。仏教の伝来から元亨二年（1322）までの約700余年間にわたる諸宗僧侶の伝記や評論、および仏教関係の諸事蹟などを漢文体で記した「日本僧史の嚆矢をなす仏教史」¹⁷⁷である。全書は30巻あり、『史記』『漢書』、または『仏祖統記』などの体裁にならって、全体の構成を傳（10）、贊（2）、論（2）、表（1）、志（10）の五格より成る。

平安朝には往生伝、続往生伝、三外往生伝、本朝新修往生伝（史籍集覽）等があるが、『元亨釈書』はこういうものの中の白眉であると芳賀矢一が言っている。諸宗僧侶の伝記や評論、および仏教関係の諸事蹟などに関することばかりであるが、「文学として見ることも出来るのである」¹⁷⁸。ここにおいて、『元亨釈書』巻第14の「菅原寺行基」という文を例として挙げてみよう。

釋行基。世姓高志氏。泉州大鳥郡人。百濟國王之胤也。天智七年生。及出胎胞衣裏纏。母忌之棄懸樹枝。經宿往見出胞能言。父母大悅收而鞠育。童稚之時與兒輩遊。動讚佛乘。村里牧豎之兒捨牛馬而從者數百人。其主或覓兒童馬牛到基所。聞其讚說不問兒畜。感泣而忘歸。基之說誨頃牛馬散諸所。主各以為己失也。說已基上高處呼牛馬。

¹⁷³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 157。

¹⁷⁴ 久須本文雄：『日本中世禅林の儒学』、東京：山喜房佛書林、1992年6月25日発行、p. 26。

¹⁷⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 168。

¹⁷⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 159。

¹⁷⁷ 久須本文雄：『日本中世禅林の儒学』、東京：山喜房佛書林、1992年6月25日発行、p. 28。

¹⁷⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 160。

應聲而來。各主牽去。率以為常十五出家居藥師寺。學瑜伽唯識等論於新羅慧基。又從義淵益智證。二十四受具足戒於德光法師。基事行化道俗追隨之者以千百數。所過遇嶮難架橋修路。指某地之可耕墾。點某水之可瀦灌。穿渠池築堤塘計畫功績不日而成。州民至今賴之。王畿之內建精舍四十九所。諸州往往而在焉。基嘗行化返故里。里人捕魚而宴池邊。基過其地。年少戲以膾薦基。基喫之須臾臨池吐出。皆為小魚游泳去。見者驚伏。基私度沙彌。勅禁園。身在獄中而出遊里閭。獄吏以聞。詔赦之。聖武帝甚敬重之。天平十七年為大僧正。此任始于基。時智光法師者有辯慧。嘗疏孟蘭盆。般若心等經。聞基榮授曰。我才智宏淵。行基只營小行耳。朝廷棄我取彼何乎。抱嫉恨隱山谷。光一夕俄死。其徒以忽殂未葬十日而蘇。語諸弟子曰。冥使驅我而行。路有金殿高廣光耀。我問使者此所何。冥使曰。汝稱智人何不知之。行基僧正受生之處也。又進行。望見煙焰滿空。問之。答曰。汝當墮之地獄也。既而到閻王所。王呵曰。汝於閻浮提日本國有謗嫉行基僧正之心。今所以召汝者治其罪也。非命終也。即令抱火銅柱。我肉鎔骨融而後放還。言已馳謝基。基時在攝州造難波橋。遙見光來而微笑。光伏地作禮悔謝說夢事。二十一年正月皇帝受菩薩戒。及皇太后皇后。乃賜號大菩薩。二月二日於菅原寺東南院右脇而寂。年八十二。基之所過耕夫捨耒耜織婦投機杼奔波禮謁。村閭闐咽而不容易往來。云。¹⁷⁹

それは行基に関する伝記であり、行基の生年、生地、父母、家系、出家、研学、修行、造寺、農業・交通関係施設の造営、聖武天皇との関係、大僧正補任、入滅、葬送などを編年体でした。明治昭和期の漢学者である北村沢吉氏はその『五山文学史稿』において、『元亨積書』における「菅原寺行基」に対し、「筆々細透物々活動亦能く無中有を生ぜしめて現虚離睽せず。靈妙の技なくして焉んぞよく斯の如きを得ん」¹⁸⁰と高く評価した。

上述したように、『元亨積書』は鎌倉時代末期の五山学芸界を代表する虎関の畢生の大作で、したがってその内容は仏教史だけでなく日本漢文学などの分野からも大いに注目されている。鎌倉時代の漢文学において最も注意すべきものである。

¹⁷⁹ 国史大系編修會編：『新訂増補国史大系第 31 卷 元亨積書』、東京：吉川弘文館、1965 年 6 月 30 日発行、p. 206。

¹⁸⁰ 北村沢吉：『五山文学史稿』、東京：富山房、1941 年 10 月 10 日発行、p. 145。

②『済北集』における新しい傾向

『済北集』は虎関師錬の漢詩文集、20巻、済北庵という庵名を冠して書名としたもので、虎関平生の著述を分類し、巻一賦、巻二唐律、巻三・四律詩、巻五・六偈贊、巻七原記銘、巻八序跋、巻九弁議書、巻十外記行記・伝・表・疏、巻十一詩話、巻十二清言、巻十三祭文、巻十四・十五論、巻十六一二十通衡の順に配列した。つまり、此の集には序、跋もあれば、賦、絶句、紀行などもあり、その他巻十一には詩話、巻十二には清言、それから巻十六以下は通衡と言って雑著が集めてある。

『済北集』に対し、芳賀矢一は「平安朝時代の學者とは趣を異にし」「詩風も自ら平安朝時の白氏流とは趣を異にするものがあり、新しい傾向を生じてきた」¹⁸¹と語っている。そして『済北集』の中で最も痛快なのは通衡であると主張する。「或曰。大藏之中諸文皆醇乎。曰不也。世尊猶有權實大小之説況諸師乎」と大藏經の文を評し、「夫儒者支那一域之化也。云々。人道之始儒教爲主者。是儒狹之言也」と儒者を論じるものである一方、又「文之嚴也。莫踰于春秋也。不熟春秋而曰文者非也」と古来の注釈の誤謬を指摘したものがあつた。芳賀矢一の考え方では、それは「平安朝時代には夢にも思はなかつたことである」¹⁸²。大いに中国を模倣する平安朝時代にとって、古来の注釈の誤謬を指摘したのは夢にも思わなかつたことである。それは鎌倉時代に入ってから、五山の僧により漢文学のレベルはより一層前に押された証しであると思う。

また詩風も平安朝の白氏流とは趣を異にするものがある。特に詩人に対する評価も前代の平安朝までのものに挑戦し、白楽天を否定し、蘇軾及びその弟子である黄庭堅¹⁸³を高く評価した。即ち、それは芳賀矢一の語っている新しい傾向の一つであろう。次は『済北集』に白居易、元稹に対する評価の文である。曰く、

白氏長慶集。元稹序之。予微笑之之不知文矣。夫文者豈以兒女牧豎之稱贊爲爾乎哉。

また

¹⁸¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、pp. 160～161。

¹⁸² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 162。

¹⁸³ 黄庭堅（こう・ていけん 1045～1105）は中国北宋の詩人。字は魯直、号の山谷道人により黄山谷と通称。分寧（江西省修水県）の人。34歳のとき、当時の大文豪蘇軾に詩を献じ、その弟子の列に加えられ、秦觀、張耒、晁補之とともに蘇門四学士と称される。

二子之文傳時者。淺易之所致也。

東坡（蘇軾）については、「坡公道德文章爲趙宋表師」と高く評価した。

芳賀矢一が言っているもう一つの新しい傾向としては、挙げられるのは『濟北集』卷十一詩話、卷十二詩言において禅僧による最初の詩論「詩話」を残したことと思う。それについては、芳賀矢一が具体的な例を通して論述した。『濟北集』卷十一詩話にある原漢文は次のように載せる。

玉屑集。句豪畔理者。以石敏若。氷柱懸簷一千丈。與李白白髮三千丈之句並按。予謂不然。李詩曰。白髮三千丈。縁愁似箇長。蓋白髮生愁裏。人有愁也。地不能容之者有矣。若許縁愁。三千丈猶爲短焉。翰林措意極其妙也。豈比敏若之無當玉卮乎。¹⁸⁴

宋時代には詩話が盛んであった。で、濟北集にも詩話が一卷ある。細かいところにもよく注意して居るのは、石敏若の詩に「氷柱懸簷一千丈」、李白の詩に「白髮三千丈」とあるのを評して、「句豪畔理」と玉屑集に言って居るのを、彼は駁して、それは見方を誤って居る、二者を混じて居るものである。敏若の句は理にそむいて居るが、李白の方は決してそうではないと、此の方を大に称揚している。

上記のように、古人の詩文についての論評である『濟北集』卷第十一の詩話は古人の注疏などに拘泥することなく、虎関独自の考え方を以て、他に臆する所なく、直接的に鋭く批判していく研学的な態度である。

虎関は聡明英哲にして博覧強記、平生病痾に悩みながら多くの業績を残した。文章も平安末期のように和習を帯びたものではないし、詩もいろいろの体があり、ただ唐詩人の糟粕をなめたようなものではない。『元亨釈書』『濟北集』などで虎関師鍊の漢文学における実力を知ることができる。とりわけ文学の方面から見ると、彼は当時の禅僧の中において、第一の人である。

2、雪村友梅とその『岷峨集』

雪村友梅（1290～1346）は同じ一寧一山の弟子であり、越後白鳥郷（新潟県長岡市近郊）の人、正応三年（1290）に生まれ幼時に鎌倉に赴いて一山一寧について僧童となり、年齢満ちてのちは叡山に登って受戒した。京都に下って建仁寺に掛錫したが、

¹⁸⁴上村觀光編：「濟北集」『五山文学全集』詩文部第1輯、東京：裳華房、1905、p. 230。

18歳となった徳治二年（1307）に、海を渡って元に入り、元叟行端、虚谷希陵、東嶼徳海、晦機元熙などに参じ、ついで道場山の叔平に参じて侍者から蔵主に転じた。時に元は参学中の日本僧に間牒の疑いを寄せ、雪村は獄に投ぜられ、後赦された。漢詩集である『岷峨集』という著がある。集の名の通り、岷峨の山間をさまよったので附けた名であり、その内容が大抵中国に関することである。

『岷峨集』下巻の初に「皇慶二年二月初七。在雪禁中。朗誦無學禪師遇兵却伽陀。因折句拜和以見意焉」という詩がある。曰く、

乾坤無地卓孤筇。可是藏身處没踪。
半夜木人騎石馬。鍊圍撞倒百千里。
且喜人空法亦空。大千任是一樊籠。
罪忘心滅三禪樂。誰道提婆在獄中。
珍重大元三尺劔。寒霜萬里光焰々。
觸體乾盡眼重開。白壁連城本無玷。
電光影裏漸春風。舜若多神血濺紅。
驚得須彌盧倒卓。潛身跳入藕絲中。
百城烟水一枝筇。觸目無非是幻空。
童子曾參無厭足。鑊湯爐炭起清風。

つまり、雪村友梅はこの詩を吟じて死罪を赦されたのである。

『岷峨集』は雪村友梅が元に留まる22年、元徳元年（1329）に帰国したが、その間に、日本僧という身分を以て政府の抑圧を受け、各地に漂泊しながら詠じた詩集である。芳賀矢一の学生である久松潜一（1894～1976）は雪村友梅の詩集『岷峨集』の諸作品に対して「烈々たる民族的氣概を發揮し、その氣格の雄渾・崇高さにおいて、この時期の頂點をなす作風を樹立したといふことができる」¹⁸⁵と高く評価した。

3、義堂周信は五山文学中の白眉

義堂周信と絶海中津は同じ土佐の人で、二人とも五山文学中の白眉であると芳賀矢

一が言っている。

義堂周信（1325～1388）は南北朝時代の五山文学僧。字は義堂、諱は周信。別号空華道人。土佐高岡の人。姓は平氏。正中二年（1325）閏正月生まれ。7歳のとき高岡郡松園寺の浄義について『法華経』や儒書を学び、14歳同寺で薙髪、翌年比叡山に登って受戒した。17歳、臨川寺の夢窓疎石について受衣し、やがてその法を嗣いだ。康暦二年（1380）足利義満の招きを受けて上洛、義満の参禅の指導にあたった。嘉慶二年（1388）4月4日寂。歳64。著作に『義堂和尚語録』4巻のほか、詩文集『空華集』20巻、日記『空華日用工夫集』、先人の名詩を集めた『貞和類聚祖苑聯芳集』10巻、『禅儀外文抄』『枯崖漫録抄』『東山外集抄』などがある。

義堂周信は空華道人と号したので、その集を『空華集』と言う。『空華集』は漢詩文集であり、量が頗る多く、20巻あり、その半分は詩である。その詩文は優れているうえに、詩の各体が備わっていると主張した。次は義堂の『空華集』の代表作である深耕説を引用する。

空華叟郊居無事、出游泛觀、田野桑柘之間、有大麥同畝而異熟者。怪之質諸老農。曰、惰農爲也。問其所以。曰く、凡地耕而淺者、所種之物、必早熟而不茂。深而耕者、必晚成而肥碩也。是以善學稼者。患乎耕之淺、不患成之晚也。而彼惰者、用力弗專。所以耕有深淺、而熟有早晚也。

嗟乎、今之吾徒也、耕道不深、而患名晚者、豈無愧於老農之言也耶。余竊有感于中。遂書以告同學端介然。端介然深耕者之徒也。

ここに、義堂の『空華集』における有名な深耕説について、明治昭和期の漢学者である北村沢吉氏と幕末の朱子学者である斎藤拙堂二人の論評を借りて論述展開していきたい。まず、北村沢吉氏は前に掲げたその『五山文学史稿』において、「五山詩文の気風が一般文物の風潮に涵され、宋元の潤化を蒙った一新生面を開き、茲に初めて正格なる漢詩文の筆路筆致を得るに至り」¹⁸⁶と非常に高く評価した。また、斎藤拙堂が「室町氏之時無文章、然余觀僧義堂空華集、頗有可誦者、最善其深耕説、文字非瑕疵、

¹⁸⁵ 久松潜一：『日本文学史』中世、東京：至文堂、1959年11月25日三版、pp. 222～223。

¹⁸⁶ 北村沢吉：『五山文学史稿』、東京：富山房、1941年10月10日発行、p. 365。

然説理核実、意在筆先、今世文章家、能無愧乎」と評した。

義堂の漢詩については、北村沢吉氏はその『五山文学史稿』において、「もし我が邦に於ける漢詩を論ずるに當りては、之が標準を先づ絶海に取らざるを得ず。而して若し更に五山における詩を論ずるに及んでは、則ち其の最も注視すべき所義堂に在りと言はざるべからず」¹⁸⁷と評した。義堂周信は中岩円月に『空華集』の序文・跋文と共に依頼した¹⁸⁸。中岩はその『空華集』の序において、義堂周信の詩を品定して曰く、

友人義堂、禪文偕熟、餘力學詩、風騷以後作者、商參而究之、最於老杜老坡二集、讀之稔焉、而醞釀胸中既久矣、時或感物興發而作、則雄壯健峻、幽遠古淡、衆体具矣、若夫高之如山嶽、深之如河海、明之如日月、冥之如鬼神、其變化如風雲雷電、其珍奇如珠貝金璧、以至其縱逸橫放、則如獵虎豹熊羆之猛烈、角之犄之、其力不得暫假焉、紫燕之喧、黃鸝之嫩、其声於是無恥乎、既然不以己所能之功為自伐也、非惟不自伐爾、視之如空華翳於病目、故目乃集曰空華、吾先覺為淵才雅思文中王、祇夜伽陀、梵音妙唱、令人樂聞、然亦謂諸仏世界、猶如空華乱起乱滅、不即不離、義堂設心在焉、自非禪文偕熟者、安能如斯之為耶、延文己亥春、中正叟中巖、走筆以為空華集之序云。

ツバメや鶯の声は一般的にはにぎやかで美しい音色とされているが、義堂の詩の調べはそれに比べても劣らない。こんなに素晴らしい詩を書いているにもかかわらず、少しも奢らないでいる。奢らないだけでなく、自分の詩を目を患ったものが空中に見る実在しない花であると見て、詩集に空華という名をつけた。中岩円月は義堂の詩に対して高く評価した。

絶海中津（1336～1405）は臨済宗夢窓派の僧、応安元年（1368）入明して杭州臨安府の中天竺山の季潭宗泐に参じて焼香侍者・蔵主などの役位にあり、また景德靈隠禅寺・護聖万寿禅寺の間を周旋して用貞輔良・清遠懷渭に参じ、洪武四年（応安四、1371）再び径山の季潭宗泐に参じた。永和四年（1378）帰国して京都に上り、応永十二（1405）年4月5日に70歳で寂した。著作には、『絶海和尚語録』3巻と詩文集の『蕉堅稿』2巻がある

¹⁸⁷ 北村沢吉：『五山文学史稿』、東京：富山房、1941年10月10日発行、p.372。

¹⁸⁸ 現在貞治七年（1386）跋付きの五山版が残っているが、『五山文学全集』第二巻『空華集』所収の跋は同序と同文である。

絶海中津、義堂周信の詩文において、禅林文学の頂点に達した。その故に、芳賀矢一は絶海中津と義堂周信が五山文学中の白眉であると言っているのであろう。それは江村北海（1713～1788）の『日本詩史』における評言によると思う。江戸中期の儒学者江村北海氏はその『日本詩史』において、「五山の作者、その名今に徴すべきもの、百人を下らず。……絶海、義堂、世多く並称し、以て敵手と為す」¹⁸⁹と指摘したことがある。

4、多作家である中巖圓月

中巖円月（1300～1375）は倉・南北朝時代の臨済宗大慧派の僧。法諱は円月、はじめ至道といったがのち円月と改めた。中巖はその道号、別に中正子・中正叟・東海一漚子とも称した。文保二年（1318）に入元を志したが許されず、京に登って万寿寺の絶崖宗卓、越前永平寺の義雲に参じ、元亨元年（1321）には不聞契聞とともに上京し、南禅寺帰雲庵に寄遇し、济北庵の虎関師鍊に通参した。正中元年（1324）博多に赴き、船便を待つ間、大友貞宗の斡旋で豊後万寿寺の闍提正具に参じ、翌年秋にようやく入元した。建武元年（1334）鎌倉円覚寺に帰って東明慧日のもとで『中正子』を撰述し、応安三年（1370）に南禅寺に招請されたが固辞し、同六年には天竜寺復興の期待を寄せられて堅請されたが、老齢をもって辞退し、永和元年（1375）正月八日寂した。76歳。仏種慧济禅師と勅諡された。著書に『東海一漚集』『中正子』『自歴譜』『藤陰瑣細集』『文明軒雑談』『仏種慧济禅師語録』『日本書』『蒲室集註解』などがある。

芳賀矢一は主に中巖円月の『東海一漚集』と『中正子』を中心として述べた。まず、『東海一漚子』に対し、芳賀矢一は「一漚集には詩文と共に多く、其の對句の如きも甚だ巧なものがある」と評した。『東海一漚集』5巻あり、巻一は古詩、五言律詩、七言律詩、五言絶句、六言絶句、七言絶句、賛、巻には疏、説、上梁文、銘、巻三は表、書、記、論、雑文、祭文、巻四は中正子十篇、自跋、巻五は自歴譜、輝東陽偈、宗廓偈、玄理偈、僊竺仙偈跋である。

例としては、『東海一漚集』にある「金陵懷古」を見てみよう。

金陵懷古

¹⁸⁹ 江村北海：『新日本古典文学大系 6 5 日本詩史卷二』、東京：岩波書店、1991年、pp. 76～77。

人物頻遷地未磨、	人物頻りに遷って地未だ磨せず、
六朝咸破有山河。	六朝咸な破れて山河有り。
金華旧址商漁宅、	金華の旧址 商漁の宅、
玉樹残声樵牧歌。	玉樹の残声 樵牧の歌
列壑雲連常帶雨、	列壑 雲連なって常に雨を帯び、
大江風定尚生波。	大江 風定まって尚お波生ず。
当年佳麗今何在、	当年の佳麗 今何くにか在る
遠客蒼茫感慨多。	遠客蒼茫として感慨多し。

金陵は今の南京市。南朝歴代の都であった。「玉樹残声樵牧歌」とは陳の後主が作ったという民謡の艶歌「玉樹後庭花」の残響が、木こりや牛飼いの口から流れてきて、そぞろ亡国の哀れさをさそう。「遠客蒼茫感慨多」は自らの事を言う。芳賀矢一はとりわけ「列壑雲連常帶雨、大江風定尚生波」という二句を挙げその対句の巧みであることを説明した。

上記は、主に芳賀矢一の禅林文学の第一人者である虎関師鍊、雪村友梅、五山文学における白眉である義堂周信、多作家である中巖圓月を中心論評についてまとめてきた。五山の禅僧による漢詩文は数も頗る多いし、優れている漢文学者と漢詩文も少なくないと考えられる。

(三) 新しい中国文学の受容

芳賀矢一の指摘したように、「禅僧は、たゞ従来の文学を維持しただけの公家とは違って、常に新しい方面を開拓して進んで行ったものであるから、文学上にも社会にも、それらが後に及した影響は非常に大きい」¹⁹⁰。鎌倉室町時代を通じて、新しい文明は常に僧侶の手によって輸入された。僧侶は単に旧文明の維持者であったばかりでなく、同時に又新文明の輸入者であったのである。

平安朝の六朝から唐までの文明を模倣することと違って、鎌倉に入り、新しい文明が僧侶の手によって輸入された。新しい文明とは宋元文化を輸入することである。北村沢吉は『五山文学史稿』の総論において、「要するに鋼健にして清新なるは五山文学

¹⁹⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 168。

の特性にして、是れ禪宗の直截にして活機を尊ぶに因りて養はれたる也。即ち一種の活力を以て支那文化を吸収し咀嚼し脱胎せしめたり。その吸収せし者は詩文也。其の咀嚼せしものは宋儒程朱の學也」と言っている。

前述したように、虎関師鍊の『濟北集』において、芳賀矢一は最も痛快なのは通衡であると主張する。「或曰。大藏之中諸文皆醇乎。曰不也。世尊猶有權實大小之説况諸師乎」と大藏經の文を評し、「夫儒者支那一域之化也。云々。人道之始儒教爲主者。是儒狹之言也」と儒者を論じるものである一方、又「文之嚴也。莫踰于春秋也。不熟春秋而曰文者非也」と古来の注釈の誤謬を指摘したものがあつた。芳賀矢一の指摘したように、それは平安朝時代には夢にも思わなかつたことである。大いに中国を模倣する平安朝時代にとって、古来の注釈の誤謬を指摘したのは夢にも思わなかつたことである。

詩風も平安朝の白氏流とは趣を異にするものがある。特に詩人に対する評価も前代の平安朝までのものに挑戦し、白楽天を否定し、蘇軾及びその弟子である黄庭堅を高く評価した。また、『濟北集』卷十一詩話、卷十二詩言において禅僧による最初の詩論「詩話」を残した。それは、宋代には詩話が盛んであつたので、その影響を受けたからである。

(四) まとめ

上記は芳賀矢一の論述した五山文学中の漢文学者の中から、主に漢文を牛耳る虎関師鍊、雪村友梅、義堂周信などのような漢文学大家を中心として、芳賀矢一の五山文学についての漢文学論をまとめてきた。

芳賀矢一は二つの方面から五山文学に関する漢文学論を展開して述べた。一つは鎌倉時代に入り、仏教は盛んであつたが、漢文学はすっかり衰え、学問はひとり僧侶の手に帰し、僧侶は大抵儒仏を兼ね学んだという方面である。芳賀矢一は主に虎関師鍊、雪村友梅、義堂周信などのような漢文学大家を中心にして、論述した。その論点として次のようにまとめたい。①虎関師鍊は禅林文学の第一人者である。その『元亨釈書』は鎌倉時代末期の五山学芸界を代表する虎関の畢生の大作で、したがってその内容は仏教史だけでなく日本漢文学などの分野からも大いに注目されている。その古人の詩文についての論評である『濟北集』卷第十一の詩話は古人の注疏などに拘泥すること

なく、虎関独自の考え方を以て、他に臆する所なく、直接的に鋭く批判していく学術的な態度である。②義堂周信と絶海中津は同じ土佐の人で、二人とも五山文学中の白眉である。義堂周信の『空華集』は漢詩文集であり、量が頗る多いし、詩文も優れているうえに、詩の各体が備わっている。とにかく絶海中津、義堂周信の詩文において、禅林文学の頂点に達した。③中巖円月は多作家であり、その『東海一漚集』には詩文が多く、その對句も甚だ巧なものがある。もう一つは新しい文明は僧侶の手によって輸入されたことである。詩風は平安朝の白氏流とは趣を異にするものがある。特に詩人に対する評価も前代の平安朝までのものに挑戦し、白樂天を否定し、蘇軾及びその弟子である黄庭堅を高く評価した。

芳賀矢一の論述に基づき、本稿は鎌倉室町時代、表面上漢文学が衰えたようであるが、五山禅僧の手により、中国宋元より新しい文明をもたらして、五山文学の隆盛を促す一方、後の徳川時代の漢文学のために、基礎を作っておいたと主張する。正に、芳賀矢一の言っているように、「鎌倉室町時代の學界・文學界は、外觀大に衰微して居るやうであるが、しかしそれは表面だけで、實は其の裏面に於て大勢力を養成し、以て徳川時代に至ったのである」¹⁹¹。

五、近世：漢文学の第二盛期

前述したように、近世の徳川時代は前述した平安時代と共に、漢学の最も盛んであった時代である。芳賀矢一は頼山陽が斎藤拙堂の著した『拙堂文話』の序に「余嘗謂吾國文運兩開每開輒有成敗之」と言っているのも、つまり平安朝時代と徳川時代とを指していると主張した。本稿ではそれに基づき、中古である平安時代は漢文学の第一盛期であり、近世である徳川時代は漢文学の第二盛期であると主張する。この第二盛期である徳川時代の日本漢文学に関する考察を展開する前に、まずその漢文学隆盛の背景について見てみよう。

(一) 徳川漢文学隆盛の背景

1、五山僧徒の漢文学は徳川時代漢文学の基礎

¹⁹¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 194。

前述の「四、近古：僧侶の漢文が牛耳る」においても言及したが、芳賀矢一は「鎌倉室町時代の學界・文學界は、外觀大に衰微して居るやうであるが、しかしそれは表面だけで、實は其の裏面に於て大勢力を養成し、以て徳川時代に至ったのである」¹⁹²と主張する。つまり、鎌倉室町時代は、表面上漢文学が衰えたようであるが、五山禅僧の手により、中国宋元から新しい文明をもたらして、五山文学の隆盛を促す一方、また徳川時代の漢文学のために、基礎を作っておいた。

例としては、藤原惺窩である。名は肅、字は斂夫、惺窩はその号である。永禄四年（1561）播磨国三木郡細河村（兵庫県三木市細川町桃津）で藤原（下冷泉）為純の三男として生まれた。彼が藤原定家の十一世の孫であったことは、彼の学風と深い関係をもつと言われる。惺窩は7、8歳のころ仏門に入り、播磨竜野の景雲寺の禅僧東明宗昊、ついで文鳳宗韶に学んだ。18歳の天正六年（1578）、父為純は三木城主別所長治に攻められて戦死。京都相国寺普広院住職の叔父清叔寿泉を頼って上洛、相国寺で禅学に励んだ。芳賀矢一の叙述により、藤原惺窩は初めやはり五山僧の文之に就いたが、この文之の師に桂庵という人がある。後徳川家康が学問の必要を感じていた折柄であったからして、惺窩は遂に召されて幕府の儒者となった。即ち、藤原惺窩は五山僧徒の学統を出て、初めて儒を以て立ったのである。

芳賀矢一の言うように、儒学にもいても文章においても、徳川時代は実に燦然として輝いているが、此の五山僧徒の学がその基礎となったことは疑うべからざる事実である。

2、儒者という階級の成立

近世の徳川時代に入り、僧侶以外に特別に儒者という一種の階級が生じたのである。芳賀矢一の考え方では、徳川時代となって、俄かに漢学の起こったのは「僧儒が全く相別れ、儒者といふ専門家が生じ、又一面には世の中が泰平となつた爲である」¹⁹³。つまり、徳川時代の漢文学隆盛の原因の一つとしては儒者という階級の成立であると芳賀矢一は主張する。

江戸時代を代表する非常に重要な儒者である藤原惺窩と林羅山は朱子学を唱えた。藤原惺窩は初め五山の僧に学び、京都五山の一つ相国寺から出てきて、後に自ら儒を

¹⁹² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 194。

¹⁹³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 197。

以て立ち、初めて朱子学を唱えた。そしてその門人の林羅山も同じく朱子学を奉じたのである。こうして、藤原惺窩と林羅山の努力により、朱子学が盛んになってきた。朱子学が盛んになると、中江藤樹の陽明学、荻生徂徠の古文辞学というようなほかの学派も起こり、儒学はますます盛んとなって、いわゆる儒者という階級が出来た。かくて彼らは幕府に昌平黌という学問所が出来たのみならず、各藩にもそれぞれ学校を設け、儒学を以て根本として人材を養成し、諸藩が皆相競って学問の発達をはかったのである。それらの学校は漢学ばかりを授けていた。もちろん、これらの学校以外にも学者の私塾がたくさんあって、百姓、町人のほかはつとめて儒学の研究をした。そこで自然漢文学も盛んとなってきた。芳賀矢一の言っているように、「この時代にはほとんど漢文でなければ文章でないといふやうに思はれ、漢學者たちは假名文を讀むのを屑しとしなかつたくらいである。」¹⁹⁴

3、泰平の世である江戸時代

芳賀矢一の言っているように、「僧儒が全く相別れ、儒者といふ専門家が生じ、又一面には世の中が泰平となつた爲である」¹⁹⁵。徳川時代の漢文学隆盛のもう一つ原因は世の中が泰平となつた爲である。応仁以後続いた戦争がやっと終わって、久しぶりに平和の江戸時代を迎えてきた。

江戸時代は厳密には、江戸に幕府が開かれた1603年3月24日から、1869年4月5日事実上の東京遷都が行われた日までの266年間をさすと考えられるが、一般には1600年の関ヶ原の戦い以降、1867年（慶応3）の大政奉還に至る間の、將軍を君主とする幕藩制国家の時代をさしている。江戸時代の260年余りは、日本の国史上においては比類のない永い間の泰平を持続した時代である¹⁹⁶。こうした史上希有ともいえる平和社会を背景にして、文学としての漢文、漢詩は儒学の副産物として生じたのであった。

（二）草創時代の漢文学

1、儒者の第一人者である藤原惺窩の漢文学

¹⁹⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.30。

¹⁹⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.197。

¹⁹⁶ 斎藤隆三：「江戸時代の風俗」『岩波講座日本歴史 第7』、東京：岩波書店、1933～1935出版、p.3。

①藤原惺窩の家学及び学術生涯

芳賀矢一が藤原惺窩家学及び学術生涯に対する評価は非常に高いと思う。まず、藤原惺窩の家学については、「徳川時代の明星たる藤原惺窩は、すでに述べた通り、歌學の權威定家十一世の孫である」¹⁹⁷と述べた。藤原惺窩（1561～1619）、名は肅、字は斂夫。惺窩はその号。ほかに柴立子・北肉山人・惺々子・妙寿などと称した。永祿四年（1561）播磨国三木郡細河村（兵庫県三木市細川町桃津）で藤原（下冷泉）為純の三男として生まれた。彼が藤原定家の十一世の孫であったことは、彼の学風と深い関係をもつ。芳賀矢一の言っているように、「彼がかく名門に生まれたといふことは、彼が當時に名を挙げた一つの原因とみることが出来るであらう」¹⁹⁸。父為純は代々の地播磨細河莊を領したが、惺窩は7歳で同地龍野の景雲寺に入門し、禅僧東明宗昊和尚に師事、次いで文鳳宗韶禅師に従学して、神童と言われた。13、4歳に京都の相国寺普広院住職の叔父清叔寿泉の縁故か五山第2位の同寺に剃髪して入山し、同南豊軒で学問僧となった。十八歳の天正六年（1578）、父為純と長兄為勝は三木城主別所長治に攻められて戦死。京都相国寺普広院住職の叔父清叔寿泉を頼って上洛、相国寺で禅学に励んだ。23歳の時に神祇大副吉田兼見の猶子となったようである。そこで師行家学と吉田神道に接触したと思われる。かくて同13年に妙寿院（陰涼軒）首座となって、学才五山第一と称されるに至った。

次に、芳賀矢一が称えた「惺窩は儒者として第一人者であつた」¹⁹⁹藤原惺窩の学術生涯について、見てみよう。慶長元（1596）年、惺窩は朱子学研究の熱意から渡明を志して鹿児島山川津を出航するも暴風雨のために鬼界島に漂着、薩南学を知り（大隈正興寺住職文之和尚の新注和訓を学び、文献を筆写したとも言う）、翌夏に帰洛した。そして京都に家塾を開き、同3年伏見で捕虜の刑部員外郎姜抗に出会って寝食を伴にし、筆談にて李派朝鮮朱子学を習得し、新儒学に転向する切掛となった。そして翌年、赤松の援助で彼と朱子学に基づく『四書五経倭訓』を執筆した。これは思想的に中世仏儒折衷学との快別で自立でもあった。次いで惺窩は翌年から『文章達徳綱領』の編纂を行った。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの後に、惺窩は深衣道服で家康と面会したが、こ

¹⁹⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 207。

¹⁹⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 207。

¹⁹⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 210。

れは形式的にも儒学者とし独立して確立を含意し、経史を進講もした。藤原惺窩は近世儒学の祖といわれ、門弟のなかでも特に林羅山、那波活所、松永尺五、堀杏庵の4人は惺門四天王と称された。

惺窩は儒者として第一人者であつたのみならず、又文章の方においても、文章達徳録、文章達徳録などを著した。金谷治氏の『藤原惺窩の儒学思想』により、惺窩の著作としては、『寸鉄録』『大学要略（逐鹿評）』『文章達徳綱領』などあり、その詩文集めたものに羅山編の『惺窩文集』と為経編の『惺窩先生文集』とがあり、また『羅山文集』の中には惺窩の語を記録した「惺窩答問」がある²⁰⁰。

②藤原惺窩の漢文学

漢文学において、芳賀矢一が主に惺窩の修辞の書である『文章達徳録』と『文章達徳綱領』、文集中で最も見るべきものの巻三にある『答林秀才』を中心として論述した。

I 藤原惺窩の漢詩文

前述したように、藤原惺窩の漢詩文集めたものには、羅山編の『惺窩文集』と為経編の『惺窩先生文集』とがあるが、本稿は国民精神文化研究所編『藤原惺窩集』上巻に収録された『藤原先生文集』をもとにして、藤原惺窩の漢詩文について考察していきたいと思う。『惺窩先生文集』は惺窩の曾孫藤原為経編、徳川光圀校し、18巻あり、そのうち詩文集12巻、和歌集5巻、別に首巻1巻であり、為経の享保2年端午之日の「重修惺窩先生文集跋」がある所より見れば、ほぼ享保2年の頃成立したものと考えられる。

芳賀矢一の考え方としては、惺窩の文はその弟子である林羅山のように多くはない。「文章は割合少い。もとより大論文などはない」²⁰¹と評した。「答林秀才」は文集中で最も見るべきものである。その中には、儒学についてよく論じたことから見ると、藤原惺窩の儒学に対する意見もよく分かってくる。「答林秀才」には藤原惺窩は次のように言う。

若諸儒不服儒服。不行儒行。不講儒礼者。何以妄称儒哉。抑亦儒名而墨行乎。墨名而儒行乎。嗚呼。猿而服周公之服。鶴而乘大夫之軒。余第恐其服不稱其身。何暇論他

²⁰⁰ 金谷治：「藤原惺窩の儒学思想」『日本思想大系 28 藤原惺窩 林羅山』、東京：岩波書店、1984年8月10日第4刷発行、p. 451。

²⁰¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 215。

衣服哉。若又禮義不誤。何憂人言。來書所謂排佛之言。更不待勞煩舌。²⁰²

これは儒者の服装、儒者としての行動、そして儒教儀礼がなされなければ儒者とはいえないという言明であって、儒教を単なる観念ではなく、みずからの行為や儀礼として表現しようとする強い意思を表わしている。

また、『惺窩先生文集』巻 11 林羅山宛の手簡「與林道春」は白氏文集について、次のように言う。

白氏新樂府齋來。嘉惠鄭重。蓋樂府而已止乎。又白氏文全部有之乎。復誰某氏筆也哉。次卷俟他日。²⁰³（『惺窩先生文集』巻 11 手簡「與林道春」）

又次のように曰く、

新樂府一卷。還之而以俟次之冊。²⁰⁴（『惺窩先生文集』巻 11 手簡「與林道春」）

上記に挙げられた二つの文は何れも慶長 10 年 (1605) 惺窩 45 歳の時のものである。それにより、白氏の詩文を得て喜び、かつ次の巻を期待する気持ちがよく現われている。

同じ『惺窩先生文集』巻 11 林羅山宛の手簡「與林道春」は杜甫について、次のように言う。

佳月即中秋。中秋非中秋。思之思之。冥冥之雨。有老杜之嘆。而無老杜之詩。彌可歎者也。²⁰⁵（『惺窩先生文集』巻 11 手簡「與林道春」）

それは老杜のような詩が生まれないことを嘆息して、「有老杜之嘆。而無老杜之詩」

²⁰² 藤原惺窩：「惺窩先生文集」『藤原惺窩集』巻上、東京：國民精神文化研究所、1938年3月10日発行、p. 138。

²⁰³ 藤原惺窩：惺窩先生文集『藤原惺窩集』巻上、東京：國民精神文化研究所、1938年3月10日発行、p. 154。

²⁰⁴ 藤原惺窩：惺窩先生文集『藤原惺窩集』巻上、東京：國民精神文化研究所、1938年3月10日発行、p. 154。

²⁰⁵ 藤原惺窩：惺窩先生文集『藤原惺窩集』巻上、東京：國民精神文化研究所、1938年3月10日発行、p. 157。

と言って居る。

惺窩の詩において、芳賀矢一が挙げたのは惺窩 14 歳の時に作った詩である。江春という僧はこの詩を見て褒めたという。詩の内容は次の通りである。

逆旅迎正懷友時。微君誰慰野生涯。夜闌相話紗牕月。半是評梅半是詩。²⁰⁶

上述したことにより、芳賀矢一の言っているように、『惺窩先生文集』において、最も見えるべきものは「答林秀才」であるが、「其の文集を見ると、自然儒學以外に我が國民性もあらはれ、又作者その人の性質なども分かつて来る」、また『惺窩先生文集』巻 11 手簡「與林道春」のように、藤原惺窩の杜甫、白居易に対する態度、儒学に対する態度を知ることが出来よう。

儒学の第一人者である藤原惺窩は文章も割合少ないし、もとより大論文などもないが、その詩文論に関する著作である『文章達徳録』と『文章達徳綱領』においては、見るに足るものが少なくない。また、惺窩の漢詩文を集めた『惺窩先生文集』により、その杜甫、白居易に対する態度、儒学に対する態度を知ることができ、特にその儒学を尊んでいた態度が分かってきた。

II 藤原惺窩の詩文論

惺窩は儒者として第一人者であつたのみならず、作文上の格式体例を論述し、文を作る規格を定めるために、古今名家の詩話、文評などを集めて、修辞の書である『文章達徳録』と『文章達徳綱領』を著した。両書とも『文鏡秘府論』と同様、諸書から抜粋したものである。が、『文鏡秘府論』は詩を中心とするものに対し、『文章達徳録』と『文章達徳綱領』両書は文を主とするものである。『文章達徳綱領』は入式内録、入式外録、入式新録、辨体内録、辨体外録、辨体新録の六巻より成っている。

『文章達徳綱領』は惺窩の命により、吉田素庵が編纂したものであり、古人の著書より詩文の理論に関するものを集めたもので、載道説によって貫かれている。日本人の漢文に多く関心が払われている点で漢文史上注目される。

『文章達徳綱領』について、芳賀矢一が注意すべきと言って居るのは次の通りであ

²⁰⁶ 藤原惺窩：「惺窩先生文集」『藤原惺窩集』巻上、東京：國民精神文化研究所、1938年3月10日発行、p. 36。

る。

學文須熟着韓柳歐蘇見文字體式。然後遍考古人下句用意處蘇文當用其意若用其文恐易厭人。蓋近世多讀故也。

『文章達徳綱領』に対し、芳賀矢一が「とにかくこの綱領には、或は文の體裁を論じ、或は文の用意を説くなど、いづれも見るに足るものである」²⁰⁷と評したように、藤原惺窩の詩文論が草創期の詩文論というべきであるが、見るに足るものも少なくないと本稿は主張する。

2、大学者である林羅山の漢詩文

藤原惺窩の一番偉かったのは、寧ろその門人に多数の人物を出した点にある。惺窩の門人中で最も傑出して居るものは林羅山である²⁰⁸。

①林羅山の学問とその文章

慶長 12 年（1607）羅山 25 歳幕府に聘せられ、この時から祝髪して、名を道春と改めた。この祝髪したことについては、中江藤樹などが誇っている。それに対して、芳賀矢一は「當時としてはこれも已むを得なかつたのである」²⁰⁹と言って居る。その理由としては、鎌倉室町時代などでは、学者といえは僧侶ばかりであつたからして、軍陣の変形と見るべきである。

江戸時代初期の大学者として、羅山は平生極めて質素な生活をして、酒も飲まず、大食もせず、全勢力を読書研究に費やし、少しでも暇があれば、どこにあつても読書をした。林羅山の学問と文章について、芳賀矢一は羅山の師である惺窩の言葉を借りて次のように言って居る。まず「卿是起予者也」とさえ言っているし、また「我が門人中で、儒学でも歌道でも談じ得る者は、たゞ羅山あるのみ」と言っている。羅山の文章に対しても、惺窩は見るごとに嘆稱した。

羅山は博識の努力家で、著書が多く、その漢詩文が、鷲峯らの編集した『羅山林先生集』150 巻に収められている。林羅山の文集は 75 巻、詩集も 75 巻あるが、この 75

²⁰⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 212。

²⁰⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 218。

²⁰⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 220。

という数は彼が行年 75 歳であったというから来ているのである。

②『羅山文集』

林羅山の『羅山文集』は 75 巻あり、賦、書、記、論、説、辯、序、その他解、原、銘、賛題等皆備わっている。芳賀矢一は「賦は當時あまり作られなかつたものであるが、此の文集にはそれもある」²¹⁰と言って、その中「鼻疾賦」「齒落賦」「武野草賦」などは見るべきものであると主張する。「齒落賦」は、次のように言う。

齟悔當初之齧骨兮、即無益于噬臍然、憎妖讎于孫壽兮、復笑齟歷於登徒之妻、悼短折於温嶠兮、哀浮危于昌黎於戲余老之將至兮、嘆逝水之不可少。²¹¹

その「齒落賦」の「齒落」という題目とその内容から見ると、韓愈の「落齒」を受け入れたことが分かってくると思う。韓愈の「落齒」は次のように言う。

去年落一牙 昨年、一牙を落とし、
今年落一齒 今年、一齒を落とす。
俄然落六七 俄然として六七を落とし
落勢殊未已 落つる勢い殊に未だ已まず。
餘存皆動搖 余の存するものも皆動揺し、
盡落應始止 尽く落ちて応に始めて止むべし。

林羅山は中国の韓愈と柳宗元を高く評価する。その点については、松下忠はその『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』においても、「羅山は韓柳を貴び二人を文章の冠冕を以て目したが、それは二人の文章が六経に基づくからであり、彼の文章観に合致するからである」²¹²と指摘した。「合致する」根拠としては、『林羅山文集』における二つの例が次のように挙げられた。

洛人或問、退之子厚之為文意。林子對曰：共是原於六經。曰：請益。曰：凡為文者、不本乎經、則駁雜而已、何足觀之乎？²¹³（『林羅山文集』卷 65 隨筆一）

また、

韓柳所以善屬文章者以本于六經故也。（中略）宜哉此二子為文章冠冕而韓優乎。²¹⁴（『林

²¹⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 222。

²¹¹ 京都史蹟會編纂：『林羅山文集』、大阪：弘文社、1930 年 7 月 1 日発行、p. 9。

²¹² 松下忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1969 年 3 月 27 日初版発行、p. 230。

²¹³ 京都史蹟會編纂：『林羅山文集』、大阪：弘文社、1930 年 7 月 1 日発行、p. 782。

²¹⁴ 京都史蹟會編纂：『林羅山文集』、大阪：弘文社、1930 年 7 月 1 日発行、p. 912。

羅山文集』卷 73 隨筆九)

前述したように、賦のほかにも、書、記、論などもある。書の五は全部石川丈山に与えるものであり、その中に、芳賀矢一が一番評価するのは丈山が詩仙堂を造る時、詩人の選抜について意見を求めたのに答えた書である。次のように言う。

足下謂。韓文公文人而非詩仙。其可除之歟。不然。文公之詩雖不及其文。而非如小陵涪翁者文人輕鄙之。文公者詩家亦稱其恢豪雄偉。然則文公之不可棄也決矣。與柳河東相配而是可也。足下又謂。樂天詩傷於俗。若用樂天。則元稹亦難捨矣。不然。樂天固是淺俗也。使老嫗解其詩。故如此。然其詩之灑落博達固非尋常韻士之所髣髴也。新舊史共稱其能詩。且古今之詩話莫不標出香山矣。元稹者不被標題於詩話。其為詩也不可與樂天一視也。且夫樂天之通達元稹之讒邪。其性操之可否匪霄壤翅矣。元稹其必除之而可也。樂天其可弃之乎。²¹⁵ (『林羅山文集』卷 7 書六)

これは詩仙堂内 36 詩仙の選定にあたり、石川丈山と親しく意見を交換したことである。その内容からみると、林羅山の中国詩人に対する態度においては、石川丈山と違うのであろう。羅山は韓愈、白樂天を貴んだようである。

論にも種々のものがあるが、芳賀矢一が指摘したように、中にも惺窩が特に称賛したのは「土堦三尺論」というのである。内容は次の通りである。

群書皆稱堯舜之有天下也采椽不斷文綺不衣土堦三尺。其言其儉陋。余讀尚書賓于四門且言日月星辰等衣裳。蓋開四方之門賓送諸侯未必隘陋也。貴為天子富有四海其冕旒衣裳未必粗賤也。若其禹之惡衣服卑宮室而誠峻宇彫墻則憂天下慮後世也。后世墨翟之徒出而假有虞夏后之事。其言過於儉。遂至于使趙高之輩說二世以此而必舜禹於匹夫傭奴。曰。如斯而有天下奚用為哉。不亦已甚乎。宜哉亡其躬矣。余想不驕不陋唯其禮而已。不泰不儉。唯其中而已。夫舜禹世質時遠。然既貴且富。如何其居匹夫之宅服匹夫之服哉。故今直據尚書以示其不極儉陋也。雖然孔子曰。禹吾無間然矣。又曰。奢則不

²¹⁵ 京都史蹟會編纂：『林羅山文集』、大阪：弘文社、1930年7月1日発行、p. 74。

遜。儉則固。與其不遜也寧固。後世之驕君不可不誠。²¹⁶（卷 24 論上）

「采椽不斷文綺不衣」とは「采椽斲らず、文綺衣ず」ということであり、つまり、山から伐採してきたままの木にかんなをかけずに、たる木にし、彩文のある帛の着物を着ないという意味である。「采椽不斷」は『韓非子・五蠹』における「堯之王天下也、茅茨不翦、采椽不斷」からの言葉であり、「文綺不衣」は『文韜・盈虚』の「帝堯王天下之時、金銀珠玉不飾、錦綉文綺不衣」からの言葉である。全体的に見ると、林羅山の「土堦三尺論」は国を治め、邦を安んずる思想が貫かれて、実用的なものであると思う。

③『羅山詩集』

『羅山詩集』も「羅山文集」と同じ、75 巻がある。芳賀矢一が言っているように、「詩の数は實に多いが、やはり學者の詩であつて、詩人の詩ではない。随つて理屈を入れたものが多い」²¹⁷というのである。例えば、

學者以為程明道傍花隨柳。予謂于流于逸于遊。在明道可也。在他人不可也。

因作 一詩以戒云。

山櫻往々咲春風。世上小兒奔走忽。我亦有花君信否。園林花在六經中。

また、

秋 雨

風外梧桐葉落時。窓前蔓草露猶滋。冥々曼々如長夜。今再無天生中尼。

林羅山の詩に対し、芳賀矢一は「彼の詩には禪僧の作に見るやうな飄逸な趣はない。中には自分の詩に自分で注釋を施しているものがある」²¹⁸と評価した。

つまり、林羅山は藤原惺窩の跡を継いで、近世儒者の先驅者であろう。林羅山につ

²¹⁶ 京都史蹟會編纂：『林羅山文集』、大阪：弘文社、1930年7月1日発行、pp. 269～270。

²¹⁷ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 227。

²¹⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 228。

いては、松下忠氏はその『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』において、「藤原惺窩と相並んで詩文壇の始祖と観るべき」²¹⁹と主張する。が、林羅山の詩につちえ、兪樾がその『東瀛詩選』において「雖詞不工，其言足徵者甚多。余謂不工何病，大輅始於椎輪，豈富較其工拙哉？余於羅山詩所選不多，不欲多留瑕疵，以為詬病」²²⁰と指摘したように、芳賀矢一も羅山の詩が学者の詩であり、詩人の詩ではないとあまり評価していないようである。

3、石川丈山は近世初の詩人

芳賀矢一の指摘したように、藤原惺窩や林羅山はもとより文学者を以て目すべきものではない。然らば、徳川の初世において、自ら詩人を以て任じ、文墨を以て楽しみとした者は石川丈山である。²²¹

江戸初期における漢詩の代表的人物である石川丈山（1583～1672）の詩集は『覆醬集』という。その初四巻は自ら撰んだもので、故郷三河において人に見せなかったが、死後門人の石川孫十郎という門人がこれに続けて続集を撰び、前後併せて20巻とした。

石川丈山の『覆醬集』の中の漢詩には閑適の詩が多い。その開巻第一である七言絶句「富士山」は詩吟を学ぶ初心者の練習によく用いられる。次のように言う。

仙客来遊雲外巔	仙客來たり遊ぶ 雲外の巔
神龍棲老洞中澗	神龍 栖み老ゆ 洞中の澗
雪如紈素煙如柄	雪は紈素の如く 煙は柄の如し
白扇倒懸東海天	白扇 倒に懸かる 東海の天

その富士の詩について、芳賀矢一は「これは有名な詩であるが、此の一詩を以て見ても尋常作家でないことが分かる」²²²と高く評価した。

また、石川丈山に対し、芳賀矢一は「學びに於ては羅山に及ばないが、詩に於ては之に過ぎて居る。要するに詩人的人物である。今惺窩・羅山・丈山の三人を比較する

²¹⁹ 松下 忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1969年3月27日初版発行、p. 226。

²²⁰ 兪 樾：『東瀛詩選』（上冊）、北京：中華書局、2016年3月第1版、p. 1。

²²¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 230。

²²² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 233。

と、惺窩は道、羅山は學、而して丈山は詩と稱すべきであらう」²²³と指摘した。

『日本詩選』の編者である江村北海は、その著『日本詩史』巻三において、「所著有覆醬集。韓人権弼者為之序、称曰日東李杜。余覽其集、句多拙累。往往不免俗習。権弼溢美、不俟弁論。然当時諸儒詠言、率出于性理之緒余、乏溫柔旨。而丈山独夢寐山林、襟懷瀟洒」と言ったことがある。江村北海の指摘したように、丈山の詩が往々俗習を免れないが、ひとり山林に夢寐するのが称赞に値する。

本稿は上述した芳賀矢一及び江村北海の言っていることをふまえ、石川丈山の詩が従来五山禅僧の禅佛を中心とする詩風と切り離し、格調高い詩風を重んじると主張する。芳賀矢一がそういう理由を以て、石川丈山は江戸時代初の詩人と考えられるのであろう。

4、木門の漢文学

①江戸文運の嚆矢である木下順庵

木下順庵（1621～1699）は江戸時代前期の儒学者である。名は貞幹、字は直夫、通称は平之允、号は順庵・錦里・敏慎齋・薔薇洞。私諡を恭靖と言う。彼は朱子学の学者であったが、しかし一面又文学にも達していた。順庵の唯一の著書は詩文集『錦里文集』19巻であり、順庵の死後17年にあたる正徳5年（1715）に、寅亮が撰したものである。『錦里文集』の構成は、菅原胤長と柴邦彦と木寅亮（木下菊潭）の序の後に、「錦里先生小傳」「凡例」を配し、巻一から巻五までの「西京稿」、巻七から巻十までの「東武稿」、巻十一に「北海稿」、巻十二・巻十三に「對韓稿」、巻十四に「于役稿」、巻十五に「和歌題」、巻十六から巻十八までの「恭靖先生遺稿」、巻十九に「附録」、そして外玄孫の靜（正直）と柴邦彦の後記で構成されている。

木下順庵について、芳賀矢一は木下順庵が「とにかく草創時代から渾成時代に移り變る時代の一人として注目すべき人である」²²⁴と主張した。芳賀矢一は原念齋の『先哲叢談』巻三の第三条と第四条に載せている荻生徂徠、服部南郭、室鳩巢三人の木下順庵に対する叙述に基づき、論述を展開してきた。荻生徂徠、服部南郭、室鳩巢が木下順庵に対する叙述はそれぞれ次の通りである。

²²³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 238。

²²⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 259。

まず、徂徠は順庵の詩を評して、「錦里先生者出。而博桑之詩皆唐矣」と言っている。古代桑は「扶桑」「博桑」「若木」などと呼ばれ、ここにおいては日本のことを指す。即ち、徂徠は順庵が唐詩を鼓吹することを指摘したいのであろう。

また、服部南郭は「錦里先生實爲文運之嚆矢。雖其詩不甚工。首唱唐。又聞先生恒言。非熟讀十三經注疏。則不可謂通經矣。由此觀之。所謂古學亦先生爲之開祖」と言っている。徂徠と同じように、服部南郭は順庵が初めて唐詩を鼓吹することを指摘した同時に、「文運之嚆矢」「古學之開祖」とも言っている。

なお、室鳩巢が堀正修に答える書によると、「恭靖先生在京時。酷愛韓文。無日不讀。每出輒以韓文自隨。及晚節東遷後。又愛王守仁文。常以其集置傍」とある。韓文は唐の韓愈の詩文を指す。順庵が韓愈の詩文を非常に愛することを言っている。

上述したことにより、護園派の荻生徂徠や服部南郭や室鳩巢は順庵を以て唐詩鼓吹者と認めている。しかしながら、順庵がはっきりと唐詩を鼓吹した例はないが、ただ「故唐人絶句、以青蓮龍標爲正宗。雖以少陵聖於詩者、有不逮焉、則其難可知矣」²²⁵とある。

杜甫を詩聖とする考え方をもととして、絶句においては李白・王昌齡は杜甫以上であると評している。盛唐の詩を傑作として推称していることに間違いはないと思う。

順庵は詩文集『錦里文集』19巻を有するが、芳賀矢一は「要するに此の人は教育家である。學説といふやうなものはなく、たゞ詩文があるだけであるが、しかし其の詩文には見るに足るものが少い」²²⁶と言っている。本稿の考えとしては、江戸時代漢文学の草創期から隆盛時代に移り変わる時代の一人として、木下順庵が江戸時代の文運の花期を開き、後江戸時代漢文学の隆盛に対する貢献をないがしろにすることはできないのであろう。また、「木門」という独創的な一派を築き、新井白石、室鳩巢、祇園南海ら「木門十哲」と呼ばれる優れた人材を輩出したので、木下順庵は教育者として特筆に値する。その門人、新井白石、室鳩巢、雨森芳洲、祇園南海、榊原篁洲の五人をはじめ、立派なものが多い。

②木門の俊才：新井白石、室鳩巢、祇園南海

²²⁵ 木下順庵著、木下一雄校訳：『錦里文集』、東京；国書刊行会、昭和57年5月1日発行、p.573。

²²⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.263。

I 新井白石：天下の詩名を擅にす

新井白石（1657年～1725）、名は君美、字は在中、錦屏山人、天爵堂等の別号がある。芳賀矢一の言っているように、人物から言っても、学問から言っても、彼は確かに徳川時代有数の人物である。その学問も種々の点から称賛するに足るものがある。『白石詩草』はその詩を集めたものであるが、ただ一巻だけのものである。その詩について、芳賀矢一は室鳩巢の「朝散太夫筑後守新井源公碑銘」に言っている内容を引用した。その内容は次の通りである。

最善唐詩。其詩豐腴馴雅直與開元諸名家相頡頏。由是四方爭傳。以逮海外之國。而公之詩名擅天下。

新井白石の詩に対し、芳賀矢一は『白石詩草』がただ一巻だけのものであるが、その一巻を以て、白石の詩才が「決して平凡でなかったがわかるであらう。その詩は格調高雅、行句もよく精練されて居る」と評価した。原念齋もその『先哲叢談』巻五の第九条において、鄭任鑰が撰した「白石先生詩序」にある「蓋彬彬有三百篇之遺風」（『白石先生余稿』）を例として、白石の詩を唐の詩人韋応物・孟浩然・元稹らと並べ評した。新井白石の詩集は朝鮮で広く読まれたのみならず、清朝の大家が人を介して贈られた詩集に序を作るということは、当時白石の場合のほかになかった。²²⁷

次に、白石の詩を見てみよう。

送入京人

紅亭綠酒畫橋西。

柳葉青々送馬蹄。

君到長安花自老。

春山一路杜鵑啼。

また、

²²⁷ 加藤周一：「新井白石の世界」『日本思想大系 35 新井白石』、東京：岩波書店、1983年11月5日第5刷発行、p. 507。

採蓮曲

紅粉青蛾照素舸。

南風吹起採蓮歌。

織々玉指不堪折。

最是枝頭綠刺多。

芳賀矢一の言っているように、新井白石の詩は格調高、行句もよく精練されている。また、これ等を見てもわかる通り、唐詩を学んで、よくこれを模倣したものである。

II 室鳩巢の『鳩巢文集』は朱子学者としての文章

室鳩巢（1658～1734）、名は直清、字は師礼、また汝玉、通称新助、また滄浪の号もある。

『鳩巢文集』は加賀にいた頃のものを集めた前編 13 巻と江戸にいた時のものを集めた後編 20 巻とこのほか補遺 11 巻がある。

芳賀矢一の言っているように、室鳩巢の思想は徹頭徹尾道学的で、その説は皆道学者としての見地からきているのである。したがって、その文章も「要するに朱子学者としての文章である」²²⁸と芳賀矢一は指摘した。例としては、ここに、『鳩巢文集』巻 8 における「答鈴木貞齋書」を挙げてみよう。

僕嚮者以為、山崎氏之學、專於理一而略於分殊者。知有君臣之大義、不知湯武放伐與君臣之義並行、而不相悖。知敬義有内外之分、不知不可以修身以上、為敬以直内以齊家以下、為義以方外、此其大者也。其他所見多執定一理、而不察分殊。所以流於神道也。

室鳩巢は『駿台雑話』巻一「老学自叙」にも、「年四十に近き頃にもあらん、ふかく程朱の学終に易ふえからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潜め思を覃うすること今に三十年、仰げばいよいよ高く、きれはいよいよ堅く、高遠に過ぎず卑近におちず、聖人復出づとも必ず其言に従はん事疑なし」と言っている。したがって、室鳩巢の漢文は道学的思想で貫かれていて、朱子学者としての文章である。

²²⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 271。

皿木門の詩人：祇園南海

祇園南海（1676～1751）は初名正卿、後改めて瑜と言った。字は白玉、鉄冠道人・観雷亭などの別号がある。その漢文学著書については、芳賀矢一が言っていないが、主に詩文集の『南海詩集』（1巻）、『南海先生集』（5巻）、と詩論の『詩学逢原』（2巻）、『明詩俚評』（1巻）、『湘雲鑽語附録』（3巻）、『南海詩訣』（1巻）、『南海詩法』（2巻）、『一夜百首』（2巻）などがある。

祇園南海に対し、芳賀矢一は主に二つの面から評価した。まず、祇園南海が「幼少の時から才を認められたが、殊に詩は最もすぐれた」²²⁹と言っている。祇園南海が14歳の時、白石・篁洲等と芳洲の寓居に集まり、即席で「辺馬有帰志」という詩を賦した。次のように言う。

遠逐將軍度雪山。
九秋大漠劍華間。
胡塵四起風悲塞。
羌笛一聲月照關。
却恨曾逢伯樂顧。
長傷未得旄頭間。
沙場幾歲摧毛骨。
何日華山休戰還。

座に在る者皆舌を巻いたという。原念齋もその『先哲叢談』巻六の第一条において、白石がそれに対する「此の詩、雄渾悲壯、以て後來斯文に任ずべきをトとするに足るなり」という評価を引用した。

また、芳賀矢一は「この人の詩は、他の人々の強ひて作ったものと違って、何處となく風致がある」²³⁰と言っている。例として、次の祇園南海の「望月有懷」を見てみよう。

露華如水夜寒生。無語空欄独数更。

惆悵去年湘水月。玉人相對到天明。

和習を脱し、才藻湧くが如きものがあり、立派な詩であると思う。芳賀矢一の言っ

²²⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 272。

²³⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 273。

ているように、祇園南海の詩には何らかの風致がある。それは詩の面において、江戸時代の漢文学が隆盛・渾成へ移り変わるあかしであろう。

③まとめ

上記のように、木門の漢文学は大体江戸時代初期、芳賀矢一のいわゆる草創期の漢文学であるが、江戸時代の漢文学が草創期から最盛期へ移り変わる時代の漢文学として非常に重要な役割を果たしていると思う。理由としては、芳賀矢一は次のように言っている。

「文は鳩巢・徂徠に至つて始めて大成した。詩の方は慶長・元和の頃に丈山・元政などがあつたが、まだやはり和習を帯びて居た。木下貞幹（錦里）が出て、我が國の詩は始めて唐の風となり、やがて白石・南海に至つて全く和習を脱し、眞に見るべきものなつた。」²³¹

即ち、文章は室鳩巢、荻生徂徠、詩は新井白石、祇園南海に至つて眞の發達をしたのであつた。室鳩巢、新井白石、祇園南海はみんな木門の漢文学者である。木門の漢文学者は江戸時代の漢文学が草創期から最盛期へ移り変わる中に、旗手を務めた。

5、伊藤仁斎

伊藤仁斎（1627～1705）は名を維楨、字を源佐と言ひ、古義堂、また棠隱と号した。その著書は『古学先生文集』『古学先生詩集』などがある。『古学先生文集』開卷卷一の「文式序」に、「作文有儒者之文。有文人之文。儒者之文者」と言つた。即ち、儒者としては文をおろそかにしてはならない

芳賀矢一は伊藤仁斎に対し、『古学先生文集』卷一の「敬斎記」に言っている「余從髻亂即有志于斯道也。然困于俗學。溺于詩文。不得進者。亦幾歲哉」という文を借りて、伊藤仁斎が「文學興味はあつた人」と評した。

また、『拙堂文話』にある言葉を通して、仁斎とその文章を評した。仁斎について、『拙堂文話』は次のように言う。

「貝原益軒伊藤仁斎並元禄以上人。當時文章之道未開。然其集中往々有可觀者。不可不謂豪傑之士」

また、仁斎の文を次のように評する。

「仁齋之文多不成語。然有氣魄光燄。使讀者不倦。東涯之文少疵。然氣燄不及。讀之思臥。古人謂文以氣爲主。信然。」

つまり、仁齋の文はもとより道学を論じたものが多く、語を飾り、句を弄するようなものはない。

伊藤仁齋の「儒医辨」(『古学先生文集』卷三)を例として見てみよう。

甚哉人之竊名，而欺俗也。物已定，而文飾之，以求銜于人道已定。而糝點之，以求售于世。其价不可増。而譏笑隨之，豈非惑乎。世俗有儒醫之稱。蓋醫而窺儒者自恥其爲小道。且與巫覡賤工伍。而竊欲列于儒。以表見其名。其事固卑陋叢小。無足深辨者矣。然世之貪汚卑屈。懷欲無厭屢試不第。抑鬱迷昧。不能以自立者。多逃儒而歸之。則固不可不爲世道之害焉。斯吾之所患也。嗚呼。儒醫亦何稱哉。

堂々たる議論であって、拙堂のいわゆる豪傑の士もなるほどと思われる。「儒医辨」は医者と儒者とは別なるべきと論じたもので、彼が医たるものを肯じなかった思想の根本をも見ることができる。その子伊藤東涯が「先府君古学先生行状」に「其爲文。專唐宋八大家。而文選浮靡之習。明氏鉤棘之辭。皆不取焉。在明唯取唐荆川順之。歸震川有光。王遵巖慎中三家而已」と言った通りである。

その他に、文において見るべきものは、「太極論」、「性善論」、「心学原論」、「荀子性惡論」、「論諸葛孔明非王佐之才」、「大学非孔氏遺書辨」等があり、どれも堂々たる議論である。したがって、芳賀矢一の考え方では、堂々たる議論は伊藤仁齋の文の特徴であると本稿は主張する。

(三) 最盛時代の漢文学

前述したように、芳賀矢一は江戸時代の漢文学を草創時代、最盛時代、渾成時代三期に分けて、享保・元文から寛政まで(1716~1801年)の期間を江戸時代漢文学の最盛時代と称する。最盛時代において、江戸時代の漢文学は発達して、和習を脱するようになった。漢詩文の隆盛は未曾有という有り様となった。

1、荻生徂徠：和習離れ得た漢文大家

荻生徂徠(1666~1728)、名は双松、字は茂卿、通稱総右衛門であり、徂徠、又護園と号した。著書には、『護園雑話』、語学書である『訳文筌蹄』(初編6巻、後編3巻)、

²³¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.32。

漢詩文集『徂徠集』30巻などがある。荻生徂徠について、芳賀矢一は次のように述べる。

徂徠集は三十巻、可なり多作であつたといへる。そして其の文も詩も純然たる支那の模倣である。従来とかく附きまとうた和習を離れ得た點に於ては、漢文家としての技倆を認めなければならぬ。²³²

何でもすべて中国風にしようとしたため、徂徠の書には、文章に返り点や送り仮名などが無い。和習を脱し、純然たる漢詩文というのは、芳賀矢一が荻生徂徠の漢文学に対する評価である。

本稿は芳賀矢一の論説を踏まえ、江戸時代漢文学の最盛期を代表する荻生徂徠の漢文学における特徴を次の如くまとめていきたいと思う。

第一の特徴は、荻生徂徠の文章は古文辞学と経学とを結合したこと。その点について、芳賀矢一は主に『徂徠集』の文章について論じている「四家雋例六則」（巻19）、「與藪震庵」（巻23）、「答屈景山」（巻27）等を例として挙げた。

韓・柳・李・王を理想とする所以は『徂徠集』巻19の「四家雋例六則」において「按六經十三家。萬世不朽之言、文章本業、外而無有焉。文章之體、具于文選。然六朝之靡、韓柳以理勝之、別開門戶。宋元之弊、李王以辭勝之、復古之業始備。雖復歷千載、唯此四家爲作文之規矩準繩也。……繇是而後、六經十三家、庶可得而學焉」と明らかにされている。徂徠は「四家雋」12巻を著して、唐の韓愈・柳宗元、明の李攀龍、王世貞を以て文章の理想としている。

また、『徂徠集』巻23の「與藪震庵」において「夫然後取秦漢以上書、而求所謂古言者、以推諸六經焉、則六經之旨瞭然如指諸掌矣。是亦無它、習乎古文故也」と言っているように、徂徠は古文辞学が古言であり、古言に通じてはじめて古経についても論述が可能だからであると主張する。

なお、『徂徠集』巻27の「答屈景山」に「夫華言之可訳者、意耳。意之可言者、理耳。其文采粲然者不可得而訳矣。故宋文之與俚言倭言、其冗長脆弱之相肖。必從事古文辭、而後可医倭人之疾。」という句がある。つまり、「倭人」にとって、「宋文」は「冗長脆弱の相」を持っていると徂徠はそれを批判するようになったと考えられる。

そういうふうに、芳賀矢一の考えでは、徂徠は韓・柳・李・王四家の文を手本とし、

文章においては、和習を帯びるということを非常に嫌がった。彼の偉いところは、この古文辞学と経学とを結合した所にある。²³³

第二の特徴としては、徂徠の詩には、風雅あり、あらゆる体が皆備わっていること。『徂徠集』の目次により、徂徠の詩には、四言古詩、五言律詩、七言律詩、五言絶句、七言絶句、擬古樂府等あらゆる体が備わっている。『徂徠集』卷之七における七言絶句百十八首の「送菅童子遊西京 二首」は次のように曰く、

五十三驛莫言難。

處處山川秋好看。

明日先從函嶺望。

如絲大道達長安。

同

揮鞭意氣愜秋涼。

才子奉恩遊洛陽。

但到西山紅葉好。

錦衣相映早歸鄉。

この菅童子というのは菅原（山田）麟嶼のことであり、当時神童と称された秀才である。この時、徂徠の門を去って、京都の東涯のところへ行った。上記の二首は其の行を送ったものであるが、徂徠の磊落豪放な所を見ることができる。芳賀矢一が言っているように、「徂徠の詩は一般に豪放なものが多く、悲歌慷慨といふ風ではない。」²³⁴

また、芳賀矢一の指摘したように、徂徠の詩には、美人や恋を詠じたもの、つまり男女の情緒を映したものも極めて多い。例えば、『徂徠集』卷之六における七言絶句である「美人分香」は次のように曰く、

春徑採香西日曛。

館娃宮畔女如雲。

²³² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、pp. 303～304。

²³³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 306。

²³⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 310。

譁然爭惜宜男草。

挿左中懷不冑分。

また、『徂徠集』巻之四の「浣紗女」は次のように曰く、

白足苧蘿女。

千年尚姓施。

襦裙不冑脱。

爭觀浣紗時。

上記のように、徂徠の詩には美人や恋を詠じたものや、風雅などがあり、あらゆる体が皆備わっている。

2、徂徠歿後文壇の牛耳を執る服部南郭の漢文学

萩生徂徠歿後、門下の護園で徂徠の詩文を継承する者は服部南郭である。南郭は徂徠歿後、『徂徠集』31巻を編刊して、護園詩文派の代表者としての地位を示した。芳賀矢一は「徂徠の歿後、文壇の牛耳を執つた者は服部南郭である」²³⁵と言っている。

服部南郭（1683～1759）は名を元喬、字を子遷、通称を小右衛門と言ひ、南郭、芙蓉館と号した。詩文集『南郭先生文集』は生涯の作品を網羅し、ひろく世に行われた。著書はほかに『南郭先生燈下書』『大東世語』や『郭注莊子』校刊などがある。

詩文集『南郭先生文集』は初編から四編まであり、それが各10巻から出来ているから、全部で40巻となるわけである。詩文とも併せて収められた。その『南郭先生文集』に対し、芳賀矢一は徂徠、積大典、江村北海、宇士新などの評を踏まえ、「かく全體としては、或はほめ、或はけなし、批評がまちまちであるが、これには學派の關係もあるであらう。しかしとにかく公平に見て、彼の長所は文藝の方にあり經學の方は寧ろ浅かつたのは確かである」²³⁶と指摘した。同じことは江村北海もその著書『日本詩史』巻四に、「蓋徂徠歿後、物門之学、分而二、經義推春台、詩文推南郭」と言っている。南郭、詩文は最も長ずる所、經義は蓋しその短所である。

服部南郭の詩に対し、芳賀矢一はまた拙堂の評したことを引用した。内容は次の通りである。

「服部南郭之詩。澹泊少味。然自有大家氣象。近人以纖巧之才。妄相詬病。多見其不

²³⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 315。

²³⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 318。

知量也。」²³⁷

即ち、服部南郭の詩は淡泊で味わいが薄い。しかし、おのずから大家の気性がある。近頃の人たちは、繊細で巧者だという才能をよりどころに、やたらと、相互に悪口を言い合っている。まさにその身のほど知らずを見る。

南郭は熊本の細川家に仕えたので、侯に上がったものに次の詩がある。「奉酬熊本侯見寄贈」という詩であり、次のように曰く、

阿蘇神獄彩雲間。

峻極天邊誰得攀。

鎮跨九州分五服。

封廻大海對三山。

文縁盛事忝前席。

情憫衰年厚假顔。

白雪兼歌招隱曲。

和將下里奉清間。

この詩には「衰年」という言葉があるが、老後過去を顧み、亡くなった友達のことなどを思い出した。芳賀矢一が「さすがに寂寥の感があるのであらう」²³⁸と言っている。

次は、『南郭先生文集』に収められた服部南郭の文章を見てみよう。南郭は詩文においては復古論者であることはであろう。そのことについては『南郭先生文集』二編卷之六の『金華稿刪序』において、次のように明らかに曰く、

凡文之難。在飾吾意之所言。乃能度古人之心当之。執古御今。文莫吾猶人也。²³⁹（『南郭先生文集』二編卷之六『答筑前井上生』）において、次のように曰く、

又『南郭先生文集』二編卷之十の『金華稿刪序』において、次のように明らかに曰く、

夫文者言之修也。修焉而後載之簡牘。終亦不能舍典籍而為言。典籍難多。以古為至。而物固有至不至。則焉可誣也。若不因古。必因後世。韓邪柳邪。歐蘇諸名家邪。執非

²³⁷ 斎藤拙堂原著、斎藤正和訳注：『拙堂文話』巻一、東京：明德出版社、2015年初版発行、p. 105。

²³⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 326。

²³⁹ 服部南郭著、日野龍夫編集・解説：『近世儒家文集集成第7巻 南郭先生文集』、東京：ペリかん社、1985年3月30日初版第1刷発行、p. 165。

陳言。敦非既朽之古人。韓氏去陳言。蓋有為而然。亦謂其身居之古時也。是深於古者也。乃超乎八代。上規周漢。所修可知也。即以為口實者。斯人也文固如昌黎乎。不然。俚言盈耳。愈新愈俚。則終亦不能舍典籍而為言。難然。斯道也乃得之于內。不可得而傳。其或未得焉。則規規終日言之不足。苟有得乎。則固已有因不為陳腐。²⁴⁰（『南郭先生文集』二編卷之十『答筑前井上生』）

即ち、古の典籍を捨てて言を為すことは出来ない。もしも古によることを陳言とするならば韓柳も歐蘇も諸名家も陳言でないものはない。古文辞拙に反対する人々は、その欠点を陳腐・剽窃であるとして盛んに攻撃する。南郭は此の攻撃を反駁し、極力古文辞を弁護している。

上記のことにより、南郭は経学よりも詩文に長じていたがために、詩文を主とする方向へ傾いて行ったことは、一生の業績が如実に証明している。荻生徂徠没後、門下の護園で徂徠の詩文を継承する者が服部南郭である。芳賀矢一の考え方として、南郭は徂徠没後、文壇の牛耳を執つた者であると本稿は主張する。

本稿は芳賀矢一の論説を踏まえ、江戸時代漢文学の最盛期を代表する荻生徂徠、服部南郭の漢文学に関する特徴を上記の如くまとめてきた。荻生徂徠の漢文学は和習を脱し、純然たる漢詩文であり、その文章が古文辞学と経学とを結合し、徂徠の詩には、風雅あり、あらゆる体が皆備わっている。服部南郭は荻生徂徠没後、門下の護園で徂徠の詩文を継承する者であり、経学よりも詩文に長じていた。服部南郭の詩は淡泊で味わいが薄い。しかし、おのずから大家の気性がある。

（四）渾成時代の漢文学

寛政以後、つまり 1802 年から 1867 年までの間、看過できない漢文学者の数が多いことは芳賀矢一のいわゆる江戸時代漢文学の第三期である漢文学の渾成時代の特色である。総説においても指摘したように、この時代において、芳賀矢一は「要するに此の頃はもう詩文を専門とする傾向が生じ、特に文化・文政に至っては、最も盛んである」²⁴¹と言っている。芳賀矢一は皆川淇園、安達清河、江村北海、片山北海、入江北海、井上蘭台、井上金峨、亀田鵬斎、市川鶴鳴、塚田大峯、豊島豊洲、寛政三学士である柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里、市河寛斎、大窪詩佛、六如、菅茶山、広瀬淡窓、天保三十六家、梁川星巖、佐藤一斎、斎藤拙堂などを漢文学者として挙げられた。

²⁴⁰ 服部南郭著、日野龍夫編集・解説：『近世儒家文集集成第 7 卷 南郭先生文集』、東京：ペリかん社、1985 年 3 月 30 日初版第 1 刷発行、p. 216。

芳賀矢一は「寛政頃の柴野栗山などからして、古文辭にも見るべきものがあり、詩には市河寛齋・大窪詩佛・菅茶山・頼山陽などがあつた」²⁴²と言ひ、また『天保三十六家絶句』(3巻)に登場した天保三十六家に対して「最も名高いのは詩佛・五山・星巖・山陽・淡窓の五人であらう」²⁴³と評した。その故に、以下は主に柴野栗山、市河寛齋、大窪詩佛の漢文学について考察したい。

1、文筆に長じる柴野栗山

柴野栗山(1736～1807)は、江戸時代の儒学者・文人である。名は邦彦であり、字は彦輔であり、寛政の三博士の一人として知られる。著に『栗山文集』5巻、『栗山堂文集』22巻、『栗山堂詩集』4巻、『雑字類篇』7巻などがある。

寛政三博士(柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里)に対し、芳賀矢一は「此の三人は學問のみならず、文筆にも長じ、殊に栗山の文の如きは到底他の追隨を許さないものであつた」²⁴⁴と評した。その例として、以下は柴野栗山の『柴野栗山文集』巻二の「送高山生序」を見てみよう。

生善劍然好學。身長八尺。高髻挿梁。面如紅玉。歲之二月。飄然入京顧余古愚軒。入相揖而謂曰。吾喜觀天下奇人偉士之面。猶觀草木之英華悦我目焉。吾所適之邦。往往道子之名字。意或子之奇焉。目之豎而鼻之横矣。是以來觀也。余起而延之也。其衣弊垢見綿。(中略)我所畏與矣。目則雨而横。鼻則特而豎矣。生還路由東都其見之可也。

この「送高山生序」は安永4年(1775)柴野栗山が京都から郷里へ帰る(乙未の春旅)彦九郎に贈ったものである。これを見ると、栗山は多分志士の氣風に共鳴したのである。ただ虚弱であつたから遂に文学へ転じたが、心に高山の生活を尊敬し、且つ羨やましく思つていたのである。

2、市河寛齋：一世を指導した寛政以後の詩人

市河寛齋(1749～1820)は名を世寧、字を子静と言ひ、上野国(いまの群馬県)出身という。市河寛齋に対し、芳賀矢一は「寛政以後の詩人として一世を指導した人である」²⁴⁵と評した。その著に『日本詩紀』(50巻)、『全唐詩逸』、『寛齋遺稿』・『寛齋百

²⁴¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 34。

²⁴² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 34。

²⁴³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 353。

²⁴⁴ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、pp. 346～347。

²⁴⁵ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 347。

絶』・『寛齋余稿』・『陸詩意註』・『宋百家詩』などがある。

『日本詩紀』は、近江朝から平安時代末までの漢詩を収集し、漢詩人別に編集した漢詩総集で、目録1巻、本集50巻、別巻1巻、外集1巻より構成される。『日本詩紀』の凡例のはじめに「編以詩紀為名。乃取則於馮吳二書也」と言っている。後藤昭雄の『日本詩紀』解説により、「馮吳二書」とは、明の馮惟訥の『古詩紀』150巻と同じく明の吳瑄の『唐詩紀』170巻を言う。²⁴⁶『古詩紀』は漢・魏以降、陳・隋以前の詩を、『唐詩紀』はその名の通り唐代の詩を集めるものである。つまり、『日本詩紀』の編纂は唐詩を規範としてなされている。それが編纂刊行されたのは寛齋が林家塾塾長の地位にあった天明6年(1786)のことである。この頃までの寛齋は古文辞派の詩風を信奉していた。即ち、『日本詩紀』は古文辞派寛齋の文業の一つなのである。

が、寛齋は18世紀末に清新派に転じ、南宋の陸游や范成大を手本とする日常的な詩情に富んだ平明な詩風を主張して、たちまち新しい詩風の指導者となった。松下忠の『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』により、寛政2年、寛齋42歳の時昌平黌を辞して、江湖詩社を設立し、実際の詩活動を開始したごろから50歳ごろまでの間では、詩風は一変して、中晩唐の詩を好み、やがて宋詩を好むに至った時期である。²⁴⁷市川寛齋を盟主とする江湖詩社の結社は、天明7年(1787)に始まり、寛政(1789~1801)初めには江戸詩壇において大きな位置をしめるようになってきた。大窪詩仏、柏木如亭などの詩人を育て、江戸後期の漢詩壇に大きな役割を果たしたため、芳賀矢一は市河寛齋が寛政以後の詩人として一世を指導した人であると評したのである。

3、大窪詩佛の詩は清逸淡泊

大窪詩佛(1767~1837)は名を行と言ひ、字は天民、瘦梅、また詩聖堂と号する。その書に、『詩聖堂詩話』、『宋詩礎』2巻、『北遊詩草』2巻、『西遊詩草』2巻、『詩聖堂詩集』33巻等がある。大窪詩佛の詩に対し、芳賀矢一は「詩佛の詩は清逸淡泊、星巖は温雅にして高趣がある」²⁴⁸と言っている。

²⁴⁶ 市河寛齋編、後藤昭雄開設：「解説」『日本詩紀』、東京：吉川弘文館、2000年3月1日復刊第1刷発行、p.2.

²⁴⁷ 松下忠：『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその摂取——』、東京：明治書院、1969年3月27日初版発行、p.598.

²⁴⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p.35.

寛政 11 年刊行された『詩聖堂詩話』も次のように曰く、

詩貴平淡。平淡詩之上乗也。然平淡不經奇險中來、則徒是村嫗絮淡耳。全無力氣焉。

固学詩先覓奇險、而後温雅、而後平淡。(『詩聖堂詩話』)

この文では、詩には平淡を貴ぶこと、平淡は詩の上乗なるものであること、平淡は奇險を経なければ全く気力のない詩となることを述べた。即ち、大窪詩佛は平淡を重視する。

大窪詩仏は「題頼子成山紫水明処」²⁴⁹に曰く、

山紫水明処

便是先生晚酌時

先生対山日酌酒

其意不在酒又不在詩

平生厭見俗人面

何如与山相對把酒卮

以山充旧識

以水充旧知

雖在鳳闕下

心与山水期

酒酣神王歌且唱

一曲平家古澹辞

山自無言水自和

清於鳴玉切於糸

王侯螻蟻定何物

胸中萬卷亦何爲

人生得意在知足

山肴野蔌風味滋

況有細君調羹巧

²⁴⁹ 市河寛齋、大窪詩仏著、揖斐高注：『江戸詩人選集』第五卷、東京：岩波書店、1991年。

甘苦鹹酸与口宜
献酬不用别人侍
山与家人共掃眉
却覺少陵老子亦多事

この詩は詩仏の作としては、なかなかよくできている。文政 10 年、詩仏 61 歳、京都に入り、頼山陽を鴨沂の山紫水明処に訪ねた。詩仏は東本願寺の涉成園の詩を作り、旧知の日野南洞公の宴に侍したりした。また、この長古を作った。詩仏 40 歳以後の詩が清逸淡泊であり、この「題頼子成山紫水明処」もその類である。

(五) まとめ

上記は芳賀矢一の言っている（一）草創時代——慶長・元和から元禄まで、（二）最盛時代——享保・元文から寛政まで、（三）渾成時代——寛政以後の通り、徳川時代の漢文学について述べてきた。五山禅僧の漢文学が徳川時代の漢文学の基礎となり、徳川時代の漢文学は実に燦然として輝いている。

草創時代の漢文学について、芳賀矢一は主に藤原惺窩、林羅山、石川丈山、木門の漢文学を中心に論述した。その論点としては、次のようにまとめていきたいと思う。まず、惺窩は儒者として第一人者であり、その詩文を集めた『藤原先生文集』と詩文論に関する著書である『文章達徳録』と『文章達徳綱領』が見るに足るものも少なくない。林羅山は藤原惺窩の跡を継いで、近世儒者の先駆者であり、『林羅山文集』と『林羅山詩集』を有する。が、芳賀矢一は藤原惺窩・林羅山時代の漢文学は未だ草昧に属して、完全な域に達することはできなかつたと主張する。羅山の詩が学者の詩であり、詩人の詩ではないとあまり評価していない。次に、石川丈山は江戸時代初の詩人であり、その詩が従来五山禅僧の禅佛を中心とする詩風と切り離し、格調高い詩風を重んじる。第三、木下順庵は江戸時代漢文学の草創期から隆盛時代に移り変わる時代の一人として、江戸時代の文運の花期を開き、江戸時代漢文学の隆盛に対する貢献を尽くしてきた。その門人、新井白石、室鳩巢、雨森芳洲、祇園南海、榊原篁洲の五人をはじめ、立派なものが多い。そのうち、室鳩巢は文章、新井白石、祇園南海は詩に長じる。また、芳賀矢一は『拙堂文話』にある「貝原益軒伊藤仁齋並元禄以上人。當時文

章之道未開」に基づき、漢文家としての技倆を認められたのが徂徠からであると主張する。伊藤仁斎の漢文学に対し、仁斎の文はもとより道学を論じたものが多く、語を飾り、句を弄するようなものはないと評した。

最盛時代の漢文学について、芳賀矢一は主に和習離れ得た漢文大家である荻生徂徠、徂徠歿後文壇の牛耳を執る服部南郭の漢文学を中心に述べた。荻生徂徠の漢文学は和習を脱し、純然たる漢詩文であり、服部南郭は詩文が最も長ずると指摘した。芳賀矢一は荻生徂徠の漢文学の特徴を次の三つにまとめてきた。第一の特徴は、荻生徂徠の文章は古文辞学と経学とを結合したこと。第二の特徴は徂徠の詩には、風雅あり、あらゆる体が皆備わっていること。第三の特徴は徂徠の詩には、美人や恋を詠じたもの、つまり男女の情緒を映したものも極めて多い。

第三期である渾成時代の漢文学について、看過できない漢文学者の数が多いと芳賀矢一は主張する。この頃はもう「詩文を専門とする傾向が生じ、文化・文政に至つては最も盛んで」²⁵⁰という状況になってきた。柴野栗山をはじめとする寛政三博士等の漢文学にも見るべきものがあり、「詩には市河寛斎・大窪詩佛・菅茶山・頼山陽などがあつた」²⁵¹。また、「最も名高い」と芳賀矢一が言っている詩佛・五山・星巖・山陽・淡窓をはじめとする天保三十六家もある。

²⁵⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 34。

²⁵¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 34。

第二章 岡田正之の日本漢文学史論

第一節 岡田正之の学術生涯

一、岡田正之の学術年譜

岡田正之（1864－1927）は剣西と号し、明治・大正時代の漢文学者。元治元年9月5日を以て富山市清水町に生まれる。家世々医を以て富山藩に奉仕する。祖は栗園と号し、経術を好み、昌平黌に学び、業がなつて藩校の学頭に就任した。傍ら学聚舎を開きて子弟を教育する。考は呉陽と号し、栗園の養子であり、詩文に長じ文章軌範脈理、呉陽遺稿等の著がある。父は昌平黌に学んだ漢学者である。

岡田正之の年譜行状に関しては、1927年10月刊行された斯文会編『斯文』第9巻の第10冊所載の「雑録・故岡田正之年譜」に基づいて作成した²⁵²。（（）内は筆者の挿入）

元治元（1864）年9月5日 富山市清水町に生まれる

明治16（1883）年 東京に出て、試験優等を以て東京大学の同年設置されたばかりの古典講習科漢書課入学。

明治20（1887）年 東京大学古典講習科漢書課卒業。

同年7月11日 恩師重野成齋先生の御推薦を以て内閣修史局入職。

明治21（1888）年1月30日 帝国大学係員

明治24（1891）年8月13日 文科大学係員

明治26（1893）年8月2日 陸軍中央幼年学校教授

明治28（1895）年4月8日 史料編纂助員

明治33（1900）年4月8日 史料編纂員を囑託

明治35（1902）年4月30日 任第一臨時教員養成所教授

明治36（1903）年5月4日 東京帝国大学文科大学講師を属託

明治39（1906）年9月12日 任学習院教授叙高等官五等賜五級俸

²⁵² 斯文会編：「雑録・故岡田正之先生年譜」『斯文』9（10）、1927年10月。

- 明治40（1907）年9月21日 東京帝国大学文科大学助教授を兼任し、日本漢文学史を担当し、上古、中古、近古、近世の四章に分け、漢文の伝来以後徳川時代に至るまでの始末を講述²⁵³。
- 大正3（1914）年3月1日 漢文大系第18巻『文章規範・古詩賞析』（富山房）出版。
- 大正9（1920）年10月29日 解題した漢文大系第22巻『楚辞・近思録』出版。
- 大正10（1921）年4月18日 『近江奈良朝の漢文学』により、文学博士授与された。
- 大正9（1920）年9月～大正11（1922）年5月 佐久節との共編した国訳漢文大成の『文選』（第2巻～第5巻）が国民文庫刊行会により刊行。
- 大正12（1923）年8月26日 中国へ出発
- 大正13（1924）年3月25日 東京帝国大学教授となる。文学部勤務を命じられ、中国哲学中国文学第二講座を分担する。
- 大正15（1926）年1月15日 御講書初に論語を進講した。
- 大正15（1926）年10月18日 学習院名誉教授の名称を授かる。
- 昭和2（1927）年7月28日 東京市本郷区駒込千駄木町50番地に薨ずる。享年64歳。
- 昭和4（1929）年9月 遺稿として『日本漢文学史』は門下生である長澤規矩也・山岸徳平らの整理により共立社書店より刊行された。
- 昭和4（1929）年 学位論文である『近江奈良朝の漢文学』は東洋論叢第10巻として東洋文庫により刊行された。
- 昭和21（1946）年10月 学位論文である『近江奈良朝の漢文学』は養徳社より復刊。
- 昭和29（1954）年12月 『日本漢文学史』の増訂版は吉川弘文館より増訂版刊行

岡田正之は幼にして家学を受け、長じて東京に遊び、小永井小舟、重野成齋に就いて学ぶ。後東京大学古典講習科に入り、明治20年7月その漢書課を卒業した。

卒業後、陸軍幼年学校の教授などを経て、明治39年学習院教授となり、大正15年まで20年間勤めた。大正13年、東京帝国大学教授を兼任した。晩年には大東文化学院教授も引き受けている。岡田正之は学者として教育家として国家に貢献する所多く、また斯文会の理事、研究部長として務めた。帝国大学文科大学書記、陸軍幼年学校教授、東京帝大史料編纂助員、陸軍中央幼年学校教授、史料編纂員、東京帝大文科大学

²⁵³ 瀧川亀太郎：『日本漢文学史』序『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。

講師を経て、明治 39 年学習院教授。40 年東京帝大助教授兼任、大正 13 年同教授兼任。支那文学概論、支那文学史、日本漢文学史を講じた。同 15 年御講書始め、同年大東文化学院教授兼任。同年退官し学習院名誉教授。昭和 2 年 7 月 28 日死去。64 歳。没後の昭和 4 年、代表的な著書『日本漢文学史』は日本初の漢文学史の研究書といわれる。

岡田正之は日本漢学に詳しく、これについては、漢文大系（富山房）の『古詩賞析』と『楚辞』の解題、国訳漢文大成の『文選』の訳、『近江奈良朝の漢文学』および『日本漢文学史』の著作がある。岡田正之の日本における漢文学の歴史を主に研究し、その講義録を中心とする業績をまとめた『日本漢文学史』は門下生である長澤規矩也・山岸徳平らの整理に基づき、1929 年に遺稿として共立社書店により出版された。近代の部分まで完成させることができなかつたことが惜しまれている。その『日本漢文学史』は上代から室町時代までの漢文学について述べたもので、1954 年にその増訂版が吉川弘文館により刊行されて現在に至るまで読み継がれている。

二、『近江奈良朝の漢文学』：日本漢文学の論述

上述した岡田正之の著書の内、東洋文庫刊行の『近江奈良朝の漢文学』は大正 10(1921)年 4 月 18 日に文学博士の学位を授与された学位論文にあたる。後にそれを第一篇の第一、二期とする『日本漢文学史』は 1929 年に共立社書店より刊行され、1954 年にその増訂版も吉川弘文館により刊行されて現在に至るまで読み継がれている。

岡田正之氏は 1946 年養徳社により出版された博士論文『近江奈良朝の漢文学』において、序説及び「第一編 由来」「第二編 学風」「第三編 文章」「第四章 詩藻」「第五編 影響」五編を設け、岡田氏が従来の「徐福齋来の説」と『日本書紀』に叙述した神功皇后征韓収還の説²⁵⁴との典籍の伝来に関する二説を「(如上の二伝説)すでに信ずるにたらざるを以て」と否定し、典籍伝来の初めは応神朝に置かなければならないと主張することから、漢文学が万葉集をはじめとする日本文学に与える影響に関する論述の「第五編 影響」まで日本の祖先が披歴した漢文学の発生と発展など漢文学の径路について叙述した。近江浄見原藤原奈良の 12 朝、120 余年の間が日本漢文学の

²⁵⁴ 岡田正之：『近江奈良朝の漢文学』、奈良：養徳社、1946 年。p. 7。

同化大成された時代であり、「平安朝以後に奔放横溢せる漢文學の源頭」²⁵⁵でもある。

近江奈良朝の漢文学の重要性に関しては、『近江奈良朝の漢文学』の序説のはじめには、開国以来、「高潔醇健なる思想の発達を遂げた」者が日本固有の美德に基づいて成長してきたのは言うまでもないであるが、日本国民に同化せられた漢文学が彼らの性情志気に与える影響が最も多大なことも「何人も争ふべからざる事實」であると論述した。「顧ふに、品性の修養と共に、趣味の領會が人格を作る上に於て必要とすれば、我が國民は少なくとも我等の祖先が味ひ得たる漢文學とその瀝ぎ出せる作品とに向かつて先づ研究の指を染めざるべからず。殊に、其の變遷の跡を明にして、醇健なる思想と高雅なる趣致とを後來の國民に傳ふるは現代國民の一大義務なり。」²⁵⁶とは非常に名高い名著とされる岡田氏の学位論文である『近江奈良朝の漢文学』の序説の最後の部分である。氏の論述した通りに、日本の先祖たちが味わい得た漢文学とその滴り積もっている作品とに向かつて研究するのは「趣味の領會が人格を作る上に於て」必要とするものであり、特に、漢文学の変遷の跡を明らかにして、漢文学及び其の作品に表した醇健なる思想と高雅なる趣致とを後來の日本国民に伝えるのは「現代國民の一大義務」である。岡田氏は自らその「一大義務」を果たして博士号を取る学位論文とし、『近江奈良朝の漢文学』という書物を完成した。

三、岡田正之日本漢文学を論述する所以

年譜に記載された通りに、岡田正之は明治16(1883)年に、東京に出て、試験優等を以て東京大学の同年設置されたばかりの古典講習科の漢書課に入学した。「古典講習科」の設置された経緯に関し、西村天囚(1865~1924)はその『碩園先生遺集』第3卷の「古典科師友寿謙記」において、すべて漢文で下記のように述べた。

「維新以降取長補短之說起自教學兵刑以至技藝之末一切崇尚西法是顧可也然推波助瀾往而不反暨於明治十五六年之交海内靡然模倣洋風抵排舊俗國典漢籍猶且棄而不講將併取彼之短而又舍我之長其弊有不勝言者焉今樞密顧問官男爵加藤博士時為東京大學總

²⁵⁵ 岡田正之：「序説」『近江奈良朝の漢文学』、奈良：養徳社、1946年。p. 4.

²⁵⁶ 岡田正之：「序説」『近江奈良朝の漢文学』、奈良：養徳社、1946年。p. 3.

理深慨于此奏於朝特設古典科於大學四年一期募集諸生以令講習國典漢籍前後兩期入學者一百餘人四方向往舊學復興而氣運亦隨一變當時為之教授者如小中村木村本居黒川栗田小杉諸先生之於國典中村重野川田三島島田南摩内藤諸先生之於漢籍竝為碩學鴻儒一代耆宿」²⁵⁷

ここに、その漢文の日本語訳は町田三郎先生がその『明治の漢学者たち』の「東京大学『古典講習科』の人々」において訳したものを下記のように引用したいと思う。

「維新以降、長を取り短を補うの説起り、教学兵刑より以て技芸の末に至るまで、一切西法を崇尚す。是れ固より可なり。然うして、推波助瀾、往きて反らず。明治十五六年の交に暨り、海内靡然として洋風を模倣し、旧俗を抵排し、国典漢籍、なお且に棄てて講ぜず、將に彼の短を併取して、又我の長を舍つ。その弊言うに勝えざるものあり。今枢密顧問官男爵加藤弘之博士、時に東京大学総理たり。深く此を概み、朝に奏して、古典科を大学に特設す。四年一期、諸生を募りて以て国典漢籍を講習せしむ。前後兩期、入学する者百余人。四方向往し、旧学復興して氣運も亦一變に隨う。当時これが教授たる者、小中村（正矩）木村（正辞）本居（豊穎）黒川（真穎）栗田（寛）小杉（楡邨）諸先生の国典に於ける、中村（正直）重野（成斎）川田（甕江）三島（中洲）島田（篁村）南摩（綱紀）内藤（耻叟）諸先生の漢籍に於けるが如き、並びに碩学鴻儒一代の耆宿たり。」²⁵⁸

明治維新以後、西洋を崇尚し、洋風を模倣するうえに、旧俗を抵排し、国典漢籍が棄てられ、安井息軒・鷺津毅堂・岡松甕谷・根本通明・中村敬宇・島田篁村・竹添井井などの漢学者たちは次第に年を取って凋謝していった状況下に、史学や政治学などの研究に必要な和漢の古典、歴史・文学等の基礎知識をしっかりと習得し、しかも漢学の老大家の凋謝したのちを受け継ぐべき後継者養成の必要性があるという意見が抬頭していた。文部省の賛成を以て、明治15年5月、東京大学文学部付属として国学の内容を中心とする「古典講習科」が設置された。明治15年の11月に、「文部省専門局長浜尾

²⁵⁷ 西村時彦：「古典科師友寿讌記」『碩園先生遺集』第3巻、大阪：懷徳堂記念会、1936年、p.23。

²⁵⁸ 町田三郎：「東京大学『古典講習科』の人々」『明治の漢学者たち』、東京：研文出版、2009年、pp.128～129。

新から、特に漢文学講習科の設立の要が説かれ、そこで以前に設立された「古典講習科」を甲部とし、新たに『漢文学』を内容とする『支那古典講習科』を乙部として設立運営することとなった²⁵⁹。明治16年9月、第一回の募集が開始され、試験優等を以て古典講習科の漢書課に入学した。

結局経済的に維持難しいゆえに、「古典講習科」はわずかに明治20年と21年の2回、40数名²⁶⁰卒業生を送り出したに過ぎないが、町田三郎氏が「東京大学『古典講習科』の人々」において語るとおりに、明治の後半から昭和初年にかけて、日本の東洋学者を代表する俊才たちが輩出することとなった。西洋学術万能の當時に、古典講習科よりは人材輩出し、国粹保存にも、和漢学の復興にも多大な貢献を尽くした人が多い。岡田正之氏もその漢書課出身の一人であり、「しかも錚々たる一人」²⁶¹である。明治20年卒業し、同年7月11日恩師重野成齋先生の御推薦を以て内閣修史局の事業と、内務省地理局の地誌編集事業とが移管されていた。氏は十分に漢学の根底があるので、資料を広く捜し、編纂することに従事でき、しかもその成績が頗る著しい。三上参次氏のご紹介により、岡田氏は官府に於ける成績だけではなく、史学雑誌などで発表した論文も多い。その後、陸軍中央幼年学校、教員養成所、学習院、東京帝国大学文学部、大東文化学院の教授となり、年譜の示した通りに、明治40年に日本漢文学史を担当し、上古、中古、近古、近世の四章に分け、漢文の伝来以後徳川時代に至るまでの始末を講述した。大正15年には御講書初に論語を進講し、それは漢学界の重鎮であるので、氏の十分である漢学の根底はよく知られている。

古来日本の歴史記録律令格式をはじめ、そのほか重要な書類も大抵漢文で表記された故に、漢文漢詩を除外し、日本語を以て書いたものばかり研究し、或いは西洋学術一辺倒になるのは勿論誤っているだろうと思う。東京大学における「日本漢文学史」の講義は芳賀矢一博士により創められ、岡田氏が之を受け継いだものである。芳賀博士の講義が既に遺稿として公刊されたが、「あまりに簡単である」²⁶²ので、岡田正之氏は大正3（1914）～大正9（1920）年に、岡田正之は富山房により出版された漢文大系

²⁵⁹ 町田三郎：「東京大学『古典講習科』の人々」『明治の漢学者たち』、東京：研文出版、2009年、p.132。

²⁶⁰ このデータは町田三郎先生の著書『明治の漢学者たち』における「東京大学『古典講習科』の人々」によるものである。

²⁶¹ 三上参次：『日本漢文学史』序『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。

²⁶² 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版の「序」、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.2。

第18巻『文章規範・古詩賞析』、第22巻『楚辞・近思録』（『近思録』の部分は井上哲次郎校訂）を校訂、解題した。また、大正9（1920）年9月～大正11（1922）年5月に、佐久節と国民文庫刊行会により刊行された国訳漢文大成の『文選』（第2巻～第5巻）を共編した。しっかりとしている漢文基礎を示した上に、長い間日本漢文学史を担当し、上古、中古、近古、近世の四章に分け、漢文の伝来以後徳川時代に至るまでの始末を講述した。氏の門下生はその講義の筆記を整理して出版に出した。

要するに、日本における漢文学の盛衰は「國文学史の一部を成すべきであるのに、わが國文學界では多く之を度外視している」²⁶³という状況のなか、岡田正之はその劣勢を挽回しようとするので、自らしっかりとしている漢文素養を以て日本漢文学史の全斑を後来の日本国民に伝えるのに、努力してきた。

第二節 岡田正之『日本漢文学史』について

前にも述べたが、岡田正之の『日本漢文学史』は1929年に遺稿として門下生である長澤規矩也・山岸徳平らの整理により、共立社書店より出版され、1954年にその増訂版も吉川弘文館により刊行されて現在に至るまで読み継がれている。本章は主に1954年に吉川弘文館より刊行された岡田正之の『日本漢文学史』増訂版に基づいて論述を展開しようと思う。

増訂版も1929年に共立社書店より出版された初版も朝紳文学時代と緇流文学時代との二篇となり、漢字漢書の伝来より、室町の末期五山僧侶が江戸文学の基を開くに至るまでである。第一篇を朝紳文学時代として推古朝より平安朝までを四期に分けられ、第二篇を緇流文学時代とし、鎌倉時代より室町時代までを四期に分けた。具体的には、第一篇の朝紳文学時代は第一期推古朝及び其の以前、第二期大化以後奈良朝の終りまで、第三期平安朝前期（漢文学隆盛時代）、第四期平安朝後期（漢文学衰頽時代）等の四期から、第二篇の緇流文学時代は第一期鎌倉時代、第二期南北朝時代、第三期室町前期、第四期室町後期から構成されている。具体的には次の表2通りである。

²⁶³ 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版の「序」、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 2。

第一篇	朝紳文学時代
第一期	推古朝及び其の以前
第二期	大化以後奈良朝の終りまで
第三期	平安朝前期（漢文学隆盛時代）
第四期	平安朝後期（漢文学衰頹時代）
第二篇	緇流文学時代
第一期	鎌倉時代
第二期	南北朝時代
第三期	室町前期

（表 2 筆者作成）

明治 16 年に同じ漢書課に入学した親友の市村瓊次郎は 1929 年に共立社書店より出版された『日本漢文学史』の序において、こう評価した。

「概して考證の精核にして論斷の穩當なるを見るべし。特に第一篇中の推古朝の遺文、懷風藻の来歴と撰者及び漢文學の影響の如きは最出色の研究にして、第二篇中の群雄の學芸及び訓點と國字解の叙述の如きも亦極めて有益の文字なりとす。」

増訂版においては、「推古朝の遺文」は第一篇第一期の第四章の内容とし、推古朝の改新、憲法十七条、推古朝の国書、推古朝の金石文、天寿国曼陀羅繡帳銘、真仮名の使用、国史の編纂と仏典の注疏などの内容を含め、推古朝には純漢文もあり、準漢文もある。それに、純漢文には散文もあり、駢体文もあり、義疏文もあるので、奈良朝の諸文体が実に推古朝に備えたと岡田正之は主張した。「懷風藻の来歴と撰者」は第一篇第二期の第六章第二節の内容とし、「漢文學の影響」は第一篇第二期の第六章の内容である。また、「群雄の學芸」は第二篇第四期の第二章の内容であり、「訓點と國字解」は第二篇第四期の第三章の内容である。

筆者は岡田正之『日本漢文学史』における論述を踏まえ、各時期に関する日本漢文学の特徴を次のようにまとめたいと思う。

1、推古朝：漢文の諸文体が備えた

- 2、懐風藻は古詩の精髓である新文学
- 3、万葉集は漢文学の精髓
- 4、奈良朝：漢文学の少壮期
- 5、平安朝前期：漢文学の強盛期
- 6、平安朝後期：漢文学の老衰期
- 7、鎌倉時代：平安朝と南北朝の架け橋
- 8、南北朝・室町時代：詩文の格は王朝を凌駕し、徳川時代の文運を促す

以下は上記八つの時期及びその特徴について展開していきたいと思う。

一、推古朝：漢文の諸文体が備えた

岡田正之氏はその『日本漢文学史』増訂版という本の初めのところに、「要するに、推古朝（554～628年）には、純漢文あり、準漢文あり。純漢文中には散文あり、駢體文あり、義疏文あり。奈良朝に於ける漢文の諸體は推古朝に備れることは知らざるべからざるなり」²⁶⁴と指摘した。つまり、岡田正之の考えでは、推古朝には純漢文もあり、準漢文もある。それに、純漢文には散文もあり、駢體文もあり、義疏文もあるので、奈良朝における漢文の諸體が実に推古朝に備えた。

佐久節と『文選』を共編したことがある岡田正之はその「文体」に関する考え方が『文選』収録作品の採択基準から影響を受けたらしい。『文選』収録作品の採択基準とその序に述べた「事出於沉思、義歸乎翰藻」であり、いわば事は沈思より出て、義は翰藻に帰する名作、つまりその内容は作者の深い思索から生まれ、その本質は修辞を凝らし美しい文学的表現を心掛けた、いわば純文学の名作だけに限定したことである。岡田正之の叙述により、推古朝の遺文の文体は「憲法十七条」「推古朝の国書」「推古朝の金石文」「天寿国曼陀羅繡帳銘」「国史と仏典の注疏」などがある。

推古朝は周知のように、推古天皇が女性であり、推古天皇の兄の子である厩戸の皇子、すなわち聖徳太子を摂政とし、蘇我馬子を大臣とする政権である。

聖徳太子は天資英明、広く学問に通じ、推古天皇の摂政として蘇我馬子とともに内

²⁶⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 31。

政・外交に尽力した。日本書紀の推古紀に太子のことをこう述べる。

「生而能言,有聖智。壯一聞十人之訴,以勿失能辨。兼知未然。且習内教於高麗僧惠慈。學外典於博士覺弼。兼悉達矣。」(卷 22)

それは説話であって事実とは認められないが、太子は若くして高句麗僧慧慈に仏典を、博士覺弼に儒学等の典籍を学び、仏教振興に尽くし、その資質と文化的素養は時流を抜くものがあったらしい。

「内政においては、憲法を定め、冠位を行ひ、朝禮を制し、神祇を祭り、諸國に屯倉を設け、溝渠を開き、難波より京師に至る大道を通じ、外政に於ては、任那を救ひ、新羅を討ち、益々百濟・高麗を懐柔し、始めて遣隋の使を差し遣わし、學生僧を留學せしめ」²⁶⁵等により、推古朝は日本の歴史上「一新紀元を劃したる時代にして、社會の状態一として潑刺たる新興の氣運を有せざるなし」²⁶⁶。具体的には、630年、冠位十二階を、604年、十七条憲法を制定した。607年小野妹子を遣隋使として派遣して隋と国交を開き、先進国の文物を輸入した。また、仏教興隆につとめて、法隆寺、四天王寺を建立し、仏典の注釈として、勝鬘、維摩、法華の三經の「義疏」を著した。また620年蘇我馬子と天皇記・国記を編んだ。さまざまに伝説化されて、太子信仰を生み今日に至るまでその行跡が伝えられている。それらは新進時勢の象徴でもある。上述した一連の内政、外政、宗教、学術、社会事業などの改新において、憲法十七条、外交国書、金石文、天寿国曼陀羅繡帳銘文、国史の編纂と仏典の注疏などの漢文や漢文に関する活動に使われている令、国書、碑文、銘文、国史の序、注疏などの諸文体が推古朝に備えた。具体的に、下記の通りに展開していく。

(一) 憲法十七条

まずは『日本書紀』卷 22 推古紀に於いて、「十二年夏四月丙寅朔、戊辰。皇太子親肇作憲法十七」という記載があり、推古 12 (604) 年に聖徳太子は自ら日本最古の成文法である憲法十七条を定めた。その憲法十七条の内容は法制とはいっても近代の憲法や法律規定とはやや異なり、むしろ一般的な訓戒を述べたもので、当時の朝廷に仕

²⁶⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 23。

²⁶⁶ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 23。

える「群卿百僚及び國司國造に對して遵守すべき道を垂示せられたるものなり」²⁶⁷、守るべき態度・行為の規範を示した官人服務規定ともいうべきものである。その憲法十七條の修辭上にも、先儒齊藤拙堂は「本朝文章、以上宮太子憲法十七條為最古、憲法之成、在推古天皇 12 年、實當隋文帝末年、故其文有漢魏遺風矣」と評したこともある。岡田正之氏は「六朝の弊習たる駢儷浮華の態なく、字句も精鍊せられ、造語も簡古にして、詩・書・論・孟・孝經・左傳・禮記・管子・墨子・荀子・韓非子・史記・文選・其の他佛書等より廣く辭の材料を取り」、「八割が四字の句を以て成れるを以て、宛然たる律語の趣あり」、「余の鄙見を以てすれば、漢魏以上にして頗る先秦の文字に類したるものあり。」「全く法家の文と其の趣致を一にするものなり」²⁶⁸と高く評価した。その例として次はそれぞれ憲法の第三、十、十五條三條の内容を載せる。

三曰。承詔必謹。君則天之。臣則地之。天覆地載。四時順行。萬氣得通。地欲覆天。則致壞耳。是以君言臣承。上行下靡。故承詔必慎。不謹自敗。

十曰。絶忿棄瞋。不怒人違。人皆有心。心各有執。彼是則我非。我是則彼非。我必非聖。彼必非愚。共是凡夫耳。是非之理 能可定。相共賢愚。如鑲无端。是以彼人雖瞋。還恐我失。我獨雖得。從衆同舉。

十五曰。背私向公。是臣之道矣。凡人有私必有恨。有憾必非同。非同則以私妨公。憾起則違制害法。故初章云。上下和諧。其亦是情歟。

(二) 推古朝の国書

次に、日本の皇室が親しく中国の君主に国書を贈られたのは推古朝をはじめとする。よく知られている推古天皇 15 (607) 年、隋煬帝大業 3 年に小野妹子を隋に遣わされ、隋との国書交換は『隋書』「卷八十一 列傳第四十六 東夷 倭國」において、隋の皇帝煬帝が激怒した「日出處天子致書日沒處天子無恙云云」という記載がある。国書は前後二通あり、一は北史・隋書に見えて、日本書紀に収められないもの、一は日本書紀に載せて、北史・隋書に採られないものである。

前者の文は「日出處天子致書日沒處天子無恙云云」²⁶⁹であり、後者の文は煬帝の書

²⁶⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 23。

²⁶⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、(東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行)、pp. 23~24。

²⁶⁹ 魏徴、長孫無忌等撰：「列傳第四十六 東夷 倭國」『隋書』卷 81、[出版地不明]：汲古閣蔵本、順治 13[1656]。

に答えたもので「東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至。久憶方解。季秋薄冷。尊・何如。想清愈。此即如常。今遣大禮蘇因高。大禮乎那利等往。謹白不具。」²⁷⁰である。当時、日本は隋と対等の立場で国交しようとすることを示すとともに、「日出處」「日沒處」の形容詞には雄大な気分が溢れるのが漢文素養の進歩のあかしである。

(三) 推古朝の金石文

推古朝の金石文については、岡田氏は伊豫道後温湯碑と法隆寺金堂薬師仏光背銘を挙げた。伊豫道後温湯碑文は推古天皇4(596)年に聖徳太子が惠聰及び葛城臣等を従え、伊豫の温湯宮に行幸したときに、記念として湯岡の側に立てた碑に載せた文である。碑文の内容は『釈日本紀』巻14により、下記の通りである。

幸于伊豫温湯宮²⁷¹

伊豫國風土記曰。湯郡。大穴持命見悔恥。而宿奈毗古那命欲活。而大分速見湯自下樋持度來、以宿奈毗古奈命而浴瀆者。暫間有活起居。然詠曰。眞暫寢哉踐健跡處。今在湯中石上也。凡湯之貴奇不神世時耳。於今世染疹痾萬生。爲除病存身要藥也。天皇等於湯幸行降坐五度也。以下大帶日子天皇與大后八坂入姫命。二軀爲度也。以帶中日子天皇與大后息長帶姫命二軀上爲一度也。以二上宮聖德皇爲一度。及侍高麗惠總葛城臣等也。于時立湯岡側碑文記云。法興六年十月。歲在丙辰。我法王大王與二惠總法師、及葛城臣。逍遙夷與村。正觀神井。歎世妙驗。欲叙意。聊作碑文一首。惟夫、日月照於上而不私。神井出於下無不給。万機所以妙応、百姓所以潜扇。若乃照給無偏私。何異于寿国。隨華台而開合。沐神井而瘳疹。詎舛于落花池而化羽。窺望山岳之巖嶠。反冀平子之能往。椿樹相廕而穹窿。冥想五百之張蓋。臨朝啼鳥而戲喞。何曉乱音之聒耳。丹花卷葉而映照。玉菓弥葩以垂井。經過其下。可以優遊豈悟洪灌霄庭意歟。才拙実慚七步。後之君子。幸無蚩咲也。以岡本天皇并皇后二軀爲一度。以後岡本天皇。近江大津宮御宇天皇。淨御原宮御宇天皇三軀爲一度。此謂幸行五度也。

それに対す評価として、「その文は四六にして、漢魏の典故を使ひ、齊梁の文字を用

²⁷⁰ 「豊御食炊屋姫天皇(推古天皇)」『日本書紀』巻22、『新訂増補 国史大系』第1巻下、(東京：吉川弘文館、1967年02月28日発行)、p.150。

²⁷¹ 碑文の内容は1898年に経済雑誌社により出版された『国史大系第七巻』における『釈日本紀』巻14述義10 第23 舒明天皇に載せた「幸于伊豫温湯宮」という碑文である。

い、頗る苦心の餘になれるものならん」²⁷²である。

法隆寺金堂薬師仏光背銘は準漢文の体として最も古いものであり、その特徴として漢文の形式に日本語の語法を交えたものである。その仏光背銘は推古天皇 15 年丁卯に、推古天皇及び聖徳太子が用明天皇のために薬師の像を造った時、その光背に彫られた縁起の文である。

池邊大宮治天下天皇。大御身。勞賜時。歳 次丙午年。召於大王天皇與太子而誓願賜我大御病太平欲坐故。將造寺薬師像作仕奉詔。然當時。崩賜造不堪。小治田大宮治天下大王天皇及東宮聖王。大命受賜而歳次丁卯年仕奉。〔『法隆寺金堂薬師如来像光背銘』〕

その仏光背銘の文に対すし、岡田正之はこの銘が文章としては称するに足らざるが、言文史上最も尊重すべきものであり、少なくとも次の三つの点を証明できると指摘した。一つは、古事記の如き準漢文体の濫觴をなした。次は、日本の国語によって真名即ち卷次と仮名とを交えて、以て書き下しの和文の淵源をなしたものである。最後は、漢籍の伝来後、音訓相交えて上下顛倒する読み方のあったこと。

（四）天寿国曼陀羅繡帳銘

また、聖徳太子の後・橘大郎女が太子の死後、推古朝に作成されたと見られる作らせた天寿国曼陀羅繡帳銘に対し、上記の法隆寺金堂薬師仏光背銘に比べると、頗る純漢文に近いものであるとは岡田正之の考え方である。「天寿国」とは、阿弥陀如来の住する西方極楽浄土を指すものと考証されている。「天寿国繡帳」とは、「聖徳太子が往生した天寿国のありさまを刺繍で表した帳」の意である。古記録に基づく考証によれば、制作当初は縦 2 メートル、横 4 メートルほどの帳 2 枚を横につなげたものであったと推定されるが、現存するのは全体のごく一部にすぎず、さまざまな断片をつなぎ合わせて額装仕立てとしたものである。現存の天寿国繡帳の大きさは縦 88.8 センチメートル、横 82.7 センチメートル。このほかに断片 2 点が別途保存されている。

（五）国史と仏典の注疏

そのほかに、推古朝においては、国史の編纂と仏典の注疏も行われた。「是歳。皇太子。嶋大臣共議之録天皇記及國記。臣連伴造國造百八十部并公民等本記」²⁷³という日

²⁷² 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p.25。

²⁷³ 「豊御食炊屋姫天皇（推古天皇）」『日本書紀』卷22、『新訂増補 国史大系』第1卷下、（東京：吉

本書紀の推古紀 28 条の記載がある。つまり、歴代の天皇をはじめ、各国の記、臣民の伝を編集することであり、最初の国史編纂でもある。なお、日本書紀において、聖徳太子は推古天皇のために、勝鬘經・法華經を講じたことも見えた。

日本書紀に推古天皇 14 (606 年) 聖徳太子が勝鬘經・法華經を講じたという記事があることも。

「秋七月、天皇請皇太子、令講勝鬘經。(中略)是歳、皇太子亦講法華經於岡本宮」(日本書紀 卷 22)。

現代語に訳せば、秋七月、天皇は皇太子に請い、勝鬘經を講じるよう仰せになった。その年、皇太子はまた、法華經をも岡本宮で講じられた。いずれも聖徳太子の著したものと信じられてきた。『法華義疏』のみ聖徳太子真筆の草稿とされるものが残存しているが、『勝鬘經義疏』『維摩經義疏』に関しては後の時代の写本のみ伝えられている。

上述したことにより、推古朝において、憲法十七条、推古朝の国書、伊豫道後温湯碑と法隆寺金堂薬師仏光背銘という推古朝の金石文、天寿国曼陀羅繡帳銘文、国史編纂と仏典の注疏などはいずれも『文選』の文体分類に属する所謂「推古朝の遺文」がある。

その内、文体的に言うと、憲法十七条、推古朝の国書、国史と仏典の注疏は、純漢文の体、即ち古代中国の古典文語文法で書かれたものであり、純粹漢文、正則漢文ともいうものである。伊豫道後温湯碑と法隆寺金堂薬師仏光背銘との金石文は準漢文の体、即ち漢文の形式に日本語の語法を交えたものである。天寿国曼陀羅繡帳銘文は上記の光背銘文より頗る純漢文の体に近いものである。また、憲法十七条、推古朝の国書は散文体であり、天寿国曼陀羅繡帳銘文は駢文体であり、三疏は義疏文である。その故に、岡田正之は推古朝には純漢文もあり、準漢文もある。純漢文中には、散文、駢文体、義疏文がある。奈良朝における漢文の諸文体が推古朝に備えたことを主張する。

二、懐風藻は古詩の精髓である新文学

後漢書をはじめとして、魏志、晋書、宋書以下の中国古史から見ても、古代における日本との交通に関する記事も少なくはない。

川弘文館、1967 年 02 月 28 日発行)、p. 81。

後漢書卷八十五 列伝卷七十五 東夷には下記のような記事が見える。

「倭在韓東南大海中，依山島為居，凡百余國。自武帝滅朝鮮，使驛通於漢者三十許國，國皆稱王，世世傳統。其大倭王居邪馬台國。……建武中元二年，倭奴國奉貢朝賀，使人自稱大夫，倭國之極南界也。光武賜以印綬。安帝永初元年，倭國王帥升等獻生口百六十人，願請見。桓、靈間，倭國大亂，更相攻伐，歷年無主。有一女子各曰卑彌呼，年長不嫁，事鬼神道，能以妖惑眾，於是共立為王。侍婢千人，少有見者，唯有男子一人給飲食，傳辭語。居處宮室、樓觀城柵，皆持兵守衛。法俗嚴峻。自女王國東度海千餘裡，至拘奴國，雖皆倭種，而不屬女王。」²⁷⁴

聖徳太子は日本の文化に多大なる貢献を尽くしたことは言うまでもない。日本の外交面においても、推古天皇 15（607）年 7 月小野妹子と鞍作福利を隋に遣わし、隋と交際を結び、また一つの新紀元を開いた。それを皮切りに、日本と古代中国との交流は盛んになってきた。隋唐の交通と漢文学の興隆は実際の社会生活に一大変化を起こしたのみならず、美的趣味の程度をも推進するところもある。志を言い、情を述べる手段としても、ひとり和歌のみを以て満足せず、さらに当時の新文学としての漢詩をも強く求めるに至るのは自然的なことになってきた。

奈良時代、天平勝宝 3 年（751 年）の序文はあるが、署名はない。編者は大友皇子の曾孫にあたる淡海三船と考える説が有力である、また他に石上宅嗣、藤原刷雄、等が擬されているが確証はない。近江朝から奈良朝までの 64 人の作者による 116 首の詩を収めるが、序文には 120 とあり、現存する写本は原本と異なると想像されている。

（一）懐風藻の詩形について

懐風藻に収められた詩は専ら当時に流行した詩体であり、その時代の詩風を示したものである。岡田氏は特に以下五項の注意すべきことを指摘した。

第一、五言の詩が多いこと。

第二、八句の詩が多いこと。

第三、対句を以て成ること。

第四、平仄の諧わないこと。「故に奈良朝時代に至りては、平仄を諧ふることの未だ

²⁷⁴ 范曄：「列伝卷七十五 東夷」『四部叢刊史部 百納本二十四史 後漢書』卷八十五、北京：商務印書館、1931 年 8 月初版。

起らざりしを知るべし」²⁷⁵。

第五、慣用の押韻あること。

その原因として、岡田氏は二つの理由を挙げた。第一は六朝の詩風を受けたこと。時代的に言えば近江奈良朝は初唐に当たるが、当時の人々は未だ多く初唐の詩に接触していないので、なお六朝の詩風を標準とする。上記第一項の五言詩が多いのはその事実を証明するものである。第二は詩学がまだ初歩である。懐風藻の作者が専ら五言の詩を作ったのは六朝の詩風の影響を受けたほかに、十句以上の詩が極めて少ないので、その筆を暢達させる力がないことに因るものである。その例として、次に大友皇子の五言詩「侍宴」を挙げる。

五言。侍宴。一絶。

皇明光日月。帝徳載天地。三才並泰昌。萬國表臣義。

現代語訳：天皇の御威光は日や月のごとく照りわたり、天皇の徳は天や地が万物を包み込むように広大で三才（天・地・人）はみな安定して盛んでおり、天皇にたいしてすべての国が儀礼を表す。

それは天智天皇のご宴にはべった時の詩。同じ詩題に梁劉孝綽、陳徐陵などの「侍宴」がある。

（二）懐風藻の内容

懐風藻の内容については、岡田氏は下記の表3の如く分類した。

内容	侍宴 従駕	七 夕	算 賀	讌 集	贈 与	積 奠	遊 覧	詠 物	臨 終	述 懐	憑 弔	閑 適	憶 人	計
詩数	34	6	2	22	6	1	17	5	1	9	3	8	2	116

（表3 筆者作成）

上記の表3から見ると、侍宴従駕の詩は四分の一を占め、最も多く、讌集遊覧はその次である。要するに、詩文を愛する天子が春花秋月につけて駕を命じ、宴を賜って詩文の製作を楽しむことは、六朝以来の風習にして、中国文化の移植に力を致した近

²⁷⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月

江奈良朝においては、この種の風流韻事の多いのが怪しむに足りないことである。

(三) 懐風藻の思想

前に述べたように、近江奈良朝が儒教本位であるので、懐風藻の詩に作者の儒教思想の流露するのは必然的な結果である。儒教思想の外に奈良朝に伝来した老荘神仙清談の思想も含まれている。老荘神仙思想は日本において、「一時の流行に止まりて、その弊害を流すことなかりしは喜ばざるを得ざるなり」²⁷⁶。なお、奈良朝において、仏教の隆盛は儒教に譲らないほどであるが、その思想が懐風藻の詩に見られるのは極めて少ない。緇流の作者は4人のみであり、仏教思想を述べる詩も二三首に過ぎない。

懐風藻は現存最古の詩集であり、五言詩が多く、その作者が六朝詩風の影響を受けたので、古詩の精髓である。次の五言詩『述懐』は懐風藻の初めに載せた天智天皇の皇子である大友皇子の作とされる漢詩である。

五言。述懐。一絶

道德承天訓、塩梅寄真宰。羞無監撫術、安能臨四海。

(道德は天訓を承け、塩梅は真宰に寄す。羞づらくは監撫の術無きことを、安ぞ能く四海に臨まむ。)

詩には「監撫」の語句があり、「監」は天子征行の際に太子が留まり守る「監国」の意、「撫」は天子とともに太子が従軍する「撫軍」の意。それは『春秋左氏伝』「閔公二年」に見える典拠とする。

君行則守、有守則従。従曰撫軍、守曰監国、古之制也。夫帥師専行謀誓軍旅、君与国政之所囟也。非太子之事也。

晋の献公が太子（太子）申生に東山臯落氏を攻めさせたのに対し、大夫の里克が上申した諫言の中の一節である。つまり軍事における太子の役割は「監国」「撫軍」にあることを述べたもので、これから「監撫」の語が現れてくる。同じ言葉は、『文選』の序にも「余監撫餘閑、居多暇日」とある。梁武帝の皇太子蕭統（昭明太子）が、みず

10日発行、p. 85。

²⁷⁶ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 91。

からの職務を「監撫」と称している。大友皇子が父天智より後継に目されていたことは事実として認められよう。当該の一首は、そのような自身の立場を踏まえての述懐と解せられる²⁷⁷。明らかに、同じ皇太子である蕭統（昭明太子）に関することにより、自身の立場からの考え方を以てこの『述懐』という五言詩を作ったわけである。

なお、上述したように、推古朝には準漢文および純漢文などの諸文体が備わったが、詩賦はまだ興っていない状態である。漢詩が日本に興ったのは近江朝の時であり、漢詩を作るのは大友皇子から始まった。懐風藻は現存最古の古詩集として、近江朝より奈良朝の終りに至るまで詩の流行が盛んになる間の詩文を集めて集と名付けられたものである。懐風藻は漢詩の集として、当時の新文学として日本の漢文学史上において、非常に重要な役割を果たしていると思う。確かに、懐風藻は近江奈良朝文学の燦然的な美観を呈するものである。

三、万葉集は漢文学の精髓

万葉集は、7世紀後半から8世紀後半ころにかけて編まれた日本に現存する最古の和歌集である。撰者については橘諸兄の原撰にして、大伴家持の続修と全編大伴家持の撰次という二説がある。後者の説は万葉集学者の定論である。天皇、貴族から下級官人、防人などさまざまな身分の人間が詠んだ歌を4500首以上も集めたもので、成立は759年（天平宝字3年）以後とみられる。その分類は雑歌、相聞歌、挽歌、譬喩歌、四季、四季相聞六種ある。六朝時代の総集の分類の題目に似ている。

万葉集の文字を万葉仮名、また真仮名と言い、奈良朝に至り、文化の発展とともに文字も益々広く使われ、作者自身は既に文字に留め、諷詠の時潤飾するものをも選択することができる。万葉集は歌題序書及び左注が皆漢文を以て書かれ、つとめて漢文学に擬しようとする。

内容的には、詠物の歌、観梅の歌、七夕の歌のようなものが顕著的であり、中国においては、詠物の詩は六朝に起こり、初唐に盛んになり、万葉集中の天、月、花鳥等を詠じる歌は漢詩に倣うものである。万葉集においては、大伴旅人は天平2年に観梅の讌集を開き、各々賦した歌は30余首がある。讌集そのものが、既に六朝の風となる

²⁷⁷ 高松寿夫：早稲田大学大学院文学研究科紀要、第3分冊 59, 13, 2013。

上にも、梅花の觀賞も新韻事の一つである。そのとき旅人の詠める歌に

和何則能爾、宇米能波奈知流、比佐可多能、阿米欲里由吉能、那何列久流加母。

と梅花を雪に比するのは、漢詩にその例が多く、陳の蘇子卿の「祇言花是雪、不悟有香來」と詠じ、唐の盧照隣にも「雪処疑花滿、花辺似雪回」とある。

万葉集は内容的にも中国文学の精髓である漢詩に倣って、天、月、花、鳥などのような自然物を歌い、漢文学の精髓である。

思想的には、推古以来、日本における国民思想を支配するものは儒佛二教であり、当然の結果としてはその思想も万葉集に流露する。その代表的な歌として、次に著明の作を以て令反感情歌を掲げる。

令反感情歌一首竝序

或有人、知敬父母、忘於侍養、不顧妻子、輕於脱履。自称稱倍俗先生。意氣雖揚青雲之上、身體猶在塵俗之中。未驗修行得道之聖、蓋是亡命山澤之民。

所以指示三綱、更開五教、遣之以譌、令反其惑。譌曰、

父母乎 美礼婆多布斗斯 妻子見礼婆 米具斯宇都久志 余能奈迦波 加久叙許等和理
母騰利乃 可可良波志母与 由久弊斯良祢婆 宇既具都遠 奴伎都流其等久 布美奴伎提
由久智布比等波 伊波紀欲利 奈利提志比等迦 奈何名能良佐祢 阿米弊由迦婆 奈何麻
尔麻尔 都智奈良婆 大王伊摩周 許能提羅周 日月能斯多波 雨麻久毛能 牟迦夫周伎波
美 多尔具久能 佐和多流伎波美 企許斯遠周 久尔能麻保良叙 可尔迦久尔 保志伎麻尔
麻尔 斯可尔波阿羅慈迦

反歌

比佐迦多能 阿麻遲波等保斯 奈保奈保尔 伊弊尔可弊利提 奈利乎斯麻佐尔

憶良はこの序文で、父母、妻子を顧みず修行得道にはしる人々を、山沢に亡命する民だという。その亡命の民にむかって、歌をもって三綱五教を示し、感情を反さんというのである。人道を尽くして、家業を励むべしの大意にして、明白に道徳的実生活の儒教主義を闡明したものである。

上述したことにより、岡田正之氏がまとめた「若し万葉集を把りて仔細に漢詩文に对照比較するならば、措辭の上に於ても、構想の上に於ても、必ずや一致せるもの極

めて多からん。」²⁷⁸の通りである。万葉集は措辞の上においても、構想においても、漢詩文と一致するところが極めて多い。上記のことを通して、奈良朝に漢文学が和歌に如何に影響を与えるか多少分ってくるだろう。万葉集は日本固有の国民性の流露するもののみならず、また漢文学の精髓を同化して一層の美を挙げた文学作品でもある。

四、近江奈良朝：日本漢文学の少壮期

岡田正之が1946年養徳社により出版された博士論文『近江奈良朝の漢文学』において、近江浄見原藤原奈良の12朝、120余年の間が日本漢文学の同化大成された時代であり、平安朝以後に奔放で横溢する漢文学の源頭でもあると指摘した通りに、近江奈良朝は漢文学の成長発展の段階であり、漢文学の少壮期である。

推古朝以来、漢文学が著しく発展してきて、奈良朝の諸文体は推古朝に備えた。近江奈良朝に入り、いよいよ同化渾成の域に達し、その象徴としては、記紀二典を産出するに至る。前述のように、古事記の文は口語体であり、日本書紀の文は詞藻に傾き、字句を精練する風がある文語体であるので、尚書を取って之を比較すれば、古事記は殷盤周誥であり、日本書紀は典謨誓命である。そして、記紀の二典は中央文学を代表し、風土記は地方文学を意味する。故に、記紀二典と風土記とを合わせて、当時の漢文学の様子が分ってきた。また、隋唐の交通と漢文学の興隆は、日本上代の社会生活に一大変化を与えるのみならず、美的趣味に影響をも与えた。ひとり和歌のみを以て、志を言い、情を抒する手段として満足できないので、さらに漢詩をも欲求するに至る。懐風藻は古詩の精髓であり、作者は、天皇をはじめ、大友・川島・大津などの皇子・諸王・諸臣・僧侶など。作風は中国大陸、ことに浮華な六朝詩の影響が大きい。初唐の影響も見え始めている。

懐風藻に収める「七夕詩」(6首)について、宿久高、尹允鎮は論文の「『懐風藻』与中国古典文学的関連」²⁷⁹における「四 『懐風藻』和六朝初唐文学」において、小島憲之校註『日本古典文学大系』第69巻『懐風藻』『文化秀麗集』『本朝文粹』の解説部分を引用して懐風藻と中国古典文学との関係が深いと指摘した。即ち、前期の懐風

²⁷⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.105。

²⁷⁹ 宿久高、尹允鎮：『懐風藻』与中国古典文学的関連『日語学習与研究』、2005年第3期、p.62。

藻は六朝文学の影響、後期の懷風藻は詩歌を中心とする初唐文学を受けたことがある。前期の懷風藻の例としては、懷風藻の「詠物詩」である「詠美人」、文武天皇の「詠雪」などが挙げられる。

正六位上左史荊助仁一首（年三十七） 五言 詠美人

巫山行雨下 洛浦迴雪霏 月泛眉間魄 雲開髻上暉

腰遂楚王細 體隨漢帝飛 誰知交甫珮 留客令忘歸

この「詠物詩」は六朝の山水詩の影響を受けた。山水詩というのは中国詩で、山水自然の澄んだ美しさを主として詠んだものである。六朝は山水詩の形成と発展の時代である。山水詩人としては、六朝時代の陶淵明・謝靈運・謝朓・鮑照などがいる。この「詠美人」の「巫山行雨下」は謝朓の『祀敬亭山廟詩』における「白雲帝郷下，行雨巫山來」という詩句を引用した可能性が高いと思う。また、『文選』における「高唐賦」や「神女賦」の巫山の神女に関する伝説などの影響を受けたことが見えた。林鶯峰編『本朝一人一首』において、「疊用故事，聊以著題。然四韻中，霏、飛二字同意，可不免疑難乎」と評価した。同じ例としては文武天皇の「詠雪」が挙げられる。

文武天皇 五言「詠雪」 一首

雲羅囊珠起 雪花含彩新 林中若柳絮 梁上似歌塵

代火輝霄漢 逐風迴洛濱 園裏看花李 冬條尚帶春

この詩も詠物詩として注目される。が、詠物的な詩は『懷風藻』においてはやはり非主流に属することは間違いない。懷風藻詩の主流は、宴や行幸など「場」そのものを対象に、それを讚美することを主題とした侍宴詩・宴席詩や從駕詩・遊覽詩などにある。従って、文武天皇の詠物詩は『懷風藻』のなかではきわめて特色的な位置を占めているといえる²⁸⁰。

後期の懷風藻は唐詩の影響が窺えるが、唐人のうち最ももてはやされていたのは王勃（約 650～約 676）の作品であった。唐月梅氏がその『日本詩歌史』において述べたように、左大臣長屋王を中心とする後期の懷風藻漢詩人は初唐の詩句、詩序の構造に

²⁸⁰ 土佐秀里：文武天皇の漢詩—その歴史的背景と文学史的意義をめぐって—、日本漢文学研究 3, 2008-03、p. 37。

倣うのが前期より明らかである。代表的な詩作としては下毛野虫麻呂の五言詩「秋日於長王宅宴新羅客」が挙げられる。

五言秋日於長王宅宴新羅客 賦得難字
職貢梯航使 從此及三韓 岐路分衿易 琴樽促膝難
山中猿叫斷 葉裏蟬音寒 贈別無言語 愁情幾萬端

詩題の「秋日於長王宅宴新羅客」は駱賓王「秋日於益州李長史宅宴序」に拠っている。この詩はるか朝鮮半島から山越え海を渡って貢ぎ物を届けに来た新羅の使者と別れるに際し、悲しみ誘う秋の風物にいつそう別離の情を深くした、というもので、虫麻呂の序文の主旨によく沿った内容にまとめられている。五言律詩の韻律には合っていないが、悲秋の情景を重ねることで別れを惜しむ気持ちが効果的に表出され、また見送る立場も明確にしており、送別詩として申し分のない作品と評しえよう。第3・4句は、大野保氏『懷風藻の研究』（1952年三省堂）が指摘するように、駱賓王「秋日別侯四」詩の「岐路分襟易、風雲促膝難」から取ったもので、第九句は小島憲之氏前掲書が注にいうとおり、駱賓王「送吳七遊蜀」詩の「贈別意無言」に基づいている²⁸¹。

上述したように、懷風藻は日本最古の漢詩集で、中国六朝時代の古詩の模倣が多く、いかにも黎明期の漢詩といったところである。懷風藻は漢詩であり、中央文学である記紀二典及び地方文学である風土記は漢文体であり、それは近江奈良朝の漢文学全体の様子を代表とするものである。近江奈良朝の漢文学は六朝の模倣が多く、唐詩の影響も窺えてきて、いずれも漢文学の少壮期である。

五、平安前期は漢文学の隆盛期

平安時代は、日本の歴史の時代区分の一つである。延暦13年（794年）に桓武天皇が平安京（京都）に都を移してから鎌倉幕府が成立するまでの約390年間を指す。岡田正之氏が平安朝の漢文学について、時代の情勢と漢文学の趣向とにより、前期と後

²⁸¹小島憲之校注：「解説」『日本古典文学大系 69 懷風藻、文華秀麗集、本朝文粹』、東京：岩波書店、1964年。

期二大時期に分けた。第一期（前期）は漢文学の隆盛時代である。桓武帝の延暦元年（782年）から醍醐帝の延長8年（930年）まで149年。第二期（後期）は漢文学の衰頹時代である。朱雀帝の承平元年（931年）から安徳帝の寿永4年（1185年）まで255年。

平安朝における詩学の大いに興ったのは弘仁・天長の間であり、嵯峨・淳和両帝は唐書芸文志集録総集類における「清溪集三十卷 齊武帝勅撰」の如き、之を例として、勅命によって、三集の漢詩文集を編撰した。

三集とは勅命を奉じて撰定する『凌雲集』、『文化秀麗集』、『経国集』三つの漢詩集のことである。

凌雲集は凌雲新集とも言い、弘仁5（814）年に小野岑守・菅原清公・勇山文継らによって嵯峨天皇より近代の詩を撰集する勅命を受け、編纂された。作者は平城天皇、嵯峨天皇、大伴親王（後の淳和天皇）ら23人で、全90首。なお、後に1首が加えられ、91首となって現在に伝わっている。

文華秀麗集は、平安時代初期の弘仁9年（818年）に、嵯峨天皇の勅命により桓武天皇の延暦元年（782）から嵯峨天皇の弘仁5年頃に至る33年間の詩を集め、編纂された勅撰漢詩集。全3巻。先に編纂された『凌雲集』に続くもので、藤原冬嗣、菅原清公などにより編纂された。作者は嵯峨天皇、淳和天皇をはじめ28人に及び、渤海使節や女流詩人の作品も収めるといふ。もともとは148首が収められていたが、内5首は伝わらない。

経国集は淳和天皇の天長4年（786）に、良岑安世、菅原清公らが勅命により編纂された勅撰漢詩集。全20巻。作者は、淳和天皇、石上宅嗣、淡海三船、空海ら。なお、現存するのは第1巻など計6巻。経国の名は魏文帝の「文章者経国之大業、不朽之盛事。」より取ったものである。

（一）三集の詩形について

三集の詩は弘仁の前後、即ち嵯峨天皇を中軸とする時代の詩風を示すものである。その詩形について、岡田正之氏が以下四つの特徴を有すると考えられる。

第一に感じるものは七言詩形の非常に多くなったこと。前述した懐風藻時代においては五言の詩は多く、七言の詩は極めて少なく、全詩百十六首中、七言は僅か7首に

過ぎず。下記の三集に関する詩形統計のデーターから見ると、七言の詩が驚くべき数に達する。

勅撰三集の詩形一覧表

詩体 集名	五言	七言	雑言	計
凌雲集	39 首	46 首	6 首	91 首
文華秀麗集	52 首	79 首	12 首	143 首
経国集	92 首	75 首	43 種	210 首
計	183 首	200 首	61 首	444 首

(表 4 筆者作成)

上記の表 4 の内、雑言は完全に七言を本位として作られたものであり、七言詩の数に算すれば、七言の詩形がいかに多いか分ってくるであろう。これは平安朝の詩が奈良朝の詩と異なる点の一である。

第二は七言詩形中において、四句即ち七絶詩形の其の数の増加したこと。八句の詩形が 94 首あるに対し、四句の詩形は 91 首あり、ほぼ同じ数となる。之を五言の八句が 121 首あるに、四句即ち五絶の詩形が僅に 15 首なるに比すれば、七絶詩形の流行の傾向を示したものはまた平安朝の詩が奈良朝の詩と異なる点の二である。

第三は長篇の多いこと。三集を通観すると、十句以上のものも少なくない。二十句以上を以てなるものが 28 首あり。滋野貞主の「和澄上人題長宮寺二月十五日寂滅會」の詩は 24 句を以て成り、小野岑守の「歸休獨臥寄高雄寺空海上人」の詩は 44 句を以て成る。これらは五言古詩の長いものである。この七言古詩のような長いものは、奈良朝に見ることができない雄篇大作である。これは亦平安朝の詩が奈良朝の詩と異なる点の三である。

第四は雑言の一体の加わったこと。奈良朝においては五言七言あるのみ。未だ雑言体なるものがなかった。然るに三集には、雑言体として記されたるもの頗る多い。「入山興」の如きものはこの種の詩である。これは亦平安朝の詩が奈良朝の詩と異なる点の四である。

雜言，入山興 一首²⁸²

間師何意入深寒 深嶽崎嶇太不安 上也苦 下時難 山神木魅是為痺
君不見 君不見 京城御苑桃李紅 灼灼紛紛顏色同 一開雨 一散風
飄上飄下落園中 春女群來一手折 春鶯翔集喙飛空 君不見 君不見
王城城裏神泉水 一沸一流速相似 前沸後流幾許千 流之流之入深淵
不入深淵轉轉去 何日何時更竭矣 君不見 君不見 九州八島無量人
自古今來無常身 堯舜禹湯與桀紂 八元十亂將五臣 西牆嫫母支離體
誰能保得萬年春 貴人賤人總死去 死去死去作灰塵 歌堂舞閣野狐里
如夢如泡電影賓 君知否 君知否 人如此 汝何長 朝夕思兮堪斷腸
汝日西山半死士 汝年過半若尸起 住也住也一無益 行矣行矣不須止
去來去來大空師 莫住莫住乳海子 南山松石看不厭 南嶽清流憐不已
莫慢浮華名利毒 莫燒三界火宅裏 斗藪早入法身里

之を要するに、岡田正之の考えでは、詩形の上において、平安朝が奈良朝と異なるものは、詩学の大いに進歩し、奈良朝においては詩学のまだ進歩していないので容易に大作をいることができないが、平安朝にいたっては長篇が多くなり、詩学の進歩を示している。又七言の詩形が、五言の詩形よりも多数を占めるに至っては全く唐詩の影響にして、七言詩は唐以後に多く、且七言四句の絶句形は初唐には少なく、中唐以後には頗る多くなってきた。三集に七絶の詩形の多くなるのは、中唐以後の詩風の然らしめところと言えるべきである。

春日山莊 <有智子内親王>

寂寂幽莊山樹裏

仙輿一降一池塘

棲林孤鳥識春澤

隱澗寒花見日光

泉聲近報初雷響

山色高晴暮雨行

²⁸² 『正校性靈集』卷第1～4所収。

從此更知恩顧渥

生涯何以答穹蒼

この七言律詩の作者は有智子内親王であり、嵯峨天皇の娘。経典や史書を博覧、漢詩文および和歌に長けていた。初代加茂斎院。嵯峨天皇が加茂に幸した際に、左右の者たちに探韻させ、春日山荘の賦を作らせたことがある。そのとき、わずか17歳の内親王は、探り当てた「塘、光、行、蒼」の四文字を使って、瞬く間に一首の七言律詩を詠み上げた。「棲林孤鳥識春沢（林に棲む孤独な鳥は春の恩沢がわかる）隠澗寒花見日光（澗に隠れて咲く冬の花は日光がわかる）」という詩句は、最も世の中の人々に称賛されている。

（二）三集の内容と作者

三集の詩の内容としては、遊覧宴集の詩が多く、君臣上下の愉悦楽易が風紙上にあふれるのは初唐朝紳の集を見る感じがする。氣象の閑麗なるのは平安朝の作者でないとできないものである。

三集の作者については、経史の学に深く、文芸の才藻に富み、唐の古今の諸体もできる嵯峨天皇の詩は豪萬宏麗なるものである。才媛として、嵯峨天皇の皇女有智子内親王も詩を善くする。

要するに、岡田正之は、三集の詩としては近体の形に属する詩が多いが、「吾人を悦ばしむるものは五七古の長篇及び雑言にあり」²⁸³。これら五言詩の長篇は縦横に筆を奔らせ、長短章を成し、大に平安朝初の特長を發揮した感じがある。次は『経国集』に載せた惟氏と称する女流詩人が作った「奉和太上天皇擣衣引」の一篇である。

雑言，奉和擣衣引（太上天皇在祚） 一首²⁸⁴

秋欲闌 閨門寒 風瑟瑟 露團團 遙憶仍傷邊戍事 征人應苦客衣單
匣中掩鏡休容飾 機上停梭裂殘織 借問擣衣何處好 南樓窓下多月色
芙蓉杵 錦石砧 出自華陰與鳳林 擣齊紈 擣楚練 星漢西迴心氣倦

²⁸³ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.124。

²⁸⁴ 経国集卷第十三 詩十二：雑詠三

隨風搖颺羅袖香 映月高低素手涼 疏節往還繞長信 清音悽斷入昭陽
就燈影 來玉房 力尺量短長 穿針泣結連枝縷 含怨縫為萬里裳
莫怪腰圍疇昔異 昨來入夢君容悴

平安朝前期は勅命を奉じて編撰する勅撰漢詩集の外に、菅家、大江氏、都氏、三善清行及び空海をはじめとする緇流のような詞藻が得意な漢詩作家がある。当時における名公鉅卿、碩学名僧が作った詩文の家集の伝記または蔵書目録に見えるものが甚だ多く、その今に存する別集は極めて少なく、空海の性靈集、菅公の菅家文草はその最も著明なものである。それに次ぐのは都良香の都氏文集及び島田忠臣の田氏家集である。次いで大江匡房の江吏部集と、藤原忠通の法性寺入道集である。

上記の勅撰三集及び現存するその六種の集を以て、平安朝前期は漢文学の強盛期を迎えてきた。

六、平安朝後期：日本漢文学の老衰期

日本の漢文学は平安朝後期に入ると、衰頹の運に向かった。その原因は次のとおりである。

(一) 世相の一変

平安朝前期の末にすでに驕奢の風が増長した。朱雀帝以降其風が愈甚しく、朝廷の紀綱は日に弛み、藤原氏益々専横を極め、其の子弟は内外の樞要に在りて、富貴を恣にし、邸宅を興し、別業を築き……「浮文虚辭を弄し、上下互に風流を競ひ、都雅を貴び」²⁸⁵。朱雀帝以後、天下の形勢が一変した。

(二) 学界の大勢

「門閥世襲の風は官界のみならず、学界の諸道も亦一家の專業となる。所謂四道専門の家は前期の末より発して後期の前半に成りしものなり。」²⁸⁶

史記・漢書・後漢書などの歴史や文選などの文学を学び、作文を習う紀伝道は菅原・大江の両家があり、論語・孝経を必修、周易・尚書・礼記・周礼・儀礼・詩経・左伝のうちの一

²⁸⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、pp. 180～181。

²⁸⁶ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月

つを選択として学ばせた明経道は清原・中原の二氏があり、律令を専攻する明法道は惟宗・坂上の両家があり、竹道の学は三善・小槻の両家がある。「四道の外に醫學・天文・曆術・陰陽等の如きも亦各専門の業となり、さなきだに享樂の氣分に満たされて、怠惰偷安の風ありしに、この如く學術をして一家の専有に歸せしめたるが故に、才人能士も角遂競争の餘地なく、争で新進向上の氣風を望むことを得んや。漢文學の衰頹する所以は毫も怪しむに足らざるなり。」²⁸⁷

(三) 和歌和文の抬頭

漢文學の衰頹が此の如くなるにもかかわらず、和歌は次第に抬頭し、平安前期の末には紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑等の諸名流が出で、905年に延喜帝の勅を奉じて古今集を編纂して、和歌は次第に盛んになってきた。

特に、平安朝後期の後半に入ると、朝威は益々陵夷して、漢文學も益々衰退してきた。後半の文章を集めて時代の反映を示すものは朝野群載と続本朝文粹との二集である。

まず朝野群載について見てみよう。朝野群載は算博士三善爲康により編纂されたものである。収録した文はほとんど漢文だが、漢文体以外において収録されたものに中臣の祭文、神祇官の謹奏、及び各種の宣命文等がある。作者には空海・都良香など前期の名僧・碩学もあるが、其の作品が極めて少なく、主に後期の源順・橘在別・大江以言などの作品である。

次は『本朝続文粹』である。『本朝続文粹』は漢詩文集であり、13巻ある。藤原季綱撰と伝えるが未詳。「本朝文粹」のあとを受けて、後一条天皇から崇徳天皇までの約120年間の漢詩文約230編を集録。作者は、藤原敦光・大江匡房・藤原明衡など約40人。続文粹には往々誤字がある。特に文章の完成した年を記録する場合に誤りが多い。例えば、藤原敦光の代表作の「中御門右丞相辞内大臣表」に「長承三年」とあるべきものを「長永三年」と記した。

七、鎌倉時代：平安朝と南北朝の架け橋

「武家の間にも亦志を詩文に寄せたるものあれば、南北朝時代の上流に於ける漢文

10日発行、p.182。

²⁸⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.183。

學は必ずしも全然地に墮ちたるには非ざるなり。寧ろ緊張せる向上的精神が斯の間に閃きたるあるは蔽ふべからず。是を以て、學問として講ずる所も、公武共に新説に傾き、詩文の標準亦唐宋に在りき。現に詠ずる所の詩を見るに、晚唐の調を帶いたるもの多く、鎌倉時代には見るを得ざる所なり。文章に於ても必ずしも四六のみに非ず。頗る散文體を應用せり」²⁸⁸とは岡田正之が南北朝の公武の文学に関する論述をまとめた観点である。南北朝の漢詩文は唐宋の詩風からの影響を受けた。南北朝時代において、武家の間に志を詩文に寄せるものもあるし、上流に於ける漢文学は必ずしも地に落ちたわけではない。詩文の標準はまた唐宋にあり、晚唐の調を帯びたものが多く、鎌倉時代にはないところがある。文章に於いても必ずしも四六のみならず、頗る散文も応用する。

鎌倉時代に対して、南北朝・室町時代の漢文学の特質として挙げなくてはならないことは、禪宗が成熟して、中国の禪林から独立して、ことに五山派の禪宗が室町幕府の保護下に一大発展を遂げた。漢詩文が文学として独自の発展を遂げるに至った。鎌倉時代には見られない、純然たる詩人・文章家が五山の詩文壇を率いて活躍している。

渡来僧の影響下に輩出した文筆僧は、この時期に入ると、文学活動を盛んにしている。その代表作家としては、虎関師鍊、中巖圓月、雪村友梅らを挙げることができる。虎関は「濟北集」20巻、「元亨釈書」30巻、雪村は古今の詩格を具える詩才を証する「岷峨集」、中巖は「東海一漚集」、その文章の伎倆と学識を示す「中正子」などの作品を持っている。これらの作品は到底平安時代においては見ることはできない。その学問詩文の風は全く宋学の影響を受け、足利・徳川時代における学風的一大淵源をなしたものである。

その例として、虎関師鍊は「濟北集」巻9において日本に古文を復興すべきことを勧めて、

因従容論明主、使天下學古文斥四六、跨漢唐、階商周。寧非文明之化興于當代乎。又足見鈞造之一端耳。

と言う。古文とは、即ち散体の文学のことであり、四六とは駢体の文学である。それは藤丞相に答えた手紙の文章であって、藤丞相というのは、誰のことか未だ詳かに

²⁸⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 297。

しないが、そこから虎関師鍊が文章に対する古文復興の主張を見ることができる。

「この時代の社会は惨憺たる戦雲に掩はれたるも、猶文学の方面に於ては一線の光明を閃せるものなきに非ず。其の重なるものを擧げんか。列聖の文学を優奨したまひたることあり。五山の名衲が依然として文事に勉めたることあり。獨り此のみならず、地方の群雄の間に文学の傳播勃興したることあり。是等は燦輝たる一大徳川文学を作れる最大近因にして、多大の希望に満てる百卉の萌芽が勃然として窮冬沍寒の間に發生せるに異なるざるなり。」²⁸⁹

五山の碩学は盛んに中国に往来して、その文物を輸入し、自らこれを研究し、唱道し、鼓吹し、最終的には徳川三百年間儒学勃興の淵源となるのは日本文学史上に特筆大書して国民の長く忘れるべからざるところである。

徳川三百年、文運の開拓者となったのが、藤原惺窩とその一門の人たちである。近世儒学の祖といわれ、門弟のなかでも特に林羅山・那波活所・松永尺五・堀杏庵の4人は惺門四天王と称された。惺窩は7歳で生地播磨国三木郡（兵庫県三木市）龍野の景雲寺に入門し、禅僧東明宗昊和尚に師事、次いで文鳳宗韶禅師に従学して、神童と言われた。後に京都の相国寺普広院住職の叔父清叔寿泉のいる五山第2位の同寺に剃髪して入山し、学問僧となった。

室町時代の後期は中央集権が衰え、勢いが四方に分れ、学問の傾向は自ら四方に分散し、講学の風各地に起こり、徳川時代の文運の先行をなしたのが、禅門緇流である。

八、南北朝と室町朝の詩文は王朝に凌架し、徳川時代の文運を促す

南北朝と室町時代において、日本禅林の名僧が極めて多いが、特に重要なのは次の通りである。圓爾の法孫には虎関師鍊があり、道隆の法孫には寂室元光があり、一山の門下には雪村友梅があり、東陽徳輝に嗣げる中巖圓月があり、高峰頭日の門下には夢窓疎石・天岸慧広。此山妙在等起こり、夢窓疎石の門に出る春屋妙葩、龍湫周沢、義堂周信、絶海中津などがある。これらの禅僧は日本の禅風を播揚するとともに、詩文界をも発展させる。

²⁸⁹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 390。

これらの五山名衲において、学問の博洽にして、文辞の卓撥であり、虎関師鍊を以て巨擘とする。「若し王朝にその比を求めば獨り空海一人あるのみ」²⁹⁰とは岡田正之の主張である。仏教に関する著書の多くに至っては、虎関師鍊は遥かに空海に及ばない如く、釈史の一大著作である元亨釈書に至っては、空海は虎関師鍊に如かざるのである。漢文学に対する伎倆と作品とに至っては、空海も虎関師鍊に及ばない。これにより、南北朝・室町時代の詩文は日本漢文学の強盛期である平安朝前期の王朝文学に凌駕する。

日本禅林著述書目によれば、虎関師鍊の著書が 11 種ある。その中に、日本仏教史の権輿、日本における漢文の紀伝史体の濫觴とされる元亨釈書がある。

元亨釈書は欽明天皇の治世により、後醍醐天皇の御宇に至る 780 余年間のことを記録したものである。その体は梁の慧皎の高僧伝、唐の道宣の続高僧伝、宋の贊寧の宋高僧伝の体に倣い、さらに史記・漢書の例に則ったものである。虎関師鍊は元亨釈書の序説志中に梁・唐・宋の高僧三伝を評価した。

三伝不精史文。蓋梁伝者戦国之文病体裁焉。唐伝者叙事艱涉、伝論文同、宛似銘辞。宋伝者駁雜𩇑𩇑、任古硬礪、絶無筆削。（卷 30）

それに次いで詩文集の濟北集が 20 卷ある。虎関師鍊は「濟北集」巻 9 において日本に古文を復興すべきことを勧めて、

因従容論明主、使天下學古文斥四六、跨漢唐、階商周。寧非文明之化興于當代乎。又足見鈞造之一端耳。

と言う。古文とは、即ち散体の文学のことであり、四六とは駢体の文学である。また、虎関師鍊の詩話及び通衡の論文は、日本における評論的の詩話・文話の初めをなすものでもある。

章の最終に、岡田正之氏が言いたいことは二つある。一つは抄注の権輿が南北朝・室町時代である。南北朝・室町時代に入り、宋学の影響により、五山緇流の抄書家は周易・尚書・毛詩・禮記・春秋左氏傳・古文孝經・中庸・孟子等の抄があり、また感度の注釈書により、新たに注釈を試みた。当時の漢文学界の進歩である。

もう一つは漢文の国訳をなすことである。漢文に国訓を附して返り点にしたがって

²⁹⁰ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 303。

顛読する漢文和読と五山の名僧などが漢文を抄訳して理解し易いようにする漢文抄訳により、漢文を同化して第二の国文的地位をするようになってきた。

日本における宋学は、鎌倉時代に宋に渡った禅僧によって伝えられ、鎌倉仏教の五山僧によって研究が進む。鎌倉末期には特にその大義名分論が後醍醐天皇の倒幕思想に影響を与え、建武の新政の理念とされた。室町時代も禅僧によって宋学の研究が続き、義堂周信や絶海中津など五山文学といわれる漢詩文の隆盛がもたらされた。また桂庵玄樹の薩南学派、南村梅軒の南学（海南学派）、藤原惺窩の京学派などの系統がうまれた。

このうち藤原惺窩はもともと仏教徒であったが、仏教に疑問を持つようになって儒学に転向し、豊臣秀吉の朝鮮侵略（文禄・慶長の役）で捕虜となって日本に拉致された朝鮮の朱子学者姜沆から李退溪の学説を学ぶことによって、朱子学の体系的な受容を行うことができた。江戸幕府は藤原惺窩の弟子の林羅山を侍講として登用して以来、朱子学を幕藩体制の支配理念として利用し、林家を代々の大学頭に任用して御用学問朱子学による思想統制を行った。なお、明の遺臣朱舜水是明再建に失敗した後日本に渡り、水戸の徳川光圀に招かれ、水戸学の祖となった。朱子学者には木下順庵、新井白石、室鳩巢など優れた学者が出現し、幕政にも参画した。

第三節 岡田正之の日本漢文学史論

前述のように、岡田正之の『日本漢文学史』は主に朝紳文学時代と緇流文学時代との二篇であり、漢字漢書の伝来より、室町の末期五山僧侶が江戸文学の基を開くに至るまでである。第一篇を朝紳文学時代として推古朝より平安朝までを四期に分けられ、第二篇を緇流文学時代とし、鎌倉時代より室町時代までを四期に分つ。具体的には、第一篇の朝紳文学時代は第一期推古朝及び其の以前、第二期大化以後奈良朝の終りまで、第三期平安朝前期（漢文学隆盛時代）、第四期平安朝後期（漢文学衰頹時代）等の四期から、第二篇の緇流文学時代は第一期鎌倉時代、第二期南北朝時代、第三期室町前期、第四期室町後期から構成されている。それに基づき、本章の第二節においては、既に彼の日本漢文学史に関する論議を1、推古朝：漢文の諸文体が備えた；2、懐風藻は古詩の精髓である新文学；3、万葉集は漢文学の精髓；4、奈良朝：漢文学の少

壯期；5、平安朝前期：漢文学の強盛期；6、平安朝後期：漢文学の老衰期；7、鎌倉時代：平安朝と南北朝の架け橋；8、南北朝・室町時代：詩文の格は王朝を凌駕し、徳川時代の文運を促す；等八つの時期及びその特徴について展開してきた。

本節では、第二節に基づき、岡田正之の日本漢文学史論について、「中国文学に比する」「日本漢文学の盛衰論」「緇流文学を高く評価する」「徳川時代の漢文学を論述せず」から論述を展開していきたいと思う。

一、中国文学に比する

(一) 日本漢文学の定義は文選に準ずる

岡田正之の日本漢文学に対する定義を論述する前に、まずはその「令文及び其他各種の文體」²⁹¹における漢文学の文体に関する主張を観察しようと思う。

岡田正之はその前に、記紀の文章、風土紀を例証として挙げることを通して、近江奈良朝には文章がよくできる大家が少なくないと指摘するとともに、「幾種の文體を有せしかを觀ることは、漢文の沿革を明にする上に於て緊要のこととなす。且當時總集として諸家の詩を彙めたる懷風藻の如きものあるも、諸體の文を集めたるなし。是吾人をして一層此の節を起こすの已むを得ざるを感ぜしむる所以なり。」²⁹²と文体を論述する重要性を強調した。それに基づき、岡田正之は 88 卷の神武天皇の郊祀詔より江戸時代大江典の答林整字書までの、詔勅・牒・対策・表・願文・諷誦文・序跋・贈答文など三千篇余を集め、水戸徳川家により年代順に編纂されたものである『本朝文集』が「略々當時の文章を網羅したり」と評価したうえで、藤原家伝（正倉院文書大日本古文書所収）、古京遺文（狩谷掖斎編纂）、古経題跋（鵜飼徹定輯録）、続古経題跋（古経堂松翁）などには「本朝文集の遺を補ふべきものあり」²⁹³と考えられている。

岡田正之の体別に統計した文体の種類及びその文章の数を次の表 5 に掲げる。

²⁹¹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、pp. 67～68。

²⁹² 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p. 67。

²⁹³ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p. 69。

文体	篇数	文体	篇数	文体	篇数	文体	篇数
詔	172	勅	192	制	24	詔報	5
勅報	1	勅書	6	璽書	7	令旨	3
義	1	啓	1	表	12	奏	12
疏	7	状	2	奏状	1	封事	2
対策	22	牒	1	書序	2	詩序	8
歌序	19	書牘	6	記	京 2	伝	懷 18
碑	9	碑序	京 2	墓志	京 8	墓版	京 1
賦	2	銘	京 14	祭文	藤 1	哀文	1
願文	正 34	条式	1	作式	1	跋	正 4 京 1 経 10 35
書後	1						
備考：正は正倉院文書、藤は藤原家伝、懷は懷風藻、京は正統古京遺文、経は正統古経題跋の略称である。							

(表 5 筆者作成)

上記の表 5 により、「本朝文集」が書かれた江戸時代の文体の数は近江奈良朝の漢文文体の数とはあまり変わらないと分かってきた。大化以前の漢文の数も少ないし、文体も詔勅国書上奏碑文銘辞など五六種類に過ぎないが、漢文使用範囲の拡大に従い、近江奈良朝には漢文の文体数はその 6 倍にして 37 種も多い数に及んだ。つまり、漢文の各種の文体は推古朝に備えた。近江奈良朝には幾多の文体を開き、後年の規範となった。平安朝より江戸時代の文体の数の文体も大体このぐらいである。「本朝文集」に現れてくる文体は漢文の各種の文体をも含む。

ここにもう一つ言いたいのは文体の種類ということである。詔勅奉疏の類は日本書紀・続日本紀に載せ、詩序小伝の類は懷風藻に現れ、歌序書牘の類は、万葉集に見え、対策及び賦は経国集に収められた。其の他一二の文は、三代格・政事要略・朝野群載・東大寺要録等に散見される。岡田正之が言う漢文の文体は『文選』に含まれている文

体とは非常に似ている。文体数も同じ 37 種類である。

「文選爛、秀才半」

「文は文集、文選、はかせの申文」

それは岡田が佐久節と共編した国訳漢文大成の『文選』の「文選解題 緒言」に引用したことばである。前者は宋代のことわざにして、文選の一部に成熟すれば、秀才の試験に及第すべき学力の半をなすとの意味であり、後者は清少納言が枕草子に述べた言葉にして、当時において詩文と言え、白氏文集と文選と博士の上申の文章とに限られたとの意味である。この二語は早大におけるまた日本の王朝時代における流行の盛を語れるものである。そのみならず、「支那の詩文集の中に古今東西に行われて最も生命を有せるものは、文選に及ぶものあらざらず」²⁹⁴。

『文選』は、紀元前 5 世紀から 6 世紀に至る優れた文学作品を集めた詩文集（30 巻本）であり、梁の武帝の長子である蕭統（昭明太子）（501～531）が、彼を取り巻く当時の文人たちの協力を得て編纂したとされている。

『文選』編纂の趣旨については、「文選序」ではもともと当時の文壇のために編纂したのではなく専ら蕭統自身が閲読するために名作を厳選したのであり、採択基準は「事は沈思より出て、義は翰藻に帰す」というような名作、いわば純文学の名作だけに限定し、即ち岡村繁がその著書『文選の研究』の「あとがき」において「中国歴代の文学作品の中でも最も貴族的な純文学の精粹を集めた『文選』是中國歴代文學中最具貴族性的純文學作品之集粹」²⁹⁵と言及した通りである。1977 年に北京中華書局により出版された李善注胡刻本『文選』（全三冊）の「出版説明」は下記の通り述べた。

《文選》的選擇標準，蕭統在序文中作了交代，他把經、史、子和文學區別開來，大膽地把它們排除在文學範疇以外，只是對史書中「綜輯辭采」、「錯比文華」的論文，仍認為是可以入選的。所謂「事出於沉思，義歸乎翰藻」就是他心目中的文學作品，也是齊梁時一般人心目中的文學作品。所以在《文選》中辭藻華麗、聲律和諧的楚辭、漢賦和六朝駢文佔去了相當大的比重，詩歌方面也多選了格律比較嚴謹的顏延之、謝靈運等人的作品，而陶淵明等人平易自然的詩篇却入選較少。

²⁹⁴ 岡田正之、佐久節：「文選解題 緒言」『国訳漢文大成 文学部第二巻 文選 上巻』東京：国民文庫刊行会 1921 年 6 月 5 日発行。p. 1。

²⁹⁵ 岡村繁：「あとがき」『文選の研究』、東京：岩波書店、1999 年 4 月 28 日第 1 刷発行。p. 346。

『文選』は経、史、子を文学から区別して大胆的にそれらを文学範疇から排除した。とくに『詩』『賦』両文体を重視し、当時文学の最も重要な文学創作の形式として、多くの文体の中で第 1 位に置かれている。それは中国古代文学観念の発展、特に六朝では純芸術文学を重視し、韻文と散文との争いを起こしたことにかかわっている可能性がある。

岡田正之は「『文選』の日本に伝来したことは極めて古く、既に推古天皇の治世である」と思う。その根拠としては、聖徳太子の憲法十七条に書かれた「財ある者の訟は石を水に投ずる如く、乏しき者の訴えは投じるに似たり」という言葉は、『文選』における李蕭遠の運命論の「其言也、如以水投石、莫之受也；及其遭漢祖、其言也、如以石投水、莫之逆也。(其の言や水を以て石に投ずる如し、之を受くること莫ければなり。…其の事や石を以て水に投ずる如し、之に逆ふこと莫ければなり)」と極めて似ているので、明らかに文選の来たことを証するものである。

岡田正之は大正 9 (1920) 年 9 月～大正 11 (1922) 年 5 月の間に、佐久節と国訳漢文大成の『文選』(第 2 巻～第 5 巻)を共編したことがある。その「文選解題」からみると、岡田氏の『文選』に関し、優れている見解を有する。それに、その『日本漢文学史』においても、深く『文選』からの影響を受けたことがあると思う。特に、岡田正之の日本漢文学史に対する定義が、『文選』における文体に対する認識を受容した。

まず、次の表 6 は筆者が岡村繁氏の現存最古の李善単注完本である北京図書館蔵南宋淳熙 8 (1181) 年尤表刻本 (1974 年、北京中華書局景印) に拠った文体一覧に基づき、作成した『文選』文体及び分類表である。

『文選』30 巻の編成形態は、まず原則として同一文体ごとに作品をまとめたが、そのうち特に作品数が多い「賦」と「詩」の二様式だけは、その内容が多岐にわたっているので、さらにこれを内容上から再分類している。

番号	文体名	作品数	巻辞
(1)	賦 (朗誦する長篇の韻文)	57 首	
	甲、京都 (上)		巻一
	乙、京都 (中)		巻二
	丙、京都 (下)		巻三

	丁、郊祀（天子の天地の祭り）・耕籍（天子の耕作）・畋獵（天子諸侯の狩獵）（上）		卷四
	戊、畋獵（下）・紀行（旅行記）		卷五
	己、遊覽・宮殿・江海		卷六
	庚、物色（自然の景象）。鳥獸（上）（下）・志（上）		卷七
	辛、志（下）・哀傷		卷八
	壬、論文（創作論）・音楽		卷九
	癸、情（愛情）		卷十
(2)	詩	251 篇 433 首	
	甲、補亡（『詩経』補足）・述徳・勸励・献詩・公讌（公式の宴）・祖餞（送別）		卷十
	乙、詠史・百一（時事批判）・遊仙・招隠・反招隠・遊覽		卷十一
	丙、詠懐・哀傷・贈答（上）		卷十二
	丁、贈答（下）・行旅（上）		卷十三
	戊、行旅（下）・軍戎（郊祀）・郊廟（郊祀）・楽府（民謡体）・挽歌・雑歌		卷十四
	己、雑詩		卷十五
	庚、雑擬（擬古詩）		卷十六
(3)	騷（楚辞）	17 首	卷十六・十七
(4)	七（七事に分けて説く問答体）	3 篇 24 首	卷十七・十八
(5)	詔（詔勅）	2 首	卷十八
(6)	冊（天子の任命書）	1 首	
(7)	令（皇后・東宮の命令文）	1 首	

(8)	教（諸侯の命令文）	2 首	
(9)	策秀才文（秀才に対する天子の試問文）	3 篇 13 首	
(10)	表（正式な上表文）	19 首	卷十九
(11)	上書（天子・諸侯への具申書）	7 首	卷二十
(12)	啓（天子・公卿への簡潔な開陳書）	3 首	
(13)	弾事（弾劾の上奏文）	3 首	
(14)	牋（上司の高官への書翰）	9 首	
(15)	奏記（中央の高官への書翰）	1 首	
(16)	書（書翰）	24 首	卷二十一・ 二十四
(17)	檄（ふれぶみ）	5 首	卷二十二
(18)	対問（問答体による自己弁明）	1 首	卷二十三
(19)	設論（問答体による反論）	3 首	
(20)	辞（楚辞系の叙情作品）	2 首	
(21)	序（序文）	9 首	
(22)	頌（盛徳をたたえる文）	5 首	卷二十四
(23)	賛（伝記・肖像等に加えた賛辞）	2 首	
(24)	符命（瑞応を述べて、君徳をたたえる文）	3 首	
(25)	史論（歴史評論）	9 首	卷二十五
(26)	史述賛（伝記を作った趣旨を要約した文）	4 首	
(27)	論（論説）	14 首	卷二十六～二十八
(28)	連珠（真珠を連ねたような美文の連作）	1 首	卷二十八
(29)	箴（戒めの文）	1 首	
(30)	銘（記念のために金石に刻み付け	5 首	

	る文)		
(31)	誄（生前の徳行をたたえ死を悼む文）	8 首	卷二十八・二十九
(32)	哀（死者への哀悼文）	3 首	卷二十九
(33)	碑文（いしぶみ）	5 首	卷二十九・三十
(34)	墓誌（死者の事跡を金石に記して墓側に埋める文章）	1 首	卷三十
(35)	行状（死者一生の略歴）	1 首	
(36)	弔文（死者の霊を慰める文）	2 首	
(37)	祭文（死者の霊前で読む文）	3 首	

（表 6 筆者作成）

前述したとおり、『文選』編纂の趣旨は『文選』の序における「事出于沉思，文归乎翰藻（事は沈思より出て、義は翰藻に帰す）」というような名作、いわば純文学の名作だけに限定し、とくに『詩』『賦』両文体を重視する。岡田正之は推古朝に備えた漢文の諸文体には純漢文も準漢文もあり、純漢文の中には散文も駢体文も義疏文もあると考えられる。文のほかに、現存する最古の日本漢詩集である『懷風藻』は近江朝から奈良朝までの 64 人の作者による 116 首の詩を収め。詩が当時の新しい文学スタイルであるので、『懷風藻』は最古の漢詩集である同時に、当時の新文学である。『文選』に定義された純文学は岡田正之に受け継がれていると思う。

本稿の考え方としては、岡田正之は『文選』における純文学の定義に基づき、経、史、子を文学と区別して文学範疇から排除し、『詩』『賦』両文体を重視し、『文選』における文体の種類に倣って、日本漢文学の文体も 37 種類有すると考えられる。

（二）記紀は尚書の比

古事記は、女帝元明天皇の和銅 5 年（712 年）正月 28 日、正五位上勲五等太朝安萬侶によって謹上された。上は神代に起こり、下は推古天皇に至るまでの様々な出来事（神話や伝説などを含む）が紀伝体で記載される。凡そ 3 巻に分け、天地開闢より鵜葺草不合命までを上巻とし、神武天皇より応神天皇までを中巻とし、仁徳天皇より推古天皇までを下巻とする。

古事記の性格については、一般的に二つの対立した見方があると思う。その点について、小島憲之氏は著書『上代日本文学と中国文学（上）』にも同じことを述べた。つまり、一つは歴史書、歴史的文書とみなすことができ、時としてはそれらは法制書といえる。もう一つは文学（文学書）とみる見方である²⁹⁶。岡田正之氏は古事記の序を見ると、それは奈良朝における漢文学の非常に進歩したことのシンボルであることが分かってくると考えられる。安萬侶が作った古事記の序文は書といっても、その文体が古事記を元明天皇に謹上する表である。宋の裴松之の「上三国志注表」、あるいは唐の長孫無忌の「上五経正義表」にならうものである²⁹⁷。その主張について、孫久富氏はその論文『古事記』の天地開闢と中国古典』において、下記の通り述べた。

『古事記』の序文は、確かに先学が考察した通り、唐の長孫無忌の「進五経正義表」と「進律疏議表」の表現用語を踏まえる箇所があるが、しかし、天地開闢に関しては、「臣聞混元初闢、三極之道分焉。」（「進五経正義表」）という表現以外にその類似が殆ど認められない。「進五経正義表」の中の「聖書亀書浮於温洛、愛演九疇、竜図出盛榮河、以彰八卦。故能範圍天地、挺埴陰陽、道濟四漠、知周万物。」や「進律閣議表」の中の「三才南分、法星著於玄象、六位斯列、習玖彰於易経。故知出震二時、開物成務……」などは、中国古来の道教の伝説を述べていて、『古事記』序文の天地開闢とその表現や筋がかなり異なっている²⁹⁸。

それに対し、本稿の考え方として以下二つの点を述べたい。一つは岡田正之の『日本漢文学史』において所謂大化以後奈良朝の終りまでの漢文学は日本漢文学の少壮期であるので、宋の裴松之の「上三国志注表」、あるいは唐の長孫無忌の「進五経正義表」のように自由に漢文で文章を書く能力は完全にできていないことは言うまでもないだろう。「字句を藻繪して巧に絢爛の文を爲せり」というレベルに達することができたら非常に進歩したと思う。もう一つは古事記序文の表現が「進五経正義表」や「進律閣議表」の中の「故能範圍天地、挺埴陰陽、道濟四漠、知周万物」「三才南分、法星著於玄象、六位斯列、習玖彰於易経」のような中国古来の同郷の伝説あるいは道教に関する思想の文句とかなり異なっているのは事実である。岡田正之の考え方では、日本漢

²⁹⁶ 小島憲之：『上代日本文学と中国文学—出典論を中心とする比較文学的考察—』、東京：塙書房、1971年10月15日再版発行、pp. 177～178。

²⁹⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 55～56。

文学の根本的な思想は儒教主義である。老子の学説は無為を尊び、自然を主として、儒教の仁義道徳を排斥し、社会の秩序を無視する。

日本書紀は舎人親王及び太安萬侶などにより、勅を奉じて完成された。『古事記』と異なり、『日本書紀』にはその成立の経緯の記載がない。しかし、後に成立した『続日本紀』の記述により成立の経緯を知ることができる。『続日本紀』の養老4年5月癸酉条には、「先是一品舎人親王奉勅。修日本紀。至是功成奏上。紀卅卷系圖一卷」²⁹⁹とある。日本書紀の成立に関する説がいろいろあるが、岡田氏は「余は寧ろ安萬侶にして始めて書紀の文を修むべしと信ず」と主張する。

『日本書紀』の文体・用語など文章上のさまざまな特徴を分類した研究・調査の結果によると、全30巻のうち、巻第一・巻第二の神代紀と巻第二十八・二十九・三十の天武・持統紀の実録的な部分を除いた後の25巻は、大別してふたつに分けられるとされる。その一は、巻第三の神武紀から巻第十三の允恭・安康紀までであり、その二は、巻第十四の雄略紀から巻第二十一の用明・崇峻紀までである。残る巻第二十二・二十三の推古・舒明紀はその一に、巻第二十四の皇極紀から巻第二十七の天智紀まではその二に付加されるとされている。巻第十三と巻第十四の間、つまり、雄略紀の前後に古代史の画期があったと推測されている。

岡田氏は齋藤拙堂が嘗て日本書紀を評した「舎人親王日本書紀、雖有模倣史・漢・鴻烈等書者、然叙事有法、用字亦皆合格。不可與近古老生之文、同日而語也」³⁰⁰を引用して、「寔に漢文学の最も熾盛なりし徳川時代の老生と雖も及ぶべからざるものあらん。」³⁰¹と書紀を高く評した。そういえるのは近江奈良朝における漢学、経学の基礎がしっかりとしているにほかならないだろう。

『古事記』と『日本書紀』との関係について、岡田正之氏は「古事記の文は口語の體にして、書紀の文は文語の體なり。口語體なるを以て古事記は達意を主とし、専ら言語其の儘を寫さんとする風あり。文語體なるを以て書紀は詞藻に傾き、字句を精鍊する風あり。若し尚書を把りて之を比せば、古事記は殷盤周誥なり、書紀は典謨誓命

²⁹⁸ 孫久富：『古事記』の天地開闢と中国古典『相愛大学研究論集』（通号 11）、1995-03、pp. 218～197。

²⁹⁹ 『続日本紀』巻8、『新訂増補 国史大系』第2巻、東京：吉川弘文館、1966年09月30日発行、p. 81。

³⁰⁰ 『拙堂文話』巻一、『日本藝林叢書』第四巻、鳳出版、1972年。

³⁰¹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 63。

なり。是記紀二典の大にその趣を異にせる所以なるべし。」³⁰²とまとめて説明した。

之を要するに、岡田氏の考えでは、古事記の文は口語体であり、日本書紀の文は詞藻に傾き、字句を精練する風がある文語体であるので、尚書を取って之を比較すれば、古事記は殷盤周誥であり、日本書紀は典謨誓命である。それも古事記と日本書紀との大きく異なる所であろう。

神の道を伝え、国体の精華を説き、国民道德の本源を提示することは記紀二典の至る所は皆当然である³⁰³。しかも、旺盛な吸引力と偉大なる同化力とにより、漢文学の根本的な精神である儒教主義を融合してより一層固有の国民性を向上させる事実は日本書紀に最も著明に最も深切に説明した。頼山陽は日本書紀・万葉集の後に書して曰く、

日本紀我之書也、万葉集我之詩也。學者可不讀周誥・殷盤・國風・雅頌、不可不讀此、故此間有禹湯文武數聖人而不知。有風俗之美踰彼三代而不省。或施之政教、皆顛倒錯繆矣。所謂舍我梁肉、戀隣之糟糠者耳³⁰⁴。

(三) 風土記は詩經の国風の類

風土記は元明天皇の詔により各令制国の国庁が編纂し、主に漢文体で書かれた地方史誌である。風土記の名称は晋の平西將軍の周処による『周処風土記』に始まり、盧植による『冀州風土記』、沈瑩による『臨海風土記』、陸恭之によるとされる。当時の風土記は大部分伝わらないが、現存しているのが常陸・出雲・播磨・肥前・豊後の御風土記あるのみである。

岡田正之の考え方では、近江奈良朝の漢文学全体を見ると、古事記と日本書紀二典は中央文学を代表し、風土記は地方文学という意味を持つ。即ち風土記は古事記・日本書紀二典と比肩すべき文学作品である。五風土記及び逸文を見ると、その文は、悉く漢文にして、純漢文とか、準漢文とか、または二文の相混ぜるものもある。一番文采があるのは常陸風土記である。

要するに、奈良朝の漢文学は、奈良都会の一区域のみならず、諸国に博士も学士も

³⁰² 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、pp. 63～64。

³⁰³ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 63。

³⁰⁴ 頼山陽著、児玉旗山輯録：「書日本紀・万葉集後」『山陽先生書後』巻中、京都：若山屋茂介、天保7年（1836）。

ある。それに基づき、岡田氏は「諸国に風土記を編みし如きも、亦地方文学の一として観ざるべからざるなり」³⁰⁵と風土記を評価した。

詩経国風は、古代中国各地に発生したそれぞれの国の民謡を集めたものである。周南・召南・邶・鄘・衛・王・鄭・齊・魏・唐・秦・陳・檜・曹・豳などの15の国と地域の小唄や民謡を収める。(中には国ではなく、国の中の一地方もある) 朱子によれば国とは周の諸侯が封ぜられた地域をさし、風とはその地域に行なわれている民謡を意味するという。多くは自然発生的に起こった里巷歌謡のようなもので、男女の相聞を歌ったものが多い。

風土記も詩経の国風も地方に発生した各地に関する風俗あるいは民謡であり、中央の天皇あるいは天子の詔二より、各地から収集した地方文学である。地方に発生したこと、中央の詔により編纂、収集したことという二つの点から見れば、風土記は詩経の国風の類とは言えるだろうと思う。

(四) 懐風藻は漢魏・隋唐に比する

奈良時代、天平勝宝3年(751年)の序文はあるが、署名はない。編者は大友皇子の曾孫にあたる淡海三船と考える説が有力である、また他に石上宅嗣、藤原刷雄、等が擬されているが確証はない。近江朝(667~672年)³⁰⁶から奈良朝までの64人の作者による116首の詩を収めるが、序文には120とあり、現存する写本は原本と異なると思像されている。

1、懐風藻の詩形について

懐風藻に収められた詩は専ら当時に流行した詩体であり、その時代の詩風を示したものである。岡田氏は特に以下五項の注意すべきことを指摘した。

第一、五言の詩が多いこと。

第二、八句の詩が多いこと。

第三、対句を以て成ること。

第四、平仄の諧わないこと。「故に奈良朝時代に至りては、平仄を諧ふることの未だ

³⁰⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.67。

³⁰⁶ 天智天皇6年(667年)飛鳥から近江に遷都した天皇はこの宮で正式に即位し、近江令や庚午年籙など律令制の基礎となる施策を実行。天皇崩後に朝廷の首班となった大友皇子(弘文天皇)は天武天皇元年(672年)の壬申の乱で大海人皇子に敗れたため、5年余りで廢都となった。

起らざりしを知るべし」³⁰⁷。

第五、慣用の押韻あること。

その原因として、岡田氏は二つの理由を挙げた。第一は六朝の詩風を受けたこと。時代的に言えば近江奈良朝は初唐に当たるが、当時の人々は未だ多く初唐の詩に接触していないので、なお六朝の詩風を標準とする。上記第一項の五言詩が多いのはその事実を証明するものである。第二は詩学がまだ初歩である。懐風藻の作者が専ら五言の詩を作ったのは六朝の詩風の影響を受けたほかに、十句以上の詩が極めて少ないので、その筆を暢達させる力がないことに因るものである。

その詩形の由来については、岡田正之は江村北海の『日本詩史』巻四を次の通りに引用した。

「懐風・凌雲二集所収五言四韻、世以為律詩非也。其詩對偶雖備、聲律未諧。是古詩漸變為近體、齊梁陳隋漸多其作。我邦承其運者。」(『懐風』・『凌雲』の二集の収むる所の五言四韻、世以て律詩と為すは非なり。其の詩、對偶備はると雖も、聲律未だ諧はず。是は古詩の漸く變じて近體と為るなり。梁陳隋、漸く其の作多し。我邦其の氣運を承くる者。)

その故に、懐風藻は古詩の精髓であり、漢魏六朝の詩風から受けた影響が最も多い。

2、懐風藻の内容

懐風藻の内容については、岡田氏は下記の表7の如く分類した。

内容	侍宴 從駕	七 夕	算 賀	讌 集	贈 与	積 奠	遊 覽	詠 物	臨 終	述 懷	憑 弔	閑 適	憶 人	計
詩数	34	6	2	22	6	1	17	5	1	9	3	8	2	116

(表7 筆者作成)

上記の表7から見ると、侍宴從駕の詩は四分の一を占め、最も多く、讌集遊覽はその次である。要するに、詩文を愛する天子が春花秋月につけて駕を命じ、宴を賜って詩文の製作を楽しむことは、六朝以来の風習にして、中国文化の移植に力を致した近江奈良朝においては、この種の風流韻事の多いのが怪しむに足りないことである。

³⁰⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 85。

3、懐風藻の思想

前に述べたように、近江奈良朝が儒教本位であるので、懐風藻の詩に作者の儒教思想の流露するのは必然的な結果である。儒教思想の外に奈良朝に伝来した老荘神仙清談の思想も含まれている。老荘神仙思想は日本において、「一時の流行に止まりて、その弊害を流すことなかりしは喜ばざるを得ざるなり」³⁰⁸。なお、奈良朝において、仏教の隆盛は儒教に譲らないほどであるが、その思想が懐風藻の詩に見られるのは極めて少ない。緇流の作者は4人のみであり、仏教思想を述べる詩も二三首に過ぎない。

要するに、「思想の醇健にして氣象の敦樸なるは本集の詩の長ずる所なり。其の至れるものに至りては、漢魏に並び隋唐にも比すべし。殊に吾人をして感歎せしむるものは朝紳高僧の努力なり、向上的精神なり。漢詩は比較的に當時の新文學なるを以て、其の創作も容易の業にあらざるべし」というのは岡田正之の懐風藻の詩に対する評価である。つまり、思想の醇健、氣象の敦樸という長所を有する懐風藻は漢魏に並び、隋唐に比肩することができると考えられる。確かに、懐風藻は近江奈良朝文学の燦然的な美観を呈するものである。

前述のように、本稿の考え方としては、岡田正之氏は江村北海の『日本詩史』及『羅山文集』巻55「題跋五家蔵本 懐風藻跋」の『懐風藻』及びその漢詩に対する評価に基づき、「思想の醇健にして氣象の敦樸なるは本集の詩の長ずる所なり。其の至れるものに至りては、漢魏に並び隋唐にも比すべし。殊に吾人をして感歎せしむるものは朝紳高僧の努力なり、向上的精神なり」と懐風藻の思想、詩風等をまとめて評価した。懐風藻の初めに載せた天智天皇の皇子である大友皇子の五言詩『述懐』について、江村北海はその著書『日本詩史』巻一において、次のように述べた。

自仁德升遐，曆世三十，經年四百五十，天智天皇登極，而後鸞鳳揚音，圭璧發彩，藝文始足商榷雲。史稱，詩賦之興，自大津王始。紀淑望亦曰：“皇子大津始作詩賦。”而其實大友皇子為始，河島王、大津王次之。大友詩，五言四句：“道德承天訓，鹽梅寄真宰。羞無監撫術，安能臨四海。”典重渾樸，為詞壇鼻祖而無愧者也。大友，天智太子。

³⁰⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.91。

(大友の詩、五言四句、『道德承天訓，鹽梅寄真宰。羞無監撫術，安能臨四海。』は、典重渾朴、詞壇の鼻祖と為すも、愧づる無き者なり。大友は天智の太子。)

つまり、江村北海は「典重渾朴」「詞壇の鼻祖」を用い、高く評価した。

また、『羅山文集』巻 55「題跋五家藏本 懷風藻跋」において、次の通りに書かれている。

「吾嘗示懷風藻竝經国集之脱簡于惺窩先生、先生一見恰似東觀見未見書、欣欣然、愉愉焉、因稱本朝之上代、不讓中華之人、不可耻也、可尚焉。」

惺窩の激賞と林道春の得意とは想像できるのであろう。

上述したことにより、本稿は岡田正之氏が江村北海の『日本詩史』及『羅山文集』巻 55「題跋五家藏本 懷風藻跋」の『懷風藻』及びその漢詩に対する評価に基づき、「思想の醇健にして氣象の敦樸なるは本集の詩の長ずる所なり。其の至れるものに至りては、漢魏に並び隋唐にも比すべし。殊に吾人をして感歎せしむるものは朝紳高僧の努力なり、向上的精神なり。」と懷風藻の思想、詩風等をまとめて評価した。

(五) 鎌倉時代は緇流文学の初唐

岡田正之はそれをふまえ、「緇流文学時代も亦これに類するものあり。鎌倉時代は初唐に擬すべく、南北時代は盛唐に比すべし。そして室町の前後期は中晩の二唐に配すべし。唐詩の權威は盛唐に在る如く、緇流文学を代表すべきは南北朝を擧げざるべからざるなり」³⁰⁹と主張する。つまり、鎌倉時代は緇流文学の初唐に、南北朝時代は緇流文学の盛唐に、室町前期は緇流文学の中唐に、室町後期は緇流文学の晩唐に比することができる。

四唐分期論は宋巖羽の『滄浪詩話』により始まり、元代楊士弘の唐詩選本である『唐音』により定められ、明高棟の『唐詩品彙』により完備された³¹⁰。「詳而分之，貞觀、永徽之時，虞、魏諸公稍離舊習，王、楊、盧、駱，因加美麗，劉希夷有閨帷之作，上官儀有婉媚之體：此初唐之始制也；神龍以還泊開元初，陳子昂古風雅正，李巨山文章宿老，沈、宋之新聲，蘇、張之大手筆：此初唐之漸盛也；開元、天寶間，則有李翰林

³⁰⁹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、pp. 279～280。

³¹⁰ 吳承学：「關於唐詩分期的幾個問題」『文学遺產』1989年03期、p. 100。

之飄逸、杜工部之沉鬱、孟襄陽之清雅、王右丞之精緻、儲光羲之率直、王昌齡之聲俊、高適、岑參之悲壯、李頎、常建之超凡：此盛唐之盛者也；大曆、貞元中，則有韋蘇州之雅淡、秦公緒之山林、李從一之台閣：此中唐之再盛也；下暨元和之際，則有柳愚溪之超然復古、韓昌黎之博大其詞，張、王樂府得其故實、元、白敘事務在分明，與乎李賀、盧仝之鬼怪、孟郊、賈島之饑寒：此晚唐之變也；降而開成以後，則有杜牧之豪縱、溫飛卿之綺靡、李義山之隱僻、許用晦之偶對，他若劉滄、馬戴、李頻、李群玉輩尚能勉氣格，將邁時流：此晚唐變態之極而遺風餘韻猶有存者焉。」³¹¹「唐詩之變，漸矣！隋氏以還，一變而為初唐，貞觀、垂拱之詩是也；再變而為盛唐，開元、天寶之詩是也；三變而為中唐，大曆、貞元之詩是也；四變而為晚唐，元和以後之詩是也。」³¹²高棟編選の『唐詩品彙』は広く唐末以来唐詩分期学説に基づき、「初唐、中唐、盛唐、晚唐」という四唐分期説を定めた。

鎌倉時代（1204～1333）の148年は朝紳文学が衰え、漢文学も委靡不振の極点に落ち、いわゆる漢文学の霜枯時代を迎えてきた。しかし、鎌倉時代は平安朝と南北朝時代との間に架かった橋梁のようなものであり、禅宗の渡来とともに、宋・元の禪文学が舶載され、新たな漢詩文の作風が移植されて、旧来の王朝的漢詩文の伝統の外に、飛躍的にその制作が興ってきた期間である。そして、自主的に中国の禪文学を摂取しようとする意識に溢れ、王朝的漢詩文の作家に見られる惰性が克服されている。緇流文学の機運は一応成熟し、南北朝の隆盛期の基礎が築かれたとしてよいであろう。

また、南北朝に活躍している虎関師鍊（1278～1346）、雪村友梅（1290～1347）も鎌倉時代の漢文学の素養によって成長してきたのである。鎌倉時代の帰化僧の中において、広く影響を残したのは一山一寧である。虎関師鍊が、一山一寧（1247～1317）の言に導かれて志を立て元亨2（1322）年に日本仏教史上著明な人物の伝記を集成した『元亨積書』30巻の大著を完成した。その詩文集『濟北集』の中の幾篇は既に鎌倉時代に制作されている。また、雪村友梅は元に留まること22年、元徳元（1329）年に帰国したが、その間日本留学僧を以て間諜と見なされたため、雪州の獄に繋がれ、後各地に漂白しながら詠じた詩集『岷峨集』の諸作品は、烈々たる民族的気概を發揮し、その気格の雄渾・崇高さにおいて、この時期に頂点をなす作風を樹立したということ

³¹¹ 高棟：「唐詩品彙総叙」『唐詩品彙』、上海：上海古籍出版社、1988年7月第2版、p. 8.

³¹² 高棟：「五言古詩叙目」『唐詩品彙』、上海：上海古籍出版社、1988年7月第2版）、p. 51.

ができる³¹³。

その故に、鎌倉時代の緇流文学は唐詩発展中の初唐という時期の唐詩のような存在であり、つぎの南北朝の隆盛期の基礎でもある。初唐（618～712年）は唐詩の醗酵して形成される時期であり、主な詩人は初唐四傑（王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王）、沈佺期、宋之問、陳子昂がある。

（六）南北時代は緇流文学の盛唐

南北朝時代（1334～1392年）は後醍醐天皇の建武元年（1334年）より、後小松天皇の明德3年（1392年）、南北朝統一まで59年。前述したように、岡田氏が南北朝時代を全唐の詩の盛唐にたとえたことからみると、緇流文学を代表すべき時代は南北朝時代である。南北時代において、禅林の名僧に至っては極めて多く、枚挙にいとまがないが、特に重要なのは前に虎関師錬、雪村友梅、中巖圓月等を、後に夢窓疎石、義堂周信、絶海中津などをあげられると思う。次は主として此の六家についてその如何なる文学を有するかを分析し、所謂五山文学の唐詩発展の「盛唐」のような隆盛時代、黄金時代の一斑を窺おうと思う。

1、虎関師錬：空海に比肩

虎関（1278～1346）は名を師錬と言う。虎関はその号である。弘安元年（1278年）京師に生まれ、嘗て菅原在輔に就いて文選を受け、源有房に従って易を学んだことがある。

岡田正之の考えでは、五山学僧において、学問の博洽、文辞の卓抜するものは虎関師錬という巨擘である。なお、もし王朝にその比を求めれば「獨り空海一人あるのみ」³¹⁴。空海は唐に入って学んだことがあるが、虎関は海を渡って法を求めたことがないという点において両者は異なる。が、学識の高いこと、気魄の雄大であることは似ている。虎関師錬の臨濟宗の僧侶として宗風を鼓吹することは、空海が真言密宗の開祖として宗義を弘布することには如かないと雖も、漢文学に対する伎倆と作品とに至っては、「空海も虎関師の後に瞠若たらざるを得ざるべし」。

日本禅林著述書目によれば、虎関の著は11種類あるが、岡田正之はその中において

³¹³ 久松潜一：『日本文学史 中世』、東京：至文堂、1959年11月25日3判、pp.222～223。

³¹⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.303。

特に詳述しなければならないのが日本初の仏教通史であるのみならず、日本における漢文の紀伝史体の濫觴とする元亨釈書である。元亨2年（1322年）に完成し、上は欽明天皇の御治世に起こり、下は後醍醐天皇の御治世に至り、凡そ780年余年間のことに係り、30巻ある。その体は梁の慧皎の高僧伝、唐の道宣の続高僧伝、宋の贊寧の宋高僧伝の体に模倣する。元亨釈書に次いで述べなければならないのは済北集である。凡そ20巻。「因従容論明主、使天下學古文斥四六」³¹⁵のように、虎関師錬が文章に対する主張を見ることができる。

2、雪村友梅：五山の詩僧

雪村（1290～1346）は伏見天皇の正応3年（1290年）に越後の白鳥郷に生まれ、幼い時鎌倉に入り、寧一山に師事し、後京都の建仁寺に入門した。徳治2年（1307年）18歳の時、元に遊学して名利を訪ねた。日元関係の悪化に伴い、日本留学僧は間諜と見なされたため、雪州の獄に繋がれる。元为天暦2年（日本では元徳元年、1329年）5月、商船に便乗して博多へ帰朝。

雪村の著書は雪村語録（二冊）と岷峨集がある。雪村の詩は「雄健爽朗の氣に富みて、澹遠清高の趣を有せる」ものである。雪村は特に古詩が長じている。文章は詩の巧力に比べると劣っているが、当時の叢林の作者たちには負けないものである。故に、「余本不覇人。足跡窮禹甸。所至訪奇古。會心輒所便。閱士如堵墻。眼中無貴賤。（岷峨集卷上「周教授」）」

という句がある。

3、中巖圓月：五山漢文学の伯兄

中巖（1300～1375）は名を圓月と言ひ、俗姓は土屋氏、中巖はその号である。正中2年（1325年）9月に、その志を遂げて元に入り、元弘2年（北朝正慶元年、1332年）にほんに帰った。中巖の著書は瑣細集・日本書・蒲室集注積がある。中巖の最も心血を注いだ文章の『中正子』に対し、岡田正之は「一時感激の作は獨り五山文學の耀たるのみならず、我が邦の漢文學史上の一名著たるに負かざるべし」³¹⁶と高く評価した。

³¹⁵ 虎関師錬：『済北集』卷九

³¹⁶ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.324。

三僧の単に漢文学の上において、「中巖は伯兄の地位を占め、虎関は仲にして、雪村は叔季」³¹⁷である。虎関は済北集において、元亨釈書において、その学殖と史筆とを發揮した。雪村は岷峨集において、古今の詩格を備えた詩才を証し、中巖は東海一漚集、殊に中正子においてその文章の伎倆と学識を示した。それらの学問詩文の風は全く宋学からの影響を受け、足利・徳川時代における学風の一大淵源とも言える³¹⁸。

4、夢窗及び義堂・絶海

夢窗（1275～1351）は詩においては雪村に及ばないが、文章においては虎関・中巖に劣らない。夢窗は元来文芸の才を有し、詩を賦し、歌を詠み、文を作る。その著書としては、夢窗語録・臨幸私記・夢中間答及び夢窗明極唱和篇・正覚国師歌集などある。

義堂（1325～1388年）は名を周信と言ひ、義堂はその号である。後醍醐天皇の正中2年（1325年）に土佐の高岡郡に生まれ、18歳に志を立てて明に遊学しようとしたが、病のため果たさなかった。義堂の著書は頗る多い。岡田正之は「義堂・絶海は五山文學のために萬丈の氣燄をあげし人にして、優に室町時代に於ける代表者の榮譽を荷ふべきものなり」と義堂と絶海を評価した。

絶海（1334～1405）は後醍醐天皇の延元元年（1336年）11月、土佐の津野に生まれ、名は中津、自ら蕉堅道人と号し、外遊の志を興し、海を渡って明に入った。七言律詩は絶海の最も長じるところであり、その在明中の作に係る「錢塘懷古」の次韻のようにその伎倆を示すものである。

之を要するに、南北朝時代において、武家の間に志を詩文に寄せるものもあるし、上流に於ける漢文学は必ずしも地に落ちたわけではない。詩文の標準はまた唐宋にあり、晩唐の調を帯びたものが多く、鎌倉時代にはないところがある。文章に於いても必ずしも四六のみならず、頗る散文も応用する。

五山名僧において、学問の博洽にして、文辞の卓撥であり、虎関師鍊を以て巨擘とする。「若し王朝にその比を求めば獨り空海一人あるのみ」³¹⁹とは岡田正之の主張で

³¹⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p. 328。

³¹⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p. 328。

³¹⁹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、（東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行）、p. 303。

ある。仏教に関する著書の多くに至っては、虎関師錬は遥かに空海に及ばない如く、釈史の一大著作である元亨釈書に至っては、空海は虎関師錬に如かざるのである。漢文学に対する伎倆と作品とに至っては、空海も虎関師錬に及ばない。これにより、南北朝・室町時代の詩文は日本漢文学の強盛期である平安朝前期の王朝文学に凌駕する。この南北朝時代は盛唐（712～765年）時期において李白、杜甫のような偉大な詩人もあるし、高適、岑参、王維、孟浩然のような傑出な詩人もある所謂唐詩の黄金時代である如く、虎関師錬、雪村友梅、中巖圓月、夢窓疎石、義堂周信、絶海中津などの五山名僧がある。

（七）室町時代前期は緇流文学の中唐

室町前期の状勢は、独り朝廷武家の学事が衰えたのみならず、学問の中心である禅僧も亦邦新濶大の氣分がなくなった。游明学僧の極めて少なく、明の僧学の衰えたことはその原因である。亦当時の禅僧の氣力の減少も事実として語らなければならない。室町時代において、再び虎関師錬・中正子は雄健なる学識を有し、雪村・義堂・絶海は詩文が俊邁であるようなものに接することができなくなったのは極めて残念なことである。

室町前期の詩文を称するものは、桂翠二翁と言ひ、あるいは禅林四絶と言う。禅林の四絶とは得巖惟肖の文と、龍派江西の詩と、真玄太白の駢儷と、清播心田の講説がある。桂翁二翁とは得巖と龍派との二翁を言う。前者は別号を双桂と称し、後者は続翠和尚と称することによる。此等諸名僧に各家集を有するが、集めて一緒と為したものは『花上集』である。

室町時代前期は緇流文学の「盛唐」である南北朝に次ぐ時代であり、中唐（766～835年）の詩が盛唐の延長であり、主に韋応物、柳宗元、韓愈、孟郊、元稹、白居易などの詩人があるとき、五山文学の隆盛期の延長である。室町の前期において、詩集としては、『花上集』と「北斗集」があり、また惟肖得巖、翱元慧鳳、瑞溪周鳳、村菴靈彦四層がある。

（八）室町時代後期は緇流文学の晩唐

応仁の乱の起こりにより、世は壞乱の季運となり、群雄割拠、戦闘混乱の極に達することは100年余。応仁の乱は、室町時代の応仁元年（1467年）に発生し、文明9年（1477

年)までの約10年間にわたって継続した内乱。

室町時代後期においては晩唐(836~906年)時期の唐詩が隆盛期から衰退期へと転換する時代であるごとき、五山文学は衰頹期を迎えてきた。

一方、室町時代後期において、群雄の割拠となり、地方の群雄の間に文学の伝播勃興したことは燦輝たる一大徳川文学を作れる最大近因である。

要するに、室町後期に入り、「朝廷の文學は黎明の如く、將に旭光の漸く地平線上に上らんとする趣あり、將軍の文學は夕日の西山に傾きて、一線の残紅を留むる感あり」³²⁰と室町後期の漢文学に対してまとめた。

室町後期になり、詩文の道が大に衰え、その詩格が大に下ったが、詩文を作る流行は前期に劣らない。その代表的作者としては横川景三・景徐周麟であり、横川の高足たる彦龍周興は学殖あり、丈才あり、観るべき文章少ないし、恐らく室町後期第一の文章家なるべきである。

室町時代後期は中央集権が衰え、勢いが四方に分れ、縉流文学の衰退期であり、全唐詩発展中の「晩唐」のような時期である。学問の傾向は自ら四方に分散し、講学の風各地に起こり、徳川時代の文運を促す。

二、日本漢文学の盛衰論

岡田正之は王朝時代における漢文学の消長を人の一生に譬え、近江奈良朝は日本漢文学の少壮期、前途の希望に輝き、平安の前期(第一期)は強盛期、漸く老境の変化を遂げようとするものであり、平安後期(第二期)に至っては、老衰の期という。

(一) 近江奈良朝：日本漢文学の少壮期

岡田正之が1946年養徳社により出版された博士論文『近江奈良朝の漢文学』において、近江浄見原藤原奈良の12朝、120余年の間が日本漢文学の同化大成された時代であり、平安朝以後に奔放で横溢する漢文学の源頭でもあると指摘した通りに、近江奈良朝は漢文学の成長発展の段階であり、漢文学の少壮期である。

推古朝以来、漢文学が著しく発展してきて、奈良朝の諸文体は推古朝に備えた。近

³²⁰ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』(増訂版)、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 397。

江奈良朝に入り、いよいよ同化渾成の域に達し、その象徴としては、記紀二典を産出するに至る。前述のように、古事記の文は口語体であり、日本書紀の文は詞藻に傾き、字句を精練する風がある文語体であるので、尚書を取って之を比較すれば、古事記は殷盤周誥であり、日本書紀は典謨誓命である。そして、記紀の二典は中央文学を代表し、風土記は地方文学を意味する。故に、記紀二典と風土記とを合わせて、当時の漢文学の様子が分ってきた。また、隋唐の交通と漢文学の興隆は、日本上代の社会生活に一大変化を与えるのみならず、美的趣味に影響をも与えた。ひとり和歌のみを以て、志を言い、情を抒する手段として満足できないので、さらに漢詩をも欲求するに至る。懐風藻は古詩の精髓であり、作者は、天皇をはじめ、大友・川島・大津などの皇子・諸王・諸臣・僧侶など。作風は中国大陸、ことに浮華な六朝詩の影響が大きい。初唐の影響も見え始めている。

(二) 平安朝前期：日本漢文学の強盛期

平安朝における詩学の大いに興ったのは弘仁・天長の間であり、嵯峨・淳和両帝は唐書芸文志集録総集類における「清溪集三十卷 齊武帝勅撰」の如き、之を例として、勅命によって、三集の漢詩文集を編撰した。

三集とは勅命を奉じて撰定する『凌雲集』、『文化秀麗集』、『経国集』三つの漢詩集のことである。

凌雲集は凌雲新集とも言い、弘仁 5 (814) 年に小野岑守・菅原清公・勇山文継らによって嵯峨天皇より近代の詩を撰集する勅命を受け、編纂された。作者は平城天皇、嵯峨天皇、大伴親王（後の淳和天皇）ら 23 人で、全 90 首。なお、後に 1 首が加えられ、91 首となって現在に伝わっている。

文華秀麗集は、平安時代初期の弘仁 9 年 (818 年) に、嵯峨天皇の勅命により桓武天皇の延暦元年 (782) から嵯峨天皇の弘仁 5 年頃に至る 33 年間の詩を集め、編纂された勅撰漢詩集。全 3 巻。先に編纂された『凌雲集』に続くもので、藤原冬嗣、菅原清公などにより編纂された。作者は嵯峨天皇、淳和天皇をはじめ 28 人に及び、渤海使節や女流詩人の作品も収めるといふ。もともとは 148 首が収められていたが、内 5 首は伝わらない。

経国集は淳和天皇の天長 4 年 (786) に、良岑安世、菅原清公らが勅命により編纂さ

れた勅撰漢詩集。全 20 巻。作者は、淳和天皇、石上宅嗣、淡海三船、空海ら。なお、現存するのは第 1 巻など計 6 巻。経国の名は魏文帝の「文章者経国之大業、不朽之盛事」という文より取ったものであろう。

(三) 平安朝後期：日本漢文学の老衰期

1、世相の一変

平安朝前期の末にすでに驕奢の風が増長した。朱雀帝以降其風が愈甚しく、朝廷の紀綱は日に弛み、藤原氏益々専横を極め、其の子弟は内外の樞要に在りて、富貴を恣にし、邸宅を興し、別業を築き……「浮文虚辭を弄し、上下互に風流を競ひ、都雅を貴び」³²¹。朱雀帝以後、天下の形勢が一変した。

2、聖学の一端

天慶（938 年～947 年）の亂は實に王綱陵夷の端を暴露せるものにして、政教を汚隆と共にせる漢文学も亦衰頹の運に向かわざるを得ない。が、第二期前半は第一期の流風余韻を受けたうえに、列聖も文学を重んじるので、漢文学の命脈を維持することができた。

3、学界の大勢

「門閥世襲の風は官界のみならず、學界の諸道も亦一家の專業となる。所謂四道専門の家は前期の末より發して後期の前半に成りしものなり。」

史記・漢書・後漢書などの歴史や文選などの文学を学び、作文を習う紀伝道は菅原・大江の両家があり、論語・孝経を必修、周易・尚書・礼記・周礼・儀礼・詩経・左伝のうちの一つを選択として学ばせた明経道は清原・中原の二氏があり、律令を専攻する明法道は惟宗・坂上の両家があり、竹道の学は三善・小槻の両家がある。「四道の外に醫學・天文・曆術・陰陽等の如きも亦各専門の業となり、さなきだに享樂の氣分に満たされて、怠惰偷安の風ありしに、この如く學術をして一家の専有に歸せしめたるが故に、才人能士も角遂競争の餘地なく、争で新進向上の氣風を望むことを得んや。漢文學の衰頹する所以は毫も怪しむに足らざるなり。」³²²

³²¹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月 10 日発行、p. 180～181。

³²² 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月

4、和歌和文の抬頭

漢文学の衰頹が此の如くなるにもかかわらず、和歌は次第に抬頭し、平安前期の末には紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑等の諸名流が出で、905年に延喜帝の勅を奉じて古今集を編纂して、和歌は次第に盛んになってきた。

三、緇流文学を高く評価

(一) 空海（弘法大師）：漢文学の一大家

空海（宝亀5年（774年）～承和2年（835年））は、平安時代初期の僧。弘法大師の諡号（921年、醍醐天皇による）で知られる真言宗の開祖であり、蔚然たる漢文の大家である。岡田正之氏のご紹介によつては、大師は12歳より典籍を読み、18歳京都に上り、大学に入って毛詩・左伝・尚書などを修め、後専ら仏典を講じ、山谷に入って修鍊苦行をする。20歳剃髪し、桓武天皇の延暦22年（804年）31歳の時に、伝教と共に遣唐使藤原葛野麻呂の一行に加わり、唐に入って青龍寺の僧惠果に就いて仏教を研鑽し、3年後平常帝の大同元年（806年）に帰朝した。大師は唐にいるとき、仏教の研鑽と共に文章にも意を致し、親しく唐の諸名流より書法を受け、詩文を賦し、往来唱和したことがある³²³。

弘法大師の詩、碑銘、上表文、啓、願文などを弟子の真済が集成した性靈集（原名は『遍照發揮性靈集』と言う）は日本人の個人文集としては最古のものである。それに対し、岡田氏は「大師の文辭に一種の気魄光燄のおよぶべからざるものあるは時代の氣風に負へる所にして、偉僧の文辭に負かざるものと云ふべし」と評価した。

弘法大師の編著に係る書として、「最も尊ぶべく、最も後學に嘉惠したる」³²⁴ものは『文鏡秘府論』である。それは平安時代前期に編纂された文学理論書で全六巻、中国の六朝期から唐朝に至る詩文の創作理論を取りまとめたものである。唐代中期の長安に留学した大師が、帰国後、日本の弘仁年間（810年～823年）に完成させたとされる。大師のこの書を編纂するのもまた唐代の学風より影響をうけたことがある。日本にお

10日発行、p.183。

³²³ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.126。

³²⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.130。

いて、詩文の形式を論じるものは大師のこの『文鏡秘府論』から始まり、長く日本の詩賦を作る者の軌範となるのみならず、歌学者の和歌四式・八雲御抄等の歌論もこの書の影響を受けた。特に唐代における詩文格に関する書が大率逸失して伝わらないので、この書により其の一斑を窺うことができるのはいかに珍重であるか言うまでもない。

要するに、平安朝初期において、詩文に長じ、漢学を修める文人学士が少ないが、才学優秀であり、その著述が一代の文運に裨補するものになるのは大師のほかにはないだろう。それだからこそ、岡田氏は「是吾人が大師を目するに漢文學の一大家を以てし、漢文學史上に特筆して、謝恩の意を表せんとする所以なり」と高く評価した。

(二) 中巖圓月：五山漢文学の伯兄

中巖（1300～1375）は名を圓月と言い、俗姓は土屋氏、中巖はその号である。正中2年（1325年）9月に、その志を遂げて元に入り、元弘2年（北朝正慶元年、1332年）にほんに帰った。中巖の著書は瑣細集・日本書・蒲室集注積がある。中巖の最も心血を注いだ文章の『中正子』に対し、岡田正之は「一時感激の作は獨り五山文學の耀たるのみならず、我が邦の漢文學史上の一名著たるに負かざるべし」³²⁵と高く評価した。

三僧の単に漢文学の上において、「中巖は伯兄の地位を占め、虎関は仲にして、雪村は叔季」³²⁶である。虎関は濟北集において、元亨釈書において、その学殖と史筆とを發揮した。雪村は岷峨集において、古今の詩格を備えた詩才を証し、中巖は東海一漚集、殊に中正子においてその文章の伎倆と学識を示した。それらの学問詩文の風は全く宋学からの影響を受け、足利・徳川時代における学風の一大淵源とも言える³²⁷。

(三) 虎関師鍊：五山漢文学の仲

虎関（1278～1346）は名を師鍊と言う。虎関はその号である。弘安元年（1278年）京師に生まれ、嘗て菅原在輔に就いて文選を受け、源有房に従って易を学んだことが

³²⁵岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 324。

³²⁶岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 328。

³²⁷岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 328。

ある。

岡田正之の考えでは、五山学僧において、学問の博洽、文辞の卓抜するものは虎関師鍊という巨擘である。なお、もし王朝にその比を求めれば「獨り空海一人あるのみ」³²⁸。空海は唐に入って学んだことがあるが、虎関は海を渡って法を求めたことがないという点において両者は異なる。が、学識の高いこと、気魄の雄大であることは似ている。虎関師鍊の臨濟宗の僧侶として宗風を鼓吹することは、空海が真言密宗の開祖として宗義を弘布することには如かないと雖も、漢文学に対する伎倆と作品とに至っては、「空海も虎関師の後に瞠若たらざるを得ざるべし」。

日本禅林著述書目によれば、虎関の著は 11 種類あるが、岡田正之はその中において特に詳述しなければならないのが日本初の仏教通史であるのみならず、日本における漢文の紀伝史体の濫觴とする元亨釈書である。元亨 2 年（1322 年）に完成し、上は欽明天皇の御治世に起こり、下は後醍醐天皇の御治世に至り、凡そ 780 年余年間のことに係り、30 巻ある。その体は梁の慧皎の高僧伝、唐の道宣の続高僧伝、宋の贊寧の宋高僧伝の体に模倣する。元亨釈書に次いで述べなければならないのは済北集である。凡そ 20 巻。「因従容論明主、使天下學古文斥四六」³²⁹のように、虎関師鍊が文章に対する主張を見ることができる。

（四）雪村友梅：五山漢文学の叔季

雪村（1290～1346）は伏見天皇の正応 3 年（1290 年）に越後の白鳥郷に生まれ、幼い時鎌倉に入り、寧一山に師事し、後京都の建仁寺に入門した。徳治 2 年（1307 年）18 歳の時、元に遊学して名利を訪ねた。日元関係の悪化に伴い、日本留学僧は間諜と見なされたため、雪州の獄に繋がる。元为天曆 2 年（日本では元徳元年、1329 年）5 月、商船に便乗して博多へ帰朝。

雪村の著書は雪村語録と岷峨集がある。雪村の詩は「雄健爽朗の氣に富みて、澹遠清高の趣を有せる」ものである。雪村は特に古詩が長じている。文章は詩の巧力に比べると劣っているが、当時の叢林の作者たちには負けないものである。

³²⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月 10 日発行、p. 303。

³²⁹ 虎関師鍊：『済北集』巻九

四、徳川時代の漢文学を論述せず

(一) 徳川時代の漢文学を論述していないのは時間的な原因

岡田正之の『日本漢文学史』について、本章の第二節にも述べたことがある。その本は朝紳文学時代と緇流文学時代との二篇だけである。即ち徳川時代については論述していないのである。その点について、同じ漢文講習科漢書課の市村瓊次郎は岡田正之の『日本漢文学史』初版の序において、「但本書に徳川時代の闕けるは大なる遺憾と謂はざるを得ず。天若し君に年壽を假して第三篇たる可き市民文學時代を完成せしめらんには、蕪林の幸恵これに過ぎたるものなかりしならん」³³⁰と述べた。つまり、時間的な原因として、室町時代まで論述してきたが、徳川時代の漢文学については、作者である岡田正之はその『日本漢文学史』において展開していなかったのである。

要するに、岡田正之は徳川時代の漢文学について展開していなかった理由として、それが重要ではないわけではなく、時間的な原因で展開しようとしてもできなくなった。

(二) 宋学伝来と徳川時代の文運促進

宋学とは濂洛閩の学、即ち周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹が主唱した学、すなわち宋学をいう。周敦頤が濂溪、程顥・程頤が洛陽、張載が閩中、朱熹が閩の出身であったところからいう。鎌倉時代に至って、日本と宋との往来がますます頻繁になってきた。漢文知識を有する高僧たちは宋に学び、日本の仏教を振興するとともに、宋代の学術文章を移植伝播した。初期は栄西と俊芿が殊に著名であり、宋学を日本に伝播する媒介になった。栄西と俊芿以後は道元と東福寺の開山圓爾が有名である。そして、宋より渡来の高僧も少なくない。彼らの化導は日本の宋学に対し、多大な貢献を尽くし、五山文学の生面を開ける端緒となる。渡来僧としては、主に道隆、普寧、正念、祖元、一山一寧等がある。要するに、鎌倉時代における宋学の伝来は長い年月と多くの人とによりもたらされたものである。そして、日本における宋学の淵源は全く鎌倉時代にある。

日本における宋学は、鎌倉時代に宋に渡った禅僧によって伝えられ、鎌倉仏教の五

³³⁰ 市村瓊次郎：『日本漢文学史』序『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。

山僧によって研究が進む。鎌倉末期には特にその大義名分論が後醍醐天皇の倒幕思想に影響を与え、建武の新政の理念とされた。室町時代も禅僧によって宋学の研究が続き、義堂周信や絶海中津など五山文学といわれる漢詩文の隆盛がもたらされた。また桂庵玄樹の薩南学派、南村梅軒の南学（海南学派）、藤原惺窩の京学派などの系統がうまれた。

このうち藤原惺窩はもともと仏教徒であったが、仏教に疑問を持つようになって儒学に転向し、豊臣秀吉の朝鮮侵略（文禄・慶長の役）で捕虜となって日本に拉致された朝鮮の朱子学者姜沆から李退溪の学説を学ぶことによって、朱子学の体系的な受容を行うことができた。

江戸幕府は藤原惺窩の弟子の林羅山を侍講として登用して以来、朱子学を幕藩体制の支配理念として利用し、林家を代々の大学頭に任用して御用学問朱子学による思想統制を行った。なお、明の遺臣朱舜水是明再建に失敗した後日本に渡り、水戸の徳川光圀に招かれ、水戸学の祖となった。朱子学者には木下順庵、新井白石、室鳩巢など優れた学者が出現し、幕政にも参画した。

以上述べたことをまとめれば、岡田正之は時代文学への評価、つまり平安前期は漢文学の強盛期という主張、そして、日本漢文学における緇流文学の役割を非常に重視するという点においては、その後の日本漢文学者である神田喜一郎とは一致している。神田喜一郎はたぶん岡田正之の日本漢文学史論から影響を受けたことがあると思う。岡田正之と神田喜一郎との日本漢文学史論における相違点は次の二つである。

一つは、文学観が違うこと。岡田正之は『文選』の採択基準に基づき、即ち漢文学の範囲は「事は沈思より出て、義は翰藻に帰する」名作、いわば純文学の名作だけに限定される。神田喜一郎は吉川幸次郎の「文学のための文学」、所謂文学の「任務説」から影響を受けた。吉川幸次郎が言った「純文学」とは、作品に用いられた表現は政治と倫理のための言語、すなわち人間の生き方についての主張をのべて他人を説得しようとする意思の伝達のためである言語ではなく、『詩経』のような感情表白の漢文学作品である。

もう一つは、中国文学との関係についての考え方が違うこと。岡田正之は日本漢文学を中国文学に類比することにより、その日本漢文学史論を展開してきた。神田喜一郎は日本漢文学の両面性を重視する。つまり、「日本の漢文学」は、本質的には間違い

なく日本文学に属する。その作者は日本人であり、その内容に盛られているのは、当然日本人の思想なり感情であるからである。しかし、その一面において、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。

第三章 神田喜一郎の日本漢文学史論

本章では、主に神田喜一郎全集の『墨林閑話』に載せてある神田喜一郎の書いた「日本の漢文学」³³¹を中心として、神田喜一郎の日本漢文学に関する見解について、解明していきたい。

第一節 神田喜一郎の生涯

神田喜一郎（1897～1984）は、号鬯庵、京都の出身、香巖居士の孫として明治30年（1897）に生まれた。祖父の香巖居士に可愛がられて育ち、その影響を受けないはずはなかった。神田喜一郎はその感化を強く受けて成長して、早くから中国の文学や歴史に興味を持ち、漢詩などもまだごく若いころから作っていたようである。第三高等学校を経て、大正10年（1921）京都帝国大学文学部史学科（支那史専攻）を卒業。大谷大学教授、宮内省図書寮嘱託を経て、昭和4年（1929）台北帝国大学文政学部助教授となり、同9年教授に昇進、東洋文学すなわち中国文学講座を担当した。

一、神田喜一郎の学術年譜

神田喜一郎の年譜行状に関しては、『神田喜一郎全集』³³²第十卷「略歴」によりながら、そのおおよそのところを次に摘録しておこう。

明治30（1897）年10月16日 京都市上京区室町通今出川上ル築山北半町217番地に神田喜左衛門の長男として誕生。

大正3（1914）年3月 京都府立第一中学校卒業

大正6（1917）年7月 第三高等学校

大正9（1920）年11月 吉田直治郎長女カヅと結婚

³³¹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp. 132～184。

³³²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻10、東京：株式会社同朋舎、1997年9月20日、pp. 421～423。

大正10（1921）年3月 京都帝国大学文学部史学科（支那史学専攻）卒業、4月京都帝国大学大学院に入学、同月大谷大学予科教授を委嘱せられた。

大正12（1923）年4月 大谷大学教授に任じられた。

大正15（1926）年3月 大谷大学教授を辞任し、4月宮内省図書寮嘱託を命じられ、漢籍目録解題を編纂。

昭和4（1929）年3月 御用済につき宮内省図書寮嘱託を解かれた。4月台北帝国大学助教授に任じられ、文政学部勤務を命じられた。

昭和9（1934）年11月 台北帝国大学教授に任じられ、文政学部東洋文学講座担任を命じられた。12月台湾総督府在外研究員を命じられ、フランス・イギリス両国に留学。

昭和11（1936）年8月台湾に戻った。

昭和14（1939）年3月京都帝国大学文学部昭和14年度講師を嘱託せられる。

昭和20（1945）年7月東京文化研究所嘱託員を委嘱せられる。12月、願により台北帝国大学教授を辞任した。

昭和21（1946）年5月大谷大学に任じられた。

昭和23（1948）年11月大谷大学を辞任、大阪商科大学に任じられる。

昭和24（1949）年4月大阪市立大学教授に任じられ、法文学部勤務を命じられた。

昭和25（1950）年1月京都帝国大学文学博士を授与される。12月文化財保護委員会専門審議会専門委員を命じられた。

昭和27（1952）年1月法文学部長に補せられた。5月京都国立博物館長に任じられた。

昭和28（1953）年3月願により、大阪市立大学教授を免じられた。4月京都大学文学部非常勤講師に併任、合わせて大学院文学研究科の授業担当を命じられる。

昭和29（1954）年4月オランダ国ハーグにおいて開催の武力紛争の際の文化財保護条約採択のための政府間会議、日本政府代表顧問を命じられ、オランダ・フランス・イギリスの諸国に出張。

昭和33（1958）年3月外務事務官に併任せられ、欧州における日本古美術展開催用務のためフランス・イギリスの両国に出張。

昭和34（1959）年6月フランス学士院よりスタニスラス・ジュリアン賞を授与された。

昭和35（1960）年7月願により京都国立博物館長を免じられた。

昭和42（1967）年11月勲二等瑞宝章を授与された。

昭和47（1972）年11月日本学士院会員におられた。

昭和52（1977）年11月妻カヅ死去。

昭和54（1979）年大韓民国文化芸術振興院より「判比量論」の刊行に対し感謝碑を授与された。

昭和59（1984）年4月10日に死去、正四位に陞叙された。

神田喜一郎は幼いころから、漢詩人で京都帝室博物館学芸委員の祖父香巖の薫陶を受け、大学では内藤虎次郎・狩野直喜に師事し、特に内藤湖南の影響を強く受けた。その学問は中国学の立場に立ち博洽で、厳選された資料による緻密な考証にもとづく研究は、史学・文学・哲学・芸術・金石文字学・書誌学などの分野に及んでいる³³³。『東洋学説林』『日本書紀古訓攷証』『日本における中国文学』『敦煌学五十年』などの多数の著書・論文は『神田喜一郎全集』全十巻に収められているが、別に『中国書道史』があり、『敦煌秘籍留真新編』、『書道全集』（平凡社）などの編書も多い。昭和五十九年四月十日、急性心不全のため京都市左京区の自宅で没す。八十六歳。京都市下京区の東本願寺に葬る。貴重書に富む蔵書は大谷大学図書館に遺贈された。

上記の年譜と略歴などにより、神田喜一郎先生の漢学に関する研究成果は主に下記の4つの方面を含むと思う。

（一）中国書道史論

神田喜一郎が中国書道に関する著作は1985年岩波書店により出版された『中国書道史』、『神田喜一郎全集』第5巻「中国における四と美術の間」の付録に収録された『中国書法の二大潮流』、監修した『書道全集』では初めのうちは中国篇だけを主宰したが、古澤先生が亡くなってからは、日本編の編集にもタッチした³³⁴。

『中国の書道史』には、有史以来、清代までの中国の書の歴史について、その背景、書道の変遷、書風、筆跡、書人、書道など書に関連した事跡を記した。

『中国書法の二大潮流』は主に阮言の『南北書派論』に対して研究展開を行った。「そ

³³³ “かんだきいちろう【神田喜一郎】”, 国史大辞典、JapanKnowledge、<http://japanknowledge.com>（閲覧日：2015/06/11）

³³⁴ 東方学会編：『神田喜一郎博士』、『東方学回想V 先学を語る（4）』、東京：刀水書房、2000年5月20日、p. 209～210。

の論の当否是非はともかく、大所高所から中国書道の歴史を眺めて、さすがに知識もあり見識もある明快な議論であります。その当時として、これは確かに斬新な意見でありました」³³⁵と指摘した。

昭和 28 年から、神田喜一郎先生は『書道全集』の編纂が始まった。平凡社の『書道全集』は二回目の出版で、神田喜一郎先生を中心に、監修である神田喜一郎先生のほかに尾上八郎先生、古澤義則先生、内藤乾吉先生と中田勇次先生などによって編集が行われた。

(二) 敦煌学

敦煌学とは、1900 年に、中国甘肅省敦煌県郊外の莫高窟にて発見された敦煌文献を契機として誕生した学問分野であり、すなわち「敦煌研究」のことを言う。東洋学の一分野を担う。その中心は、敦煌文献の文献学的な研究ではあるが、広義には、莫高窟の仏教壁画や仏教彫刻の仏教美術史的研究、石窟の考古学的研究をも含む。

神田喜一郎先生の敦煌学についての研究成果は、主に『神田喜一郎全集』第九巻に載せている『敦煌学五十年』のことである。中国の敦煌学などの内容も神田喜一郎先生の中国学研究の重要領域の一つである。その『敦煌学五十年』の中に、敦煌学 50 年来の関係する研究状況、論述について、述べたとともに、当時敦煌学に関する研究において最も新しい成果と情報紹介した。

(三) 日本漢文学史論

世界文学史上、まったく他に類例を見ないユニークな存在³³⁶といえる「日本の漢文学」に対して、神田喜一郎は高く評価した。日本の漢文学について、その『日本の漢文学』においては、日本の漢文学に対する定義「『日本の漢文学』とは何か」と、それに対する時代区分「漢文学の黎明期」、「奈良朝の漢文学」、「平安朝の漢文学」、「五山文学」、「江戸時代の漢文学」、「漢文学の衰滅」、合わせて 7 つの部分によって構成される。日本の漢文学の黎明期から、日露戦争以後の日本の漢文学衰滅まで、日本漢文学の萌し、三つの発展ピーク、およびその衰滅について分析し、説明した。特に日本の

³³⁵神田喜一郎：『中国書法の二大潮流』、『中国における詩と美術の間 付録』、『神田喜一郎全集』巻 5、東京：株式会社同朋舎、1993 年 1 月 20 日、p. 255。

³³⁶神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 132。

漢文学における中国文学からの影響や関係について、神田喜一郎先生は自ら独特の立場に立って叙述を展開し、分析した。

漢文学の実践として、神田喜一郎先生が編纂した『明治漢詩文集』昭和58年10月に筑摩書房によって『明治文学全集』の62巻として出版された。

神田喜一郎先生は日本近代東洋文化史学者であり、日本の漢文学、漢詩、中国書道史論、敦煌学などの分野で非常に大きな貢献を尽くした。

(四) 神田喜一郎の博士論文

本節上記の年譜行状のとおり、神田喜一郎は昭和25年(1950年)1月、「支那訓詁学上より見たる日本書紀古訓攷証」により、京都帝国大学で文学博士の学位を授与された。その論文は序説、「以其頸所嬰五百箇御統之瓊」をはじめとする29篇の考証及び結語によって構成された。結語の中に載せる「古訓の一見疑はしきものも、必ず何等かの典拠に基づくものなること」のように、神田喜一郎は京都学派の一員として、おもに考証学の方法によって、考証を重視する。狩野直喜を中心とする京都の中国学研究者が、新しい時代において新しい研究方法、とりわけ清朝考証学によって、江戸漢学および当時の東京の学問と異なった新時代を代表される研究学問と研究成果を打ち出されたものである。

二、まとめ

上述したことにより、神田喜一郎は『明治文学全集』の62巻として出版された『明治漢詩文集』の編纂という日本の漢文学に関する実践を通して、学者としての鋭い目で神田喜一郎独特の日本漢文学史論を打ち出す。「日本の漢文学」は「世界文学史上、まったく他に類例を見ないユニークな存在である」「その一面において、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。」のような日本の漢文学に関する独特の論説を指摘した。日本の漢文学史論上には、『明治漢詩文集』を編集した実践的な経験を持っている神田喜一郎はより明確的に日本の漢文学の「二面性」を提出した。

第二節 「日本の漢文学」について

一、日本漢文学の定義

まず、日本の漢文学とは何か？この質問に対し、神田喜一郎は下記の通り述べた。

われわれは一般に「日本の漢文学」という言葉を何気なく使用している。もとより「日本の漢文学」とは、日本人が中国の文字を用い、中国の語法に従って創作した文学であることには間違いないが、それが「日本の漢文学」として成立するのは、千数百年の長い時代にわたって、そうした文学が日本文学の一環として、脈々と一つの流れを形成しながら、絶えず生生発展しているからである。そうでなければ、「日本の漢文学」なるものは、決して成立しないであろう³³⁷。

神田喜一郎が「日本の漢文学」に対する定義の通り、もとより我々が何気なく使用している「日本の漢文学」とは、日本人が中国の文字を使って、中国の語法に従って作った文学である。

西洋において、フランス人の書いたイギリス語の小説とか、イギリス人の作ったフランス語の詩とかいうものが存在しないではない。しかし、これまで「フランスの英文学」とか「イギリスの仏文学」とかいうものの存在は、まったく認められておらない。なぜならば、そういった作品は、単なる好事の徒が、たまたま自己一個の興味にまかせて創作したところの、いわば離れ離れの孤立した作品たるにとどまって、いまだ国民文学の中に一つの流れを形成するだけのものに発展していないからである。

二、日本漢文学の特質：日本漢文学の二面性

その定義から見ると、神田喜一郎が指摘してきたように、「日本の漢文学」には二重性格がある。

「日本の漢文学」は、本質的には間違いなく日本文学に属する。その作者は日本人であり、その内容に盛られているのは、当然日本人の思想なり感情であるからである。

³³⁷ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.132。

しかし、その一面において、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。日本人は、日本に初めて中国文学が伝わって以来、これを先進の文学として崇め、その新しい傾向を追いつつ、ひたすら模倣擬作にこれつとめてきた。そうした事情の下に自然と形成せられてきたのが「日本の漢文学」である³³⁸。

まず、「日本の漢文学」というのはその作者が勿論日本人であり、その内容に盛られているものは当然日本人の思想なり感情であるため、本質的には間違いなく日本文学に属する文学である。一方では、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。要するに、日本の漢文学は中国文学の影響を受け入れながら、日本漢文学独自の発展を成し遂げてきた。

「日本の漢文学」なるものは、じつに世界文学史上、まったく他に類例を見ないユニークな存在である。ともかく「日本の漢文学」には、こうした二重性格こそ、実に「日本の漢文学」の持って生まれた著しい宿命的な特質に他ならない。

三、日本漢文学に対するとらえ方

上記した「日本の漢文学」の特質からくる当然の結果として、これまで「日本の漢文学」を取り扱う学者の態度には、相異なった二派がある。つまり、これを日本文学の一環として捉えようとするものと、中国文学の支流として捉えようとするものである。

前者の態度をとるものは、「日本の漢文学」の作品に、必ずしも中国の文字や語法の厳密性を要求しない。いわゆる和習の多い作品に対しても寛大に扱う。後者の態度をとるものは、すべてを中国文学の基準に照らして解決しようとする。前者の例としては、古いところでは『日本霊異記』、『将門記』、少し降っては『明衡往来』などというものをはじめ、近いところでは江戸時代の末期に流行した狂詩のごとき、もともと正確な中国の文章として書くことを意図しないで書かれた作品までも、これを「日本の

³³⁸神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.133。

漢文学」の範囲に摂取しようとするのである。そうして一切の解釈や評価は、純粋な日本文学の一環として行われる。

後者の態度をとるものは、すべてを中国文学の基準に照らして解決しようとする。この点においては、前者とは著しく対照的である。したがって一概に「日本の漢文学」といっても、それぞれの立場によって、おのずから「日本の漢文学」として取り上げる作品の範囲も異なってくるし、またその作品に対する評価も大きく異なってくる。

本論は神田喜一郎の日本漢文学史論について日本漢文学史を論考する。

第三節 日本漢文学史

日本漢文学史について、神田喜一郎は漢文学の黎明期、奈良朝の漢文学、平安朝の漢文学、五山文学、江戸時代の漢文学、漢文学の衰滅など六つの時期に分けた。

一、飛鳥時代の漢文学：日本漢文学の黎明・萌芽期

日本に初めて漢文学の黎明ともいふべきものが萌してきたのは、いわゆる飛鳥時代（崇峻天皇5年～和銅天皇3年、つまり紀元592年～710年の118年間）、すなわち推古朝になってからである。

これより前、大体紀元3世紀にあたる応神天皇の治世に百済から『論語』と『千字文』とが博士王仁によってもたらされたという伝説がある。そうして漢文学の黎明期をこの時代に擬する学者が少なくない。その理由として、これより前、『論語』と『千字文』など漢籍が伝えられてきたからである。

それに対する神田喜一郎の反対理由は、『千字文』という書は中国南北朝時代、梁の周興嗣の作ったもので、6世紀の前半の著作である。それが3世紀に伝えられるはずがない。要するに、『千字文』は六世紀の後半あたりに伝えられたものである。大体欽明天皇の治世にあたることになる。

（一）純文学に属する作品は、まだほとんど表れなかった。

中国において、梁の沈約の書いた『宋書』の中の「夷蛮伝」に載せてある倭王武が

宋の順帝に上ったという表文のことである。この表文は、実に日本最古の漢文となるわけで、現にそう見て少しも疑わない学者もある。

しかし、その文章はあまりにも堂々とした駢体文で、当時の日本人の作ったものとは到底考えられない。この文章は、おそらく一代の文豪と言われた沈約が『宋書』を書いた時に潤色したものに相違ない。日本に漢文学の黎明のきざしてきたのは、やはり飛鳥時代になってからであるとするのが穏当であろう。

法興6年、即ち推古天皇の4年（596）に、聖徳太子が百済から来た恵聡法師及び葛城臣を従えて、伊豫の道後の温泉に遊ばれたとき、その記念として湯岡の側に建てられた碑の文章である。大体は温泉の靈妙な効能を讃歎したものであって、いかにも中国の六朝時代に流行した駢体文を極力模倣しようとしたものである。この道後の温泉の碑文に六朝の文気がうかがいうるが、北周の文豪庾信「温湯碑」という文章を手本となった可能性がある。駢体文として後世の上に欠陥があるし、措辞またはなはだ生硬である。おそらく作者は駢体文の法則を十分に消化していなかったのみならず、これだけの内容のある駢体文を書くには、その文才学力ともに足らなかったものであろう。

飛鳥時代の漢文として一般に大きく取り上げられているものに、名高い聖徳太子の「十七条憲法」があり、また法隆寺金堂の釈迦三尊像をはじめ、いろんな仏像に見る造像記があるが、これらの文章は、実は純文学的な作品とは言えない。

こうした造像記といい、「十七条憲法」といい、いずれも実用的な文章は、道後の温泉の碑文のごとく美辞麗句を彫琢しようとしたものよりも、その巧拙という点では勝っている。この飛鳥時代には漢文学の素養が、純文学的な作品を生み出すまでにはまだ成熟していなかったのであろう³³⁹。

ここに言う純文学については、神田喜一郎の後輩である中国文学の泰斗と仰がれた吉川幸次郎はその『中国文学史の時代区分』において、中国の文学史は四つの時期に分けることが出来ると主張し、その第一時期は秦の始皇帝が、最初の統一帝国を作るまでの時期、つまり前三世紀以前の時期であって、それは前文学史の時代であると総括することが出来ると指摘してきた。その時代区分の理由としては、「何となれば、文

³³⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 138。

学の意識が、まだはっきりした形では現れないからである」³⁴⁰ということである。

この時期の言語としてあるものは、「論語」「老子」など思想家の言語、及び思想家の一派であった儒家が、人間の規範として撰定した五経の言語であるが、五経の一つである「詩経」唯一つをのぞき、あとはすべて政治と倫理のための言語、すなわち人間の生き方についての主張をのべて他人を説得しようとする言語であるか、或いは歴史の言語、それも政治なり倫理についての主張を成立させる前提として、人間の生活についての事実を記録する言語である。要するに言語は意思の伝達のためであり、「詩経」だけが感情の表白としてある。また「詩経」だけが韻文であり、ほかはみな散文である。且つその「詩経」さえも、政治への遠まわしの批判として読みえる点が重視されている。

上記により、吉川幸次郎が言った「純文学」とは、作品に用いられた表現は政治と倫理のための言語、すなわち人間の生き方についての主張をのべて他人を説得しようとする意思の伝達のためである言語ではなく、「詩経」のような感情の表白であるということである。

(二) 純文学的な作品の出現

純文学的な作品の出現するのは、飛鳥時代から更に50年そこそこの歳月を経過した、いわゆる近江朝を待たねばならなかった。

この時代になって、初めて日本に日本の漢文学の開祖と言ってもよい漢詩作家大友皇子が現れた。その代表作としては『懷風藻』の開巻第一にその詩が二首載っている。いずれも五言絶句であるが、まことに堂々たる作品である。

大友皇子の弟の河島皇子、長子の葛野王と大津皇子など、近江朝から浄御原朝にかけて、これらの人々の活動は、飛鳥時代にきざしてきた日本の漢文学の黎明を一層明確なものに進めた。

それは飛鳥時代以来、中国に20年30年にも及ぶ長期の留学を終えて帰朝した高向玄理・僧旻・南淵請安などが、新しくもたらしかえった中国文化に対する知識が次第に醗酵せられ、それが大化の改新という未曾有の一大変革を契機に、ついに表面に現れ出たものである。

³⁴⁰ 吉川幸次郎：『中国文学史の時代区分』『吉川幸次郎全集』巻 25、東京：筑摩書房、1986年6月、p. 5。

二、奈良朝の漢文学：日本漢文学の成長期

日本の漢文学は、奈良朝に入るとともに、ますます発展の一路をたどった。広義では、710年（和銅3年）に元明天皇によって平城京に遷都してから、794年（延暦13年）に桓武天皇によって平安京に都が遷されるまでの84年間。狭義では、同じく710年から、784年（延暦3年）に桓武天皇によって長岡京に都が移されるまでの74年間を指す。当時の貴族社会における中国文化に対する憧憬がますます熾烈を加え、それとともに遣唐使が奈良朝74年間に三たびも派遣せられ、中国文化の接收が急速度に進んだのが、その大きな原因である。

（一）宮廷文学の発展

奈良朝時代において、多く読まれた中国の文学作品の一つは中国文学の古典である『離騷』『文選』『庾信集』と連なる一類である。また、多く読まれた中国の文学作品のもう一つは『太宗文皇帝集』『許敬宗集』という唐の宮廷を中心とした当時の新文学である宮廷文学である。

その故に、奈良朝時代の漢文学の主流をなすものは詩である。それは宮廷文学と言ってよいだろう。なぜかという、当時の現存する日本最古の漢詩集『懷風藻』を見ると、それに収められた作品の大半は、宮廷におけるいろんな宴に侍して作ったとか、天子の駕に扈従してどこかへ遊んだとか、そういった題のもとに作られたものであって、中には応制の作、即ち天子の命によって作ったという詩も少なくない。

奈良朝時代の漢文学の主流をなしている漢詩は、大体六朝の末、すなわち梁・陳から初唐にかけて行われた詩風を学んだもので、実は文学としてそう優れたものではない。もとより一種の台閣体ともいべき文学であるから、特徴としては平正典雅であり、奇抜な構想とか、激越な感情とか、そういったものを求めることができない。用語が生硬で、風趣に乏しいのが目立つ。あまりにも退屈な凡作の多いのは遺憾である。が、中には佳句もないではない。その代表的な作としては下記の表 8 通りである。

漢詩人	代表的な漢詩
中臣大島	葉落山逾静。風涼琴益微。
百済和麿	芳梅含雪散。嫩柳帯風斜。
刀利康嗣	金堤拂弱柳。玉沼汜輕鱗。

(表 8 筆者作成)

いずれも佳句と言えるだろう。そのようなものは多少あるが、全編整った完作は確かに少ない。

ある中国の学者は『懐風藻』に載せる紀末茂の「臨水観魚」(詩の内容は下記通り)と題する一首を完作として挙げ、「直ちに丘希範・柳文暢の一派に似たり」と褒めたことがある。丘希範とは丘遲、柳文暢とは柳惲のことで、いずれも梁の詩人である。それに対して、神田喜一郎はこの紀末茂の詩は、じつは陳の張正見の詩をほとんどそのまま剽窃したものだ³⁴¹と指摘した。

臨水観魚³⁴² 水に臨んで魚を観る

結宇南林側 宇を結ぶ 南林の側
 垂釣北池澗 釣を垂る 北池の澗
 人来戯鳥没 人来りて戯鳥は没し
 船渡緑萍沈 船渡りて緑萍は沈む
 苔揺識魚在 苔揺いで魚の在るを識り
 縉尽覚潭深 縉尽きて潭の深きを覚る
 空嗟芳餌下 空しく嗟く 芳餌の下
 独見有貪心 独り貪心有るを見るを

上記のことを見ても、奈良朝時代の漢詩が、まだまだ幼稚なものであったことがわかる。漢詩の作家も少なかった。『懐風藻』に見える作家は、わずか 64 人に過ぎず、その作品も 120 篇を数えるのみである。漢詩を作るということは、当時にとってはよ

341 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 144。

342 与謝野寛等：『日本古典全集、懐風藻、凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝麗藻』、東京：日本古典全集刊行会、1926 年 5 月 3 日、p. 17。

ほどのことであつたらしい。

奈良朝時代の漢文学として、漢詩に次ぐものは漢文の作品である。これには純文学に属しないものがあるが、概していうと、その出来栄えは漢詩に勝っている。純文学に属する漢文の作品は次の通りである。

純文学に属する漢文の作品はまず挙げられるのは元明天皇の和銅五年に太安万侶（?—養老7年〔723〕）が『古事記』を撰録して上った表文（即ち上表文、上書ともいう）、『懷風藻』の序文、『東大寺献物帳』の首に載せられた序文及び『懷風藻』の詩に作者自らその詩を作った由来を書いた序などである。

1、『古事記』上表文³⁴³

臣安萬侶言 夫混元既凝 氣象未效 無名無爲 誰知其形 然乾坤初分 參神作造化之首 陰陽斯開 二靈爲群品之祖 所以出入幽顯 日月彰於洗目 浮沈海水 神祇呈於滌身 故太素杳冥 因本教而識孕土產鳴之時 元始綿 賴先聖而察生神立人之世 寔知懸鏡吐珠 而百王相續 啖劔切蛇 以萬神蕃息歟 議安河而平天下 論小濱而清国土 是以番仁岐命 初降于高千嶺 神倭天皇 經歷于秋津嶋 化熊出爪 天劔獲於高倉 生尾遮徑 大鳥導於吉野 列攘賊 聞歌伏仇 即覺夢而敬神祇 所以稱賢后 望烟而撫黎元 於今傳聖帝 定境開邦 制于近淡海 正姓撰氏 勒于遠飛鳥 雖步驟各異 文質不同 莫不稽古以繩風猷於既頽 照今以補典教於欲絕

暨飛鳥清原大宮 御大八洲天皇御世 潛龍體元 雷應期 聞夢歌而相纂業 投夜水而知承基 然天時未臻 蟬蛻於南山 人事共洽 虎步於東国 皇輿忽駕 浚渡山川 六師雷震 三軍電逝 杖矛舉威 猛士烟起 絳旗耀兵 凶徒瓦解 未移浹辰 氣自清乃放牛息馬 愷悌歸於華夏 卷旌戈 詠停於都邑 歲次大梁 月踵俠鍾 清原大宮 昇即天位 道軼軒后 德跨周王 握乾符而摠六合 得天統而包八荒 乘二氣之正 齊五行之序 設神理以獎俗 敷英風以弘国 重加智海浩瀚 潭探上古 心鏡煌 明覩先代

於是天皇詔之 朕聞諸家之所 帝紀及本辭 既違正實 多加虛偽 當今之時 不改其失 未經幾年 其旨欲滅 斯乃邦家經緯 王化之鴻基焉 故惟撰録帝紀 討覈舊辭 削僞定實 欲流後葉 時有舍人 姓稗田名阿禮 年是廿八 爲人聰明 度目誦口 拂

³⁴³ 經濟雜誌社編：『古事記』、『国史大系 古事記・祝詞・風土記』7卷、東京：經濟雜誌社、1898年8月6日、p.5～8。

耳勒心 即勅語阿禮 令誦習帝皇日繼 及先代舊辭 然運移世異 未行其事矣

伏惟皇帝陛下 得一光宅 通三亭育 御紫宸而德被馬蹄之所極 坐玄扈而化照船頭之所逮 日浮重暉 雲散非烟 連柯并穗之瑞 史不絕書 列烽重譯之貢 府無空月 可謂名高文命 德冠天乙矣

於焉惜舊辭之誤忤 正先紀之謬錯 以和銅四年九月十八日 詔臣安萬侶 撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭 以獻上者 謹隨詔旨 子細採 然上古之時 言意並朴 敷文構句 於字即難 已因訓述者 詞不逮心 全以音連者 事趣更長 是以今或一句之中 交用音訓 或一事之內 全以訓錄 即 辭理見 以注明 意况易解更非注 亦於姓日下謂玖沙訶 於名帶字謂多羅斯 如此之類 隨本不改 大抵所記者 自天地開闢始 以訖于小治田御世 故天御中主神以下 日子波限建鵜草葺不合尊以前 爲上卷 神倭伊波禮毘古天皇以下 品陀御世以前 爲中卷 大雀皇帝以下 小治田大宮以前 爲下卷 并錄三卷 謹以獻上 臣安萬侶 誠惶誠恐頓首頓首

和銅五年正月二十八日 正五位上勳五等太朝臣安萬侶謹上

2、『懷風藻』の序文

懷風藻序³⁴⁴

懷風藻の序

逖聽前修、遐觀載籍

逖く前修を聽き、遐に載籍を觀るに

襲山降蹕之世、樞原建邦之時

襲山降蹕の世に、樞原建邦の時に

天造艸創、人文未作

造艸創にして、人文未だ作らずありき。

至於神后征坎品帝乘乾

神后坎を征し品帝乾に乗じたまふに至りて

百濟入朝啓於龍編於馬厩

百濟入朝して龍編を馬厩に啓き

高麗上表圖烏冊於鳥文

高麗上表して烏冊を鳥文に圖く。

王仁始導蒙於輕島、

王仁始めて蒙を輕島に導き

辰爾終敷教於譯田

辰爾終に教を譯田に敷く。

遂使俗漸洙泗之風、

遂に俗を洙泗の風に漸め、

人趨齊魯之学

人を齊魯の学に趨かしむ。

³⁴⁴ 小島憲之校注：『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』、『日本古典文学大系』 69 卷、東京：岩波書店、1964 年 6 月、pp. 58～62。

逮乎聖德太子、	聖德太子に逮びて、
設爵分官、肇制禮義	爵を設け官を分かち、肇めて禮義を制めたまふ。
然而、專崇釋教、未遑篇章	然すがに専ら釋教を崇み、未だ篇章に遑もなかりき。
及至淡海先帝之受命也	淡海先帝の命を受けたまふに及至びて、
恢開帝業、弘闡皇猷	帝業を恢開し、皇猷を弘闡したまふ。
道格乾坤、功光宇宙	道乾坤に格子、功宇宙に光れり
既而以為、調風化俗、	既にして以為ほしけらく、風を調へ俗を化むることは、
莫尚於文	文より尚きことは莫く、
潤德光身、孰先於学	徳を潤らし身を光らすことは、孰れか学より先ならむ。
爰則、建庠序、徵茂才、	爰に則ち、庠序を建て、茂才を徵し、
定五禮、興百度	五禮を定め、百度を興したまふ。
憲章法則、規模弘遠、	憲章法則、規模弘遠、
復古以來、未之有也	復古より以來、未だ有らず。
於是、三階平煥、四海殷昌	是に三階平煥、四海殷昌、
旒纒無為、巖廊多暇	旒纒無為、巖廊暇多し。
旋招文学之士、時開置醴之遊	旋文学の士を旋招き、時に置醴の遊びを開きたまふ。
當此之際、	此の際に當りて、
宸瀚垂文、賢臣獻頌	宸瀚文を垂らし、賢臣頌を獻る。
雕章麗筆、非唯百篇	雕章麗筆、唯に百篇のみに非ず。
但時經亂離、悉從煨燼	但し時に亂離を経て、悉く煨燼に従ふ
言念湮滅、軫悼傷懷	言に湮滅を念ひ、軫悼して懷を傷ましむ
自茲以降、詞人間出	茲れより以降に、詞人間出す。
龍潛王子、翔雲鶴於風筆	龍潛の王子、雲鶴を風筆に翔らせ、
鳳翥天皇、泛月舟於霧渚	鳳翥の天皇、月舟を霧渚に泛かべたまひ、
神納言之悲白鬢、	神納言が白鬢を悲しび、
藤太政之詠玄造	藤太政が玄造を詠める
騰茂實於前朝、	茂實を前朝に騰げ、
飛英聲於後代	英聲を後代に飛ばす。
余以薄官餘閒、遊心文囿	余薄官の餘間を以ちて、心を文囿に遊ばす。

閱古人之遺跡、	古人の遺跡を閲、
想風月之舊遊	風月の舊遊を想ふ。
雖音塵眇焉、而餘翰斯在	音塵眇焉と雖も、餘翰斯に在り。
撫芳題而遙憶、	芳題を撫でて遙かに憶ひ、
不覺淚之泫然	涙の泫然るるを覺らず。
攀縈藻而遐尋、	縈藻を攀ちて遐に尋ね
惜風聲之空墜	風聲の空しく墜なむことを惜しむ。
遂乃收魯壁之餘磊、	遂に乃ち魯壁の餘磊を收め
綜秦灰之逸文	秦灰の逸文を綜べたり。
遠自淡海、云暨平都	遠く淡海自り、云に平都に暨ぶまで、
凡一百二十篇、勒成一卷	凡て一百二十篇、勒して一卷と成す
作者六十四人、具題姓名、	作者六十四人、具に姓名を題し、
并顯爵里、冠于篇首	并せて爵里を顯はし、篇首に冠らしむ。
余撰此文意者、	余が此の文を撰ぶ意は、
為將不忘先哲遺風	將に先哲の遺風を忘れずあらむと為なり。
故以懷風名之云爾	故懷風を以ちて名づくる云爾。
于時天平勝寶三年歲在辛卯冬十一月也。	

時に天平勝寶三年歲辛卯に在る冬十一月なり。

(二) 仏教文学の発展

この時代に仏教が栄え、多くの仏教文学書が読まれたが、立派な仏教文学を生み出すことはなかった。当時の仏教文学として残っているのは、いろんな写経の跋文くらいに過ぎない。

1、薬師寺と長谷寺の銘文について

奈良朝以前のものであるが、大和の薬師寺の東塔の檫の銘とか、長谷寺の法華説相の圖の銅板の銘は、いずれも古来有名であるが、前者は、長安の西明寺の鍾銘の文句を取り入れて作ったものであり、後者は「瑞石像銘」を学んだ痕跡がある。いずれも、純粹の漢文学とは言えないだろう。

2、淡海三船：「大安寺碑文」と『唐大和上東征伝』

奈良朝の仏教文学といえる作品はまず奈良朝末期に出た漢学の大家淡海三船（養老6年〔722〕—延暦4年〔785〕）の撰した「大安寺碑文」が、立派な大作である。その碑文の原石を失っているが、碑文の内容は文章で今日に伝わっている。淡海三船のもう一つの著作である『唐大和上東征伝』がある。それは天平勝宝6年（754）に来朝した中国僧鑑真に関する伝記である。

三、平安朝の漢文学：日本漢文学の最初の盛期

平安時代：桓武天皇の延暦13年（794）、平安京、すなわち今の京都に都が定めてから、源頼朝が鎌倉に幕府を開く（1192）まで、凡そ400年間を平安時代という。

この何でも先進国の新しい傾向を追うということは、昔も今も変わらぬ日本人の特性と見えて、平安朝に入ると、初唐よりもさらに新しい時代の文学を手本として学んだようである。

この時代は日本の漢文学という立場から見ると、正式に遣唐使の廃止が決定せられた宇多天皇の寛平6年（894）あたりを界として、前後2期に分かれる。平安前期の漢文学は主に宮廷文学であり、平安後期の漢文学はほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった。

（一）平安前期の漢文学

前述したとおり、神田喜一郎の考えでは、平安前期の漢文学は桓武天皇の延暦13年（794）から、正式に遣唐使の廃止が決定せられた宇多天皇の寛平6年（894）当たりまでの100年間の漢文学のことをいう。前期には、奈良朝時代のあとを受けて、日本の漢文学はますます隆盛の運に向かった。この期の中心をなす嵯峨天皇の治世は、その絶頂をなしたとも言う³⁴⁵。『日本国見在書目録』の記した漢籍により、大体平安前期に日本に渡来していた漢籍は、唐人の詩文集である太宗のときに出た上官儀、それから王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王のいわゆる初唐の四傑をはじめ、李嶠・劉希夷、それにやや遅れて出た陳子昂、及び杜審言、沈宋と並び稱せられる沈佺期に宋之問、

³⁴⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.148。

盛唐になって王維・李白・王昌齡、最も新しいところでは白居易・元稹などの集である。また総集として『河嶽英靈集』も見えている。『河嶽英靈集』とは唐の殷璠が編纂した盛唐の詩を収めた唐詩選集であり、その序に「粵若王維、王昌齡、儲光羲等二十四人、皆河嶽英靈也、此集便以《河嶽英靈》為號」³⁴⁶と記した。神田喜一郎の述べたように、平安前期において、以上のような唐人の詩文集が渡来していたということは、当時の漢文学を考える上に極めて重要なことで、実際、当時の詩文を読むと、その影響の著しいものがある³⁴⁷。

平安前期の漢文学はまた二つの時期に分かれる。第一は嵯峨天皇の弘仁(810～823)を中心とした時代であり、第二は清和天皇の貞観(859～876)を中心とした時代である。

まず第一期は嵯峨天皇の弘仁(810～823)を中心とした時代、この時代をもって日本漢文学の一つのピークを迎えてきた。

第一期の漢文学は、この時代に編纂せられた三つの勅撰集によってその大体を窺うことができる。三つの勅撰集とは、弘仁5年(814)の頃に小野岑守(寶龜8年〔777〕～天長7年〔830〕)が編纂した『凌雲集』、おなじく弘仁10年(819)に藤原冬嗣(寶龜6年〔775〕～天長3年〔826〕)らが編纂した『文華秀麗集』、および淳和天皇の天長4年(827)に良岑安世らの編纂した『経国集』である。

『凌雲集』は、平安時代初期の弘仁5年(814年)に嵯峨天皇の命により編纂された日本初の勅撰漢詩集。全1巻。正式名称は凌雲新集。小野岑守、菅原清公らによって編纂された。作者は平城天皇、嵯峨天皇、大伴親王(後の淳和天皇)ら23人で、全90首。なお、後に1首が加えられ、91首となって現在に伝わっている。

『文華秀麗集』は、平安時代初期の弘仁9年(818年)に、嵯峨天皇の勅命により編纂された勅撰漢詩集。全3巻。先に編纂された『凌雲集』に続くもので、勅撰三集の一。藤原冬嗣、菅原清公などにより編纂された。作者は嵯峨天皇、淳和天皇をはじめ28人に及び、渤海使節や女流詩人の作品も収めるという。もともとは148首が収められていたが、内5首は伝わらない。

『経国集』は、平安時代初期の天長4年(827年)、淳和天皇の命により編纂された

³⁴⁶王克讓：『河嶽英靈集注』、成都：巴蜀書社、2006年7月第1版、p.1。

³⁴⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.149。

勅撰漢詩集。良岑安世、菅原清公らが編纂。作者は、淳和天皇、石上宅嗣、淡海三船、空海ら。なお、もともと 20 巻あったうち、現存するのは第 1 巻など計 6 巻に過ぎない。

『経国集』は、前二者とは違って、上は文武天皇の慶雲から下は淳和天皇の天長に及ぶ 120 余年間に作られた詩文を集めたもので、序文に言うところによると、作者は 178 人、賦 17 首、詩 917 首、序 51 首、対策 38 首を収とある。

神田喜一郎は著書『日本における中国文学 I—日本填詞史話 上一』の「二 填詞の濫觴」の初めに次の通り書いてある。

わが邦で始めて填詞を作ったのは、果たしてだれであらうか。

平安朝の初期、委しくいふと淳和天皇の天長 4 年である。良岑安世が勅を奉じて、当時の碩学滋野貞主等をして奈良朝以来当時に至るまでの詩文を編纂せしめた。総集『経国集』である。その巻 14 に嵯峨天皇の御製の漁歌子五闋と、それに奉和した三品有智子内親王及び滋野貞主の作七闋とが見えている。先づ御製の五闋を『経国集』に見える通りの体裁で題目をも併せて掲げてみよう。

雑言。漁歌。五首。每歌用带字 太上天皇

江水渡頭柳亂絲，漁翁上船煙景迷，
乘春興，無厭時，求魚不得帶風吹。
漁人不記歲月流，淹泊沿回老棹舟，
心自效，常狎鷗，桃花春水帶浪遊。
青春林下度江橋，湖水翩翩入雲霄，
煙波客，釣舟遙，往來無定帶落潮。
溪邊垂釣奈樂河，世上無家水宿多，
閑釣醉，獨棹歌，洪蕩飄飄帶滄波。
寒江春曉片雲晴，兩岸花飛夜更明，
鱸魚膾，蓴菜羹，餐罷酣歌帶月行。

これこそ実にわが邦に於ける填詞の濫觴である。江戸末期に出た田能村竹田がその名著『填詞図譜』の中に、わが邦に於ける填詞の開祖として兼明親王を推して以来、それが久しく学界の通説となってきたが、嵯峨天皇にかかる御製のある以上、その説

の訂正せらるべきことはいふまでもない。日本漢文学史上、填詞の開祖としては、当然嵯峨天皇を押さねばならぬ。この事実を初めて指摘したのは先輩青木迷陽（正児）博士である³⁴⁸。

当時の人々が新しい中国の文学作品をいかに喜んだかは、嵯峨天皇に填詞の作のあることによってもわかってきた。

その嵯峨天皇の毎首の第5字目にことごとく「帶」の字が用いてある五首連作になる『漁歌』を拝読すると、唐の張志和の『漁歌子』を模倣せられたものであることは明らかである。張志和の原作は、唐の李德裕の書いた『玄真子漁歌記』をはじめ、五代の無名氏の『尊前集』や宋の計有功の『唐詩紀事』などの書に見えているが、五首の連作になっていて、毎首の第五字目にことごとく「不」の字が用いてある。張志和という人物は中国中唐の詩人。婺州（浙江省）の人。字、子同。肅宗のとき待詔翰林に進んだが、事に坐して左遷され、のち太湖のあたりに隠遁して煙波釣徒と称した。書画、音楽にもすぐれ、またその詩はほとんど現存しないが、『漁歌子』など詞5首が残されており、中唐期に文人が詞の創作にあたった先駆的存在となっている。張志和は名高い顔真卿ととくに親しく、真卿が湖州の刺史をつとめていたとき、これを湖州に訪ね、盛んに翰墨の妙技を揮うたという。『漁歌子』を作ったのは、すなわちその時のことで、唐の代宗の大歴9年（774）秋8月と推定せられるのである³⁴⁹。神田喜一郎の考証によると、嵯峨天皇の『漁歌』を作ったのは張志和が『漁歌子』を作ったのと、相距ることわずかに49年で、当時としては実に早く中国における新興の詩体が伝えられたものである。その考証の推定は次のとおりである。

嵯峨天皇が「漁歌」を作られたのは、『経國集』にこの「漁歌」を載せ、その題下に「太上天皇在酔しと注しているところから、天皇の御在位中の作品たることが明らかで、すなわち大同4年（809）から弘仁14年（823）に至る時代ということになる。ところがこの天皇の「漁歌」の作には、有智子内親王（大同2年〔807〕～承和14年〔847〕）の奉和の作があって、おなじく『経國集』に載っている。天皇と内親王との唱和の詩は、この「漁歌」のほかにも多く『経國集』に載っているが、それらの唱和の詩は、

³⁴⁸神田喜一郎：『二 填詞の濫觴』、『日本における中国文学 I—日本填詞史話 上一』、『神田喜一郎全集』巻6、東京：株式会社同朋舎、1984年4月30日、p.15～16。

³⁴⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.152。

弘仁 14 年 2 月、天皇が賀茂齋院に行幸せられた際、當時わずかに十七歳に過ぎなかった内親王が、その日の課題「春日山莊詩」の七言律詩を賦して、痛く天皇の御感をえたのを最初とするというから、「漁歌」の唱和の行われたのは、必然的に弘仁十四年に限定せられる結果になる³⁵⁰。それも神田喜一郎が日本の漢文学史論と漢文学の中国的要素に関する論考を行うときに非常に重視する考証方法である。

以上の三つの勅撰集の詩を見ると、さすがに『懷風藻』の詩とはいろいろな点において著しく変わってきていることが感ぜられる。神田喜一郎の述べたように、『懷風藻』には五言詩が大半を占めているのに対し、この三つの勅撰集には七言詩が圧倒的に多くなっている。このことは前人のすでにしばしば指摘したところであるが、単にそうした形式上の変化ばかりに止まらない。もっと重要なことは格調の変化である³⁵¹。その例として、神田喜一郎はつぎの例を挙げた。

初唐の四傑をはじめ、當時の諸家が喜んで作ったものに七言歌行体の樂府がある。多くは四句ごとに韻を換え、聲調宛転、あたかも珠の盤を転ぶがごとく、なだらかに叙述を運び、幾段にも及ぶ長篇である。中国に留学して帰ってきたばかりの空海に命じて、その中国からもたらした『劉希夷集』を二度も書写せしめておられることから見ると、天皇はこの七言歌行体の樂府を愛好せられたらしい。

劉希夷（永徽 2 年〔651〕～調露元年〔679〕）というのは中国唐代の詩人。字は庭芝、延芝。一説に名が庭芝で字が希夷ともいわれる。汝州（河南省汝州市）の出身。幼くして父を失い、母と共に外祖父のもとに身を寄せ 20 歳頃まで過ごした。容姿はすぐれており、物事にこだわらない性格なので素行が悪かった。酒と音楽を好み、琵琶の名手であった。675 年（上元 2 年）進士となるが仕官せずに各地を遊覧した。“年年歳歳花相似 歳歳年年人不同”で有名な詩「代悲白頭翁」とか「公子行」とかが代表作。詩集 4 巻がある。

こういう風に、平安朝初期には、一面初唐のものが喜ばれたが、しかしまたその一面において、七言律詩などになると、盛唐から中唐にかけて行われた、王維・孟浩然・常建・儲光義と連るところの、沖澹にして、しかも深遠な趣を具えた一派の作に近い

³⁵⁰神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、pp. 152～153。

³⁵¹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 150。

ものがある。これらの詩は、おそらく極めて清新なものとして、當時の人びとに歓迎せられたのであろう³⁵²。

以上の三つの勅撰集のほか、僧空海の『文鏡秘府論』の現れたことも注意すべきことである。唐代中期の長安に留学した空海が、帰国後、日本の弘仁年間（810年～823年）に完成させたとされる。それに対し、神田喜一郎は「日本における最初の文学論で、その中国文学批評史や中国修辞学史の上に遺した功績は大きい。」³⁵³と高く評価した。取り上げられている諸家の評論の取舍選択に空海の主観が入っているとはいえ、そこに引用されている文章はすべて唐土の文人のものであり、彼自身が執筆したことが確実であるのは、各巻に見える序文のみである。空海は、本書に関しては「著者」ではなく、編者の位置にあると言える。全六巻の構成は、天・地・東・南・西・北に分かたれている。全六巻の内容は、天・地・東・南・西・北の順で見たとき、冒頭の天巻では中国語（古代漢語）に見られる声調変化、四声の原理を説き、地巻では詩の形式や描くべき題材について述べる。天巻では劉善経の声律論、地巻では王昌齡・皎然・上官儀らの詩論を基本に置く。続く東巻は対句の種類と用法を解説し、南巻は文章のあるべき形、またそれを作る際の心構え等を述べ、西巻は韻律上の避けるべき事柄を論じ、そして最終の北巻は対句に関して守らねばならぬ法則のまとめを綴っている。神田喜一郎の述べたように、いずれにしても、これだけの書は、中国においても梁の劉勰の著した『文心彫龍』を除けば、前後に一つもないではないか。日本の漢文学として、中国に向ってもっとも誇りうる書の一つである。なお空海は漢文を善くし、その詩文をあつめたものに『性霊集』があり、そのほかにも『三教指歸』という儒・佛・道の三教を論じたおもしろい著術もあって、その才筆を窺うことができる。『性霊集』は、空海（弘法大師）の漢詩文集。正しくは『遍照發揮性霊集』。空海の詩、碑銘、上表文、啓、願文などを弟子の真済が集成したもので、10巻からなる。正確な成立年は不明だが、遅くとも空海が没した承和2年（835年）をさほど下らない時期までに成立したとみられ、日本人の個人文集としては最古。10巻のうち巻八～巻十の3巻はやくに散逸し、現『性霊集』の巻八～巻十には、承暦3年（1079年）、仁和寺の濟

³⁵²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 151。

³⁵³神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 153。

暹が空海の遺文を収集して編んだ『続遍照發揮性靈集補闕鈔』3巻が充てられている。なお、済暹の『補闕鈔』は、散逸した巻八～巻十そのものの復元を図ったものではないし、後世の偽作と今日では判定されている作品もいくつか含んでいる。

上述したことにより、天皇は当時の文壇の領袖として、それにふさわしい文学の才を具えておられた。御製の今日に傳わるもの百首に近く、当時における第一の作家であったと思う。天皇の周圍に多くの文人があつまり、一時の盛を極めたのも當然といえよう。この時代をもって、日本の漢文学の一つのピークとする。

第二期は清和天皇の貞観（859～876）を中心とした時代である。平安前期の半ばごろになると、同じく宮廷文学といっても、いくらか風調が変わってきた。その原因となったのは、名高い白居易、すなわち白樂天の詩文が日本に渡来したことである。

白居易の集が渡来した証拠に関する通説は大江匡房（長久2年〔1041〕～天永2年〔1111〕）の談話を筆記した『江談抄』に見える。伝えられるところによると、嵯峨天皇は当時いち早く白氏の集を入手せられ、その中から「閉閣唯聞朝暮鼓。登楼空望往来船。」（閣ヲ閉ジテ唯聞く朝暮の鼓 楼ニ登ツテ遙カニ望ム往来ノ船）の一聯を取り出し、わざと「空」の字を「遥」と改め、小野篁の才を試みられたという³⁵⁴。が、神田喜一郎はそれに対し、「これは大江匡房の談話を筆記した『江談抄』に見える誰も周知の説話であるが、歴史的事実とは認め難い。従ってこれは嵯峨天皇の治世に白居易の集が渡来した証拠とはならないのであって、その渡来の年代は、もう少し降ると思う。」と反論した。神田喜一郎は「現存の確實な史料から考えられるところでは、仁明天皇の承和5年（838）をもって最初とする。すなわち大宰少武藤原岳守（大同3年〔808〕～仁寿元年〔851〕）が大唐人の貨物を調べて元白の詩筆をえたという『文徳實録』（仁壽元年9月の條）の記事より古いものはない。」³⁵⁵主張した。それから後、しばしばいろいろな人によって伝えられた。ともかく、なかでも承和14年（847）に僧慧萼が

³⁵⁴ その通説はたぶん岡田正之の主張と思う。岡田正之は著書『日本漢文学史 増訂版』（吉川弘文館、昭和29年12月10日発行）のp.174において、「嵯峨帝が白氏文集を秘蔵せられ、河陽宮に行幸の時、『閉閣唯聞朝暮鼓。登楼空望往来船。』の句を小野篁に示し給ひしに、篁は遥を改めて空に作る最も妙ならんと奏せしに、嵯峨帝は『卿の詩情は樂天に同じ。』と宣ひし事は江談抄卷四に、篁は見ゆる有名なる逸話なり。之に據れば、嵯峨帝御在位中か、又御讓位後なるかは明ならざれども、其の承和五年以前とするには異論無かるべし。承和11年〔1504〕頃に、我が邦の僧惠萼が唐に在りて傳寫し齎せるものは、後に金澤文庫本となれり。之等は白氏の生存中文集の我が邦に傳はりしことを示すものなり」がある。

³⁵⁵ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.156。

中国から『白氏文集』をもたらしかえった事実は、その『白氏文集』の展転伝写を経た古鈔本が、永く金澤文庫に伝えられたことによって、特に世に知られている。

ともかく承和以来、白居易の詩文は俄に日本に流行して、ほとんど一世を風靡するに至った。その理由はもちろんいろいろあろうが、神田喜一郎は主に三つがあると考えた。一つは白居易の詩が極めて平易で、日本人にも理解し易く、その次はその作品の中には、「長恨歌」や「琵琶行」のような艶にして美しい小説的興味の深い叙事詩などもあって、平安朝の宮廷詩人の嗜好によく適合したからである。実際、白居易の詩は、中国においても、それとおなじ理由で夙く白居易の生存していた時代から流行し、揚・越の地方ではこれを特に印刷して売るものがあつた事実さえ伝えられている位である。第三はその詩のなかに盛られた當時の政治や社会の矛盾に対する辛辣な批判は、これまでの貴族文学にはまったく見出されなかつたもので、当時ようやくそれらの矛盾に目覚め、頭をもちあげはじめた庶民の共感をよんだのである。ところが白居易の詩の伝えられた頃の日本にも、貴族社会の間に藤原氏の勢力の異常な伸張に対する一種の反感があつて、いくらか政治や社会の矛盾を自覚するものがあつたところから、そういう意味において、白居易の詩はまた一部の不平の徒の間に喜ばれたとも想像せられるのである。ともかく白居易の集は、それが渡來するとまたたくの間に大変な流行を来した。平安朝前期の半ばを過ぎて出た島田忠臣とか都良香（承和元年〔834〕～元慶3年〔879〕）などは、白居易を崇拜すること、まさに神佛にもひとしいものがあつた。忠臣の「吟白舎人詩」と題した七言絶句とか、良香の「白樂天讚」と、題する一篇などは、その心情をよく物語っている。この忠臣・良香の二人は、もっともすぐれた當時の文人で、多くの作品を遺したが、その集を『田氏家集』とか『都氏文集』とか、いずれも白居易の『白氏文集』に擬した書名をつけているのを見ても、おそろしく思い半ばに過ぎるものがある。

この二人にややおくれて、名高い菅原道眞（承和12年〔845〕～延喜3年〔903〕）が出た。菅原道眞は、日本の平安時代の貴族、学者、漢詩人、政治家。参議・菅原是善の三男。官位は従二位・右大臣。贈正一位・太政大臣。忠臣として名高く、宇多天皇に重用されて寛平の治を支えた一人であり、醍醐朝では右大臣にまで昇った。しかし、左大臣藤原時平に讒訴され、大宰府へ大宰員外帥として左遷され現地で没した。死後天変地異が多発したことから、朝廷に祟りをなしたとされ、天満天神として信仰の対

象となる。現在は学問の神として親しまれる。なお道眞の詩文は、『菅家文草』12巻および『菅家後草』1巻に収められ、今日その詩470余首、文百50余篇が伝わっている。

道眞が白居易をよく学んだことは、もちろん忠臣・良香以上で、中国においても、これだけよく白居易を学んだものは、おそらくないであろう。かつて渤海國の使臣裴頴が來朝したとき、道眞と詩の唱和を試み、道眞の詩をもって白氏の体をえたものと称讃したというが、神田喜一郎はまことに當然の批評といえようと評価した。神田喜一郎の考えでは、道眞は、白居易ばかりを学んだのではなく、唐の温庭筠（飛卿）の詩を愛したとの説が『江談抄』に見えている。庭筠は、白居易に少しおくれて、晩唐時代に出た詩人である。名高い李商隱（義山）と並んで、世に温李と称せられ、その詩の艶麗なことをもって好評を博した。道眞が温庭筠のどういうところを愛したのかは明らかでないが、温庭筠は晩年失意の境遇に陥ったので、その詩にはおのずから一種の哀調があり、そういうところに道眞の胸に何か懸えるものがあったのではなかろうかと思う。庭筠の詩にいう、「誰か詞賦をもって雕輦に陪す、寂寞として相如は茂陵に臥す。」またいう、「草木の榮枯は人事に似たり、緑陰寂寞たり漢陵の秋。」これらは、じつに謫居にある道眞の言おうとした感懐ではなかったであろうか³⁵⁶。しかし、いずれにしても道員のもっとも私淑し傾倒したのは、何といても白居易であった。こうして白居易は、ますます盛行し、やがて平安朝後期に入るのである。

（二）平安後期の漢文学

後期になると、中国文学と隔絶された日本の漢文学は、おいおい日本化の方向を辿って、新しく一種の独自の境地を開いていった。大きな変貌を遂げるのである。日本の漢文学は、ほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった。日本の漢文学はこれまでと違って、平易な言葉を持って自由に思想なり感情を發表することをおぼえ、そこにだいぶ変化を生じてきた。平安後期の日本漢文学については、神田喜一郎先生は「せっかく白居易の詩に導かれて、自由に自己の思想や感情を表現するように向きかけてきた新傾向も、まったく挫折してしまい、一種のマネリズムに陥って、時代の降ると

³⁵⁶神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.158。

ともに、ますます低下していったと見るよりしかたがない。」³⁵⁷と述べた。

神田喜一郎の述べたように、自己の思想なり感情を率直に表現しようとする結果、その作品にはすでに一種の和習がほのみえてきている。これは日本の漢文学を中国文学の一支流と視るときには、大きな一つの欠陥になる。平安朝後期は、この欠陥のしだいに振大されてゆく時期で、これを漢文学の衰退時代と称しても差支えない。日本の漢文学に対しては衰退したが、日本文学の角度から考えてみれば一種の発展であると思う。

この時期の作品をあつめたものとしては、『扶桑集』『本朝麗藻』および『本朝文粹』『本朝続文粹』がある。このうち『扶桑集』と『本朝文粹』とには、平安朝前期に属する人の作品も見えているけれども、その主とするところは平安朝後期の作品である。

『扶桑集』は漢詩集。16巻。現存は残欠2巻。紀齊名撰。長徳年間（995～999）頃成立。光孝朝から一条朝までの詩人76人の作品を集めたという。現在、24人の詩102首が伝わっている。

『本朝麗藻』は漢詩集。2巻。上巻の一部と下巻が現存。高階積善撰。寛弘7年（1010）成立か。「扶桑集」に続いて、寛弘年間（1004～1012）の作品を集録。七言律が多い。主な作者は、一条天皇・具平親王・藤原伊周・藤原道長・藤原有国・大江以言など。寛弘期の詩の粹を集めたものとして尊重される。

『本朝文粹』は漢詩文集。14巻。藤原明衡撰。康平3年（1060）ごろの成立。嵯峨天皇から後一条天皇時代までの詩文427編を、「文選」の体裁にならって39項に分類して収める。詩は少なく、奏状・表・序が豊富で願文・諷誦文なども含む。主な作者は、大江匡衡・大江朝綱・菅原文時・紀長谷雄・菅原道真・源順・大江以言・慶滋保胤・兼明親王・都良香・紀齊名など。平安時代の文藻の粹を集め、後の文章家の模範となった。

『本朝続文粹』平安末期の漢詩文集。13巻。編者は藤原季綱というが、後人の手も加わっている。成立は保延6年（1140）以降、近衛天皇時代（1141～1155）か。「本朝文粹」の続編にあたるもの。藤原敦光・大江匡房・藤原明衡など後一条天皇時代以降（1016～）の作品、文章228編、詩四首から成る。続本朝文粹。

³⁵⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp. 159～160。

以上の諸書によって平安朝後期の作品を読むと、せっかく白居易の詩に導かれて、自由に自己の思想や感情を表現するように向きかけてきた新傾向も、まったく挫折してしまい、一種のマンネリズムに陥って、時代の降るとともに、ますます低下していったと見るより仕方がない。これは一方において、純粋な日本文学が発達して、もはや漢文学は、いわば告朔の餼羊で、そうした存在としてのみ価値を認められたに過ぎなかった結果と思う。ただ、この間において、醍醐天皇の皇子の兼明親王(延喜 14 年〔914〕～永延元年〔987〕)の作品「菟裘賦」の一篇だけは、特に立派であることを注意しておきたい³⁵⁸。

四、五山時代の漢文学：日本漢文学の第二の盛期

平安後期以来、日本の漢文学は久しく萎靡沈滞して振るわなかったが、中日両国の禅僧の往来が盛んになり、新しく中国の宋元の文学が輸入せられるようになったので、開花したのが五山文学である³⁵⁹。それに、神田喜一郎が言ういわゆる五山文学は主として京都の五山を中心とした禅僧の間に発達したもので、鎌倉時代の末期に起こり、ついで南北朝時代(1336～1392)に栄え、室町時代(1393～1573)の中期、いわゆる応仁の乱(1467～1477)あたりまで続いた文学のことである。

一般的に、中国の文学は駢体の文学と散体の文学との二つに分けることができる。六朝から唐代にかけて栄えたのは駢体の文学、唐代の中ごろから起こってきて、唐代に全盛に至るのは散体の文学である。神田喜一郎の言った通り、日本の飛鳥・奈良朝の昔から平安朝に至る漢文学は、駢体の文学を承け、五山文学は、この散体の文学を承けたのである。

五山時代の漢文学は、詩においては唐の李白・杜甫・韓愈を先覚者とし、宋代に入って欧陽脩・梅堯臣・蘇軾・黄庭堅・陳師道・陳與義・陸游・範成大・らの大家が輩出した。文においては、唐の韓愈、柳宗元の二人を先覚者とし、宋に入って欧陽脩・蘇軾・王安石・曾鞏らの大家が輩出した。五山文学は、即ちこれらの諸大家を規摹したもので、日本の漢文学としては、誠に新しく生面を開いたものということができた。

³⁵⁸神田喜一郎：『日本の漢文学』『墨林閑話』『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp. 159～160。

³⁵⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』『墨林閑話』『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10

(一) 五山時代前期の漢文学

従来の通説は五山文学の開祖が一寧一山となっているが。一寧一山は虎関師錬に先立って、後伏見天皇の正安元年（1299）、中国から日本に来た。台州臨海県（現在の浙江省台州市臨海市）の出身。姓は胡氏。幼くして出家し、律、天台宗を学んだ後、臨濟宗に転じ、天童山や浄慈寺などで修行を積み、阿育王寺の頑極行弥の法を嗣いだ。その後、環溪惟一らに参禅を続け、諸所を遊方した。博覧多識の学僧で、詩文をよくしたと言われておる。が、一寧一山の唯一の著書として現存する『一山国師語録』からは、五山文学の開祖と押さねばならぬ程の物は見当たらないようである。五山文学の開祖としては、やはり虎関師錬を押さすのが妥当であろう。

虎関師錬（弘安元年4月16日〔1278年5月9日〕～興国7年/貞和2年7月24日〔1346年8月11日〕）は、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての臨濟宗の僧。諱は師錬、字は虎関。父は藤原左金吾校尉で、母は源氏。一説に玄恵と兄弟とする³⁶⁰。京都の出身。諡号は本覚国師。その学問の博く、識見の優れていることは、じつに驚くべきものがあった。その『濟北集』の中の「詩話」と題する一卷は中国において宋代にできた多くの詩話に比べても、決して遜色もあるものではなく、日本人の著した詩話では、古今第一とも言えるのであろう。さらに、『濟北集』の中の「通衡」と題する巻にも、日本人離れした立派な文章がある。しかし、虎関師錬の詩はその文章に比べてだいぶ劣る。中には偈頌といってもよい作品が混ざっている。

詩人という点において、虎関師錬に勝っていたのは、雪村友梅（正応3年〔1290〕～貞和2年〔1346〕）である。雪村友梅は鎌倉時代末から南北朝時代にかけての臨濟宗の禅僧である。父は越後の土豪・一宮氏（源姓）、母は信濃須田氏（藤姓）。正応3年（1290年）越後白鳥にて生まれる。幼少の頃、鎌倉に出て建長寺の一山一寧に侍童として仕える。元朝からの帰化僧である一寧から唐語や彼の地の様子を教えられたと思われる。のち比叡山戒壇院で受戒、つづいて京都建仁寺に入門した。

雪村は中国で滞留すること23年の長きに及んだ。しかし日元関係の悪化に伴い、日本留学僧は間諜（スパイ）と見なされたため、雪州の獄に繋がれる。叔平も雪村を匿った罪で逮捕され、獄死した。雪村も危うく処刑されかけたが、とっさに無学祖元の

月15日、p.160。

³⁶⁰永井如瓶「庭訓往来作者考」（1904）に「或説云、玄恵法印は東福寺の虎関禅師と兄弟なりと云々」とある。

臨劍頌を唱えたため、気圧された処刑官が、死罪を延期し、処刑を免れた。以後、江南地域ではこの臨劍頌が、祖元ではなく雪村の作であると伝わったということが、数十年後同地を訪れた中巖円月によって記録されている。死一等を免ぜられて長安に流され、3年後には四川の成都に改めて流謫され、その地で10年を過ごす。この間、さまざまな経書・史書などを学び、一度暗記したページはちぎって河へ捨てたという。大赦により許された後、長安に戻りそこで3年を過ごす。この頃より帰国の念が募ったが、請われて長安南山翠微寺の住職となり、元の朝廷から「宝覺真空禪師」の号を特賜された。その流謫せられていた時代の詩役250首を集めたものに『岷峨集』に感があるが、立派な作品が多い。

〈冬月游君山〉：「路隔蓬萊二十年，偶尋幽上岳陽船，鈞天罷奏鳳已去，貝闕不徧龍正眠。沙際冰痕枯水石，山中日色澹風烟。湘魂弔到斑斑竹，恨滿東南飛鳥邊。」

上記は雪村の「冬月游君山」と題した七言律詩である。その「鈞天罷奏鳳已去，貝闕不徧龍正眠」という聯はまったく元の楊載や範梈とよく似ている。それに、「岷山歌」とか、「上硯融峰」とか、いろいろ傑作がある。ともかく雪村友梅は、五山文学の初期に出た大詩人であった。

雪村友梅に少し遅れて中巖円月（正安2年〔1300〕～永和元年〔1375〕）が出ている。中巖円月は、南北朝時代の臨濟宗の僧。相模国鎌倉の出身で、俗姓は土屋氏。中巖は道号で、諡号は仏種慧濟禪師。中巖円月は、詩人というよりも文章家、文章家というよりも思想家であったと言って差し支えない。『東海一漚集』の巻四に収める「中正子」十篇などは、漢の楊雄を気取って、儒家の仁義の道と仏家の生命死生の理とを論じたもので、思想的にも異色或る作品である。

兎も角虎関師鍊・雪村友梅・中巖円月3人は、五山文学の基礎を築いた大家である。

（二）五山時代後期の漢文学

五山文学の隆盛を極めたのは、南北朝時代である。その前期を代表したのが、上述した虎関師鍊・雪村友梅・中巖円月であるが、その後期を代表したのは、義堂周信（正中2年〔1325〕～嘉慶2年〔1388〕）と絶海中津（建武3年〔1336〕～応永12年〔1405〕）

の二人である。ともに詩文に優れたが、特に義堂は文に長じ、絶海は詩に長じた。

義堂周信は南北朝時代の五山の禅僧。土佐の人。夢窓疎石の弟子となり臨済宗に帰依した。鎌倉円覚寺に入り、のち京都建仁寺、南禅寺等に住す。詩文の才に長じ、詩文集に《空華集》二十卷、日録に《空華日工集》があり、絶海中津とともに五山文学の代表者。

絶海中津は、南北朝時代から室町時代前期にかけての禅僧・漢詩人。道号は絶海のほかに要関、堅子、蕉堅道人など多数ある。義堂周信と共に「五山文学の双璧」と併称されてきたが、20世紀後半から義堂より詩風の高さを評価され、五山文学ひいては中世文芸史の頂点を為すと論じられている。また、『絶海和尚語録』や『蕉堅藁』（詩文集）などの著作が伝わっている。

五山文学時代には、虎関師錬・雪村友梅・中巖円月、これを後にしては義堂周信・絶海中津の相次いで輩出した南北時代は、平安朝の初期に次いで、日本漢文学史上、第二のピークをなしたが、室町時代になって、惟肖得巖・江西龍派・心田清播・希世靈彦とか、いろいろな文学僧が出たが、いわゆる強弩の末で、没落の一路をたどった。

五、江戸時代の漢文学：日本漢文学の第三の盛期

江戸時代の漢文学に対して、神田喜一郎先生は日本の漢文学の史的立場から、三期に分けた。慶長元年（1596）あたりに始まり、貞享4年（1687）に至るまでの90年間を江戸時代の第一期とする³⁶¹。第二期は元禄の初（1688）から安永の末（1780）に至る90年あまりの間である³⁶²。第三期は天明の初（1781）から慶応の末（1867）に至る80年余りの間である³⁶³。特に、第二期には、日本の漢文学の第三のピークを迎えてきた。

（一）、江戸時代の漢文学の第一期：1596～1687

³⁶¹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.168。

³⁶²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.171。

³⁶³神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.174。

慶長8年（1603）に徳川家康が征夷大將軍に任命されて江戸³⁶⁴に幕府を樹立してから、社会が安定しているとともに、日本の漢文学も応仁の乱以来の相次いだ戦乱のために、極度の不振陥って、非常に哀れな状態の中から、再び芽をふき出し、日本の漢文学の復興を迎えてきた。その復興に尽くしたのは、藤原惺窩とその門人の林羅山とである。江戸時代の漢文学は、藤原惺窩、林羅山二人によって基礎が築かれた。この二人の文学は大体は五山文学の伝統を受けて、それを発展させしめたに過ぎないものであった。その作品は格別新鮮味はなく、それに和習のはなはだしいものがあり、純粹な文学という立場からは、そう感心すべきものではなかった³⁶⁵。

1、日本漢文学の復興：藤原惺窩と林羅山

藤原惺窩（永禄4年〔1561〕～元和5年〔1619〕）は名が肅、藤原定家末裔の下冷泉家参議中納言為純と母（瑞室夫人、毛利秀頼の娘ともいう）の3男として播磨国（兵庫県）三木郡細河荘に誕生した。彼は7歳で同地龍野の景雲寺に入門し、禅僧東明宗昊和尚に師事、次いで文鳳宗韶禅師に従学して、神童と言われた。13、4歳に京都の相国寺普広院住職の叔父清叔寿泉の縁故か五山第2位の同寺に剃髪して入山し、同南豊軒で学問僧となり朱子学を学んだ。儒学を学ぼうと明に渡ろうとするが失敗に終わった。その後朝鮮儒者・姜沆との交流を経て³⁶⁶、それまで五山僧の間での教養の一部であった儒学を体系化して京学派として独立させた。朱子学を基調とするが、陽明学も受容するなど包摂力の大きさが特徴である。近世儒学の祖といわれ、門弟のなかでも特に林羅山・那波活所・松永尺五・堀杏庵の4人は惺門四天王と称された。和歌や日本の古典にも通じており、同時代の歌人木下長嘯子とは友人であったと言われる。豊臣秀吉・徳川家康にも儒学を講じており、家康には仕官することを要請されたが辞退し、門弟の羅山を推挙した。主著に『寸鉄録』『千代もと草』『文章達徳綱領』がある。

林羅山（天正11年〔1583〕～明暦3年〔1657〕）は、江戸時代初期の朱子学派儒学

³⁶⁴江戸は、日本の首都東京の旧称であり、1603年から1867年まで江戸幕府が置かれていた都市である。1868年（明治元年）に発せられた「江戸ヲ称シテ東京ト為スノ詔書」により江戸は「東京」と改称された。

³⁶⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.168～169。

³⁶⁶後、姜沆が朝鮮に帰国するときに「明と朝鮮の連合軍で日本を占領して欲しい」と願い出た（『看羊録』）のは有名な話である。

者。林家の祖。羅山は号で、諱は信勝。字は子信。通称又三郎。出家した後の号、道春の名でも知られる。

天正 11 年（1583）、京都において産まれるが、ほどなく伯父へ養子に出される。小さい頃から秀才として謳われ、文禄 4 年（1595）京都建仁寺で仏教を学ぶが、僧籍に入る（出家する）のは拒否し家に戻る。

独学を進めるうちに朱子学に熱中していき、慶長 9 年（1604）藤原惺窩に会う。羅山にとって惺窩との出会いは、精神的、学問的に大きく影響を受けることになり、惺窩も羅山の英明さに驚き、翌慶長 10 年（1605）には徳川家康に会わせる。惺窩の勧めもあり、家康は以後羅山を手元に置いていくことになる。羅山は家康に抜擢され、23 歳の若さで家康のブレーンとなった。

慶長 11 年（1606）にはイエズス会の日本人修道士、イルマン・ハビアンと「地球論争」を行っている。この時林羅山は地動説と地球球体説を断固として受け入れず、地球方形説と天動説を主張した。この論争は林羅山がハビアンを論破する形で終わり、その後ハビアンは信仰に動揺を来たし、後の棄教につながっていく。

慶長 12 年（1607）には、江戸に赴き 2 代将軍徳川秀忠（家康の 3 男）に講書を行った。寛永元年（1624）3 代将軍・徳川家光（秀忠の長男）の侍講になり、以後幕府政治にも関わっていくことになる。寛永 12 年（1635）武家諸法度の起草にあたり、翌 13 年（1636）には伊勢神宮参拝典礼にもあたった。

なお寛永 9 年（1632）上野忍が岡に、学問所を与えられ先聖殿と称した。後に忍岡聖堂と呼ばれる施設である。

羅山は、初期の幕府の土台作りに大きく関わり、様々な制度、儀礼などのルールを定めていった。学問上では、儒学・神道以外の全てを排し、朱子学の発展、儒学の官学化に貢献した。博識で学問だけでなく紀行書なども著すなど多彩な面がある。

なお、大学頭は、3 代林鳳岡（羅山の孫）の時代からであり、以後林家は代々幕府の学問の責任者を担ってゆく（駿河文庫の管理を担う）。

明暦 2 年（1656）に妻を亡くした際には、その死を悼む詩を 26 首詠むなど愛妻家でもあった。翌年、明暦の大火によって邸宅と書庫を焼失し、その 4 日後に死去した。書庫が焼失した衝撃で命を縮めたという説がある。墓は東京都新宿区市谷山伏町にある。

林羅山は、上は『詩経』・『楚辞』・『文選』から、下は稗史や小説に至るまで通じないものではなく、その自ら救った詩文も、これを集めた『羅山文集』が75巻に及んでいることによっても、そのいかに多かったかを察することができよう³⁶⁷。

2、詩人：石川丈山

当時の詩人として名声が高かったのは石川丈山である。名は重之、一の名は凹、六六山人・東溪等の別号がある。三河の人。徳川家康に仕え、大阪の役に偉功をたてたが、軍令を犯したという理由で賞せられず、それより母老い家貧なるを以て諸国に遊び、晩に比叡山下一乗寺村に隠栖し、その四壁に唐士の詩人三十六人の画像をかかげ詩仙堂といった。藤原惺窩に学び、詩・書を善くした。寛文十二年歿。年九十。『覆醤集』正統24巻ある368。次はその富士山を詠じた漢詩一首『富士山』を挙げる。

富士山³⁶⁹

仙客来遊雲外巔	仙客来たり遊ぶ 雲外の巔
神龍棲老洞中淵	神龍棲み老ゆ 洞中の淵
雪如紈素煙如柄	雪は紈素の如く 煙は絵の如し
白扇倒懸東海天	白扇倒しまに懸かる 東海の天

この『富士山』という丈山の漢詩について、猪口篤志の『日本漢詩鑑賞辞典』には俞樾『東瀛詩選』の評価：「警句多くして、而も佳章少なし」を引用した。丈山はみずから杜甫を学んだといっているが、その『富士山』のごとき、世間でやかましく言われるほどの名句とは思われない。その詩文を集めたものを『覆醤集』というが、それにはもっと優れた作がある。江村北海³⁷⁰はその著した『日本詩史』の中に、丈山の詩を評して、「句に拙累多くして往々俗習を免れず。」と言っているのも、必ず酷評とは言えないであろう。丈山でさえこうである。それ以下のものは言うまでもない。それに比べると時代は少し降るが日蓮宗の学僧元政が、寛永5年（1628）に中国から亡命してきた陳元賛の影響を受けて、いくらか清新の気を示しているのが、むしろやや注

³⁶⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 169。

³⁶⁸猪口篤志：『富士山』、『日本漢詩鑑賞辞典』、東京：角川書店、1980年7月10日、p. 119。

³⁶⁹この詩は猪口篤志の『日本漢詩鑑賞辞典』に載せる丈山の『富士山』による。

³⁷⁰江村 北海（正徳3年〔1713〕～天明8年〔1788〕）は、江戸時代中期の儒者、漢詩人。名は綬。字は君錫、通称は伝左衛門、北海と号す。著書は『日本詩史』5巻、『日本詩選』15巻、『授業編』10巻、『北海詩鈔』8巻、『北海文鈔』3巻。

目せられる程度である³⁷¹。

3、日蓮宗の学僧：元政

元政（通称：元政上人元和9年〔1623〕～寛文8年〔1668〕）は、地下官人の家柄で、毛利輝元などに仕えた石井元好の五男として出生。母は近江石山の人で、法号は妙種日脱。元政は別に日政・妙子などと号す。13歳、彦根の井伊直孝に近侍として仕え、26歳、病を得て出家、妙頭寺14世日豊に師事し、33歳、洛南深草に称心庵を結び隠棲。戒律堅固であったが、母に孝心深く、明人陳元賛と詩を応酬し、袁中郎の平実な詩風を慕った。江戸時代前期の日蓮宗の僧・漢詩人。山城・深草瑞光寺（京都市）を開山した。

校訂した仏典類や著作が多い。校訂者としては、『訓点天台三大部輔正記』・『大智度論』・『涅槃経会疏』・『法苑珠林』・『釈門章服義』・『袁中郎全集』・『宝物集』などの業績がある。著作としては、『如来秘蔵集』6巻・『小止観鈔』3巻・『龍華傳鈔』3巻・『本朝法華傳』3巻・『扶桑隱逸傳』3巻・『元々唱和集』2巻・『衣裏宝珠鈔』・『釈氏二十四孝』・『釈門孝傳』・『龍華歴代師承傳』・『身延山七面記』・『身延山紀行』・『温泉遊草』・『称心病課』・『草山要路』・『草山和歌集』・『食医要編』・『以空上人方丈記首書』・『聖凡唱和』・『都土産』・『霞谷法語』・『江左垂示』・『唱題得意』・『題目和歌鈔』がある。明から亡命して名古屋藩に仕えていた陳元賛の影響を受け、漢詩人としても知られる。漢詩文集に『艸山集』30巻・『谷口山詩集』6巻がある。

4、『大日本史』編纂総裁：安積澹泊

安積澹泊（1653～1737）は江戸時代、水戸の人。名は覚。字は子先。通称は覚兵衛。号は澹泊・老圃・常山・老牛居士。祖父の正信は元和元年（1615）大阪の役に功があり、のち水戸侯に仕えた。父は貞吉（希斎）。澹泊は幼時から学びを好み、10歳のとき朱舜水に学び、3年に及んだ。最も史学に長じ、徳川光国が大日本史を編集するに当たって、彰考館総裁となった。その学は程朱を宗としたが、それに拘泥することがなかった。能文で華音に通じた。明歴2年生、元文2年10月10日没、年82。著に澹泊史論3巻・朱子談綺3巻・舜水先生行実並略譜1巻・西山遺事5巻・烈祖成蹟20

³⁷¹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.170。

卷・烈祖成蹟姓名考 2 卷・神祖遺事 1 卷・朱文恭遺事 1 卷・水戸唐儒話 1 卷、湖亭涉筆 4 卷、老圃詩脞 1 卷・澹泊齋文集 18 卷・澹泊齋筆記 38 卷がある。

5、木下順庵

木下順庵（1621～1698）は江戸時代初期、京都の人。名は貞幹。字は直夫。通称は平之允。号は順庵・錦里。父秀里は浪人で京都錦小路鳥丸に住み、順庵は次子である。20 歳のころ、柳生某に伴われて江戸に赴いたが、志を得ないで京都に帰り、松永尺五に師事して朱子学を学んだ。その後、加賀（石川県）の前田侯に仕え、寛文 11 年（1671）江戸に赴いたが、この間、徳川光国・朱舜水・林鷲峰・林鳳岡らと往来した。天和 2 年（1682）7 月、62 歳の時、将軍綱吉に召されて幕府の儒官となり、江戸神田小川町に住んだ。子弟の教育につとめて人材が輩出し、中でも新井白石・室鳩巢・雨森芳洲・祇園南海・榊原篁洲は「木門の五先生」の称があって優れている。その教育は孝悌を根本とする儒教道徳の実践にあった。また唐詩鼓吹の首唱者と目され、先哲叢談卷三には「服部南郭曰く、錦里先生（順庵）は実に文運の嚆矢なり。其の詩は甚だしくは工ならずと雖も首て唐を唱へたり」とあり、また西島蘭溪は「順庵・（荻生）徂徠二先生勃興し、海内の詩風一変セリ」（弊箒詩話上）と言っている。白石・鳩巢・芳洲など、みな唐詩を鼓吹したいのはその影響である。元和 7 年 6 月 4 日生、元禄 11 年 12 月 23 日没、年 78。著に錦里文集 19 卷・靖恭先生遺稿 3 卷・班荊集 2 卷がある。

（二）、江戸時代の漢文学の第二期：1688～1780——日本漢文学の第三盛期

第二期は元禄の初から新井白石で、それに次いで荻生徂徠が出、その後輩に祇園南海・梁田蛻巖・秋山玉山らの大家が輩出した。が、神田喜一郎先生は「これらの人々は、これまで残っていた五山文学の伝統を根底から覆し、日本の漢文学を大きく展開せしめた」と指摘した。

この期の劈頭に出たのが新井白石（明暦 3 年〔1657〕～享保 10 年〔1725〕）で、それについて荻生徂徠（寛文 6 年〔1666〕～享保 13 年〔1728〕）が出、その後輩に祇園南海（延寶 5 年〔1677〕～寶暦元年〔1751〕）・梁田蛻巖（天和 2 年〔1682〕～寶暦 7 年〔1757〕）・秋山玉山（元蘇 15 年〔1702〕～寶暦 13 年〔1763〕）らの大家が輩出したが、これらの人びとは、これまで残っていた五山文学の伝統を根底からくつつがえし、

日本の漢文学を大きく転回せしめた。

1、新井白石

新井白石（1657～1725）は江戸時代中期の儒学者、政治家。江戸時代の人。名は君美。字は在中・済美。通称は与五郎・伝蔵・勘解由。号は白石・紫陽・錦屏山人・天爵堂。上総(千葉県)の久留里侯の臣新井正済の子。幼時から明敏で神童と称された。久留里侯に仕えたが、貞享元年(1684)28歳のとき木下順庵の門に入って学んだ。元禄6年(1693)順庵の推挙によって甲府侯徳川家宣の儒臣となり、宝永6年(1709)家宣の將軍となってからは侍講となり、幕政にも参与して政治改革を実行した。正徳2年(1712)家宣が没し、吉宗が將軍となるに及んで退隠して読書著述に晩年を送った。その学は朱子学を信奉して、史学・地理学・典故故実、その他各方面にわたり、同文通考に見られる文字の研究、東雅に見られる国語の語源研究など功績は大きい。また詩文に長じた。明暦3年2月10日江戸柳原で生まれ、享保十年五月十九日千駄ヶ谷の邸で没、年69。著に藩翰譜12巻・藩翰譜続編12巻。折たく柴の記3巻・東雅20巻・同文通考4巻・読史余論3巻・古史通4巻・古史通或問2巻・東音譜1巻・采覧異言5巻・西洋紀聞3巻・坐問筆語1巻・白石詩草1巻・白石先生遺文・白石先生遺文拾遺2巻・白石先生余稿3巻・鬼神論1巻・白石建議8巻などがあり、新井白石全集がある。なお、自己を詠じた詩(自題肖像)に「蒼顔如鉄髮如銀、紫石稜稜電射人、五尺小身渾是胆、明時何用画麟麟」と言っている。

2、荻生徂徠及び護園学派

荻生徂徠（1666～1728）は江戸時代、江戸の人。名は双松。字は茂卿。幼名は伝二郎。通称は総右衛門。号は徂徠。また日本橋の茅場町にいたところから護園と号し、先祖の物部氏にちなんで中国風に物徂徠・物茂卿と称した。館林藩の医官方庵の次男で、江戸芝浦に生まれた。延宝7年(1679)、父方庵が藩主綱吉(のち五代將軍となる)の謎を蒙って上総国(千葉県)長柄郡本納村に貶謫されたので、これに従ったが、元禄3年(1690)父が赦されて江戸に還るに及び、芝に塾を開いて朱子学を講じた。当時貧乏で衣食に窮し、増上寺前の豆腐屋に助けられたという話が伝えられている。元禄9年(1696)31歳のとき柳沢吉保(五代將軍綱吉の執権)に見出されてのちは、綱吉にも謁

見して名を成した。宝永6年(1709)、綱吉の没後は退いて教授し、門人に太宰春台・服部南郭・山県周南などが出て、いわゆる護園学派を形成した。初め朱子学を奉じたが、のち復古に転じて朱子学を攻撃し、また伊藤仁斎の古義学をも駁して対立し、別に古文辞学を起こした。古文辞は明の中ごろ、李子麟・王世貞によって説き始められたもので、漢以前の古文こそ真の文章であるとしたが、徂徠はこれによって経書もまた直接古言古語を研究することにより、その真義が得られるとした。なお、詩文においても古文辞をとらえ、特に詩は唐詩選を尊んで宋詩を排斥し、明詩を鼓吹したが、詩文の制作を奨励して、朱子学の道学的文学論に対し、詩文を道德の拘束から解放する立場をとった。また岡島冠山を講師として中国語の学習会を開くなど、中国語の習得に力を入れ、みずからも通じた。寛文6年2月16日生、享保13年1月19日没、年63。著に弁道1巻・弁名2巻・論語微10巻・論語弁書10巻・大学解1巻・中庸解2巻・孟子識1巻・孝経識1巻・尚書学1巻・孫子国字解13巻・呉子国字解5巻・読荀子四巻・経子史要覧2巻・古文矩1巻・文変1巻・訓訳示蒙5巻・訳文筌蹄6巻・学則1巻・詩文国字順2巻・文淵詩源1巻・絶句解3巻・同拾遺3巻・徂徠杜律考3巻・唐後詩10集7巻・皇朝正声1巻・学寮了簡1巻・素問評1巻・五言絶句百首解1巻・滄漠7絶200首解2巻・詩題苑3巻・明律国字解37巻・素書国字解2巻・鈴録20巻・政談4巻・護園十筆10巻・護園随筆5巻・護園録稿2巻・護園談余4巻・護園遺編20巻・徂徠文集四巻・徂徠集31巻・同拾遺1巻・徂徠詩集便覧などがある。なお、徂徠の後は兄伯達の子金谷が養嗣となり、家学を継いで郡山藩に仕えたが、その子鳳鳴も郡山藩に仕えて儒臣となった。

護園学派は江戸時代の儒学の一派。荻生徂徠の学派をいう。その居が江戸日本橋の茅場町にあったので、「茅」と同義語の「護」字をとって、書齋を護園と称したことから、その名がある。その学は伊藤仁斎が孔子の仁を主として倫理的方面から解釈して修身を重んじたのに対し、政治的意味に重きを置いて、経世済民の実学に傾いているのが特色である。また道を明らかにするためには古書に通じ、古文辞を解しなければならないとして、明の李子麟・王世貞などの主張した古文辞の説に共鳴した。太宰春台・服部南郭・山県周南などが出て、享保(1716～1736)以後、その門流が栄えた。那波魯堂の学問源流にはその盛行ぶりを「徂徠ノ説、享保ノ中年以後ハ、信ニ一世二風靡スト云ベシ。然レドモ京都ニテ至テ盛ンニ有シハ、徂徠没シテ後(享保13〈1728)

没)、元文(1736～1741)ノ初年ヨリ、延享(1744～1748)寛延(1748～1751)ノ比マデ、十二三年ノ間ヲ甚シトス。世ノ人其説ヲ喜ンデ習フコト信ニ狂スルガ如シト謂フベシ」と伝えている。なお、この派の人々は政経・芸文の二つに分かれ、前者の代表に春台、後者の代表に南郭があつて、江村北海の日本詩史にも、「蓋し徂徠没して後、物門の学分れて二と為る。経義は春台を推し、詩文は南郭を推す」と言っているが、とりわけ詩文専門の文人集団を生み出したことや、訳社と称する結社を作つて、現代中国語の研究の重要性を主張し、習熟につとめたのが注目される。しかしこの派は儒学に一新機軸を開いたとはいえ、各人の個性や才を重んじ、詩文に偏し、また強く政治・経済の功利を論ずるところから、修徳・徳育の面において欠けやすい弊があり、非難攻撃するものも少なくなかつた。宇野明霞が論語考を著して徂徠の論語徴の非をせめ、石川麟洲が弁道解蔽を刊行(宝暦5〈1755〉刊)して徂徠の古文辞学説を反駁したのをはじめ、蟹養斎が非徂徠学(明和2〈1765〉刊)・弁復古(安永7〈1778〉刊)を著し、中井竹山が非論語徴(天明4〈1784〉刊)を著しているなどそれであるが、こうした風潮をうけて折衷学派が台頭した。

この讓園には天下の人材があつまつて、一時の盛を誇つたのみならず、その流れはずっと後世までも長く絶えなかつた。この時期を日本の漢文学の第三のピークといつても差支えないであろう³⁷²。まさに神田喜一郎の述べたように、この時期を以て、日本の漢文学は再び芽をふき出し、立派に花を咲かせ、実を結ぶことになった。

3、祇園南海、梁田蛻巖、秋山玉山

祇園南海(1677～1751)は江戸時代、紀伊(和歌山県)の人。名は正卿、また瑜。初名は与一郎。字は伯玉・汝班。通称は余一。号は南海・逢萊・觀雷・鉄冠道人・湘雲主人。家は紀伊藩の藩医。貞享2年(1685)父につれられて江戸に出、元禄2年(1689)木下順庵の門に入った。同10年(1697)父のあとをついで紀伊藩の儒官になった。詩は宋詩を排して唐詩を範とし、影写の説に独自の説を展開したが、また作詩に秀でて、新井白石・梁田蛻巖と共に三大家と称せられた。また書画を善くし、山水と墨竹に長じて文人画の祖といわれる。延宝5年生、宝暦元年9月8日没、年75。著に詩学逢原2・明詩俚評1巻・湘雲瓊語附録3巻・南海詩訣1巻・南海詩法2巻・一夜百首2巻・

³⁷²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.172。

鍾秀集 1 卷・南海詩集 1 卷・南海先生集 5 卷・江南竹枝 1 卷・題咏捷吟 1 卷・賓館綺
紵集 2 卷・忠説和解 1 卷がある。

梁田蛻巖（1672～1757）は、江戸時代中期の漢詩人。名は邦美、字は景鸞、通称は
才右衛門、蛻巖と号す。旗本の家臣の家柄に生まれ、江戸で育つ。11 歳で幕府の儒官
であった人見竹洞に入門し、新井白石や室鳩巢などと交流する。元禄 6 年（1693 年）
に加賀藩に儒者として仕えるがまもなく辞して、美濃の加納藩や播磨の明石藩に出仕
した。晩年までには漢詩の大家として敬仰されるようになった。門下に江村北海・稻
垣白嵐などがいる。明石で没する。享年 86。墓は兵庫県明石市日富美町の本立寺にあ
る。江村北海は、蛻巖の詩の中でも「徐文長の詠雪に和す」を「尖新にして精巧」と
賞賛している³⁷³。蛻巖はたびたび詩風を変え、成唐の詩人たちや袁中郎、鍾惺、譚元
春などの影響を受ける。「天縦の才あり而して力を極めて鍛錬」し、晩年にいたるまで
思いを字句に潜め続けた³⁷⁴。浅野長祚が『寒檠瓊綴』の中で、好学の士のための必読
書として『蛻巖集』を挙げている³⁷⁵[3]。中根香亭は、新井白石・室鳩巢・三宅観瀾の
詩と蛻巖の詩を比較し、「蛻巖は一生不遇で他の三人が栄達したのに遠く及ばないが、
その風流高逸の境地は三人の夢想だにできないところである」と評している³⁷⁶。

秋山玉山（1702～1763）は江戸時代、肥後（熊本県）の人。名は儀・定政。字は子羽。
通称は儀右衛門。号は玉山・青柯。熊本藩士中山定勝の子。叔父の秋山需庵の養子と
なった。藩儒水足屏山に徂徠学を学んだ。23 歳のとき藩主（宣紀）に従って江戸に赴き、
林大学頭鳳岡に師事し、昌平黌に入り、林門に研修すること 10 年に及んだ。また服部
南郭に従って護園の詩文を学んだ。帰藩して藩主の侍読となり、延享 5 年（1748）正月、
藩校時習館の開校に当たって初代教授となった。宝暦 13 年 12 月 11 日没、年 62。著
に時習館学規 1 卷・玉山詩集 6 卷・玉山遺稿 11 卷・墨子全書 6 卷（校）・韓詩外伝 10
卷（校）がある。

4、末期：龍草廬、僧大典

竜草廬（1714～1792）は江戸時代、山城（京都府）伏見の人。名は公美。字は君玉（一
時、名を元亮、字を子明と改めた）。通称は彦二郎・衛門。号は草廬・竹隱・松菊・呉

³⁷³江村北海：『日本詩史』、東京：岩波文庫、2005 年、p. 77。

³⁷⁴江村北海：『日本詩史』、東京：岩波文庫、2005 年、p. 105。

³⁷⁵浅野梅堂：『寒檠瓊綴 卷之二』、東京：吉川弘文館、p. 79。

³⁷⁶中根香亭：『香亭雅談』下、東京：吉川弘文館、1920 年、p. 35。

竹翁・緑羅洞・鳳鳴。本姓は武田氏。十一歳のとき父を亡くし、貧苦のうちに学に励んだ。初め荻生徂徠・太宰春台の学を学んだが、のち宇野明霞に師事した。学成って京都烏丸小路に塾を開いて教えた。詩書に長じ、和歌を善くし、国学にも通じたので、従学する者が少なくなかった。身を持すること甚だ高く、諸葛孔明・陶淵明の人となりを慕った。草廬・松菊を号としたのは、これに依っている。寛延3年(1750)、38歳のとき彦根藩の儒臣となり、彦根に在ること18年、安永4年(1775)致仕して京都に帰り、その詩社を幽蘭社といった。寛政4年2月2日没、年79。著に草廬詩集1巻・草廬文集初編5巻・同2編5巻・同3編6巻・同4編6巻・同5編8巻・同6編1巻・同7編3巻・草廬和文集2巻・草廬和歌集4巻・金蘭詩集7巻・草廬尺讀集1巻・草廬百家選1巻・竜氏筆乗・明七子詩贅7巻・縮柳編2巻・書錦集2巻・絶句訳二巻・帝京篇1巻・詩文玉藻6巻・南海草1巻・南遊詩草1巻・大和河内道之記1巻・論語詮・論語闕・毛詩証・毛詩徴一卷・唐詩材一卷・灰韻礎一卷・日本詩刑・名詮2巻・典詮1巻・士大夫節儉論1巻・呉竹翁談5巻・辞略1巻・ならの葉1巻・中華輿地全図1巻などがある。

大典(1719~1801)は江戸時代の近江(滋賀県)の人。字は梅莊。号は大典・蕉中。京都相国寺の禅僧となり、儒を宇野明霞に学んだ。享和元年2月8日没、年83。著に詩語解・詩家推敲・文語解・皇朝事苑・初学文談・昨非集・北禅文革・北禅詩草などがある。

(三)、江戸時代の漢文学の第三期：1617~1867

第三期は、天明の初めから慶応の末に至る80年あまりの間である。この期に入るに先立って、第二期の末あたりから、ようやく護園一派の古典主義も倦厭せられるようになり、それに対する反動運動が一部に台頭しかかっていたが、第三期に入ると、俄然一つの大きな勢力となるに至った。

1、急先鋒：僧六如、菅茶山、市川寛西齋、山本北山

六如(1737~1801)は江戸時代、近江(滋賀県)の人。詩僧。名は慈周。字は六如。号は葛原・無着庵・白楼。本姓は苗村氏。少時から読書を好み、彦根の野村東皐について詩文を学んだ。初め比叡山北谷善光院に住み、明和4年(1767)僧籍を削られたが、安永元年(1772)召還せられて正覚院に入った。のち江戸に出て宮瀬竜門に従って修辞

を学んだが、やがてその非を悟り、当時流行の偽唐詩を嫌って宋詩を唱え、専ら陸放翁を学んで詩風革新の先駆者となった。山本北山の如きその風を聞いて起こった一人である。尖新な熟字を喜ぶところがあり、梧窓詩話に「近人好用奇字。蓋六如老柄為之張本」とある。晩年は京都真葛原の恵恩院に閑居し、また愛宕山白雲教寺に住んだ。享和元年三月十日没、年 65(一説に 67)。著に葛原詩話四卷・同後編四卷・六如庵詩紗六卷がある。

菅茶山(1748～1827)は江戸時代後期の漢詩人・儒者。備後(広島県)神辺の人。名は晋帥。字は礼卿。通称は太沖。号は茶山。家は世々農商を業としたが、学を好んで京都に出て那波魯堂に朱子学を学び、同門の中井竹山・西山拙斎と交わった。のち郷里に帰って子弟に教授し、その家塾を黄葉夕陽村舎と称した。のち藩に請うて家塾を郷校となし、廉塾と称して塾頭となった。福山藩に仕えて大目付に進んだ。その学は朱子学を宗とし、詩を以て名を得た。詩は宋詩を範として、身近に取材した平明な詩風を特色とした。延享 5 年 2 月 2 日生、文政 10 年 8 月 13 日没、年 80。私詮を文恭先生という。著に詩論入門 2 卷・詩律法門 2 卷・黄葉夕陽村舎詩集(前編・後編・遺編)23 卷・筆之須佐比 4 卷・大和紀行日記 1 卷・茶山文集 4 卷・茶山遺稿七卷付録 1 卷・遊芸日記 1 卷・花月吟 1 卷・冬の日影 2 卷・福山志料 35 卷・重修福山志 100 卷がある。なお、名前の呼び方について、「かんさざん」「かんちゃざん」の両者が行われているが、菅は神辺地方に多い姓の菅波を修したもの、茶山は近くの茶臼山にとったもので、「すがちゃざん」が正しいとの説もある。

市河寛斎(1749～1820)は江戸時代の人。儒者・漢詩人。上野(群馬県)甘楽郡の人。名は世寧。字は子静。通称は小左衛門。号は寛斎・半江・西野・江湖詩老。細井広沢の弟子である父の蘭室から家学を受け、のち江戸に遊学して林祭酒正良の門に入り、昌平黌の學員長となった。居ること五年、病のため辞任した。その学は朱子学を宗とした。寛政 3 年(1791)富山侯に聘せられて藩校教授となり、在職 20 余年に及んだ。詩を善くして宋詩(陸放翁)を範とし、その詩社を江湖詩社とって、その門から菊池五山・大窪詩仏・柏木如亭などが出た。その著の全唐詩逸は全唐詩にもれていて、我が国に伝わる唐詩百余編を集めたもので、飽廷博の知不足齋叢書にも収められている。寛延 2 年生、文政 3 年 7 月 10 日没、年 72。著に日本詩紀 53 卷・全唐詩逸 3 卷・漢魏六朝五家絶句選 5 卷・談唐詩選 1 卷・北里歌 1 卷・江湖詩人小伝稿 4 卷・江湖詩話 1

卷同補遺 1 卷・三家妙絶 1 卷・詩家法語 1 卷・宋百家詩 7 卷・陸詩意註 7 卷・陸詩考
実 3 卷・寛齋百絶 1 卷・寛齋遺稿 5 卷・寛齋余稿 8 冊・俗耳談 2 卷・林氏家譜略注 1
巻がある。

山本北山（1752～1812）は江戸時代、江戸の人。名は信有。字は天禧。通称は喜六。
号は北山・孝経楼・奚疑翁。幼にして山崎桃溪に素読を学び、のち折衷学派の井上金
峨に従って折衷説を奉じた。経学は孝経を本とし、孝経集覧 2 巻はその 22 歳のときの
著である。作詩志穀・作文志穀を著して荻生徂徠らの古文辞派を排撃し、文は韓・柳（唐
の韓愈・柳宗元）に拠り、詩は清新を唱えて性霊説を主張した。その詩社を竹堤吟社と
いい、遊学入門するもの数百人に及び、門下に市河寛齋・大窪詩仏らがあつて詩風を
一変した。寛政異学の禁にあたっては、亀田鵬斎・家田大峰・豊島豊洲・市川鶴鳴ら
と共にこれに反抗し、江戸の五鬼と称せられた。寛政 4 年（1792）秋田藩主佐竹義和の
聘に応じて儒臣となり、江戸藩邸日知館の教授となった。家が富有で常に奇書を購求
して博覧につとめた。宝暦 2 年生、文化 9 年 5 月 18 日没、年 61。述古先生といわれ
る。なお、人となり豪湛卓絶、然諾を重んじ、侠客の風があつて、その印には儒中侠
の三字を刻していた。著に作文志穀 1 巻・作詩志穀 1 巻・詩藻行潦 4 巻・作文率 4 巻・
作文例証 1 巻・文用例証 3 巻・作文例証続編 3 巻・文事原始 3 巻・文事証拠 5 巻・文
事考 5 巻・文事正誤 7 巻・文藻行潦 3 巻・広文藻行潦 7 巻・詩藻行潦 4 巻・詩率 1 巻・
作文率 4 巻・助字率 10 巻・孝経楼詩話 2 巻・孝経楼漫筆 4 巻・孝経楼文集 50 巻・論
語正義・北山先生論語説 20 巻・学庸正義・大学弁 2 巻・北山先生大学説 1 巻・中庸弁
1 巻・北山先生中庸説 2 巻・孝経集覧 2 巻・校定孝経 1 巻・古文尚書勤王師 3 巻・尚
書後弁弁 10 巻・経義諏説 1 巻・古今学派考などがある。

2、三博士：柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里

柴野栗山（1736～1807）は江戸時代末、讃岐（香川県）高松の人。名は邦彦。字は彦
輔。通称は彦輔。号は栗山・古愚軒。尾藤二洲・古賀精里と共に寛政三博士の一。初
め藩儒後藤芝山を師としたが、のち江戸に出て鳩巢門下の中村蘭林の門に入り、次い
で林榴岡に従って学び、朱子学を宗とした。阿波藩に仕えて藩儒となったが、天明 8
年（1788）幕府の儒官となり、昌平畏の教官となった。大学頭林信敬および岡田寒泉ら
と学政の改革につとめ、狙練学など異派の勃興に反対して朱子学を正学とし、松平定

信を動かして、いわゆる寛政異学の禁を布くに至った。文章を善くし、詩は多くないが佳作が多い。元文元年生、文化4年12月1日没、年72。著に栗山文集5巻・栗山堂文集22巻・栗山堂詩集4巻・国鑑20巻・雑字類編7巻・資治概言2巻・上近衛公書1巻・聖賢障子図考1巻・論語筆記1巻・東奥紀行1巻などがある。

尾藤二洲(1745～1813)は江戸時代、伊予(愛媛県)川上の人。名は孝肇。字は志尹。通称は良佐。号は二洲・約山・静寄軒・流水斎。少時から文を作ることを好み、長じて学を講ずることを知った。明和7年(1770)24歳のとき大阪に出て片山北海に師事し、復古学を講習した。当時、北海は詩社を結んで混沌社といい、その社友に頼春水があったが、二洲はこれと親しく交わった。春水に勧められて洛闕の書を読み、ついにこれを正学とするに至ったが、なお二洲が朱子学を奉ずるに至ったのには、また懐徳堂の中井竹山・履軒兄弟の影響によることが大であった。寛政3年(1791)擢でられて幕府の儒官となり、寛政三博士の一に数えられた。人となり恬澹簡易で、文は帰震川を愛し、詩は陶淵明・柳宗元を愛した。文化10年12月14日没、年69。著に易繫辞広義1巻・論孟待旨2巻・学庸衛旨・中庸首章発蒙図解1巻・周易広義補4巻・四箴解1巻・素餐録1巻・正学指掌1巻・称谓私言1巻・称谓私言続篇・国学指要・文章一隅1巻・択言1巻・痴夢録4巻・訓蒙駢言1巻・家世遺事1巻・冬読書余3巻・静寄軒文集12巻・約山詩集20巻・静寄雑著1巻・静寄余筆2巻がある。

古賀精里(1750～1817)は江戸時代、肥前(佐賀県)の人。名は樸。字は淳風。通称は弥助。号は精里・復原。佐賀郡古賀村の出身。佐賀藩士古賀忠能の子。初め王陽明の学を学び、京都に遊学して福井小車に朱子学を学び、また西依成斎の門に入って闇斎学を修め、ついで大阪に至って講説した。このころ尾藤二洲・頼春水と親交があり、反覆討論して、ついに朱子学をとるに至った。帰藩して佐賀藩に仕えて藩政の機密に参画し、天明元年(1781)藩校弘道館が設立されるに及び、32歳、抜擢されて教授となった。弘道館にあること15年、47歳のとき幕府にその実績が認められて抜擢され、寛政8年(1796)幕府昌平黌の儒官となり、柴野栗山・尾藤二洲と共に(寛政の三博士といわれる)、朱子学を鼓吹した。詩・文・書を善くした。文化14年5月4日没、年68。著に四書集釈10巻・論語纂釈諸説弁誤4巻・大学章句纂釈1巻・大学諸説弁誤1巻・中庸章句纂釈2巻・中庸諸説弁誤1巻・近思録集説8巻・続資治通鑑評4巻・極論時事封事1巻・十事解1巻・経語摘粹1巻・対礼余藻3巻・歳余儲説1巻・韓聘瑣記2

卷・洪浩然伝 1 卷・鱗腹錦字 1 卷・経済文録 1 卷・軟莎偶語 1 卷・大江帖 1 卷・精里全書 20 卷・精里文鋤初集 3 卷・精里文鈞 2 集 2 卷・精里文砂 3 集 5 卷・帰臥詩鈔 1 卷・帰臥亭雜鈔 12 卷・瀟碧軒詩文稿 5 卷・精里先生丙子稿 1 卷がある。

3、関東：柏木如亭、菊池五山、大窪詩佛（山本北山の門）

柏木如亭（1763～1819）は江戸時代、江戸の人。名は昶。字は永日。通称は門弥。号は如亭・柏山人・瘦竹・晚晴社。幕府小普請方大工の棟梁の子として生まれたが、青年期の遊蕩生活に家財を蕩尽し、寛政 6 年（1794）家職を辞して翌年江戸を去り、信州中野に至った。晚晴吟社を開いて詩を教授して生活したが、寛政 10 年（1798）秋には新潟に至り、以後各地に遊歴して、文政 2 年（1819）春、伊勢・伊賀方面に至り、初夏になって病気となり、京都の廃寺で客死した。市河寛齋の門下で江湖詩社の中心的詩人であり、大窪詩仏・菊池五山と名を齊しくした。また画を善くした。文政 2 年 7 月 8 日没、年 57。著に海内才子詩 5 卷・宋詩清絶 2 卷・詩本草 1 卷・如亭集 2 卷・聯珠詩格釈註 3 卷・晚晴吟社集 3 卷・如亭遺稿 3 卷・如亭百絶 1 卷・如亭北遊集 1 卷・岬庵殘稿 1 卷・続吉原詩 1 卷・木工詩集 1 卷。

菊池五山（1772～1855）は江戸時代、讃岐（香川県）高松の人。名は桐孫。字は無絃。通称は左太夫。号は五山・娛庵・小釣雪。高松藩儒菊池室山の子。初め藩儒後藤芝山に從学したが、のち京都に出て柴野栗山に師事し、のちまた江戸に赴いて、市河寛齋に学んだ。学成って塾を開いて教授し、特に詩名が高く、性靈派を尊んだ。その後、また高松藩に仕えて記室となり、菊池半隠が没して家が絶えたので、その後を興し継いだ。安政 2 年 6 月 17 日没、年 84（一説に安政 6 年没、年 82。また一説に嘉永 2 年 6 月 27 日没、年 81）。著に五山堂詩話 16 卷・同補遺 5 卷・五山堂詩存 7 卷・清人詠物詩鈔 1 卷・明人絶句 2 卷・続西廂才人詩 1 卷。人唐詩 2 卷・水東竹枝 1 卷・西湖竹枝 2 卷・娛庵詠物 1 卷がある。なお、五山の堂号の由来については、五山堂詩話に、貧乏で篋中に留める書の、白香山・李義山・王半山・曾茶山・元遺山の集だけだったのによるとしている。

大窪詩仏（1767～1837）は江戸時代、常陸（茨城県）の人。名は行。字は天民。通称は柳太郎。号は詩仏・瘦梅・詩聖堂・江山翁・玉池精舎。父の宗春は医者。江戸に移り住んで山本北山について折衷学を修め、また市河寛齋に学んで詩文に長じ、頼山陽

に親灸した。また書を善くし、画家谷文晁とも親交があつて画に秀でた。寛政4年(1792)ごろ柏木如亭と二瘦詩社を興して性靈清新の詩風を鼓吹したが、文化3年(1806)神田お玉が池に詩聖堂を営んだころから詩名が高くなり、菊池五山と並んで詩壇の中心をなし、市河寛斎・柏木如亭・菊池五山と共に江戸の四詩家と称せられた。盛んに遊歴を試みたが、晩年には秋田藩に仕えて儒臣となり、江戸邸日知館にあつて教授した。天保8年4月11日没、年71。著に宋詩礎2巻・侃文韻府両韻便覧1巻・宋三大家絶句箋解2巻・諸韻牋1巻・清新詩題4巻・卜居集2巻・北遊詩草2巻・再北遊詩草2巻・西遊詩草2巻・二島遊草1巻・詩聖堂百絶1巻・詩聖堂詩話・詩聖堂詩集33巻などがある。

4、関西：頼山陽、篠崎小竹

頼山陽(1780～1832)は江戸時代、安芸(広島県)竹原の人。名は襄。字は子成。通称は久太郎。号は山陽。三十六峰外史。父は広島藩の儒官頼春水。幼少のころから叔父の頼杏坪(きょうへい)について読書を学び、早くから詩文を作った。父の友人柴野栗山の勧めで朱子の通鑑綱目を読み、修史の志をたてた。18歳、江戸に遊学して尾藤二洲の塾に入り、また昌平黌に学んだ。遊学すること一年、広島に帰ったが、性豪放で21歳のとき脱藩して京都に出奔し、罪を得て、以後九年間自宅内に監禁された。文化6年(1809)、30歳のとき父の友人菅茶山に迎えられて備後(びんご)の神辺(かんなべ)に赴いたが、32歳のとき京都に移り、三本木の山紫水明処で門生に教えた。生涯仕官せず、著作につとめ、史家として本領を發揮したものに日本外史・日本政記がある。詩文は才気を以てまさり、雄渾にして迫力がある。安永9年12月27日生、天保3年9月23日没、年53。墓が東山の長楽寺にある。著に日本外史22巻・日本政記16巻・通議3巻・新策6巻・春秋遼琢録3巻・孟子評点7巻・垂講疑問録1巻・古文典刑3巻・小文規則1巻・唐絶新選2巻・謝選拾遺7巻・宋詩鈔8巻・杜詩評鈔4巻・彭沢詩鈔1巻・東坂詩鈔3巻・韓昌黎詩鈔4巻・錦繡段選々1巻・芸圃茗談1巻三家古詩鈔1巻・浙西六家詩鈔6巻・増評八大家文読本16巻・評本文章軌範7巻・頼山陽先生一夜話3巻・山陽詩集23巻・山陽文集13巻・山陽先生題跋2巻・山陽先生書後3巻・日本楽府1巻・頼山陽書翰集3冊があり、頼山陽全書がある。

篠崎小竹(1781～1851)は江戸時代、豊後(大分県)の人。名は弼。字は承弼。通称

は長左衛門。号は小竹・畏堂・南豊。本姓は加藤氏。幼時から篠崎三島に従学し、偉才を認められてその養子となった。19歳、江戸に出て尾藤二洲に学び、のち再び江戸に赴いて古賀精里に学び、昌平黌に寓したが、居ること半歳、家に帰って父三島に代って子弟に教授した。その学は徂徠学から朱子学に転じたが、また詩文および書を善くした。仕官を好まなかったが、三島以来の縁故で淡路領主稲田氏の賓師となった。嘉永4年5月8日没、年71。著に四書松陽講義5巻・名教館記1巻・松山寺瘞齒記・唐詩遺4巻・酒人十詠貼1巻・斉山詩帖・小竹詩集・小竹文集1巻・小竹乙未文稿1巻・小竹齋詩鈔5巻・小竹近稿1巻・小竹齋文稿4巻・小竹先生艸稿1巻・名頭屋号考1巻・南豊集1巻がある。

5、九州：広瀬淡窓

広瀬淡窓（1782～1856）は江戸時代、豊後（大分県）日田の人。名は建。字は子基。通称は寅之助。号は淡窓・苓陽・青溪・遠思楼主人。寛政9年（1797）16歳のとき博多の亀井塾に入り、南冥・昭陽父子について経業を修めた。生来多病で、四方に遊ぶことをせず、郷里に私塾咸宜園を開いて子弟を教育した。来たり学ぶ者四千余人、門人に高野長英・大村益次郎・長三洲などがある。その学は一道一派に偏せず、経学・老荘の学を兼修して独得の学風を形成したが、敬天はその一貫した根本思想であった。また詩を善くして、西海の詩聖と称せられ、桂林荘雜詠、示諸生はその詩碑と共に広く知られて有名である。天明2年4月11日生、安政3年11月1日没、年75。著に約言1巻・約言補1巻・約言或問1巻・読論語1巻・読孟子・老子摘解2巻・析玄1巻・読左伝1巻・義府1巻・儒林評1巻・迂言三巻・再新録1巻・申聞書1巻・性善論1巻・論語三言解1巻・万善簿10巻・夜雨寮記4巻・宜園規約1巻・家譜及系図1巻・淡窓日記82巻・淡窓小品2巻・六橋紀聞10巻・文稿拾遺1巻・遠思楼詩鋤四巻・懐旧楼筆記56巻・淡窓詩話2巻があり、淡窓全集に収めている。なお、弟に旭荘（1807～1863）があり、兄に代わって家塾咸宜園を督した。

6、梁川星巖、広瀬旭荘

梁川星巖（1789～1858）は江戸時代、美濃（岐阜県）安八郡曾根村（現在の大垣市曾根町）の人。名は孟緯。字は公図・無象。通称は新十郎。号は星巖・詩禪・三野逸民・夏軒老人・天谷道人・百峰。12歳で父母を亡くし、文化3年（1806）秋、江戸に出て古賀

精里・山本北山に学んだ。居ること三年江戸を去って京都に上り、諸名家と唱和したが、文化7年(1810)再び江戸に赴き、北山の門に入り、勉励してその名が顕れた。大窪詩仏・菊池五山などと交わった。文化9年(1812)5月、北山の死に遇い、文化14年(1817)8月帰郷して子弟に教えたが、文政3年(1820)紅蘭を娶り、文政5年(1822)9月、紅蘭を伴って西遊の途に上り、その間、菅茶山・頼杏坪・亀井昭陽などと会し、京都では頼山陽夫妻と花を嵐山に賞した。天保3年(1832)また江戸に赴き、天保5年(1834)神田お玉が池に玉池吟社を開いて門弟に教えた。弘化3年(1846)12月、京都に上って二条木屋町に住み、ついで川端丸太町に移り、鴨沂小隱と称した。その詩は唐詩を中心に、宋・元・明・清諸家の精を採って一流に属し、特に律・絶二体を得音心とした。なお、慷慨の士で勤王の志士とも交わり、当時、梅田雲浜・頼三樹三郎・池内陶所とともに尊王撰夷の四天王と目された。時事を認した慨嘆詩25首があり、その詩を集めたものに顯天集がある。門下に大沼枕山・小野湖山・森春濤などがある。寛政元年6月18日生、安政5年9月2日没、年70。著に星巖集26巻・星巖遺稿15巻・星巖絶句剛1巻・蓮塘集2巻・春雷余響10巻・顯天集1巻がある。

広瀬旭荘(1807～1863)は江戸時代、豊後(大分県)日田の人。名は謙。字は吉甫。号は旭荘・梅墩。淡窓の弟。文政6年(1823)17歳のとき、筑前の亀井昭陽に学び、文政10年(1827)備後(広島県)に至り菅茶山に学んだ。翌年帰って肥前(佐賀県)田代の東明館に教授し、天保2年(1831)淡窓の家塾を監督した。その後、大阪に家塾を開いたが、天保15年(1844)江戸に家塾を開いた。北陸・中国を経て文久元年(1861)日田に帰って雪来館を開いた。最も詩に長じて、その詩は清の愈曲園の東海詩選にも収められて、「東国の詩人の冠」(巻23)と評されている。多作を以て聞こえ、その詩論は清の袁随園の性霊説を中心とする折衷説であった。なお、勤王の志が厚く、頼三樹三郎・佐久間象山・吉田松陰・桂小五郎などと交わり、嘉永6年(1853)米使浦賀へ来航するに当たっては、幕府に上書して沿海国防の策を論じた。文化4年5月17日生、文久3年8月17日没、年57。著に識小編1巻・克己編1巻・追思録1巻・塗説2巻・明史小批2巻・怪史・日間瑣事備忘録百66巻・録海2巻・九桂草堂随筆10巻・宜園百家詩初編3巻・宜園百家詩二編6巻・宜園百家詩三編6巻・梅轍詩妙五編十五15巻・梅激文鈔6巻・梅墩遺稿2巻・梅墩漫筆1巻がある。

江戸時代の九州では、広瀬淡窓と広瀬旭荘兄弟が有名である。旭荘は淡窓の弟であ

るが、大阪に住した。兄の淡窓は、一般に王・孟・韋・柳といわれる唐の王維・孟浩然・韋應物・柳宗元の淡泊な詩風を喜んだが、旭荘は才気煥発、宋の蘇軾を学んだ。愈樾は『東瀛詩選』において、

子基蓋隱居教授者彼崎彌序雲近世善教育後進者于山陽則稱茶山管翁於九州則稱淡窗廣瀨君四方之士爭就其塾皆有所成而後歸叩其所業由詩人者居多可以知其為人與其所以為詩矣，晚年以處士蒙旌命之舉有述懷詩六首蓋亦異數也詩皆其門人所刻平淡之中自有精彩讀集中論詩五古一首知其於此道三折肱矣³⁷⁷

と淡窓を評価した。旭荘に対しては、

吉甫詩才氣橫溢變幻百出，長篇大作，極五花八陣之奇而片語單詞又雋永可味，鐵硯學人齊藤謙，稱其構思若泉湧，若潮瀉及其發，口吻上筆端若馬之注坡，若雲翻空而風卷葉，雖多不濫，雖長不冗，洵知吉甫之詩者矣，吉甫擺脫塵務不入仕途，所親則墨客騷人，所好則江山風月，宜其為東國詩人之冠也，詩美不勝收，故入選者甚多，分上下卷雲³⁷⁸。

と評価した。その作品を激賞して、山梨稻川と共に日本詩人の第一と称した。

六、明治の漢文学：日本漢文学最後の繁盛と其の衰滅

明治維新とともに、新しく突如として欧米の文化が現前に現れ、中国の文化の地位を奪ってしまった。漢文学が衰滅の気運に転落したことは言うまでもない。しかし、その徴候の著しく表れてきたのは、大体日清戦争を契機として、一般人の中国文化に対する態度が急変して以後のことである。明治中期以後における漢詩のごとき、江戸時代よりも却って盛んになったと思われる一面のあったことを忘れてはならないのである。

³⁷⁷ (清) 愈樾、佐野正巳：『東瀛詩選』、汲古書院、1981年6月発行、p. 228。

³⁷⁸ (清) 愈樾、佐野正巳：『東瀛詩選』、汲古書院、1981年6月発行、p. 299。

(一) 明治前期：日本漢文学最後の繁盛

1、梁川星巖の派：小野湖山、大沼枕山、森春濤

小野湖山（1814～1910）は江戸末・明治時代、近江(滋賀県)浅井郡高畑村の人。漢詩人。名は長怨。初名は巻。字は伺翁・懐之・野公・士達。通称は傷助・伺之助。号は湖山・玉池仙史・狂々生・晏斎。三河吉田(豊橋)藩領の近江国(滋賀県)東浅井郡高畑の医師横山玄篤の子。安政の大獄に吉田に幽閉せられ、小野桐之助と改名した。天保2年(1831)江戸に出て、尾藤水竹・藤森弘庵に師事し、また梁川星巖の玉池吟社に参加した。抜擢されて吉田藩の儒臣となった。諸藩の志士と尊王攘夷を論じ、水戸の藤田東湖と親交があった。安政6年(1859)、安政の大獄に関係して吉田に禁錮幽閉せられること八年に及んだ。維新後、明治元年(1868)東京に出て総裁局権弁事となり、のち豊橋藩権少参事兼時習館督学となった。廃藩後は上京したが、のち大阪に優遊吟社を結成し、詩名が高かった。詩は白楽天を欽慕し、白詩を宗とした。明治43年4月10日没、年97。著に湖山楼十種8冊(鄭絵余意一卷・北游剩稿・火後憶得詩・蓮塘唱和集正続3巻・湖山楼詩稿・湖山消閑集2巻・湖山近稿2巻同続1巻・湖山楼詩屏風2巻)・賜硯楼詩5巻・李西涯擬古樂府1巻・優遊吟社詩2冊・鴨西唱和2巻・新選三体詩3巻・乍浦集詠鈔1巻・湖山楼百律1巻・鴨西寓楼雜詩・清人愈陳二家精選湖山詩1巻・感旧涙余・帰展小稿がある。

大沼枕山（1818～1891）は江戸末・明治時代、東京下谷の人。漢詩人。名は厚。字は子寿。通称は捨吉。号は枕山・台嶺。詩人大沼竹溪の子。叔父の鷺津松隠に学び、また詩を菊池五山に学び、梁川星巖の玉池吟社に参加し、詩名を馳せた。のち下谷仲御徒町に下谷吟社を開いて子弟に教えた。詩を学ぶ者、上下貴賤の別なく集まり、三十年間、詩壇の雄となった。詩は宋詩を主として陸放翁を宗とし、最も詠物に長じた。維新後は清詩の新風を鼓吹した森春濤におされて不遇であった。文化15年3月19日生、明治24年11月1日没、年74。著に歴代詠史百律一卷・日本詠史百律1巻・詠史絶句2巻・江戸名勝詩1巻・東京三十詞・房山集1巻・下谷吟社詩三巻・王夢楼絶句2巻・詩語抜錦5巻・同人集6巻・観月小稿1冊・詩学明弁1巻・枕山詩鈔6冊・枕山遺稿1巻・枕山詠物詩1巻・枕山百詠物1巻・枕山絶句抄1巻・水竹居集2巻がある。なお、永井荷風の下谷叢話に枕山と鷺津毅堂の伝を載せている。

森春濤（1819～1889）は明治時代の人。漢詩人。尾張（愛知県）一宮の人。名は魯直。字は希黄。通称は浩甫。号は春藩・九十九峰軒二二十六湾書楼。塊南の父。家は世々医を業とした。張の儒家鷲津益斎（毅堂の父）の門に入って学び、同門に大沼枕山（春濤と従兄弟）がいた。共に詩に長じて、たがいに唱和した。嘉永3年（1850）32歳のとき江戸に出て、上野東叡山の或学寮に寄寓し、折から近くの下谷三枚橋にいた枕山と日夜往来して詩作に耽ったが、生活に困るやら、瘡を患うやらしてその年のうちに尾張に帰った。ついで安政3年（1856）7月、京都に出て梁川星巖の門に入り、その間、斎藤拙堂・広瀬旭莊・池内陶所をはじめ、京阪の文人たちと交わって詩名が高くなった。文久3年（1863）5月、名古屋に移り、桑名町三丁目に住んで、桑三軒吟社を開くに及んで、教を請う者多く、中でも丹羽花南・奥田香雨・永坂石壊・神波即山はすぐれて森門の四天王といわれ、永井荷風の父、禾原もまたその門に学んだ。明治6年（1873）岐阜に至って木葉庵に寓し、岐阜雑詩1巻がある。明治7年（1874）10月東京に移住し、下谷摩利支天横町に居を定めて茉莉巷凹処と称し、茉莉吟社を起こして門人の養成につとめた。翌8年（1875）4月、東京才人絶句2巻を刊行し、7月機関誌新文詩を発行して、詩名いよいよあがり、その詩風は天下を風靡して詩壇の第一人者となった。徳山樗堂・橋本蓉塘・岩溪裳川などその門人であるが、その詩は清詩を鼓吹して、詩風は艶体を主とし、絶句を第一とした。文政2年4月2日生、明治22年11月21日没、年71。著に清三家絶句2冊・清二十四家詩3巻・東京才人絶句2巻・岐阜雑詩1巻・銅椀竜金1巻・旧雨新鋤2巻・春濤詩鈔2冊・新文詩25巻・敗柳殘奇集・新曆謡1巻・新潟竹枝1巻・千葉竹枝二局山竹枝1巻・玉島竹枝1巻・三国港竹枝1巻がある。

2、成島柳北、長三洲

成島柳北（1837～1884）は江戸末・明治時代、江戸浅草の人。名は惟弘。初名は温。字は保民・叔厲。通称は甲子太郎。号は柳北・確堂・漫上漁史。幕府儒官成島筑山（また稼堂）の子。学を好み、詩文を善くし、幕府に仕えて儒官となり、安政3年（1856）侍講となって、家定・家茂の二代にわたって経学を講じた。その後、慶応元年（1865）歩兵頭並となり、ついで三年騎兵頭となり、また外国奉行となり、会計副総裁となったが、徳川慶喜の職を辞してからは、退いて隅田川畔に隠居した。維新後は文筆を業とし、明治7年（1874）朝野新聞社長となって、雑録その他に健筆をふるい、鋭い風刺で政

府をおびやかすものがあったが、これより先、同五年には東本願寺法主に従って欧州に遊び、翌年帰った。その学は程朱を主とし、その文は哀随園の風があるといわれる。天保8年2月16日生、明治17年11月30日没、年48。著に柳北文鈔・柳北奇文2巻・柳北詩鈔1巻・柳北遺稿2巻・温泉紀行・航西日乗・航薇日記3巻・寒檠小稿4巻・柳橋新誌2冊・新橋情譜・揚牙児奇獄・群礦一塊2巻・京猫一斑・英国国会沿革誌2巻・本邦現存古銭目録1冊・古銭鑑識訓蒙3巻・明治新撰泉譜2冊があり、また成島柳北全集1巻（博文館、明治30）があり、柳橋新誌がもっとも著名である。

長三洲（1833～1895）は江戸末・明治時代、豊後（大分県）日田の人。本名は長谷茨。字は世章・秋史。通称は富太郎・光太郎。号は三洲。広瀬淡窓の門に入り、業成って万延元年（1860）長門藩に赴いて明倫館講師となった。維新後は木戸孝允に仕えて、のち文部大丞兼教部大丞となり、一等編修官に挙げられ、明治28年（1895）東宮侍書を拝した。その学は程朱を奉じて実践を主とし、また詩文・書画に長じた。天保4年9月23日生、明治28年3月13日没、年63。著に三洲遺稿12巻・書論3巻・三体千字文1巻・新撰手紙の文2巻・新封建論・復古原論がある。

3、森槐南、国分清涯、本田種竹

森槐南（1863～1892）は明治時代の人。漢詩人。名は公泰。字は大来。通称は泰二郎。号は梶南・秋波禅侶・菊如澹人・説詩軒主人。春濤の子。幼時から家学を承け、鷺津毅堂・三島中洲に師事した。最も詩学に造詣が深く、また明清の伝奇に精通した。明治漢詩壇の第一人者で、新詩綜を発刊したり、随鷗吟社の盟主となったりした。明治14年（1881）太政官に出仕して以後、図書寮編修官・宮内大臣秘書官・東京帝国大学文科大学講師を歴任した。明治44年（1911）文学博士となった。文久3年生、明治44年3月7日没、年49。著に唐詩選評釈8巻・古詩平仄論2冊・杜詩偶評講義3冊・李太白詩講義1冊・李義山詩講義3冊・韓昌黎詩講義2冊・作詩法講話1冊・浩蕩詩程1巻・槐南集8冊・槐南遺稿がある。

国分清涯（1857～1844）は仙台の人。漢詩人。名は高胤。字は子美。号は青厓・太白山人。少年時代、藩学養賢堂教授国分松嶼に漢学を学び、落合直亮に国学を学んだ。上京して司法省法律学校に学び、大阪朝野新聞を経て、明治22年（1889）日本新聞記者となった。評林欄を担当して、漢詩をもって時事を風刺し、評判となって大臣・官僚・

政客・商売など、読んで一喜一憂と言われる。その後、森塊南らと吟社星社を結成するなど、漢詩壇に活躍したが、大正12年(1913)大東文化学院が創立されると招かれて教授となり、漢詩文を講じた。また雅文会をはじめ、詠社・興社・蘭社・樸社など詩社の主盟となり、また雑誌昭和詩文を主宰し、また随鷗吟社・芸文社にも関係して、漢詩の興隆に貢献した。昭和12年(1937)芸術院会員に推された。その詩は杜甫を宗とし、詩人的な詩というより国土的気風に富んでいるのが特質である。まとまった詩集には評林詩を集めた詩董狐があるだけで、猪口篤志著の新釈漢文大系日本漢詩(明治書院)に芳野懷古・唯射利を収めている。安政4年5月5日生、昭和19年3月5日没、年88。

本田種竹(1862~1907)は明治時代、徳島の人。名は秀。字は実卿。通称は幸之助。号は種竹。家は商家であるが、学芸に志して阿波藩儒岡本晒堂や有井進斎など朱子学系統の学者に学んだ。明治12年(1879)から13年にかけて、近畿地方を巡遊して江馬天江・富岡鉄斎などの墨客と交わった。明治17年(1884)上京して官途につき、駅通局・東京府・農商務省に勤め、また東京美術学校教授(歴史)・文部大臣官房秘書を歴任した。37年(1904)7月退官後は専ら詩文を事として39年、自然吟社を創立して主宰した。また国分青厘らと日本新聞の詩欄に拠って、とりわけ近体にすぐれた才能を発揮し、最も清の王漁洋を敬慕した。文久2年6月21日生、明治40年9月29日没、年46。著に懷古田舎詩存6巻・戊戌遊草2巻がある。

4、長尾雨山、高野竹隠、副島蒼海

長尾雨山(1864~1942)明治・昭和時代前期の漢学者、書家。元治元年9月18日生まれ。五高、東京高師などの教授を歴任。明治36年上海にいき教科書の編集にあたる。大正3年帰国、京都にすむ。平安書道会副会長。没後に「中国書画話」が刊行された。昭和17年4月1日死去。79歳。讃岐(香川県)出身。帝国大学卒。名は甲。字は子生。

高野竹隠((1862~1921)は明治・大正期の漢詩人、尾張国(愛知県)の人。本名は高野清雄、別号は白馬山人。佐藤牧山に漢学を、森春濤に詩を学んだ。明治・大正にわたり、随鷗吟社の客員、鷗夢吟社賛助員として尽くした。伊勢、備前、鹿児島などで教え、備前岡山時代、同地の西川吟社を指導した。晩年は京都に住んだ。

副島蒼海(1828~1905)江戸末・明治時代、佐賀の人。名は種臣。通称は二郎。号は蒼海・一一学人。佐賀藩士で藩の国学教授枝吉南濠の二男。兄を神陽といい、藩学

教授で、門下に大隈重信・江藤新平などの偉才がある。早くから家学を受けて、兄神陽の感化を得、藩士副島利忠の養子となり、国事に志して、幕末維新の際に奔走した。明治元年(1868)3月、新政府に召されて参与・制度局事務判事となり、その後、外務卿・宮中顧問官・枢密院副議長・内務大臣などを歴任した。明治38年1月31日没、年78。経学に通じ、詩を善くし、森春濤一派の清詩流行のときに当たって、漢魏の古調を唱え、これに和すものに国分青厘・石田東陵などがあつた。著に蒼海全集6巻がある。

(二) 明治後期：日本漢文学の衰滅

神田喜一郎の述べたように、明治20年あたりになると、漢文学の大家と称えられた長老が、ぼつぼつ凋落しはじめ、日清戦争によって、日本が清国に勝ったことは、これまで中国の文化に対して日本人がもっていた尊敬の念を雲散せしめ、日本の漢文学は、俄に衰滅してしまうのである。それでもそれから10年、日露戦争(1904～1905)の頃まではどうにか命脈を保ったし、特に漢詩などはかえってこれまで以上に盛んであつたが、あたかも日本の文壇に自然主義が勃興してくると、その時をおなじうして、ここにまったく生命を喪うことになってしまった。もっともそれ以後においても、漢詩を作り漢文を作るひとが全然なくなつたというのではない。個々の作家としては、前代にもまさる、すぐれた人が稀に出てはいる。しかし、その作品はもう特殊な専門家の間にだけ通用するにとどまって、一般の人びととは何の関係ももたない無縁の存在となつてしまつた³⁷⁹。

第四節 日本漢文学における中国文学の受容

内藤湖南の日本文化に関する主な論点は「文明中心移動論」、「中国文化は日本文化の要素である」、「螺旋循環状の文化影響論」、「富永仲基の『加上説』は東西思想学派成立の通説である」等。桑原武夫は内藤湖南の名著『日本文化史研究』に対する解説において、次のように述べた。

湖南は若いころ『学変臆説』と題して天運螺旋循環説なるものを唱えたことがある。

³⁷⁹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.183～184。

進歩のプロセスは決して直線ではなく、また円環でもない。それはいわばラセンのようにもとに巡りつつ高まっていくというのである。イタリアのヴィコにこれに似た循環史観があるが、若い湖南がそれを知っていたのだろうか。ともかく湖南のほうかはるかに明晰だ。本書でも、一つの文化が発達してある時代に絶頂に達すると、それは以後の時代にはもはや発達しない。発達するよう見えても、それは種類が変わってきているのだという着目すべき断絶史観を示しているが（上巻、103 ページ）、これはラセン史観の展開ということができる。このほか本書には湖南が初期からもっていた「文化中心移動説」、日本への中国文化の影響における『ニガリ説』など、代表的『独断』が読まれるが、読者はそのほかにも光を放つ小独断にいくつもめぐり会うはずである³⁸⁰。

文明中心論の主張は内藤湖南『近世文学史論』³⁸¹の序論にある。「夫れ文物なる者は、民種の英華なり、方土の果實なり、或は其の時に應じて而して榮ふ・譬へば猶ほ櫻桃杏李の盛春に於ける、桔梗、敗醬、胡枝、紫苑の初秋に於けるがごとし・或は其の壤に因て而して宜しうす、譬へば猶ほ椰子椿樹の蔭を炎日の下に交へ、松杉檜柏の翠を堆雪の中に見はすがごとし。」内藤は序論の初めに自然風物は或はその時に応じてそして榮え、或はその壤によってそして成長していくことにより、文化の形成は時代や地域などに緊密な関係を持っていると主張した。各国各時代の文化はそれぞれ各地域各時代文化の特徴がある。「禮文の成周に備はるや、禮儀三百、威儀三千、其の諦は則ち雅頌、其の絃は則ち紹武、辭令の春秋に妙なるや、戰陣の間と雖も、整うて而して暇ある、以て相尚ぶことを爲し、雍容聞雅、曾て急言端論せず、辯読の戦國に盛なるや、長短掉闔、縦を合し横を連ね、人の國を安危し、人の家を存亡せしむ、記誦訓詁の爾漢に精なるや、三冬二十萬言、奇字艱辭、博閎を銜耀し、名物度数、蟲魚草木、曲さに詳密を極む、清談詞章の六朝に行はるゝや、半吐半吞、含糊微中以て其の玄を競ひ、綺章給句、駢四儷六、以て其の巧を孚ふ、有唐の詩、菁華瑰麗已に極り、馳騁揮霍又有り、渾々灑々、沈鬱頓挫、前より光にして而して後を啓く、有宋の學、天人の際を

³⁸⁰ 内藤湖南：『解説（桑原武夫）』『日本文化史研究（下）』（東京：株式会社講談社、1976年11月10日第1冊発行 2012年2月10日第33冊発行）、p.175～176。

³⁸¹ 『近世文学史論』は旧名関西文運論と言、明治29年（1896）大阪朝日新聞社に連掲され、明治30年（1897）1月10日に1945年まで存続した政教社により出版され、1939年5月に日本文化名著選シリーズの一つとして創元社により出版され、1970年9月15日に筑摩書房により『内藤湖南全集 第一巻』（編者は神田喜一郎、内藤乾吉）に収録、出版された。

極め、性理の奥を發し、碎脞の習を擺脫し・精一の旨に體達し、雲霧を排盡して、親しく日月を睹る、明清の纂輯考據、二酉四庫、汗牛充棟、獺の魚を祭るが若く、毫釐を剖析し、錙銖を甄別し、蟲と伍を爲す」のごとき、中国文化は時代の変遷により、その文化の形態も異なっている。例えば、周朝の文化精髓は典章制度（礼楽文物に関する法令制度）であり、周と秦の間は諸子学であり、両漢は經典訓詁であり、六朝は銜学駢體であり、唐は詩歌であり、宋は儒学であり、明清は典籍整理である。

「夫れ時以て之を経し、地以て之を緯し、錯綜して而して之を變化す、文化の史、斯に燦然として其の美を爲す。錦繡の文を成すを觀るに、繁簡の相代る、此に絢爛の處あれば、彼に散漫の處あり、人の視線必ずかの絢爛の處に集中し、而して其の段を成し匹を成す、繁簡の相代る、從頭徹尾、上下一様なるを嫌ふや、則ち亦一縦一横、以て其の變化の奇を出す。横卷の山水を作るを視るに、必ず處々湊合の位置あり、以て全幅の氣脈をして、斷續相屬せしむること、藕を折ること數節、而かも絲は則ち相牽くが若くす、而して其の湊合の處、或は重嶂、或は孤峰、或は懸泉、或は幽壑、乃至樓閣、危巖、林樾、密篁、宜しきに隨て點し、以て其の重複を避く、是に於てか文化湊合中心の説あり」

要するに、文物は時代、風土に関するもので、時代と風土と結合して文化湊合中心になる。上記のように、時代と地域を経緯とし、例えば、諸山水絵画、懸泉、幽壑、樓閣處々湊合の位置あり、縦横に入りこんでいて、脈絡が繋がり、匹を成す。そして、文化中心はまた各時代の政治、經濟などの原因で移動することもある。内藤湖南は文化が時によって違い、地域によって適合し、即ち文化の形成は時代と地域を経緯とし、文化の中心はまた時代の推移によって移動することもあると考えられた。

中国文化は日本文化の「凝集要素」である。内藤湖南はその名著『日本文化史研究』において、次のとおり述べた。

「従来の日本の学者の解釈の方式は、日本文化の由来を、樹木の種子が最初から存して、それを支那文化の養分に依って栽培せられたと云ふやうに考へるのであるが、余の考へるところでは、例へば豆腐を作る如きもので、豆を磨った液の中に豆腐にな

る素質を持ってはいたが、之を凝集さすべき他の力が加はらずにあったので、支那文化は即ち其れを凝集させたニガリの如きものであると考へるのである。又他の一例を擧げて見るならば、兒童が智識となるべき能力を自然に具へてゐるけれども、其れが眞の智識となる方式は、先進の年長者から教へられて初めて出来たと同じである。」³⁸²

それは内藤湖南の有名な「ニガリ説」である。日本の漢文学もそのように、中国文学という「ニガリ」の凝集力により、ずいぶん長い間に形成せられるものである。

「応仁の乱」は日本文化独立の契機である。日本學術文化の發展はすこぶる中国からの影響を受けた。聖徳太子以後平安期までは漢唐時代の注疏学と唐代の文化を受け入れた。徳川時代の二百五、六十年は宋明理学、宋の文化と清朝考証学を受け入れた。學術文化の性質形態に関しては、前者は貴族文化、宮廷文学、後者は庶民文化、學術も朝廷から民間へ普及していった。その學術文化の變化する契機は応仁の乱である³⁸³。内藤湖南は応仁の乱が日本独特文化の發生した重要時点であるとより強く主張した。要するに、日本は中国からの影響をかけ離れ、独自の學術文化を作る轉換点である。

螺旋循環状の文化影響論に関しては、内藤湖南は『内藤湖南全集』第一卷に収録された「學變臆説」において、次のとおり述べた。

「天運は循環するか、意ふに其の循る所の環は、完全なる圓環にあらずして、寧ろ無窮なる螺旋形を為す者たらんか、何となれば一個の中心點より展開して三のダイメンションある空間を填充すべき一條線は、須らく無限に支派して螺形に纏繞する所の者たらざるべからざれば也。」³⁸⁴

それに対し、連清吉教授は次のとおりに指摘した。内藤湖南が言うとおりに、東洋文化の中心は中国にあり、黄河沿岸に芽生えた文化はまず西の方に伸び、また南の方に至り、その後東北から日本へと蔓延してきた。中華文化の刺激により、中国周辺の各民族はやっと文化勃興を起こした。その後、周辺民族は新興文化を為し、逆に中国に

³⁸²内藤湖南：「日本文化史研究」『内藤湖南全集』第九卷、東京：筑摩書房、1997年12月8日、p.14。

³⁸³連清吉：『内藤湖南的日本文化論』、『前言：内藤湖南の著述生平及其以時地為經緯的文化形成論』『日本近代的文化史学家：内藤湖南』（台北：台湾学生書局、2004年10月初版）、p.17。

³⁸⁴内藤湖南：「學變臆説」『内藤湖南全集』第1卷、東京：筑摩書房、1970年1月10日、p.351。

まで至る。其の正方向移動と逆方向移動のくりかえり循環は、即ち東洋文化形成の歴史軌跡である。

内藤湖南は富永仲基の「加上説」が東西学派成立の通説であると考えられた。加上説とは、古代神話や宗教を解釈する仮説のひとつ。日本の学者・思想家の富永仲基（正徳5年〔1715〕～延享3年〔1746〕）や、中国の歴史学疑古派の顧頡剛（1893～1980）が提唱した。それに関し、連清吉教授は『日本近代的文化史学家：内藤湖南』の『前言：内藤湖南の著述生平及其以時地為経緯的文化形成論』注26において、すでに説明した。内藤湖南は富永仲基の「加上説」を用い、学術思想発展の順序を客観的に把握して、中国古代思想の歴史を築いた。

以上は内藤湖南の有名な「文明中心移動論」、「ニガリ説」、「螺旋循環状の文化影響論」である。日本の漢文学もそのように、中国文学という「ニガリ」の凝集力によって、ずいぶん長い間に形成せられるものである。神田喜一郎はその先生である内藤湖南の思想文化からの影響を受けたのであろう。本節は神田喜一郎の日本漢文学の中国的要素に関する論点を展開していきたいと思う。

一、飛鳥時代の日本漢文学における中国文学の受容

本章第三節に述べた通り、日本漢文学の黎明期とはいわゆる飛鳥時代（崇峻天皇5年～和銅天皇3年、つまり紀元592年～710年の118年間）、すなわち推古朝になってからの時代である。日本に初めて漢文学の黎明ともいべきものが萌してきたのである。

（一）漢籍の伝来

まず『論語』と『千字文』の伝来に関する伝説に対して、神田喜一郎は大体紀元三世紀に『論語』と『千字文』とが博士王仁によってもたらされたという伝説を批判した。『日本の漢文学』においては、神田喜一郎は「大体紀元三世紀に当たる応神天皇の治世に百済から『論語』と『千字文』とが博士王仁によってもたらされたという伝説がある。そうして漢文学の黎明をこの時代に擬する学者が少ない。しかし、『千字文』という書は、中国において南北朝時代、梁の周興嗣の作ったもので、6世紀の前半の

著作である。それが3世紀に伝えられるはずがない³⁸⁵と述べた。

その伝説は主に『古事記』と『日本書紀』の中に記載されている内容だろう。『古事記』においては、「百濟国、若有賢人者貢上。故受命以貢上人、名和邇吉師。即論語十卷・千字文一卷、并十一卷、付是人即貢進。」³⁸⁶と記された。それに対して、『日本書紀』においては、「十六年春二月、王仁来之。則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁。莫不通達、所謂王仁者是書首等之始祖也。(日本語訳：十六年の春二月に、王仁来たり。則ち太子菟道稚郎子、師としたまひ、諸典籍を王仁に習ひたまふ。通た達たまはずといふこと莫し。所謂王仁は、是書首等が始祖なり)」と記載された。

この伝えは、儒教の初伝として古くから重要視されてきたものであるが、しかし記・紀のこのように古い年代の記事を、すぐそのまま信用することはもちろんできない。ことに応神天皇何年という年月や、『論語』・『千字文』を持ってきたとか、太子の師となったというようなことは、後世の造作という疑いがきわめて濃厚である。上述した通りに、『古事記』の応神天皇の条に16年(紀元285年)に百濟の国の和邇吉師(王仁)が「論語」10巻、「千字文」1巻をもたらしたという記述がある。また『日本書紀』の応神紀には、菟道稚郎子皇太子が王仁について漢文を習ったと記されている。が、その時代には中国ではまだ「千字文」は成立しておらず、南朝の梁の武帝(464-549)が周興嗣(470-521)につくらせたものである。だが王仁は帰化人として日本に滞在していたと考えられ実在の人物とみなされている。「千字文」を伝えたとするならば6世紀初めの人と考えられる。いろんな説が出たが、いずれも牽強附会の説である。「要するに日本の古代の紀年に誤があるところから起こった矛盾に過ぎず、おそらく6世紀の後半あたりに伝えられたものであろう。」百濟から仏教が初めて日本に伝えられているという事実から考えて、「論語」や「千字文」が6世紀の後半あたり、大体欽明天皇の治世に伝えられた。

(二) 五経博士来朝

欽明天皇の少し前、継体天皇の治世には、百濟から五経博士が来たという伝説もある。この伝説に対して、神田喜一郎は「この伝説は、まず信據しうるものと思うが、

³⁸⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.135。

³⁸⁶青木和夫【ほか】校注：『古事記』『日本思想大系』第1巻、東京：岩波書店、1982年2月25日、p.214。

その五経博士とは、果たしてどの程度の学者であったか分からないにしても、ともかく五経博士というからには、漢文学の素養のあった人物と見なくてはならない。そうした大体欽明朝における漢学者の渡来と、漢籍の伝来とは、日本にやがて漢文学のおこる素地を作ったものであることを疑えない。日本に漢文学の黎明のきざしてきたのは、やはり飛鳥時代になってからである。」³⁸⁷と述べた。

(三)「夷蛮伝」に載せる表文

中国において、梁の沈約の書いた『宋書』の中の「夷蛮伝」に載せてある倭王武が宋の順帝に上がったという表文のことである。表文の内容は次のとおりである。

順帝昇明二年、遣使上表曰「封国偏遠、作藩于外、自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧處。東征毛人五十国、西服衆夷六十六国、渡平海北九十五国、王道融泰、廓土遐畿、累葉朝宗、不愆于歲。臣雖下愚、忝胤先緒、驅率所統、歸崇天極、道逕百濟、裝治船舫、而句驪無道、圖欲見吞、掠抄邊隸、虔劉不已、每致稽滯、以失良風。雖曰進路、或通或不。臣亡考濟實忿寇讎、壅塞天路、控弦百萬、義聲感激、方欲大舉、奄喪父兄、使垂成之功、不獲一簣。居在諒闇、不動兵甲、是以偃息未捷。至今欲練甲治兵、申父兄之志、義士虎賁、文武效功、白刃交前、亦所不顧。若以帝德覆載、摧此強敵、克靖方難、無替前功。竊自假開府儀同三司、其餘咸各假授、以勸忠節」詔除武使持節、都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王³⁸⁸。

原文は四六駢儷体で格調高い名文で、装飾過剰である。この倭王武とは、多くの歴史学者によって雄略天皇に議定せられている。そうすると、この表文は、実に日本最古の漢文となるわけで、現にそう見て少しも疑わない学者もある。しかし、神田喜一郎は「その文章はあまりにも堂々とした駢体文で、当時の日本人の作ったものとは到底考えられないのみならず、これを、当時日本に多く帰化していた朝鮮の帯方や楽浪地方出身の漢人の手になったものと見ても、やはり立派すぎている。」と指摘しているとともに、「もし、これだけの堂々とした駢体文を作りうる人物が、日本であると帰化の漢人であるとを問わず、当時日本に存在していたとするならば、日本の漢文学は、もっと開花しておるべきはずである。この文章は、おそらく一代の文豪と言われた沈

³⁸⁷ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 135。

³⁸⁸ (梁) 沈約：『卷九十七 列傳第五十七 夷蠻』、『宋書』(中華書局、1974年)、pp. 2395～2396。

約が『宋書』を書いたときに潤色したものに相違ない。」³⁸⁹と考証した。

(四) 駢体文と日本漢文学の萌し

まず飛鳥時代に作られた純文学的な漢詩文は、ただ一遍だけ今日に依存するものがある。それは法興6年、すなわち推古天皇の4年(596)に、湯岡の側に建てられた碑の文章である。

法興六年十月 歳在丙辰 我法王大王与慧慈法師及葛城臣 道遙夷予村正觀神井
歎世妙驗 欲叙意 聊作碑文一首 惟夫 日月照於上而不私 神井出於下無不給
万機所以妙応 百姓所以潜扇 若乃照給無偏私 何異干(天の誤りか) 寿国 随華台
而開合 沐神井而?(癒) 疹 ?(言巨) 舛于落花池而化弱 窺望山岳之巖?(愕) 反冀
子平之能往 椿樹相?(蔭) 而穹窿冥想五百之張蓋臨朝啼鳥而戲?(峠の山が口) 何
曉乱音之聒耳 丹花卷葉而映照 玉菓弥葩以垂井 經過其下 可以優遊 豈悟洪灌霄
霄庭 意与才拙実慚七步 後之君子 幸無蚩咲也

碑の現物は亡失し、文面のみ『釈日本紀』巻14所引の『伊予風土記』逸文に残っています。『釈日本紀』や『万葉集註釈』が引用した「伊予風土記逸文」には、推古4年(596年)聖徳太子(厩戸皇子)と思われる人物が伊予(現在の愛媛県)の道後温泉に高麗の僧・慧思と葛城臣なる人物を伴って赴き、その時湯岡の側にこの旅を記念して「碑」を建て、その碑文が記されていたとされている。

大体は温泉の霊妙な効能を讃歎したものであって、いかにも中国の六朝時代に流行した駢体文を極力模倣しようとしたものであることは、だれにも容易に看取しうるところである。神田喜一郎の記載した通り、「当時、梁の昭明太子の編纂した『文選』が伝わっていたことは確かで、それは聖徳太子の『十七条憲法』の中に『文選』に見える魏の李康の作った『運命論』の句が用いられている事実によっても証明せられるのであるが、そうした事情を考えるならば、この道後の温泉の碑文に六朝の文気のうちがいうのも、もとより当然のことと首肯できよう。」

北周の文豪である庾信に「温湯碑」³⁹⁰という文章がある。『文選』には収められてい

³⁸⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.136。

ないが、こんな文章も手本となった可能性がある。しかし、そうとは言うものの、「この道後の碑文は、そんなに上乘の作品ではない。駢体文として構成の上に欠陥があり、措辞またはなはだ生硬である。おそらく作者は駢体文の法則を十分に消化していなかったのみならず、これだけの内容のある駢体文を描くには、その文才学力ともに足らなかったものと思う。いわば少し荷が勝ちすぎている感がある。当時の漢文としては、最高の作家の手になったものに違いないが、それだけに当時の漢文学の程度をこれによって大体推測することができるのである」³⁹¹と神田喜一郎は証拠を出して評論した。

その次、飛鳥時代に一般に大きく取り上げられているものに、名高い聖徳太子の「十七条憲法」や法隆寺金堂の釈迦三尊像をはじめ、各種の仏像に見る造像記がある。が、「これらの文章は、実は純文学的作品とは言えない。」その理由としては、「十七条憲法」は立派な文章であるので、北周の蘇綽が太祖のために作った六條の詔書などに範をとって書かれたものと思われる。造像記の文章には、特に法隆寺金堂の薬師如来像の光背に刻せられている丁卯年の造像記の如く純然たる漢文で書かれている文章はなかなか内容もある名文である。こうした造像記といい、「十七条憲法」といい、この時代には漢文学の素養が、純文学的な作文を生み出すまでにはまだ成熟していなかったのであろう。

（五）近江朝の漢文学における中国文学受容

純文学的な作品の出現するのは、飛鳥時代から更に50年の歳月を経過した近江朝になった。この時代になって、はじめて日本に漢詩作家が現れた。『懷風藻』の開巻第一に載っている大友皇子、すなわち弘文天皇である五言絶句の漢詩二首である。「特に『述懐』と題した一首は、皇太子の地位にある人の言葉として、立言の体を得ているのに感心する。」その詩の転結に「羞無監撫術、安能臨四海。」との二句があるが、その「監撫」という二文字について、従来この字面を説くに、『書経』の太甲に見える「天、其徳を監し、……萬方を撫綏す。」という言葉に出典を主張する注釈家があるが、神田喜一郎は「それでは全く見当違い。意味をなさない。」と述べた。その理由としては、監

³⁹⁰ (北周)庾信撰、(清)倪璠注：『第十三卷碑 温湯碑』『庾子山集注(全三冊)』、北京：中華書局、1980年10月第1版、pp.727~731。

³⁹¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp.137~138。

撫とは、『左伝』の閔公二年の条に、「君行けば則ち守り、守りあれば則ち従う。従うを撫軍といい、守るを監国という。古の制なり。」とあって、天子諸侯の太子には監国撫軍ということが任務となっていたところから特に「監撫の術」という字面が用いられたのであって、その用字の的確で慎重なことを見るべきであるということである。

近江朝から浄御原朝にかけて、大友皇子、葛野王と大津皇子らの活動は、飛鳥時代に萌してきた日本の漢文学の黎明を一層明るいものに進めた。「それは飛鳥時代以来、中国に二十年三十年にも長期の留学を終えて帰朝した高向玄理・僧旻・南淵請安などが、新しくもたらしかえった中国文化に対する知識が次第に醗酵せられ、それが大化の改新(646)という未曾有の一大変革を契機に、ついに表面に現れ出たものと思う。」

392

二、奈良朝の漢文学における中国文学の受容

前述したとおり、日本の漢文学は、奈良朝に入るとともに、ますます発展の一路をたどった。その原因は、中国文化の摂取が急速度に進んだためである。当時の貴族社会における中国文化に対する憧憬がますます熾烈を加え、それとともに遣唐使が奈良朝75年間に三度も派遣せられた。

(一) 奈良朝の漢文学における中国六朝～初唐の文学の受容

その時代において、当時の中国は安史の乱があったけれども、中国文学史上から言くと、いわゆる盛唐の時代で、中国文学の精華である詩が全盛を極めたのであった。古今を通じて詩人の冠冕と崇められる李白・杜甫の二大詩人をはじめ、王維・孟浩然・高適・岑参らの作家が雲のごとくに紛起したのも、この盛唐の時代である。奈良朝がこの盛唐の時代に当たることは看過できないところであって、現に元正天皇の養老元年(717)に遣唐使として中国に派遣せられた阿部仲麻呂(文武天皇2年〔698〕～宝亀元年〔770〕)が、中国において李白や王維と親しく交際しているがごとき、だれも知る名高い事実である。しかし、神田喜一郎は「こうした事実だけを見て、奈良町の漢文学が盛唐文学の影響を受けていたかのごとく考えては、それは大きな誤りである。

³⁹²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.140。

当時の漢文学は、実は李白や杜甫の出た盛唐の時代の文学とは、まったくと言ってもよいくらいに異なったものであったのである。」と指摘した。なかなか鋭い考察である。考えてみると、まさにそうである。前述したとおり、奈良朝の時代は、ほぼ唐の玄宗、肅宗、代宗の三代の治世に当たっている。所謂盛唐文学の時代であるが、奈良朝の漢文学はすぐその影響を受けるのは無理であろう。

盛唐文学の影響を受けていなかったのなら、いったい奈良朝時代において、奈良朝の漢文学は中国のいかなる種類の文学からの影響を受けていたのか。いま正倉院に蔵する当時の文書を調べてみると、当時輸入せられ、多く読まれた中国の文学作品は『離騷』『文選』、それから別集として『庾信集』『太宗文皇帝集』『許敬宗集』などが書写せられていることが分かる。「これらの書は、もちろん奈良朝時代に読まれた中国文学書のごく一部にすぎないけれども、しかし、これでも大体の傾向だけは察しうるように思う。」³⁹³神田喜一郎はその「傾向」を二種類分けて述べる。すなわち一つは、『離騷』『文選』『庾信集』と連なる一類で、中国文学の古典である。それから一つは、『太宗文皇帝集』『許敬宗集』という一類で、これは唐の宮廷を中心とした当時の新文学である。

以上の分類により、神田喜一郎は二つの例を挙げた。一つは、『翰林学士集』という許敬宗が編集した、唐の太宗の貞観年中に群臣の間で昭和した詩を集めた書の、奈良朝時代に書写されたと覚しき古鈔本の残巻が伝わっている。それは偶然ではなく、こうしたものが喜んで読まれたことが想像せられる³⁹⁴。もう一つは、正倉院には、文武天皇の慶雲4年(707)に書させられた『王勃集』の残巻が蔵せられている。楊炯・盧照隣・駱賓王と相並んで初唐の四傑に数えられる大詩人である王勃の作品は奈良朝時代に盛んに流行したらしい。慶雲四年に書写せられた正倉院本のほかに、もう一本やはり奈良朝時代に書写せられたと考えられるものが伝わっている。この『王勃集』は、唐の宮廷を中心とした当時の新文学という第二の種類に属せしめるには無理があるが、しかし、当時として最も新しい文学書であったことは確かで、その意味において位は、第二の種類に準ぜしめても必ずしも不当ではないと思う³⁹⁵。

³⁹³神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.141。

³⁹⁴神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.142。

³⁹⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年

以上は中国文学の古典、初唐の宮廷を中心とした当時の新文学という奈良朝の漢文学が受けていた中国的要素を述べた。その時代において、もう一つの種類の文学である仏教文学がある。梁の僧裕の編纂した『弘明集』及び唐の道宣の編纂した『広弘明集』の如き名著から、釈靈實の『鏡中集』などという、その書名すら中国に伝わらぬ仏教文学書が読まれたらしく、これを書写した記録が正倉院の文書にあるし、また今正倉院に蔵する聖武天皇の宸翰『雑集』には、『鏡中集』やそのほか多くの仏教文学書を抄録していて、当時どんな仏教文学書が渡ってきていたかがよく窺われる³⁹⁶。

以上のように、奈良朝時代に輸入せられ、また多く読まれた中国の文学書は、大体三つの種類に分けられるのである。つまり、神田喜一が認める奈良朝時代の漢文学の中国的要素は『離騷』『文選』『庾信集』をはじめとする中国の古典、『太宗文皇帝集』『許敬宗集』をはじめとする唐の宮廷を中心とした当時の新文学、多く読まれたその書名すら中国には伝わらぬ仏教文学である。これによって、奈良朝時代の漢文学の性格も、ほぼ想像できる。

(二) 奈良朝の漢詩と許敬宗の『翰林学士集』

「奈良朝時代の漢文学の主流をなすものは詩である。そうしてそれは宮廷文学と言ってよかろう。」その理由として、神田喜一郎は『懐風藻』に収められた作品の大半は、宮廷におけるいろんな宴に侍して作ったとか、天子の駕に扈從してどこかへ遊んだとか、そういった大のもとに作られたものであったって、中には応制の作、すなわち天子の命によって作ったという詩も少ないというわけである。

それらの作品は大体六朝の末、すなわち梁・陳から初唐にかけて行われた詩風を学んだもので、いかにもその痕跡の歴然たるものがある。神田喜一郎の考えにより、奈良朝時代の漢文学の主流をなしている漢詩は主に許敬宗の『翰林学士集』からの影響を受けていた。

許敬宗（592年～672年）は、中国の唐の政治家、文学者、歴史家。字は延族。杭州新城県（現浙江省富陽市の西南）の出身。『高祖実録』、『文館詞林』、『西域図志』などの編纂に参加した。神田喜一郎のご紹介通り、許敬宗は、いうまでもなく唐の太宗に

10月15日、p.142。

³⁹⁶神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.142。

仕えて著作郎に除せられ、次いで高宗の時、礼部尚書に進んだ人物であるが、その文学に長じたことは、唐の太宗がまだ秦王と称していたとき、文学館に招かれ、いわゆる文学館の十八学士の一人に数えられたことによっても知られよう。その集には、多くの宮廷を中心とした作品が収められていたに違いない。それらは奈良朝の宮廷詩人にとって、便利な参考書であった。いま残巻の伝えられている許敬宗の『翰林学士集』は、まったくそうした性格のものである。

いずれにしても、奈良朝の漢文学の主流をなしている漢詩は、大体以上のような性格のものである。文学としてはそう優れたものではない。もとより一種の台閣体ともいべき文学であるから、奇抜な構想とか、激越な感情とか、そういったものを求めることはできないし、どうしても平正典雅に趣くのは当然である³⁹⁷。

(三) 奈良朝の漢文における中国文学の受容

奈良朝時代の漢文作品には、純文学に属しないものがあるが、概していうと、その出来栄は漢詩に勝っている。説明するには、神田喜一郎は、元明天皇の和銅5年(712)に太安万侶(?~養老7年[723])が『古事記』を撰録して上がった表文や、『懷風藻』の序文などを例として挙げた。それらに対して、神田喜一郎は「いずれも本格的な駢体文で書かれていて、實に堂々たるものである。前者は唐の長孫無忌が『五経正義』を上がった表文を手本として書いたものらしいが、それにしても巧みに日本の故事を漢文でしるしなどしている手腕は相当なものである。後者は梁の昭明太子の『文選』の序を模範としたものと思うが、これも格調の高い典雅な文章である。」³⁹⁸と高く評価した。

もう一首立派な文章は天平勝宝8年(756)7月、光明皇后が聖武天皇の御遺愛の品を東大寺に施入せられたとき、その品目を書いて差し出された目録、すなわちいわゆる『東大寺献物帳』の首に載せられた序文である。これは隋の煬帝の「宝臺経藏願文」などに則って書かれたものである。ともかく名文である。そのほか『続日本紀』などに見えている詔勅の文章などにも優れたものが多い。また『懷風藻』の詩には、当時の例として、作者自らその詩を作った由来を書いた序のついているものも少くない。

³⁹⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.143。

³⁹⁸神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.145。

奈良朝時代の漢文学においては、文章が詩に勝っていたという理由は次のとおりである。当時の文物制度ことごとく唐王朝に範をとっていた。朝廷において、上は天皇の詔勅から下は臣下の表奏に至るまで、あらゆる文書は、みな漢文を以て書かれた。そのほか各官庁の文書の類もまた皆そうであった。従って漢文の社会的必要性は極めて高く、自然的に、これを熱心に学ぶものが多く、名手も出たのであろう。その反対として、詩にはそれほど需要がなかった。それに単に自己の感情を抒すだけならば、日本語を以て自由に目的を達しうる和歌の道が明けており、わざわざ漢詩に苦勞する必要がなかった。それも当時の漢詩が文章に比べて遜色のある大きな原因である。

(四) 仏教文学における中国文学の受容

奈良朝の仏教文学については、前述したとおり、仏教が栄えたので、多くの仏教文学書が読まれた形跡があるが、神田喜一郎は「特にそれを学んで、立派な仏教文学を生み出すことはなかった」と述べた。

ともかく、前述のように、梁の僧裕の編纂した『弘明集』及び唐の道宣の編纂した『広弘明集』の如き名著、釈靈實の『鏡中集』などという、その書名すら中国に伝わらぬ仏教文学書が多く読まれたらしく、書写された。二つの例として、大和の薬師寺の東塔の檨の銘は『広弘明集』に見える唐の長安の西明寺の鐘銘の文句を取り入れて作ったものであり、長谷寺の法華説相の圖の銅板の銘は『広弘明集』に見える「瑞石像銘」を学んだ痕跡がある。当時の漢文作家が中国の作品を平気で焼き直したことを知りうるのである³⁹⁹。

三、平安朝の漢文学における中国文学の受容

平安朝の漢文学の中国的背景と時代区分について、神田喜一郎は次の通り述べた。

桓武天皇の延暦十三年(794)、平安京、すなわちいまの京都に都が奠められてから、源頼朝が鎌倉に幕府を開く(1192)まで、凡そ400年間を平安時代という。ところで、この時代は日本の漢文学という立場から見ると、正式に遣唐使の廃止が決定せられた宇多天皇の寛平6年(894)あたりを界として、前後二期に分れる。中国においても、こ

³⁹⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.147。

れにおくれること 13 年(907)にして唐王朝が亡び、いわゆる五代の混乱時代がはじまった。日本の漢文学としては、これまで長い間、中国から絶えず新しい刺戟をうけていたのが、大体 10 世紀のはじめ頃から、それがぴつたりと止ることになったのである。ここに前後二期が劃せられるのは當然であろう。前期には、奈良朝時代のあとをうけて、日本の漢文学はますます隆盛の運に向った。この期の中心をなす嵯峨天皇の治世は、その絶頂をなしたともいいうる。しかるに後期になると、中国文学と隔絶された日本の漢文学は、おいおい日本化の方向をたどって、新しく一種の独自の境地を開いていった。これは日本文学の立場からは、あるいは進歩と見られないこともなかろう。しかし、中国文学の立場からは、明らかに退歩と認めねばならぬ。ともかくこの平安朝の後期になって、日本の漢文学は大きな變貌をとげるのである⁴⁰⁰。

日本人は何でも先進国の新しい傾向を趁うということは、昔も今も変らぬ特性がある。奈良朝以來、日本の漢文学が特に『文選』をもって金科玉條としながらも、その一面において、もっとも時代的に近い六朝末から初唐にかけて現われた文学作品を手本としてきたのである。平安朝に入ると、初唐よりも更に新しい時代の文学を手本として学んだようである。

(一) 三つの勅撰集の中国的要素

藤原佐世の著した『日本国見在書目録』は、その確かな著作年代はわからないが、ともかく佐世が醍醐天皇の昌泰元年(898)に歿していることによって、それ以前に著されたものであることは疑なく、大体ここにいう李安朝前期に日本に渡來していた漢籍をしるしたものを見て差支えなかろう⁴⁰¹。ところでその中には、唐人の詩文集として、太宗のときに出た上官儀、それから王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王のいわゆる初唐の四傑をはじめ、李嶠・劉希夷、それにややおくれて出た陳子昂、および杜審言、沈宋と並び称せられる沈佺期に宋之間、盛唐になって王維・李白・王昌齡、もっとも新しいところでは白居易・元稹などの集が見えている。また総集として『河嶽英靈集』⁴⁰²も

⁴⁰⁰ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 148。

⁴⁰¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 149。

⁴⁰² この書は唐の殷璠が編纂したもので、そこに収められた作家には、常建・李白・王維・李頎・高適・岑参・孟浩然・儲光義・王昌齡などの人びとがある。いま京都の陽明文庫には、桓武天皇の皇子の高枝王の筆蹟と伝える『河嶽英靈集』の断簡が遺っているが、平安朝前期には流行したものらしい。

見えている。

本章「第三節 日本漢文学史」の述べたように、この平安朝前期の漢文学は、また二つの時期に分かれる。第一は嵯峨天皇の弘仁(810～823)を中心とした時代であり、第二は清和天皇の貞観(859～876)を中心とした時代である。弘仁を中心とした時代の漢文学は、この時代に編纂せられた三つの勅撰集によってその大体を窺うことができる。三つの勅撰集とは、弘仁5年(814)の頃に小野寄守(寶龜8年〔777〕～天長7年〔830〕)が編纂した『凌雲集』、おなじく弘仁10年(819)に藤原冬嗣(寶龜6年〔775〕～天長3年〔826〕)らが編纂した『文華秀麗集』、および淳和天皇の天長4年(827)に良岑安世らの編纂した『経国集』である。

第一の『凌雲集』は、延暦元年(782)から弘仁5年に至る30余り年間の詩をあつめたもので、作家は24人、詩は91首である。第二の『文華秀麗集』は、ほぼおなじ時代の詩百四十三首を、遊覧・宴集・餞別・購答など十一の部門に分類排纂したもので、唐の『河嶽英靈集』とその体裁は異なるけれども、書名は『河嶽英靈集』に擬したのではないかと思われる。第三の『経国集』は、前二者とは違って、上は文武天皇の慶雲から下は淳和天皇の天長に及ぶ百二十余り年間に作られた詩文をあつめたもので、序文に言うところによると、作者は178人、賦17首、詩917首、序51首、封策38首を収むということである。しかし現行の『経国集』は、もともと二十巻あったうち、わずかに六巻を存するに過ぎない残缺本であって、もちろん詩文の数は非常に少い。

以上の三つの勅撰集の詩を見ると、さすがに『懐風藻』の詩とはいろんな点において著しく変わってきていることが感ぜられる。『懐風藻』には五言詩が大半を占めているのに対し、この三つの勅撰集には七言詩が圧倒的に多くなっている。このことは前人のすでにしばしば指摘したところであるが、単にそうした形式上の変化ばかりに止まらない。もっと重要なことは格調の変化である。例えば初唐の四傑をはじめ、當時の諸家が喜んで作ったものに七言歌行体の樂府がある。多くは四句ごとに韻を換え、聲調宛転、あたかも珠の盤を転ぶがごとく、なだらかに叙述を運び、幾段にも及ぶ長篇である。こういう樂府は、奈良朝時代にはこれを模倣するものがまだほとんどなかったが、平安朝時代に入ると俄に多くなってきた⁴⁰³。

⁴⁰³神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp. 150～151。

平安初期には、神田喜一郎の述べたように、一面初唐のものが喜ばれたが、しかしまたその一面において、七言律詩などになると、盛唐から中唐にかけて行われた、王維・孟浩然・常建・儲光義と連るところの、沖澹にして、しかも深遠な趣を具えた一派の作に近いものがある。これらの詩は、おそらく極めて清新なものとして、当時の人びとに歓迎せられたのであろう。

(二) 日本における最初の文学論『文鏡秘府論』における中国文学の受容

平安朝前期において、特に注意すべきことは、僧空海の『文鏡秘府論』の現われたことである。日本における最初の文学論で、その中国文学批評史や中国修辞学史の上に遺した功績は大きい。この『文鏡秘府論』は、六朝から唐代にかけて現われた多くの作詩作文書をあつめて、これを6巻にまとめあげたものであるが、その詩文を作る根本として思想の必要なことを論じたり、実際の事物についてみずから体験することの必要なことを論じたりしているのは卓見で、これを単なる詩文の格式作法を論じた修辞の書と見ることはできないと思う。中国において、これまでほとんどすべての文学論は、儒家的見地に立って、文学と道德とを切りはなして考えることができなかった。いずれにしても、これだけの書は、中国においても梁の劉勰の著した『文心雛龍』を除けば、前後に一つもないではないか。日本の漢文学として、中国に向ってもっとも誇りうる書の一つである。

平安朝の漢文学も、もちろん宮廷文学として榮えたので、その前期において中心となったのは、平城・嵯峨・淳和の三人の天皇であった。そうしてその周囲には、小野答守、その子の篁（延暦21年〔802〕～仁壽2年〔852〕）、良岑安世、滋野貞主、藤原冬嗣、菅原清公、賀陽豊年（天平勝宝3年〔751〕～弘仁6年〔815〕）など、多くの立派な文人があつまった。また嵯峨天皇の皇女には、有智子内親王のような才媛もあった。それらの入びとは、何か宮中に行事があつたり、どこかに行幸があつたりすると、天皇としばしば詩の応酬を試みた。ときには特別の詩會が催された。ただ、そういう場合、たいていは或る題目が定められ、それを詩に詠ずるのであって、どうかすると、まったく作者の体験を経たことのない「征成」とか「塞下曲」とか、そうした種類の題目の出されることもめずらしくはなかった。したがって詩を作るものは、何かの類書から適当な熟語や故事を拾いあつめ、それを巧みに組み合わせて間に合わすような

が多かった。要するに當時詩を作るということは、一種の文字の遊戯であったとも言っているのである。これは宮廷文学として已むをえなかったところであろうが、その結果、當時の作品には、一見まことに立派にできてはいても、生き活きた生氣とか、満ち溢れた實感とか、そうしたものに乏しい憾がある。しかし當時においては、生氣とか實感とかよりも、とにかく巧みに文字を組み合わす技巧を重んじたのである。天皇は當時の文壇の領袖として、それにふさわしい文学の才を具えておられた。御製の今日に傳わるもの百首に近く、當時における第一の作家であったと思う。天皇の周圍に多くの文人があつまり、一時の盛を極めたのも當然といえよう。この時代をもって、日本の漢文学の一つのピークとする⁴⁰⁴。

(三) 平安後期の漢文学における『白氏文集』の受容

平安朝前期の半ば頃になると、おなじく宮廷文学といっても、いくらか風調が変わってきた。その原因となったのは、名高い白居易、すなわち白樂天の詩文が日本に渡來したことである。

『白氏文集』が渡來した時代について、多くの学者は大江匡房（長久2年〔1041〕～天永2年〔1111〕）の談話を筆記した『江談抄』に見える周知の説話により、嵯峨天皇の治世にあたる。その記載により、嵯峨天皇は當時いちはやく白氏の集を入手せられ、その中から「閉閣唯聞朝暮鼓。登樓空望往來船。」の一聯を取り出し、わざと「空」の字を「遙」と改め、小野篁の才を試みられたという。が、神田喜一郎は「これは誰も周知の説話であるが、歴史的事実とは認め難い。したがってこれは嵯峨天皇の治世に白居易の集が渡來した謹擦とはならないのであって、その渡來の年代は、もう少し降る」⁴⁰⁵と主張する。現存の確實な史料から考えられるところでは、仁明天皇の承和5年(838)をもって最初とする。すなわち大宰少貳藤原岳守（大同3年〔808〕～仁壽元年〔851〕）が大唐人の貨物を調べて元白の詩筆をえたという『文徳實録』（仁壽元年9月の條）の記事より古いものはない。それから後、しばしばいろいろな人によって傳えられた。とにかく承和以來、白居易の詩文は俄に日本に流行して、ほとんど一世を風靡するに至った。

⁴⁰⁴神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 155。

⁴⁰⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 156。

その理由はもちろんいろいろあろうが、それについて、神田喜一郎は次のように述べた。白居易の詩が極めて平易で、日本人にも理解し易く、しかもその作品の中には、「長恨歌」や「琵琶行」のような艶にして美しい小説的興味の深い叙事詩などもあって、平安朝の宮廷詩人の嗜好によく適合したからであると思う。実際、白居易の詩は、中国においても、それとおなじ理由で夙く白居易の生存していた時代から流行し、揚・越の地方ではこれを特に印刷して売るものがあつた事実さえ伝えられている位である。もっとも白居易の詩が中国において廣範圍の読者をえたのについては、そのほかにも理由がないではない。その詩のなかに盛られた當時の政治や社会の矛盾に対する辛辣な批判は、これまでの貴族文学にはまったく見出されなかつたもので、當時ようやくそれらの矛盾に目覚め、頭をもちあげはじめた庶民の共感をよんだのである。ところが白居易の詩の伝えられた頃の日本にも、貴族社会の間に藤原氏の勢力の異常な伸張に対する一種の反感があつて、いくらか政治や社会の矛盾を自覚するものがあつたところから、そういう意味において、白居易の詩はまた一部の不平の徒の間に喜ばれたとも想像せられるのである。ともかく白居易の集は、それが渡來するとまたたくの間に大變な流行を來した。

平安朝前期の半ばを過ぎて出た島田忠臣とか都良香（承和元年〔834〕～元慶3年〔879〕）などは、白居易を崇拜すること、まさに神佛にもひとしいものがあつた。忠臣の「吟白舎人詩」と題した七言絶句とか、良香の「白樂天讚」と、題する一篇などは、その心情をよく物語っている。この忠臣・良香の二人は、もっともすぐれた當時の文人で、多くの作品を遺したが、その集を『田氏家集』とか『都氏文集』とか、いずれも白居易の『白氏文集』に擬した書名をつけているのを見ても、おそらく思い半ばに過ぎるものがある。

この二人にややおくれで、名高い菅原道眞（承和12年〔845〕～延喜3年〔903〕）日本の漢文学が出た。道眞が白居易をよく学んだことは、もちろん忠臣・良香以上で、中国においても、これだけよく白居易を学んだものはないくらいである。かつて渤海国の使臣裴頤が來朝したとき、道眞と詩の唱和を試み、道眞の詩をもって白氏の体をえたものと稱賛したというが、まことに當然の批評といえよう。もっとも道眞は、白居易ばかりを学んだのではなく、唐の温庭筠（飛卿）の詩を愛したとの説が『江談抄』に

見えている⁴⁰⁶。

「平安朝後期に入ると、日本の漢文学は、ほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった。もともと白居易は、中国において六朝以来貴族社会の間に発展してきた修辞本位の駢儷文学に反封して、もっと内容のある、そして庶民的な平易明白な文学を主張した詩人である。したがってその作品が日本に輸入せられると、日本の漢文学も、これまでと違って、平易な言葉をもって自由に思想なり感情を発表することをおぼえ、そこにだいぶ変化を生じてきた。」⁴⁰⁷

平安後期の漢文学は奈良朝以来の宮廷文学に較べて進歩してきたことが認められるのであるが、しかし、そうした一面、自己の思想なり感情を率直に表現しようとする結果、その作品にはすでに一種の和習がほのみえてきている。これは日本の漢文学を中国文学の一支流と視るときには、大きな一つの欠陥になる。これを漢文学の衰退時代と称しても差支えない。

この時期の作品をあつめたものとしては、『扶桑集』『本朝麗藻』および『本朝文粹』『本朝續文粹』がある。このうち『扶桑集』と『本朝文粹』とには、平安朝前期に属する人の作品も見えているけれども、その主とするところは平安朝後期の作品である。『本朝文粹』は、その書名は宋の銚鉦の『唐文粹』に従い、体例は『文選』に則った詩文の一大総集で、すべて十四巻、収められた作家の数は69人、詩文の数は429篇の多きに達している。編者は藤原明衡(永祚元年〔989〕～治暦2年〔1066〕)である。『本朝續文粹』は、すなわち『本朝文粹』の後を承けて藤原季綱の編纂したもので、すべて13巻である。以上の諸書によって平安朝後期の作品を読むと、せっかく白居易の詩に導かれて、自由に自己の思想や感情を表現するように向きかけてきた新傾向も、まったく挫折してしまい、一種のマンネリズムに陥って、時代の降るとともに、ますます低下していったと見るより仕方がない。これは一方において、純粋な日本文学が発達して、もはや漢文学は、いわば告朔の餼羊で、そうした存在としてのみ価値を認

406 国史研究会編『国史叢書 古事談 續古事談 江談抄』(東京:友文社、1914年12月22日発行)の「江談抄第五 詩事」には「菅家御草事。又被云、菅家云、温庭筠詩體優長也。」また、「新日本古典文学大系」大江匡房述、藤原実兼記;山根對助、後藤昭雄校注の『江談抄』(東京:岩波書店、1997年6月27日第1刷発行)は「(十七)菅家の御草の事」の下に「温庭筠の没年は870年頃、道真是903年であるから、道真是新しい詩人の詩を読んでいたことになる。また最も早い温庭筠詩の受容である。以後は千載佳句に18首、和漢朗詠集が3首採録され、匡房の詩境記に言及がる。」という注がある。

407 神田喜一郎:『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京:株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp.158~159。

められたに過ぎなかった結果と思う⁴⁰⁸。

四、五山時代の漢文学における中国文学の受容

中国の文学は、駢体の文学と散体の文学との二つに分けることができる。六朝から唐代にかけて榮えたのは駢体の文学であった。日本の飛鳥・奈良朝の昔から平安朝に至る漢文学は、この駢体の文学を承けたのである。ところが中国において、唐代の中頃から、おいおい散体の文学がおこってきて、ついに宋代になると、その全盛を見るに至った。五山文学は、この散体の文学を承けたのであって、したがっておなじく漢文学といっても、前代のものとは本質的に異なるのである。散体の文学は、詩においては唐の李白・杜甫・韓愈（退之）を先壘者とし、宋代に入って馮陽修（永叔）・梅堯臣（聖俞）・蘇軾（東坡）・黃庭堅（山谷）・陳師道（無己）・陳與義（簡齋）・陸游（放翁）・范成大（石湖）らの大家が輩出した。文においては唐の韓愈、柳宗元（子厚）の二人を先覚者とし、宋代に入って歐陽修・蘇軾・王安石（半山）・曾鞏（南豊）らの大家が輩出した。五山文学は、すなわちこれらの諸大家を規摹したもので、日本の漢交学としては、まことに新しく生面を開いたものといえることができる⁴⁰⁹。

五山文学の五山文学たる本領は、どこまでも散体の文学を主張したところにあるのである。こうして五山文学は、これまでの日本の漢文学の流れを一変せしめたのであったが、なおそれと共に、これまでの日本の漢文学が宮廷中心のものであったのを、新しく禅林中心のものに変化せしめたことも、日本の漢文学の歴史の上に大きな変革をもたらしたものといわなければならない。

（一）五山文学の基礎を築いた三大家における中国文学の受容

前述したとおり、五山文学の開祖は虎関師錬である。その中国の文学に対して、識見の優れていることは実に驚くべきものがある。その証拠としては、『濟北集』の中の「詩話」と題する一卷を見ると、その事実がありありと窺われる。この「詩話」は、中國において宋代にできた多くの詩話にくらべても、決して遜色のあるものではなく、

⁴⁰⁸神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.160。

⁴⁰⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp.160～161。

日本人の著した詩話では、おそらく古今第一と許してよかろう⁴¹⁰。神田喜一郎はそう高く評価した。大体虎關師鍊の漢文に対する好尚を知ることができるようである。詩はまったく宋代の詩風である。その傑作といわれる「梅花」と題する七言律詩九首などは、明らかに林逋の名高い「梅花」の作に擬したものである。

雪村友梅は久しく中國におったので、その詩には虎關師鍊と違って、當時の新風、すなわち元詩の格調が窺われる。たとえば「冬月游君山」と題し、「寄趙彦清」と題した七言律詩などの聯は、まったく元の楊載(仲弘)や范梈(徳機)とよく似ている。それに七言古詩にも、「眠山歌」とか「上祀融峰」とか、いろいろ傑作があるが、これにも金の元好問(遺山)や元の呉萊(淵穎)を想わすような瑰瑋なところがある。ともかく雪村友梅は、五山文學の初期に出た大詩人であった。

雪村友梅に少しおくれて中巖圓月が出ている。その詩文をあつめたものに『東海一温集』五巻がある。詩は李白と杜甫、文は韓愈と柳宗元を宗としたというが、詩はむしろ宋風である。かつて中國に留學し、滞留すること八年、當時の文豪薩都刺(天錫)と唱和を試みたということであるが、しかし、その詩には薩都刺などの影響は殆ど見られない。それよりも中巖圓月のすぐれていたのは文章である。『東海一温集』の巻四に収める「中正子」十篇などは、漢の楊雄を氣取って、儒家の仁義の道と佛家の性命死生の理とを論じたもので、思想的にも異色ある作品である。神田喜一郎の述べたように、中巖圓月は、詩人というよりも文章家、文章家というよりも思想家であったとって差支えない。

ともかく虎關師鍊・雪村友梅、それに中巖圓月の三人は、五山文學の基礎を築いた大家である。

(二) 五山文學における宋元の詩の受容

五山文學の基調となった中國文學が主に詩である。當時のもっとも新しい文學として、金王朝や元王朝の文學作品が喜ばれたことも、金の元好問の編集した『中州集』のごとき、金王朝の詩をあつめた十巻にも及ぶ大部な詩集をはじめ、元王朝の詩をあつめた『皇元風雅』などが印刷せられているが、これは雪村友梅などが當時の中國の新風をもたらした結果、それを喜ぶ文學会が相当に多かったためであろう。殊に

⁴¹⁰神田喜一郎：『日本の漢文學』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.162。

驚くのは、趙孟頫（子昂）・虞集（道園）・范梈・揭傒斯（曼碩）・薩都刺など、元王朝の代表的な詩人の集が多く印刷せられていることである。しかし、極く一般には、『三牘詩』『聯珠詩格』『古文眞寶』などという、中国ではまったく田舎の寺子屋の教科書に過ぎなかった通俗書が広く護まれ、中国文学の教養の基礎となったようで、いずれも五山版として印刷せられている。それにまた五山文学を知るには、南宋時代に出た詩話の多く読まれたことを注意しなければならない。

上述したことから窺えるが、五山の文学僧にはおのずから二つの派があった。大体は宋詩を喜んだが、その一方には元王朝の新しい詩風を喜んだ派のあったことである。そうして後者は中国に留学した者に多かった。この二つの詩風は、かなり違って、これを一言で言いあらわすならば、南宋の詩は濫であり、元の詩は麗である。

（三）五山の禅林文学における中国文学の受容

五山文学は、何と云っても禅林の文学である。その根底をなしているのは、いうまでもなく禅である。したがって五山の文学会も、いろいろ中国の文学作品を読み、これを作詩文の模範としたが、それよりもっと直接的な模範としたのは、やはり中国の禅僧の文学作品であって、唐の『寒山詩』をはじめ、宋の雪竇重顯の『祖英集』、契嵩の『鐔津文集』、敬叟居簡の『北磻集』、淮海元肇の『淮海掣音』、無文道璨の『無文印』、藏叟善珍の『藏叟摘稿』など、その他多くの禅僧の集が読まれ、中には五山版として印刷せられたものもあった。したがって、そうした意味からいうと、五山文学の本質は一つの偏向した文学であったといつてよからう⁴¹¹。

（四）五山時代の漢文学後期における中国文学の受容

五山文学前期の代表は虎関師錬、雪村友梅、中巖圓月三大家であるのに対し、五山文学後期の代表は義堂周信と絶海中津である。特に義堂は文に長じ、絶海は詩に長じた。義堂の文は篇数が多く、文章としてはなかなかすぐれている。詩はまったく宋風で、その理窟っぽくて風趣の乏しいことは虎関師錬とおなじである。これに対して絶海の詩は、おそらく五山文学の第一に位するといつてよいもので、じつに巧みである。殊に絶海が明王朝の極く初期にあたって中国に約十年間留学していた時代の詩に

⁴¹¹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.162。

は、中國の大家に伍せしめても遜色を見ないほどの傑作がある。「錢塘懷古」「岳王墳」「多景樓」などの七言律詩は、その代表的なもので、特に「多景樓」の一首がよい。絶海が中國に留学していた頃には、中國に高啓（青邱）のごとき一代の大家といわれた詩人がいて、絶海もその影響をうけたらしく、いかにも高啓を思わせるような調子のものがある。また絶海が親しく交際した禅僧には、季潭宗泐・独菴道衍・見心來復などといった當時の名高い文学僧がおったが、その影響を受けたと思われる。絶海は、その意味ではよき時代に留学したものとも言うるのである。

以上、これを前にしては虎關師鍊・雪村友梅・中巖圓月、これを後にしては義堂周信・絶海中津が相ついで輩出した南北朝時代は、卒安朝の初期について、日本漢文學史上、第二のピークをなしたが、その後五山文學はあまり振わず、室町時代になって、いろんな文學僧が出たが、いわゆる強弩の末で、没落の一路をたどった。

五、江戸時代の漢文学における中国文学の受容

前述したとおり、神田喜一郎は江戸時代の漢文学に対して、三期に分けた。具体的には次のとおりである。江戸時代は厳密にいうと、徳川家康が江戸に幕府を開いた慶長8年(1603)にはじまるが、日本の漢文學の立場からは、大体、慶長元年(1596)あたりにはじまり、それから貞享4年(1687)に至るまでの90年間をもって、江戸時代の第一期とする。第二期は元禄の初(1688)から安永の末(1780)に至る90年あまりの間である。第三期は天明の初(1781)から慶応の末(1867)に至る80年余りの間である。特に、第二期には、日本の漢文学の第三のピークを迎えてきた。

(一) 江戸時代の漢文学の第一期における中国文学の受容

神田喜一郎が指摘したように、江戸時代の漢文学は、第一期の藤原惺窩と林羅山によって基礎が築かれたとあって差し支えない。しかし、この二人の文学は大体は五山文学の傳統をうけて、それを発展せしめたに過ぎないものであった。その作品には格別新鮮味はなく、それに和習のはなはだしいものがあり、純粹な文学という立場からは、そう感心すべきものではなかった。惺窩は、律詩を学ぶには『瀛奎律髓』、絶句を学ぶには『聯珠詩格』を見るのがよいと人に教えていたとのことである。

日蓮宗の学僧元政が、寛永5年(1628)に中国から亡命してきた陳元賛の影響を受けて、いくらか清新の氣を示しているのが、むしろやや注目せられる程度である。なお、日本に亡命してきた中国人といえ、陳元賛について、黄檗の隠元が承應3年(1654)にその一門を引きつれて渡來し、朱舜水が萬治2年(1659)に渡來しているが、これらの人びとの影響も少くなかった。殊に朱舜水の感化には著しいものがあつた。舜水は徳川光圀の信任を得、水戸藩に聘せられたが、當時水戸藩では『大日本史』の編纂がはじまり、多くの学者があつまっていたので、その中には朱舜水の薫陶を受けたものが少くなかった。後に『大日本史』編纂の総裁にまでなつた安積澹泊はその随一で、見事な漢文を書いた。その『大日本史』のために書いた論贊は日本人の作として稀に見る名文といつてよい。

(二) 江戸時代の漢文学の第二期における中国文学の受容

前述したとおり、江戸時代の漢文学の第二期の代表は主に、新井白石、荻生徂徠、祇園南海、梁田蛻巖、秋山玉山である。

白石・南海・蛻巖の三人は、ともに木下順庵の門から出たものである。順庵は、五山以來の漢詩が主として宋王朝の理智的な詩風を学んだものであつたのに樹し、唐、殊に盛唐の格調の高い詩を理想とした。文学の上に極端な古典主義を唱え、文は秦漢、詩は漢魏盛唐ということを標語とし、一時天下を風靡したものである。順庵は朱舜水と非常に懇意にしていたので、こういうことを聞いていたのではないかと思う。ただし順庵の作品をあつめた『錦里文集』十九卷にはそれほど李夢陽の影響は認められない。李夢陽の強い影響が見られるのは、門人の新井白石の作品である。これは出藍といつてよい。高華典麗というか、雄偉博大というか、盛唐詩人の堂堂とした格調を学んだ痕跡の歴然たるものがある。ただ遺憾なことに、白石の作品は極めて少なく、僅かに『白石詩草』一卷と『白石絵稿』三巻のあるのみで、文章に至っては殆ど作品らしいものを遺していない。

徂徠は李夢陽の後に出たおなじ派の李墓龍(干鱗)と王世貞(元美)を特に崇拜し、いわゆる古文辞学を首唱した。その影響力は非常なもので、當時の詩人達は、みなこの主張に従つて、漢魏盛唐の詩を極力学んだものである。これを普通に護園派という。護園とは、徂徠の塾の名である。この護園には天下の人材があつまって、一時の盛を

誇ったのみならず、その流れはずっと後世までも長く絶えなかった。神田喜一郎はこの時期を日本の漢文学の第三のピークと言う。

(三) 江戸時代の漢文学の第三期における中国文学の受容

これまでの護園一派が李何李王の説を奉じて、いかにもむずかしくごつごつした古典的な文章をつかったのを排斥し、唐宋の平易明暢な文章をつくることにつとめ、文章の風格を大きく一変せしめた。ともかく第二期から第三期に入ると、日本の漢文学は、古典主義の重苦しい重歴から解放せられて、近代的な明るくて軽快な気分にあつたことになったのであるが、これはまた日本の漢文学を、広く一般士民の間に普及せしめることにもなったのである。日本の漢文学は、奈良・平安の両朝には宮廷文学であり、鎌倉・室町の時代には禅林文学であったのが、ここに来て一般士民の文学となったといつてよいであろう。こうした傾向は、もちろん江戸時代になって、一般社会が安定し、一般庶民が経済的にも向上してくると、文化も普及し、しぜんに見られた現象であったが、漢文学の平易化したことは、それに一層拍車をかけたのであつた。

頼山陽や梁川星巖になると少しく詩風が変じてきた。山陽が明や清の新しい詩風を取入れたことは、いま指摘した通りであるが、そのころ読まれた明詩は高啓の作品で、これは一時非常な勢をもって流行し、その詩集の翻刻さえ現われたほどであつた。しかし、それよりも山陽や星巖がもっとも大きな影響をうけたのは、清王朝の詩であつた。中でも、乾隆の三大家といわれた袁枚（随園）・蔣士銓（藏園）・趙翼（瓠北）の影響が著しく、それについて浙西六家といわれた厲鶚（樊榭）・嚴遂成（海珊）・王又曾〔穀原）・錢載（籜石）・袁枚・吳錫麟（穀人）らの詩風であつた。この浙西六家の詩を選集した『浙西六家詩鈔』などというものは、當時その新鮮さをもって歓迎せられ、翻刻本の出ているほか、頼山陽の批評を加えた本なども刊行せられている。關西の詩入六家の作をあつめた『攝西六家詩鈔』という書の當時出版せられているのも、もちろん『浙西六家詩鈔』にもじつたもので、そのいかに盛行したかが察せられよう。こうした清朝詩人の集は先を争つて読まれたもので、特に厲鶚と袁枚とが喜ばれたが、第三期の末になると、もっと新しい張問陶（船山）とか陳文述（碧城）などという詩人の集が輸入せられて喜ばれた。いかに日本人が昔も今もおなじく新しいものに飛びつきたかがわからう。

文章においては、松崎謙堂、佐藤一齋、安井息軒、塩谷宕陰が現れた。これらの人々とは清王朝の初期に出た朱彝尊（竹垞）や汪琬（鈍翁）を学んだところがあるが、宕陰に至っては、おなじく清王朝の初期に出た侯方域（雪苑）とか魏禧（叔子）などを学んだ痕跡がある。ところが侯方域とか魏禧の交章には、中国の純粋な古文作家の忌避する小説家風の氣味があつて、その氣味が宕陰の交章に認められるのは瑕瑾とせられている。もっともこうした瑕瑾は、すでに頼山陽の文章にもあつて、その「百合傳」といって祇園の茶亭の女のことを書いた文章は明らかに侯方域の「李姫傳」という、名高い秦淮の藝者のことを書いた小説家風の文章に胚胎している。純粋なのは松崎謙堂の文章である。しかし、一般には侯方域や魏禧を学んだ文章が喜ばれたようで、この黙、詩において厲鶚や袁枚などの影響をうけた詩が歓迎せられたのと、一脈相通じたところがあり、日本の漢文学の傾向を考える上に、一つの大きな問題を暗示しているように思う。

六、明治時代の漢文学における中国文学の受容

1868年明治維新の大変革により、欧米の文化は中国文化の地位を奪ってしまったのと言うまでもないであろう。それによって、明治維新以後の日本の漢文学は衰滅の一路を辿ったと断定するのは大きな誤りである。神田喜一郎の指摘した通りに、明治維新とともに新しく突如として欧米の文化が眼前に現われて、中国の文化の地位を奪ってしまった。漢文学が衰滅の氣運に転落したことはいうまでもない。しかし、その徴候の著しく現われてきたのは、大体日清戦争(1894~1895)を契機として、一般人の中國文化に対する態度が急変して以後のことである。それまでは何といてもまだ根強い伝統が残っていて、例えば一般人の必須教養科目として、英・漢・敷の三つのもものが重んぜられたことを見ても、いちおう漢文学に価値の認められていたことがわかる。それに日清戦争の頃までの社会の上層部に立つ支配者は、みな漢文学の盛んであった江戸時代に教育をうけてきたものばかりであったから、みずから漢詩文を作るだけの素養をもち、漢文学に対して一種の郷愁ともいふべきものを抱いていた。したがって明治中期以後における漢詩のごとき、江戸時代よりもかえって盛んになったと思われる一面のあったことを忘れてはならないのである。もっともそれは、消えかかろ

うとする蠟燭の火が、俄にぼっと明るくなり、それを最後に消えてしまうのと似た現象ではあったが、ともかく明治維新以来、日清戦争の頃までの漢文学は、必ずしも衰滅の一路を辿ったのではなかった。大勢は決していても、その間に多少の紆絵曲折はあったのである⁴¹²。以上は神田喜一郎の「明治維新以後の日本の漢文学は衰滅の一路を辿った」に対する反駁でもある。

(一) 明治漢詩における中国文学受容

まず明治時代の漢詩をながめてみよう。勢力があった梁川星巖の系統をひく一派の代表する漢詩人は大沼枕山、小野湖山、森春濤であり、一般に枕・湖・春と並び称せられた。この三人は、それぞれ詩風を異にし、枕山は宋の陸游を宗とし、湖山は宋の蘇軾を学んだが、ひとり春濤のみは、江戸時代の末期以来流行しつつあった清朝の袁枚や陳文述などの、極く新しい詩風をとり入れた。橋本蓉塘、永坂石埭はその門人である。その後は、森槐南、国分清涯、本田種竹の三人があった。槐南は、少年の頃から漢詩に天才を現わし、春濤の羽翼となったが、春濤の死後は、その衣鉢をついで詩壇に活躍した。槐南は清の呉偉業（梅村）や陳文述を学び、清涯は明の李夢陽を範とし、種竹は清の王士禎（漁洋）を奉ずるという風に、三人またおのおの詩風を異にしたが、枕山・湖山・春濤について、次の時代を担うて立った。これが明治 34、5 五年の頃までの漢詩壇の大勢で、その主流をなしたのは森春濤および槐南の一派であったことを否定できない⁴¹³。

(二) 明治漢文における中国文学受容

明治の漢文の方面では、重野成齋と川田甕江とが相並んで大家と称せられた。そのほか、中村敬宇・三島中洲などが有名であったが、優れていたのは中村敬宇で、敬宇は早く幕末にイギリスに留学したこともあり、西洋の学問にも造詣が深く、それを見事に漢文に表現し、これまでの漢文作家とは違った特色を発揮した。それから経学者の島田篁村・竹添井井も以上の諸家に伍して文名が高かった。井井が明治 9 年清国の四川地方を旅行した時の紀行『機雲峡雨日記』は、殊に名文として当時広く読まれた

⁴¹²神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 179。

⁴¹³神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 181。

ものである。

なお、明治14年(1881)に、清国から駐日公使として黎庶昌(蕓齋)の来日したことも注意すべきである。彼は名高い曾國藩の門人で、桐城派の文章を善くした。桐城派というのは、清朝の乾隆時代(1736~1795)に、安徽省の桐城から出た方苞(望溪)とか姚鼐(姪傳)などの唱えた文章の一派で、専ら韓愈・柳宗元のもっとも純粋な古文を作ろうとするのである。曾國藩はその桐城派の説の信奉者で、黎庶昌はそれを承けたのであった。重野成齋はじめ当時の漢文作家は、黎から桐城派の主張を聞いて、大いに感心したもので、殊に藤野海南とか亀谷省軒などは、ひどく傾倒したものであったが、しかし、いくらか影響があっただけで、日本の漢文を一変せしめるまでには至らなかった。

この桐城派は、おなじ古文といっても、清朝初期に出た侯方域などの文章を、古文の純粋を傷ける小説家の文章であるとし、もっとも嫌うのであるが、その小説家風の文章を当時日本でよくしたものに、菊池三溪、依田学海があり、一般には喜ばれて、成齋や甕江に対して一派をなした。なお、そのほかにも多くの漢文作家が輩出したことはいうまでもない。しかし、その社会的な名聲となると、大体以上に挙げた諸家が代表的なものである。それらの諸家の作品を通じて観察するならば、率直に言って漢文のほうは、いわば江戸時代、殊に寛政の三博士以来の延長で、中には中村敬宇のような異色のある作家もないではなかったが、概していうと、あまり大きな変化もなかったといつてよい。

明治も20年あたりになると、漢文学の大家といわれた長老が、ぽつぽつ凋落しはじめ、そこへ日清戦争によって、日本が清国に勝ったことは、これまで中国の文化に対して日本人がもっていた尊敬の念を雲散せしめ、日本の漢文学は、俄に衰滅してしまうのである。それでもそれから十年、日露戦争(1904~1905)の頃まではどうにか命脈を保ったし、特に漢詩などはかえってこれまで以上に盛んであったが、あたかも日本の文壇に自然主義が勃興してくると、その時をおなじうして、ここにまったく生命を喪うことになってしまった。もっともそれ以後においても、漢詩を作り漢文を作る人が全然なくなったというのではない。個々の作家としては、前代にもまさる、すぐ

れた人が稀に出てはいる⁴¹⁴。

第五節 日本漢文学の日本独自の展開

前述したとおり、日本の漢文学は中国文学の影響を受け入れながら、日本漢文学独自の発展を成し遂げてきたというのは神田喜一郎の主張の一つでもある。日本の漢文学は中国文学という「ニガリ」の凝集力により、ずいぶん長い間に形成せられるものであるが、その形成の中に、日本の漢文学は独自の発展も実現できた。

一、平安の漢文学の独自性

1、僧空海とその『文鏡秘府論』

前述したとおり、平安前期において、六朝から唐代にかけて現れた多くの作詩作文書を集めた日本における最初の文学論である『文鏡秘府論』は僧空海によって著わされた。神田喜一郎の述べたように、「中国において、これまでほとんどすべての文学論は、儒家的見地に立って、文学と道德とを切りはなして考えることができなかった。しかるに僧空海は、日本に生れ、それほど堅苦しい儒教的教養を身につけず、はやく佛門に帰したのであるから、生來の聰明もあって、こんな当時としてはまったく常人の意表に出た卓見を吐くことができたのであろう。」⁴¹⁵日本の漢文学作家は中国的要素を受け入れながら、本国の思想や感情を以て中国の文字や中国語の語法を通して日本の漢文学の独自の発展をやり遂げた。僧空海は桓武天皇延暦 23 年(804)12 月 23 日 31 歳で第 16 次遣唐使留学僧として途中、暴風雨にあい九死に一生を得て長安に入った。延暦 24 年(805)年 5 月密教の第七祖・青龍寺の恵果和尚に師事。長安滞在中は、唐の仏者たちのみならず多くの文人墨客と交流し、広く文化を摂取した。大同元年(806)20 年間の予定を 2 年間で帰国したため、帰京の許可を得るまで大宰府の観世音寺に滞在することになった。膨大な密教の典籍、仏像、法典、曼荼羅、その他の文物を日本にもたらし、12 月に『請来目録』を朝廷に差し出した。なんでも先進国の新しい傾向

⁴¹⁴神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 184。

を趁うという昔も今も変わらぬ日本人の特性をもって、当時の先進国である中国の文化などを大量取り入れた空海は自分なりの思想や感情を以て、『文鏡秘府論』のような著作を著わした。「これだけの書は、中国においても梁の劉勰の著した『文心雕龍』を除けば、前後に一つもないではないか。日本の漢文学として、中国に向ってもっとも誇りうる書の一つである」⁴¹⁶と神田喜一郎は高く評価した。

2、菅原道真

「自己の思想なり感情を率直に表現しようとする結果、その作品にはすでに一種の和習がほのみえてきている。これは日本の漢文学を中国文学の一支流と視るときには、大きな一つの欠陥になる。平安朝後期は、この欠陥のしだいに拡大されてゆく時期で、これを漢文学の衰退時代と称しても差支えない。」⁴¹⁷

3、『扶桑集』『本朝麗藻』『本朝文粹』『本朝続文粹』四集

神田喜一郎は『扶桑集』『本朝麗藻』『本朝文粹』『本朝続文粹』四集によって「平安朝後期の作品を読むと、せつかく白居易の詩に導かれて、自由に自己の思想や感情を表現するように向きかけてきた新傾向も、まったく挫折してしまい、一種のマンネリズムに陥って、時代の降るとともに、ますます低下していったと見るより仕方がない。これは一方において、純粋な日本文学が発達して、もはや漢文学は、いわば告朔の餼羊で、そうした存在としてのみ価値を認められたに過ぎなかった結果と思う。」⁴¹⁸と述べた。平安後期の日本の漢文学は白居易一色に塗りつぶされてしまった。庶民的な平易明白な文学を主張する白居易の詩作は日本において、喜んで受け入れられた。平易な言葉をもって自由に思想なり感情を憶え、次第に日本の漢文学の独自の発展をもたらしてきた。

⁴¹⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.154。

⁴¹⁶神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.154。

⁴¹⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.159。

⁴¹⁸神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp.159～160。

二、五山時代の漢文学の独自性

従来の通説は五山文学の開祖が一寧一山となっているが。一寧一山は虎関師錬に先立って、後伏見天皇の正安元年（1299）、中国から日本に來た。台州臨海県（現在の浙江省台州市臨海市）の出身。姓は胡氏。幼くして出家し、律、天台宗を学んだ後、臨濟宗に転じ、天童山や浄慈寺などで修行を積み、阿育王寺の頑極行弥の法を嗣いだ。その後、環溪唯一らに参禅を続け、諸所を遊方した。博覧多識の学僧で、詩文をよくしたと言われておる。が、一寧一山の唯一の著書として現存する『一山国師語録』からは、五山文学の開祖と押さねばならぬ程の物は見当たらないようである。それにより、神田喜一郎は「五山文学の開祖としては、やはり虎関師錬を押さすのが妥当であろう。」⁴¹⁹と主張した。

虎関師錬（弘安元年4月16日〔1278年5月9日〕～興国7年/貞和2年7月24日〔1346年8月11日〕）は、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての臨濟宗の僧。諱は師錬、字は虎関。父は藤原左金吾校尉で、母は源氏。一説に玄恵と兄弟とする⁴²⁰。京都の出身。諡号は本覚国師。その学問の博く、識見の優れていることは、じつに驚くべきものがあった。その『濟北集』の中の「詩話」と題する一卷は中国において宋代にできた多くの詩話に比べても、決して遜色もあるものではなく、日本人の著した詩話では、古今第一とも言えるのであろう。さらに、『濟北集』の中の「通衡」と題する巻にも、日本人離れした立派な文章がある。しかし、虎関師錬の詩はその文章に比べてだいぶ劣る。中には偈頌といってもよい作品が混ざっている。

三、江戸時代の漢文学の独自性

江戸時代の漢文学の基礎を築いたのは確かに藤原惺窩と林羅山である。「この二人の文学はこの二人の文学は大体五山文学の伝統をうけて、それを発展せしめたに過ぎないものであった。その作品には格別新鮮味はなく、それに和習のはなはだしいものが

⁴¹⁹神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.162

⁴²⁰永井如瓶「庭訓往来作者考」（1904）に「或説云、玄恵法印は東福寺の虎関禅師と兄弟なりと云々」とある。

あり、純粋な文学という立場からは、そう感心すべきものではなかった。」⁴²¹

第六節 神田喜一郎の日本漢文学論

神田喜一郎は日本の漢文学に対し、日本の漢文学の特質、日本の漢文学の発展の歴史、日本の漢文学における中国文学受容、日本の漢文学の独自の形成と発展などの方面から神田喜一郎独自の日本漢文学論を展開してきた。それが神田喜一郎の日本漢文学論である。神田喜一郎の日本漢文学論として下記の通りにまとめていきたいと思う。

一、日本の漢文学の定義

神田喜一郎はその『日本の漢文学』において、「われわれは一般に『日本の漢文學』という言葉は何気なく使用している。もとより『日本の漢文學』とは、日本人が中国の文字を用い、中国の語法に従って創作した文学であることには間違いないが、それが「日本の漢文學」として成立するのは、千數百年の長い時代にわたって、そうした文学が日本文学の一環として、脈脈と一つの流れを形成しながら、絶えず生生獲展しているからである。そうでなければ『日本の漢文學』なるものは、決して成立しないであろう。」⁴²²と日本の漢文学について定義を下した。周知の通り、もともと日本には文字が無かったとされているので、中国より漢字を受け入れた。最初は中国語を習得することを通して、漢文を試して作り始めた。散文のみならず、詩作も試みられ、『懐風藻』には、7世紀からの作品が収められている。

二、日本漢文学の特質：両面性

「日本の漢文学」には二重性格、つまり両面性がある。こうした二重性格こそ、じつに「日本の漢文学」の持って生まれた著しい宿命的な特質にほかならない⁴²³。「日本

⁴²¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 169。

⁴²² 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 169。

⁴²³ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 133

の漢文学」は、本質的には間違いなく日本文学に属する。その作者は日本人であり、その内容に盛られているのは、当然日本人の思想なり感情であるからである。しかし、その一面において、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出たところの支流であることも否定することができない。

(一) 中国文学の受容

神田喜一郎が述べた通り、「日本の漢文学」は単に日本人が中国の文字を使って、中国の語法に従って創作してきたというだけの、単純な性質のものではない。その中国文学との関係は、極めて密接である。両者の間には、事実、文学的にも歴史的にも画然とした国境線が引かれていないとも考えられる。ある点、「日本の漢文学」は、むしろ中国文学に属せしめて考えるのが適当であり、またそうして初めて理解しうるとも言いうるのである⁴²⁴。

(二) 日本の独自の発展

「日本の漢文学」は日本人が中国の文字を用い、中国の語法に従って創作した文学であるから、本質的には間違いなく日本文学に属する。ひとまず「日本の漢文学」は日本という土壌で長い時代にわたって、形成しながら絶えず発展しているのであるうえに、その内容に盛られているものは当然日本人の思想なり感情であるから、その独自性がある。そういう独自性をもって、日本漢文学は独自の発展を成し遂げたのである。

三、日本漢文学の時代区分論

神田喜一郎は日本の漢文学に対し、漢文学の黎明期、奈良朝の漢文学、平安朝の漢文学、五山文学、江戸時代の漢文学、漢文学の衰滅など六つの時期に分けた。神田喜一郎は従来の研究者と違って、特に日本漢文学の黎明期、三つの盛期、日本漢文学の衰滅に関する区分が自ら独特なところがある。

(一) 飛鳥時代を日本漢文学の黎明期とする

⁴²⁴ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.133

日本に初めて漢文学の黎明ともいうべきものが萌してきたのは、いわゆる飛鳥時代（崇峻天皇5年～和銅天皇3年、つまり紀元592年～710年の118年間）、すなわち推古朝になってからである。

これより前、大体紀元3世紀にあたる応神天皇の治世に百済から『論語』と『千字文』とが博士王仁によってもたらされたという伝説がある。そうして漢文学の黎明期をこの時代に擬する学者が少なくない。その理由として、これより前、『論語』と『千字文』など漢籍が伝えられてきたからである。

それに対する神田喜一郎の反対理由は、『千字文』という書は中国南北朝時代、梁の周興嗣の作ったもので、6世紀の前半の著作である。それが3世紀に伝えられるはずがない。要するに、『千字文』は六世紀の後半あたりに伝えられたものである。大体欽明天皇の治世にあたることになる。

1、純文学に属する作品は、まだほとんど表れなかった。

中国において、梁の沈約の書いた『宋書』の中の「夷蛮伝」に載せてある倭王武が宋の順帝に上ったという表文のことである。この表文は、実に日本最古の漢文となるわけで、現にそう見て少しも疑わない学者もある。

しかし、その文章はあまりにも堂々とした駢体文で、当時の日本人の作ったものとは到底考えられない。この文章は、おそらく一代の文豪と言われた沈約が『宋書』を書いた時に潤色したものに相違ない。日本に漢文学の黎明のきざしてきたのは、やはり飛鳥時代になってからであるとするのが穏当であろう。

法興6年、即ち推古天皇の4年（596）に、聖徳太子が百済から来た恵聡法師及び葛城臣を従えて、伊豫の道後の温泉に遊ばれたとき、その記念として湯岡の側に建てられた碑の文章である。大体は温泉の靈妙な効能を讃歎したものであって、いかにも中国の六朝時代に流行した駢体文を極力模倣しようと努めたものである。この道後の温泉の碑文に六朝の文気がうかがいうるが、北周の文豪庾信「温湯碑」という文章を手本となった可能性がある。駢体文として後世の上に欠陥があるし、措辞またはなはだ生硬である。おそらく作者は駢体文の法則を十分に消化していなかったのみならず、これだけの内容のある駢体文を書くには、その文才学力ともに足らなかったものであろう。

飛鳥時代の漢文として一般に大きく取り上げられているものに、名高い聖徳太子の「十七条憲法」があり、また法隆寺金堂の釈迦三尊像をはじめ、いろんな仏像に見る造像記があるが、これらの文章は、実は純文学的な作品とは言えない。

こうした造像記といい、「十七条憲法」といい、いずれも実用的な文章は、道後の温泉の碑文のごとく美辞麗句を彫琢しようとしたものよりも、その巧拙という点では勝っている。この飛鳥時代には漢文学の素養が、純文学的な作品を生み出すまでにはまだ成熟していなかったのであろう⁴²⁵。

ここに言う純文学については、神田喜一郎の後輩である中国文学の泰斗と仰がれた吉川幸次郎はその『中国文学史の時代区分』において、中国の文学史は四つの時期に分けることが出来ると主張し、その第一時期は秦の始皇帝が、最初の統一帝国を作るまでの時期、つまり前三世紀以前の時期であって、それは前文学史の時代であると総括することが出来ると指摘してきた。その時代区分の理由としては、「何となれば、文学の意識が、まだはっきりした形では現れないからである」⁴²⁶ということである。

この時期の言語としてあるものは、「論語」「老子」など思想家の言語、及び思想家の一派であった儒家が、人間の規範として撰定した五経の言語であるが、五経の一つである「詩経」唯一つをのぞき、あとはすべて政治と倫理のための言語、すなわち人間の生き方についての主張をのべて他人を説得しようとする言語であるか、或いは歴史の言語、それも政治なり倫理についての主張を成立させる前提として、人間の生活についての事実を記録する言語である。要するに言語は意思の伝達のためであり、「詩経」だけが感情の表白としてある。また「詩経」だけが韻文であり、ほかはみな散文である。且つその「詩経」さえも、政治への遠まわしの批判として読みえる点が重視されている。

上記により、吉川幸次郎が言った「純文学」とは、作品に用いられた表現は政治と倫理のための言語、すなわち人間の生き方についての主張をのべて他人を説得しようとする意思の伝達のためである言語ではなく、「詩経」のような感情の表白であるということである。

⁴²⁵神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.138。

⁴²⁶吉川幸次郎：『中国文学史の時代区分』、『吉川幸次郎全集』巻25、東京：筑摩書房、1986年6月、p.5。

2、純文学的な作品の出現

純文学的な作品の出現するのは、飛鳥時代から更に50年そこそこの歳月を経過した、いわゆる近江朝を待たねばならなかった。

この時代になって、初めて日本に日本の漢文学の開祖と言ってもよい漢詩作家大友皇子が現れた。その代表作としては『懷風藻』の開巻第一にその詩が二首載っている。いずれも五言絶句であるが、まことに堂々たる作品である。

大友皇子の弟の河島皇子、長子の葛野王と大津皇子など、近江朝から浄御原朝にかけて、これらの人々の活動は、飛鳥時代にきざしてきた日本の漢文学の黎明を一層明るいものに進めた。

それは飛鳥時代以来、中国に20年30年にも及ぶ長期の留学を終えて帰朝した高向玄理・僧旻・南淵請安などが、新しくもたらしかえった中国文化に対する知識が次第に醗酵せられ、それが大化の改新という未曾有の一大変革を契機に、ついに表面に現れ出たものである。

(二) 日本漢文学の三つもの盛期（ピーク）について

日本漢文学はその萌しから、自ら自分独特な発展を辿った。日本漢文学の黎明期から日露戦争（1905）にかけて、日本の漢文学は三つのピークをなした。

1、第一の盛期（ピーク）：代表作は三つの勅撰集

平安前期の漢文学はまた二つの時期に分かれる。第一は嵯峨天皇の弘仁（810～823）を中心とした時代であり、第二は清和天皇の貞観（859～876）を中心とした時代である。第一期は嵯峨天皇の弘仁（810～823）を中心とした時代、この時代をもって日本漢文学の一つのピークを迎えてきた。

第一期の漢文学は、この時代に編纂せられた三つの勅撰集によってその大体を窺うことができる。三つの勅撰集とは、弘仁5年（814）の頃に小野岑守（寶龜8年〔777〕～天長7年〔830〕）が編纂した『凌雲集』、おなじく弘仁10年（819）に藤原冬嗣（寶龜6年〔775〕～天長3年〔826〕）らが編纂した『文華秀麗集』、および淳和天皇の天長4年（827）に良岑安世らの編纂した『経国集』である。

嵯峨天皇の弘仁（810～823）を中心とした時代の漢文学は、この時代に編纂せられた三つの勅撰集によってその大体を窺うことができる。三つの勅撰集とは、弘仁5年（814）

の頃に小野寄守（寶龜8年〔777〕～天長7年〔830〕）が編纂した『凌雲集』、おなじく弘仁10年(819)に藤原冬嗣(寶龜6年〔775〕～天長3年〔826〕)らが編纂した『文華秀麗集』、および淳和天皇の天長4年(827)に良岑安世らの編纂した『経国集』である。第一の『凌雲集』は、延暦元年(782)から弘仁5年に至る30余り年間の詩をあつめたもので、作家は24人、詩は91首である。第二の『文華秀麗集』は、ほぼおなじ時代の詩百四十三首を、遊覧・宴集・餞別・購答など十一の部門に分類排纂したもので、唐の『河嶽英靈集』とその体裁は異なるけれども、書名は『河嶽英靈集』に擬したものではないかと思われる。第三の『経国集』は、前二者とは違って、上は文武天皇の慶雲から下は淳和天皇の天長に及ぶ百二十余り年間に作られた詩文をあつめたもので、序文に言うところによると、作者が百七十八人、賦十七首、詩九百十七首、序五十一首、封策三十八首を収むとある。しかし現行の『経国集』は、もともと二十巻あったうち、わずかに六巻を存するに過ぎない残歟本であって、もちろん詩文の数はずっと少ない。

2、第二の盛期（ピーク）：代表作家は義堂周信と絶海中津

二つ目のピークは五山文学時代である。その時代には、虎関師錬・雪村友梅・中巖円月、これを後にしては義堂周信・絶海中津の相次いで輩出した南北時代は、平安朝の初期に次いで、日本漢文学史上、第二のピークをなした。

平安後期以来、日本の漢文学は久しく萎靡沈滞して振るわなかったが、中日両国の禅僧の往来が盛んになり、新しく中国の宋元の文学が輸入せられるようになったので、開花したのが五山文学である⁴²⁷。それに、神田喜一郎が言ういわゆる五山文学は主として京都の五山を中心とした禅僧の間に発達したもので、鎌倉時代の末期に起こり、ついで南北朝時代（1336～1392）に栄え、室町時代（1393～1573）の中期、いわゆる応仁の乱（1467～1477）あたりまで続いた文学のことである。

五山時代の漢文学は、詩においては唐の李白・杜甫・韓愈を先覚者とし、宋代に入って欧陽脩・梅堯臣・蘇軾・黄庭堅・陳師道・陳與義・陸游・範成大・らの大家が輩出した。文においては、唐の韓愈、柳宗元の二人を先覚者とし、宋に入って欧陽脩・蘇軾・王安石・曾鞏らの大家が輩出した。五山文学は、即ちこれらの諸大家を規摹したもので、日本の漢文学としては、誠に新しく生面を開いたものということができた。

⁴²⁷神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.160。

第二の盛期を代表したのは、義堂周信（正中2年〔1325〕～嘉慶2年〔1388〕）と絶海中津（建武3年〔1336〕～応永12年〔1405〕）の二人である。ともに詩文に優れたが、特に義堂は文に長じ、絶海は詩に長じた。

義堂周信は南北朝時代の五山の禅僧。土佐の人。夢窓疎石の弟子となり臨済宗に帰依した。鎌倉円覚寺に入り、のち京都建仁寺、南禅寺等に住す。詩文の才に長じ、詩文集に《空華集》二十卷、日録に《空華日工集》があり、絶海中津とともに五山文学の代表者。

絶海中津は、南北朝時代から室町時代前期にかけての禅僧・漢詩人。道号は絶海のほかに要関、堅子、蕉堅道人など多数ある。義堂周信と共に「五山文学の双璧」と併称されてきたが、20世紀後半から義堂より詩風の高さを評価され、五山文学ひいては中世文芸史の頂点を為すと論じられている。また、『絶海和尚語録』や『蕉堅藁』（詩文集）などの著作が伝わっている。

3、第三の盛期（ピーク）：代表は護園派

三つ目のピークは江戸時代の漢文学の第二期である。その代表は主に、新井白石、荻生徂徠、祇園南海、梁田蛻巖、秋山玉山である。

徂徠は李夢陽の後に出たおなじ派の李攀龍（于鱗）と王世貞（元美）を特に崇拝し、いわゆる古文辞学を首唱した。その影響力は非常なもので、当時の詩人達は、みなこの主張に従って、漢魏盛唐の詩を極力学んだものである。これを普通に護園派という。護園とは、徂徠の塾の名である。この護園には天下の人材があつまって、一時の盛を誇ったのみならず、その流れはずっと後世までも長く絶えなかった。神田喜一郎はこの時期を日本の漢文学の第三のピークと言う。

（三）明治前期は日本漢文学の衰滅期ではない

木下彪著『明治詩話』（岩波書店、2015年3月17日第1刷発行）の表紙に「明治時代、坪内逍遙ら西洋の影響を受けた新しい文学が始まった。しかし、当時広く読まれていたのは漢詩文だった。」という紹介文がある。神田喜一郎もその『明治漢詩文』の「編者後記」において、「明治時代は、漢文はともかく、漢詩は空前の発達を遂げた。

その作品も極めて多い。」⁴²⁸を述べた。明治の漢文学、特にその衰滅の時期に対し、明治維新以後の日本の漢文学は衰滅の一路を辿ったと断定する従来の研究者は少なくない。が、神田喜一郎はそれが大きな誤りだと指摘した。

神田喜一郎の指摘した通りに、1868年明治維新の大変革により、欧米の文化は中国文化の地位を奪ってしまったのは言うまでもない。明治維新とともに新しく突如として欧米の文化が眼前に現われて、中國の交化の地位を奪ってしまった。漢文学が衰滅の気運に転落したことはいうまでもない。しかし、その徴候の著しく現われてきたのは、大体日清戦争(1894~1895)を契機として、一般人の中國文化に対する態度が急変して以後のことである。それまでは何といてもまだ根強い伝統が残っていて、例えば一般人の必須教養科目として、英・漢・敷の三つのものが重んぜられたことを見ても、いちおう漢文学に価値の認められていたことがわかろう。それに日清戦争の頃までの社会の上層部に立つ支配者は、みな漢文学の盛んであった江戸時代に教育をうけてきたものばかりであったから、みずから漢詩文を作るだけの素養をもち、漢文学に対して一種の郷愁ともいふべきものを抱いていた。したがって明治中期以後における漢詩のごとき、江戸時代よりもかえって盛んになったと思われる一面のあったことを忘れてはならないのである。ともかく明治維新以来、日清戦争の頃までの漢文学は、必ずしも衰滅の一路を辿ったのではなかった。漢文学が衰滅の気運に転落した日露戦争以後のことである。

⁴²⁸神田喜一郎：『編者後記』、『明治漢詩文集』明治文学全集 62、東京：株式会社筑摩書房、1983年8月25日初版第1刷発行、p. 400。

終章：近代における日本漢文学史論

以上は、主に学術生涯、日本漢文学史に関する著書や論述の面から、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学史論について論考した。終章においては、日本漢文学に対する定義、時代区分論、日本漢文学の各盛期を代表する漢文学者などの側面から、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学史に関する論述の特質とは何か、ということを知りたい。これを以て、本論の締め括りとして。

第一節 日本漢文学に対する定義

一、三人の日本漢文学に対する定義

まずは、前述を踏まえ、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学に対する定義を次のようにまとめていきたい。

(一) 芳賀矢一：日本漢文学史の意義を重視する

日本漢文学史の意義について、芳賀矢一はその遺著『日本漢文学史』の初めにおいて、「日本漢文学史とは日本人の作った支那文学の歴史である。之を私は日本文学史の一部として見たいと思ふ」⁴²⁹と書いてある。つまり、芳賀矢一の考えでは、日本漢文学史とは、日本人が中国語を使って作った中国文学の歴史でありながら、之を日本文学史の一部として見なければならぬのである。その次、また「近頃國文学史・支那文学史のけんきゅうは盛んであるが、日本人の作った支那文学の研究は餘り見受けないうである」⁴³⁰と従来研究の欠落を指摘した。国文学史において、漢文学を除くようになった。

その漢文学を排除する原因が、主に時代の風潮や自国語の文学のみ扱う西洋文学史の影響であると芳賀矢一は主張する。時代の風潮というのは、「西洋の文学史に於ては、

⁴²⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 1。

⁴³⁰ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 1。

自國語の文學のみを扱ひ、外國語で書いたものを入れないためである。かういふ原因から、日本文學史に於ても右にいふやうな風が生じたのであろう⁴³¹ということである。また、「西洋の文學史に於ては、自國語の文學のみを扱ひ、外國語で書いたものを入れないためである」⁴³²という原因で、従来の研究者たちは自國語の文學のみ扱う西洋文學史という現象を依拠に、漢文學を日本文學から除き、自國語の文學のみ扱うようになってきた。

そのように、漢文學を排除する結果としては、「此等の文學は遂に入れるところがないこととなる。又是を日本の文學から除いては日本國文學の研究といふことが完全に行はれないことになる」⁴³³。つまり、芳賀矢一の考え方としては、漢詩文を中心とする日本漢文學を日本の漢文學から除いたら日本國の研究は完全に行なうことができないことになる。それにより、芳賀矢一のいわゆる日本漢文學史の意義がどこにあるか分かってくる。

(二) 岡田正之：『文選』に準ずること

前述したように、本論は岡田正之の日本漢文學に対する定義が『文選』に準ずるものであると思う。岡田正之は江戸時代の『本朝文集』における文体と近江奈良朝頃の漢文文体と比較した結果、漢文の各種の文体は推古朝に備えた。理由としては、『本朝文集』を体別に統計して、文体の種類及びその文章の数についての統計に対し、「試に大化以前を回顧すれば、文章の数も少く、文體も詔勅國書上奏碑文銘辭の五六種に過ぎず。然るに近江奈良朝には之に六倍して 37 種の多きに及ぶは、正に以て漢文使用の範圍の擴大せしを表ししものなり。更に平安朝の文を見るに、文體の此の外に出づるもの尠し」⁴³⁴と指摘した。即ち、近江奈良朝には幾多の文体を開き、後年の規範となった。江戸時代の文体の数の文体も大体このぐらいである。

『文選』編纂の趣旨は『文選』の序における「事出于沉思，文归乎翰藻（事は沈思より出て、義は翰藻に帰す）」というような名作、いわば純文學の名作だけに限定し、とくに『詩』『賦』両文体を重視する。岡田正之は推古朝に備えた漢文の諸文体には純

⁴³¹ 芳賀矢一『日本漢文學史』富山房 1928 年、p. 3。

⁴³² 芳賀矢一『日本漢文學史』富山房 1928 年、p. 3。

⁴³³ 芳賀矢一『日本漢文學史』富山房 1928 年、p. 2。

⁴³⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文學史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954 年 12 月 10 日発行、p. 70。

漢文も準漢文もあり、純漢文の中には散文も駢体文も義疏文もあると考えられる。文のほかに、現存する最古の日本漢詩集である『懐風藻』は近江朝から奈良朝までの64人の作者による116首の詩を収め。詩が当時の新しい文学スタイルであるので、『懐風藻』は最古の漢詩集である同時に、当時の新文学である。『文選』に定義された純文学は岡田正之に受け継がれていると思う。

本論の考え方としては、岡田正之は『文選』における純文学の定義に基づき、経、史、子を文学と区別して文学範疇から排除し、『詩』『賦』両文体を重視し、『文選』における文体の種類に倣って、日本漢文学の文体も37種類有すると考えられる。

(三) 神田喜一郎：漢文学の二重性格の強調

神田喜一郎はその『日本の漢文学』において、次のように述べた。

「日本の漢文学」は、本質的には間違いなく日本文学に属する。その作者は日本人であり、その内容に盛られているものは、当然日本人の思想なり感情である。しかし、その一面において、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから岐れ出たところの支流であることも否定することができない。日本人は、日本にはじめて中国文学が傳わって以来、これを先進の文学として崇め、その新しい傾向を追いつつ、ひたすら模倣擬作にこれつとめてきた。そうした事情のもとに自然と形成せられてきたのが「日本の漢文学」である。「日本の漢文学」は、単に日本人が中国の文字を用い、中国の語法に従って、創作したというだけの、単純な性質のものではない。その中国文学との関係は、極めて密接である。両者の間には、事実、文学的にも歴史的にも劃然とした國境線が引かれていないとも考えられる。ある點、「日本の漢文学」は、むしろ中国文学に屬せしめて考えるのが適當であり、またそうしてはじめて理解するとも言っているのである。ともかく「日本の漢文学」の持つて生まれた著しい宿命的な特質にほかならない。⁴³⁵

神田喜一郎が指摘してきたように、「日本の漢文学」は二重性格を有する。「日本の漢文学」というのはその作者が勿論日本人であり、その内容に盛られているものも当然日本人の思想なり感情であるため、本質的には間違いなく日本文学に属する文学である。一方では、「日本の漢文学」はまた、中国文学という一つの大きな流れから分か

⁴³⁵ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.133。

れ出たところの支流であることも否定することができない。要するに、日本の漢文学は中国文学の影響を受け入れながら、日本漢文学独自の発展を成し遂げてきたものである。即ち、神田喜一郎の言っている「日本の漢文学」は日本文学に属するものでありながら、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出た支流でもあるという二重性格、或は二面性を有する。

上記のように、神田喜一郎の考えでは、「日本の漢文学」とは、日本人が中国の文字を使って、中国の語法に従って作った文学である。神田喜一郎の言っているように、西洋において、フランス人の書いたイギリス語の小説とか、イギリス人の作ったフランス語の詩とかいうものが存在しないではないが、これまで「フランスの英文学」とか「イギリスの仏文学」とかいうものの存在は、まったく認められておらない。なぜならば、そういった作品は、単なる好事の徒が、たまたま自己一個の興味にまかせて創作したところの、いわば離れ離れの孤立した作品たるにとどまって、いまだ国民文学の中に一つの流れを形成するだけのものに発展していないからである。

二、三人の日本漢文学に対する定義の異同

芳賀矢一が「日本漢文学史とは日本人の作った支那文学の歴史である。之を私は日本文学史の一部として見たいと思ふ」⁴³⁶と言っているので、芳賀矢一の日本漢文学に対する定義としては、日本漢文学は日本文学史の一部でありながら、中国文学史の一部でもあると分かってきた。

日本における漢文学の盛衰が「國文学史の一部を成すべきであるのに、わが國文学界では多く之を度外視している」⁴³⁷という状況のなか、岡田正之はその劣勢を挽回しようとするので、自らしっかりとしている漢文素養を以て日本漢文学史の全般を後来の日本国民に伝えるために、『日本漢文学史』を執筆したわけである。日本文学に大きな影響を与えた『文選』は、「支那の詩文集の中に古今東西に行われて最も生命を有せるものは、文選に及ぶものあらざらず」⁴³⁸というわけで、岡田正之の日本漢文学に対

⁴³⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 1。

⁴³⁷ 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版の「序」、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 2。

⁴³⁸ 岡田正之、佐久節：「文選解題 緒言」『国訳漢文大成 文学部第二卷 文選 上巻』東京：国民文庫刊行会 1921年6月5日発行。p. 1。

する定義は『文選』に準ずるものであると思う。

神田喜一郎の日本漢文学に対する定義は日本漢文学の二重性格、つまり両面性を強調する。即ち、神田喜一郎の言っている「日本の漢文学」は日本文学に属するものでありながら、中国文学という一つの大きな流れから分かれ出た支流でもあるという二重性格、或は二面性を有する。

本論の考えでは、神田喜一郎は芳賀矢一の「日本漢文學史とは日本人の作った支那文學の歴史である。之を私は日本文学史の一部として見たいと思ふ」⁴³⁹という日本漢文学に対する定義に基づいて、日本の漢文学が日本文学に属するとともに、中国文学という一つの大きな流れからわかれ出た支流である、即ち日本漢文学が「二重性格」或は「二面性」を有すると主張する。その理由としては、神田喜一郎の「日本の漢文学」がはじめて出たのが「岩波講座 日本文学史」の第十六巻一般項目である。その参考文献を通して分かってきたのは、通説的な文献として、神田喜一郎は芳賀矢一の『日本漢文学史』（『国語と国民性』と合刊 昭和3年富山房）を参考したことがある⁴⁴⁰。

第二節 日本漢文学史の時代区分論

芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎はそれぞれの原因で、日本漢文学史に対する時代区分の主張も違う。以下は三者の日本漢文学史に対する時代区分についてまとめていきたい。

一、三人の日本漢文学史に対する時代区分

（一）芳賀矢一：四つの時期と二つの盛期

芳賀矢一は日本漢文学史について、その『国文学史十講』における時代区分を参照し、主に上古、中古、近古、近世という四期に分けたと思う。その『国文学史十講』において、国文学史を上古文学（太古から平安奠都まで）、中古文学（平安奠都から鎌倉幕府の創立まで）、近古文学（鎌倉幕府の創立から江戸幕府の創立まで）、近世文学

⁴³⁹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 1。

⁴⁴⁰ 神田喜一郎：「日本の漢文学」『岩波講座 日本文学史』第16巻一般項目 東京：岩波書店、1959年1月10日、p. 37。

(江戸幕府の創立から明治維新まで)、現代文学五つの時代に分けた。その時代区分の特徴に関して、本論は芳賀矢一の論述を踏まえ、次のようにまとめた。

1、上古は漢文学の曙光

本論は芳賀矢一の言っている推古朝が漢文学の準漢文から純粹の漢文へ移り変わった時期を踏まえ、推古朝を日本漢文学の萌芽期とする。奈良時代においては、漢詩人及び作品が誕生し、『懷風藻』における漢詩が漢詩の嚆矢である。

2、中古の平安時代は漢文学の第一盛期

芳賀矢一は頼山陽が『拙堂文話』の序に言っている平安朝時代と徳川時代を指している「文運両開」を引用して、平安時代は後の徳川時代と共に、漢学の最も盛んであった時代であると指摘した。⁴⁴¹中国古代の修辞理論を参酌して作られた『文鏡秘府論』と漢詩文集である『性靈集』は弘法大師空海の代表的な漢文学作品である。本論は、弘法大師空海の『文鏡秘府論』と『性靈集』、勅撰三集、鬼神を感ぜしむ詩才を有する都良香、「当代の詩匠」である島田忠臣、漢文学者である菅原道真などの漢詩文を以て、平安時代は芳賀矢一のいわゆる漢文学の第一盛期を迎えてきたと主張する。

3、近古は僧侶の漢文が牛耳る

近古の五山文学時代は衰えかけていた学問がさらに衰頹した一方、仏教が益々盛んとなった。学問はひとり僧侶の手に帰し、僧侶の漢文が牛耳る。芳賀矢一は五山禅僧である虎関師錬、雪村友梅、義堂周信、中巖圓月の漢詩文に対し、高く評価した。芳賀矢一の論述に基づき、本論は近古の五山文学時代、表面上漢文学が衰えたようであるが、五山禅僧の手により、中国宋元より新しい文明をもたらして、五山文学の隆盛を促す一方、後の徳川時代の漢文学のために、基礎を作っておいたと主張する。

4、近世の徳川時代は漢文学の第二盛期

上述したように、中古の平安時代は漢文学の第一盛期であり、近世の徳川時代は漢文学の第二盛期である。五山禅僧の漢文学が徳川時代の漢文学の基礎となり、徳川時代の漢文学は実に燦然として輝いている。芳賀矢一は、徳川時代の漢文学を次の三つの時代に分けた。つまり、①草創時代——慶長・元和から元禄まで、②最盛時代——

享保・元文から寛政まで、③渾成時代——寛政以後の通りである。芳賀矢一のいわゆる「草昧時代」とは藤原惺窩・林羅山時代である。その時代の漢文学は未だ草昧に属して、完全な域に達することはできなかつた。例えば、林羅山の漢詩文に対し、芳賀矢一が羅山の詩が学者の詩であり、詩人の詩ではないとあまり評価していない。「最盛時代」とは漢詩文が未曾有の隆盛に発達している時代であり、その時代において、荻生徂徠の漢文学は和習を脱し、純然たる漢詩文であり、服部南郭は詩文が最も長ずる。「渾盛時代」とは、寛政以後、つまり 1802 年から 1867 年までの間、看過できない漢文学者の数が多い時期である。その特質について、芳賀矢一が言っていないが、その取り上げられた漢文学者や漢詩文により、本論の考えでは、いわゆる「渾成時代」とは、寛政 5 年（1793）朱子学を中心とする「寛政異学の禁」の後、古学・朱子学・陽明学のいずれにも偏せず先行学説の長所のみをとるという折衷的態度により、漢文学に深く影響し、諸家が並存している時代である。先行各派の諸説を折衷する態度というのは井上金峨・片山兼山らが唱えた折衷学派である。その文献実証の方法は幕末の考証学に受け継がれた。そのため、「渾盛時代」の漢文学の特徴としては、看過できない漢文学者の数が多いということであろう。

（二）岡田正之の日本漢文学史に対する時代区分：朝紳と緇流両盛期

岡田正之は日本漢文学史を朝紳文学時代と緇流文学時代二篇に分け、漢字漢書の伝来より、室町の末期五山僧侶が江戸文学の基を開くに至るまでである。第一篇を朝紳文学時代として推古朝より平安朝までを四期に分けられ、第二篇を緇流文学時代とし、鎌倉時代より室町時代までを四期に分けた。具体的には、第一篇の朝紳文学時代は第一期推古朝及び其の以前、第二期大化以後奈良朝の終りまで、第三期平安朝前期（漢文学隆盛時代）、第四期平安朝後期（漢文学衰頹時代）等の四期から、第二篇の緇流文学時代は第一期鎌倉時代、第二期南北朝時代、第三期室町前期、第四期室町後期から構成されている。

その日本漢文学史を朝紳文学時代と緇流文学時代に分けたのは、朝紳文学時代、緇流文学時代においては、それぞれ一つの盛期を成した。朝紳文学時代においては、勅撰の三集、弘法大師の漢詩文を以て、漢文学の強盛期になった。緇流文学時代に至っ

⁴⁴¹ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928 年、p. 25。

て、まずは、例えば空海に比肩する虎関師錬、漢文学の上において伯兄の地位を占めた中巖圓月、叔季である雪村友梅のような緇流漢文学者は岡田正之に高く評価された。また、岡田正之は古人が全唐の詩を初、盛、中、晩の四期に分けたことにより、緇流文学時代もそれに類して、「鎌倉時代は初唐に擬すべく、南北朝時代は盛唐に比すべくし。而して室町の前後期は中晩の二唐に配すべし」⁴⁴²と言っている。吉川幸次郎は次のように曰く、「七世紀から九世紀まで、三百年にわたる大帝国、唐の時代は、中国の国勢が最も盛んな時代の一つでありましたが、同時にそれは中国の詩の最盛期でありました。」⁴⁴³即ち、唐詩の地位と云ったら、中国の最も盛んな時代における最盛期の文学スタイルであろう。また、「南北朝・室町の學風の新に宋學に傾き、詩文の格は大に王朝を凌駕し、而も漢文學を地方に普及せしめ、徳川時代の文運を挑發したること」⁴⁴⁴と岡田正之は指摘した。五山時代の緇流文学発展の流れを唐詩の初、盛、中、晩四期にたとえ、緇流文学の詩文の格は大に王朝を凌駕し、徳川時代の文運を挑發するという岡田正之の論述を踏まえ、本論は五山時代の緇流文学も岡田正之の主張する一つの盛期としたいのである。

(三) 神田喜一郎：六つの時期と三つの盛期

神田喜一郎は日本漢文学史を漢文学の黎明期である飛鳥時代、奈良朝、平安朝、五山文学時代、江戸時代、明治時代など六つの時期に分けた。また、平安朝、五山文学時代、江戸時代を三つのピーク、いわゆる盛期とする。その時代区分論は次のようにまとめていきたい。

1、飛鳥時代は漢文学の黎明期

神田喜一郎の考えでは、「十七条憲法」、造像記のような文章は、実は純文学的な作品とは言えない。即ち、ただ漢文学の萌芽である。この飛鳥時代には漢文学の素養が、純文学的な作品を生み出すまでにはまだ成熟していなかったという理由で、神田喜一郎は飛鳥時代を漢文学の黎明期とする。

⁴⁴²岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 284。

⁴⁴³吉川幸次郎：「中国文学入門」『吉川幸次郎全集 第一巻』、東京：筑摩書房、1984年3月15日4刷発行、p. 23。

⁴⁴⁴岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 424。

その純文学という言い方は、神田喜一郎の後輩である中国文学の泰斗と仰がれた吉川幸次郎の文学「任務説」と似ている。吉川幸次郎はその『中国文学の性質』において「文学の性質」について、次のように曰く、

「この文学が、詩におきましても、また散文におきましても、必ずしも、空想による虚構を任務とせず、地上の事実としてあります実在の経験、ことに凡人、普通人の、日常的な経験、それらを重要な題材といたしまして、文学を作ることでございます。一般的に文学の任務は、哲学とは異なりまして、哲学が人間の法則を、抽象的に考えますのに対し、文学は個別的な人間の事実を題材といたしまして、しかも人間に普通な真実を、掘り起こすことを任務といたします。それが一般に文学の任務であります。この国の文学は、そうした真実を示唆すべき事実、それを好んで人間の身近なところに求めて来たということでもあります。」⁴⁴⁵

上記の吉川幸次郎「文学の性質」という「任務説」に基づき、本論が言っている純文学とは哲学と異なって、個別的な人間の事実を題材とし、人間に普通な真実を、掘り起こすことを任務とし、文学のための文学である。そういうことで、神田喜一郎は『懐風藻』の開巻第一にその詩が二首載っている漢詩人大友皇子を日本の漢文学の開祖とする。

2、明治時代は漢文学の衰滅期ではない

明治維新以後の日本の漢文学は衰滅の一路を辿ったと断定する従来の研究者は少なくないが、神田喜一郎はそれが大きな誤りだと指摘した。神田喜一郎の考えでは、漢文学が衰滅の気運に転落した徴侯の著しく現れてきたのは大体日清戦争（1894～1895）を契機として、一般人の中国文化に対する態度が急変して以後のことである。⁴⁴⁶つまり、神田喜一郎は日本漢文学の衰滅期が1894年に始まった日清戦争以後になったのであり、明治維新以来、日清戦争の頃までの漢文学は、必ずしも衰滅の一路を辿ったのではなかったと指摘した。その理由について、神田喜一郎は次のように曰く、

「それ（日清戦争）までは何ととってもまだ根強い傳統が残っていて、例えば、一般人の必須教養科目として、英・漢・数の三つのものが重んぜられたことを見ても、

⁴⁴⁵ 吉川幸次郎：「中国文学入門」『吉川幸次郎全集 第一巻』、東京：筑摩書房、1984年3月15日四刷発行、p. 78。

⁴⁴⁶ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 179。

いちおう漢文學に価値の認められていたことがわかって。それに日清戦争の頃までの社会の上層部に立つ支配者は、みな漢文學の盛んであった江戸時代に教育を受けてきたのばかりであったから、みずから漢詩文を作るだけの素養をもち、漢文學に対して一種の郷愁ともいふべきものを抱いていた。したがって、明治中期以後における漢詩のごとき、江戸時代よりもかえって盛んになったと思われる一面のあったことを忘れてはならないのである。」⁴⁴⁷

即ち、一つは漢文学の価値が認められていた。もう一つは上層部に立つ支配者は江戸時代に教育を受けてきたから、漢詩文を作る素養を持つこと。というわけで、神田喜一郎の主張として、明治中期以後、日清戦争の頃までの漢文学は江戸時代よりもかえって盛んになったのである。それに基づいて、本論は「明治時代は漢文学の衰滅期ではない」というのを神田喜一郎の時代区分論に関する特徴の一つとする。

3、三つの盛期

神田喜一郎の主張する漢文学の三つのピークはそれぞれ次のようである。第一のピーク（盛期）は平安前期の第一期、即ち嵯峨天皇の弘仁（810～823）を中心とした時代である。代表的な漢文学としては三つの勅撰集である。第二のピーク（盛期）は五山文学の隆盛を極めた南北朝時代である。その前期を代表したのが、虎関師錬・雪村友梅・中巖円月であるが、その後期を代表したのは義堂周信と絶海中津二人である。第三のピーク（盛期）は江戸時代の第二期である元禄の初（1688年）から安永の末（1780年）に至る90年余りの間である。代表的な漢文学としては荻生徂徠の詩文集『徂徠集』31巻である。その気魄の雄大なことは、白石を圧倒するものがあり、日本の漢文学として中国にも誇ってよいものと思う。⁴⁴⁸

二、三人の時代区分論の相違について

（一）漢文学の萌芽期の相違

漢文学の萌芽期については、芳賀矢一と岡田正之との主張は大体同じ、即ち推古朝

⁴⁴⁷ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.179。

⁴⁴⁸ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.172。

が漢文学の萌芽期ということである。神田喜一郎は「文学のための文学」という純文学論に基づいて、飛鳥時代を漢文学の萌芽期とする。

芳賀矢一が推古朝において伊豫道後温泉碑文、憲法十七条のような純漢文が現われてきて、漢文学の曙光でもあると指摘したので、推古朝を芳賀矢一の日本漢文学史時代区分論における漢文学の萌芽期としたいのである。

岡田正之の考えでは、推古朝には純漢文もあり、準漢文もある。それに、純漢文には散文もあり、駢体文もあり、義疏文もあるので、奈良朝における漢文の諸体が実に推古朝に備えた。そういうわけで、岡田正之の日本漢文学史に対する時代区分論の「漢文学の萌芽期」も推古朝であるとは言えるのであろう。

神田喜一郎の考えでは、「十七条憲法」、造像記のような文章は、実は純文学的な作品とは言えない。日本漢文学の萌芽期はもっと遅くなるのである。飛鳥時代に至っても漢文学の素養が、純文学的な作品を生み出すまでにはまだ成熟していなかったという理由で、神田喜一郎は飛鳥時代がただ漢文学の黎明期であり、漢詩人大友皇子を日本の漢文学の開祖とする。

(二) 衰滅期に関する主張の相違

日本漢文学の衰滅期について、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三人の主張が異なっている。

まず、芳賀矢一が主張する日本漢文学の衰滅期は明治維新以後である。芳賀矢一の『日本漢文学史』に、日本漢文学の衰滅期については言及しなかったが、その日本漢文学史に関する論述が徳川時代の漢文学までだというのは前述した時代区分においても述べた。また、芳賀矢一はその著書『国文学史十講』の「緒論」において、次のように曰く、

「維新の後からは西洋學問も益々盛んに這入つて來、文化が日に進んで來ることは實に凄しい勢いで、うかくすると時代後れの人になります。活版印刷の術も盛んになつて、新聞雑誌の發行、書籍の刊行、知識を進める手段は何もかも備はつて來ました。文學も西洋文學の影響を受けて、外國文學の翻譯が行はれ、また西洋の文學を味つた人が歌や、小説や、戯曲などを改良しようといふ企も度々聞きました。これから我國民文學が益々高遠な思想を入れて規模も大きくなり、國運の進歩に伴れて東西の精華

を集めた様な大文學の出ることは期して望まれる事と信じます。」⁴⁴⁹

つまり、芳賀矢一の考えとして、明治維新以後は期して望まれることは漢文学ではなく、西洋文学が日本の国文学に影響を与えることであり、漢文学期して望まれることから排除されたのである。そういうわけで、本論は芳賀矢一の日本漢文学の衰滅期が明治維新以後であると主張する。

次に、岡田正之が主張する日本漢文学の衰滅期も明治維新以後である。岡田正之の『日本漢文学史』は朝紳文学時代と緇流文学時代との二篇だけである。即ち徳川時代については論述していないのである。その点について、同じ漢文講習科漢書課の市村瓊次郎は岡田正之の『日本漢文学史』初版の序において、「但本書に徳川時代の闕けるは大なる遺憾と謂はざるを得ず。天若し君に年壽を假して第三篇たる可き市民文學時代を完成せしめらんには、蕪林の幸恵これに過ぎたるものなかりしならん」⁴⁵⁰と述べた。つまり、時間的な原因として、室町時代まで論述してきたが、徳川時代の漢文学については、作者である岡田正之はその『日本漢文学史』において展開していなかったのである。要するに、岡田正之は徳川時代の漢文学について展開していなかった理由として、徳川時代の漢文学が重要ではないというわけではなく、時間的な原因で展開しようとしてもできなくなった。その故に、本論は岡田正之が主張する日本漢文学の衰滅期が明治維新以後であると主張する。

第三、神田喜一郎が主張する日本漢文学の衰滅期は日清戦争以後である。神田喜一郎の考えでは、漢文学が衰滅の気運に転落した徴侯の著しく現れてきたのは大体日清戦争（1894～1895）を契機として、一般人の中国文化に対する態度が急変して以後のことである。⁴⁵¹つまり、神田喜一郎は日本漢文学の衰滅期が1894年に始まった日清戦争以後になったのであり、明治維新以来、日清戦争の頃までの漢文学は、必ずしも衰滅の一路を辿ったのではなかったと指摘した。

上述したように、芳賀矢一と岡田正之は従来研究通りに、日本漢文学の衰滅期が明治維新以後であると主張するが、神田喜一郎は日本漢文学の衰滅期が日清戦争以後であると主張する。

⁴⁴⁹ 芳賀矢一：国文学史十講、東京：富山房、1899年12月31日発行、p. 25。

⁴⁵⁰ 市村瓊次郎：『日本漢文学史』序、『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。

⁴⁵¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 179。

(三) 盛期に関する主張の相違

すでに述べたように、芳賀矢一は頼山陽が『拙堂文話』の序に言っている平安朝時代と徳川時代を指している「文運両開」を引用して、平安時代は後の徳川時代と共に、漢学の最も盛んであった時代であると指摘した。本論は平安時代と徳川時代を芳賀矢一の「二つの盛期」という芳賀矢一の日本漢文学史論における時代区分論の一部と見たいのである。

岡田正之は平安朝前期が日本漢文学の強盛期であると言っている。その理由としては、平安前期において、勅撰詩集である『凌雲集』、『文化秀麗集』、『経国集』三集の登場と弘法大師空海の『文鏡秘府論』『性霊集』などの漢文学作品により、日本漢文学の盛期を迎えた。また、五山時代の緇流文学発展の流れを唐詩の初、盛、中、晩四期にたとえ、緇流文学の詩文の格は大に王朝を凌駕し、徳川時代の文運を挑発するという岡田正之の論述を踏まえ、五山時代の緇流文学も岡田正之の主張する一つの盛期と言えるのであろう。

神田喜一郎は平安前期の第一期を第一の盛期、五山文学の隆盛を極めた南北朝時代を第二の盛期、江戸時代の第二期である元禄の初（1688年）から安永の末（1780年）に至る90年余りの間を第三の盛期という日本漢文学の「三つの盛期」を主張する。

上述したように、三人の一致している論点としては、平安前期が日本漢文学の盛期の一つである。本論の考えでは、神田喜一郎は芳賀矢一、岡田正之の日本漢文学の盛期に関する論述に基づき、上記の「三つの盛期」という主張を述べた。特に、芳賀矢一の「二つの盛期」と五山時代の漢文学が徳川時代の漢文学の基礎となるという論述は神田喜一郎の日本漢文学の「三つの盛期」という論点のために下ごしらえをしておいた。

第三節 代表的漢文学者と作品

一、代表的漢文学者と作品

1、弘法大師空海及びその漢文学について

芳賀矢一の『日本漢文学史』においては、弘法大師空海に関する紹介は直接的に触れたことはないが、空海の『文鏡秘府論』と『性霊集』に関する論説を通してその漢文学を述べた。まず、中国の『文心雕龍』をはじめとする修辞書を参酌して作った『文鏡秘府論』について、芳賀矢一は「奈良時代には作家も少なく、作品も残ってゐないが、平安朝に至つては修辞の書まで出て居るのは、面白い事である」「此の文鏡秘府論が支那で尊ばれて居る」⁴⁵²と評価した。次に、『性霊集』については、勅語とか、他の僧のために作った文とかのような「多く実用的なもの」「佛教に關するものばかり」であるが、その中に、慧果大和尚の碑文「大唐神都青龍寺故三朝国師灌頂阿闍梨慧果和尚之碑」を作ったことなどを以て見て、空海が当時文章家として有名であるのは疑いないと芳賀矢一が指摘した。即ち、芳賀矢一が弘法大師空海の漢文学功績に対する評価は高いと言えるのであろう。

岡田正之の弘法大師空海に関する評価は次の如くである。「弘法は真言宗を開きて、佛教界の面目を一新せしめたるものなるが、我が漢文學界の一大恩人としては、主として弘法大師を擧げざるべからず。大師は蔚然たる漢文の大家なり」「平安朝の初に在りて外典を將來して詩文の典型を與へたるものは大師を以て第一となさざるべからず」⁴⁵³「是吾人が大師を目するに漢文學の一家を以てし、漢文學史上に特筆して、謝恩の意を表せんとする所以なり」⁴⁵⁴つまり、岡田正之の考えでは、弘法大師は漢文学界の大恩人であり、漢文学の一家として、漢文学史上において特筆すべき漢文学者である。

また、弘法大師の詩文集『性霊集』に対し、岡田正之は「大師の文辭に一種の気魄光燄のおよぶべからざるものあるは時代の氣風に負へる所にして、偉僧の文辭に負かざるものと云ふべし」⁴⁵⁵と評した。つまり、岡田正之の考えでは、弘法大師の文辭には一種の気魄光燄の及ばないものがあつて、優れているが、大師の詩文も当時の時代氣風として、雕琢を極め、四六文の弊に陥っているのである。

大師の『文鏡秘府論』に対し、岡田正之は「大師の編著に係る書として最も尊ぶべ

⁴⁵² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房 1928年、p. 86。

⁴⁵³ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 125。

⁴⁵⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 133。

⁴⁵⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 129。

く、最も後學に嘉惠したるもの」⁴⁵⁶と評した。大師のこの『文鏡秘府論』を非常に高い位置につけた。

神田喜一郎は弘法大師空海の『文鏡秘府論』に対し、「この平安前期において、特に注意すべきことは、僧空海の『文鏡秘府論』の現れたことである。日本における最初の文學論で、その中國文學批評史や中国修辭学史の上に遺した功績は大きい」⁴⁵⁷と高く評価した。神田喜一郎の主張としては、空海の『文鏡秘府論』は高く評価すべき優れた文學論であり、中国に向かって最も誇りうる書の一つであり、中国においても、梁の劉勰の著した『文心雕龍』を除けば、前後一つもないものである。空海のその他の作品についてはあまり触れていない。

上述したように、弘法大師空海に対し、三人とも高く評価し、特に大師の『文鏡秘府論』に対して非常に高く評価した。芳賀矢一が主にその『文鏡秘府論』と『性靈集』に関する論述を通して大師の功績を表わした。岡田正之は弘法大師空海のことを詳しく紹介した上に大師の『文鏡秘府論』を特に高く評価し、大師は漢文学の一大家として、漢文学史上において特筆すべき漢文学者であるのはその主張である。神田喜一郎は特に空海の『文鏡秘府論』を評価し、空海の『文鏡秘府論』は優れた文學論であり、その中国文學批評史や中国修辭学史の上に遺した功績が大きいと主張する。

2、勅撰三詩集の特質

本論は芳賀矢一の論述を踏まえ、その『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』という勅撰三詩集の特質については、次のようにまとめてきた。①天皇の漢詩好み、平城、嵯峨、淳和の三天皇も大変漢詩文をお好みになった。②詩題の変化は『懷風藻』頃の単一より多様へと変わってきた。『懷風藻』頃の詩題は天皇を賛美し、宴に侍する詩、殊に天皇の詔に応じて詠んだ詩、即「侍宴」「応詔」のような詩が多いのは明らかである。③詩の体裁の変化は五言より七言へ変わってきた。「七言が多くなり、又平仄も非常にきびしくなった」⁴⁵⁸のである。

⁴⁵⁶ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 130。

⁴⁵⁷ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 153。

⁴⁵⁸ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 118。

勅撰三集の特質について、岡田正之は「三集の詩としては近體の形に屬する詩多けれども、吾人を悦ばしむるものは五七古の長篇及び雜言にあり。是等は縦横に筆を奔らせ、長短章を成し、大に平安朝初の特長を發揮したる感あり。」⁴⁵⁹と云っている。奈良朝時代と異なるのは七言詩形の非常に多いことと、七絶詩形の流行の傾向であると岡田正之が言っている。

神田喜一郎もすでにその『日本の漢文学』において、奈良朝時代即ち、『懷風藻』頃の五言詩が大半を占めているのに比べて見れば、勅撰三詩集には七言詩が圧倒的が多くなっていると指摘した。また、神田喜一郎は「單にそうした形式上の變化ばかりに止まらない。もっと重要なことは格調の變化である」⁴⁶⁰と主張する。例としては、初唐の四傑をはじめ、当時の諸家が喜んで作ったものに七言行体の樂府がある。

まとめて言うと、三人の勅撰三詩集の特質に関する共通している観点としては、『懷風藻』頃の五言詩が大半を占めていると異なって、勅撰三詩集には七言詩が圧倒的が多くなっているということである。つまり、芳賀矢一、岡田正之両氏のこの点に関する論点は神田喜一郎が言っている「前人のすでにしばしば指摘したところ」⁴⁶¹である。

3、 緇流文学重視の強調

芳賀矢一は主に虎関師鍊、雪村友梅、義堂周信などを中心とする漢文学大家について論述を行った。その主な論点は次の如くである。①文学の方面から見ると、漢文学中最も注意すべき『元亨釈書』と文学スタイルの新しい傾向が現われた『濟北集』を以て、「虎関は先づ當時の禪僧中第一の人であらう」⁴⁶²。②雪村友梅の『岷峨集』がこの時期の頂点をなす作風を樹立した。③義堂周信と絶海中津は同じ土佐の人で、五山文学中の白眉である。④中巖円月は多作家であり、その『東海一漚集』には詩文が多く、その對句も甚だ巧なものがある。芳賀矢一の言っているように、「鎌倉室町時代の學界・文學界は、外觀大に衰微して居るやうであるが、しかしそれは表面だけで、實は其の裏面に於て大勢力を養成し、以て徳川時代に至ったのである」⁴⁶³。そのため、

⁴⁵⁹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 124。

⁴⁶⁰ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 150。

⁴⁶¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 150。

⁴⁶² 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 168。

⁴⁶³ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 194。

本論の主張としては、鎌倉室町時代、表面上漢文学が衰えたようであるが、五山禅僧の手により、中国宋元より新しい文明をもたらして、五山文学の隆盛を促す一方、後の徳川時代の漢文学のために、基礎を作っておいた。

岡田正之はとりわけ五山時代の緇流文学を評価した。まず、「緇流文学時代も亦これに類するものあり。鎌倉時代は初唐に擬すべく、南北時代は盛唐に比すべし。そして室町の前後期は中晩の二唐に配すべし。唐詩の権威は盛唐に在る如く、緇流文学を代表すべきは南北朝を擧げざるべからざるなり」⁴⁶⁴の言っているように、岡田正之は五山時代の緇流文学発展の流れを中国の最も盛んな時代における最盛期の文学スタイルである唐詩の初、盛、中、晩という時期にたとえる。また、「南北朝・室町の學風の新に宋學に傾き、詩文の格は大に王朝を凌駕し、而も漢文學を地方に普及せしめ、徳川時代の文運を挑發したること」⁴⁶⁵と指摘した。五山時代の緇流文学発展の流れを唐詩の初、盛、中、晩四期にたとえ、緇流文学の詩文の格は大に王朝を凌駕し、徳川時代の文運を挑發することを通して、岡田正之は五山時代の緇流文学を非常に高く評価した。

本論の考えとして、神田喜一郎が芳賀矢一、岡田正之両氏の五山時代の禅林文学に関する論述を踏まえ、五山文学の隆盛を極めた南北朝時代を第二の盛期とすることから見ると、本論は神田喜一郎も芳賀矢一、岡田正之両氏と同じ、五山時代の緇流文学を高く評価した。

4、五山文学の開祖について

芳賀矢一は宋から来た一寧一山が、「五山文學の起る初の人である」⁴⁶⁶と言っている。本論では、それは芳賀矢一がただ一寧一山の門人に虎関師錬、雪村友梅のような大漢文学者があることによる論述である。つまり、一寧一山の五山禅僧に対する漢文上の教えの面から述べた。

五山文学の開祖について、岡田正之は直接に言及したことがないが、五山文学の代表者として、「前には虎関・雪村・中巖等を擧げ、後には夢窓・義堂・絶海を推さざる

⁴⁶⁴ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、pp. 279～280。

⁴⁶⁵ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p. 424。

⁴⁶⁶ 芳賀矢一『日本漢文学史』富山房1928年、p. 159。

べからず」⁴⁶⁷と言っているうえに、虎関師鍊の地位について、「學問の博洽にして文辭の卓拔せるものは、五山文學僧中虎關を以て巨擘となさざるべからず。若し王朝に其の比を求めば獨り空海一人あるのみ」⁴⁶⁸と評価した。そのため、本論は岡田正之の主張する五山文学の開祖と言えは虎関師鍊のほうが妥当であると思う。

五山文学の開祖について、神田喜一郎は芳賀矢一が主張する一寧一山を否定し、岡田正之の主張する虎関師鍊に賛成すると思う。神田喜一郎は「五山文學の開祖としては、やはり虎関師鍊を推すのが妥當であろうと思う。その學問の博く、識見のすぐれていることは、じつに驚くべきものがあつた。殊に中國の文學に對して、そうである」⁴⁶⁹と主張する。また、芳賀矢一が主張する一寧一山を否定する理由については、「一寧一山は、じつのところ、ほとんど純文學的な作品を遺しておらない。また文學そのものについて、どれほど深い造詣があつたのか、それもよく分からない」と言っている。つまり、一寧一山の唯一の著書として現存する『一山國師語録』からは、五山文学の開祖と推さねばならぬほどのものは見当たらないようである。それは、神田喜一郎が京都中国学の研究者として、考証方法を重視するわけであると思う。

5、荻生徂徠の漢文学

岡田正之の『日本漢文学史』は室町時代までであるので、荻生徂徠の漢文学について、論述していない。ここにおいては、芳賀矢一と神田喜一郎両氏の荻生徂徠の漢文学に関する論述を中心として述べたい。

芳賀矢一は荻生徂徠の漢文学が和習を脱し、純然たる漢詩文であると評した。その漢文学の特徴として、次のように述べた。第一の特徴は、荻生徂徠の文章は古文辞学と経学とを結合したこと。第二の特徴としては、徂徠の詩には、風雅あり、あらゆる体が皆備わっていること。また、徂徠の詩には、美人や恋を詠じたもの、つまり男女の情緒を映したものも極めて多い。荻生徂徠、服部南郭の漢文学を以て、江戸時代漢文学の最盛期を迎えた。

神田喜一郎の荻生徂徠の漢文学に対する態度はすでに述べた。荻生徂徠はいわゆる

⁴⁶⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.303。

⁴⁶⁸ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.303。

⁴⁶⁹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.162。

古文辞学を首唱した。その気魄の雄大なことは、白石を圧倒するものがあり、日本の漢文学として中国にも誇ってよいものである。その詩文に関する主張は、「東坡・山谷・三體詩・瀛奎律髓の類、皆損友と可被思召候。詩は唐詩選・唐詩品彙、此等を益友と可被思召候。明朝の李空同・何大復・李于鱗・王元美、詩文宜敷候」（『徂徠先生答問書』）ということである。当時の詩人たちは皆、この主張に従って、漢魏盛唐の詩を極力学んだものである。「一時の盛を誇ったのみならず、その流れはずっと後世までも長く絶えなかった」⁴⁷⁰と神田喜一郎は評した。

上述したように、芳賀矢一、神田喜一郎両氏も荻生徂徠の漢文学を重視し、江戸時代漢文学の盛期を示しているシンボルであると思う。

二、まとめ

本節では、芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏が日本漢文学を論述する時に、各時代を代表する漢文学者及びその漢文学作品に対する主張の相違点について述べてきた。本論は主に、弘法大師空海及びその漢文学、勅撰三詩集の特質、緇流文学重視の強調、荻生徂徠の漢文学、五山文学の開祖等の面について、三人の主張の異同について論述を行った。時代的な原因で、芳賀矢一、岡田正之両氏の論点は簡单的、考証が足りないという不足があるが、後世の神田喜一郎のような学者に重要な参考を提供した。

第四節 本論の究明したことと今後の課題

一、本論の究明したこと

本論は芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学に関する論述を整理し、考証などを行い、以下のことを究明した。

（一）日本漢文学とは何か

日本漢文学とは日本人が中国の文字を用い、中国の語法に従って創作した文学であ

⁴⁷⁰ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984

る。「日本の漢文学」は本質的に間違いなく日本文学に属する一方で、また中国文学という一つの大きな流れから岐れ出たところの支流である。日本漢文学は「二重性格」即ち「二面性」を有する。

本論は芳賀矢一の日本漢文学史を日本文学史の一部とすることと神田喜一郎の言っている「日本の漢文学」の「二重性格」により、日本の漢文学に対する正しい捉え方としては、日本文学の一環として取り扱いながら、中国文学の支流として扱うことである。つまり、日本漢文学を扱うには、その「二重性格」即ち「二面性」を重要視しなければならない。

1、中国文学史の再現

本論の主張として、日本漢文学史というのは一つの中国文学史が日本において再現されたものであるとも言える。即ち、日本漢文学史は中国文学史の「日本的」な展開である。

下記の表の通り、奈良時代の漢文学は漢魏六朝、初唐文学の再現であり、第一種類は『離騷』『文選』『庾信集』という中国文学の古典であり、第二種類は『太宗文皇帝集』『許敬宗集』というような唐の宮廷を中心とした当時の新文学であり、第三種類は『弘明集』（梁・僧祐）及び『広弘明集』（唐・道宣）、『鏡中集』（釈靈実）のような仏教文学書である。

平安時代において、前期は上官儀、初唐の四傑をはじめ、李嶠、劉希夷、陳子昂、杜審言、沈佺期、宋之問、王維、李白、王昌齡のような唐人の詩文集、最も新しいのは白居易、元稹の集、また総集『河岳英靈集』が日本に渡来し、平安後期に入ると、日本の漢文学はほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった。⁴⁷¹

五山文学時代は、南北朝時代から室町時代にかけて、唐宋大家の古文、例えば、杜甫、韓愈、柳宗元、蘇軾、黄庭堅、陸游らの集が五山版として印刷された。

江戸時代において、第一期（1596～1687）は五山文学の後を受けて宋王朝の理知的詩風を学び、第二期（1688～1780）は秦漢盛唐の詩文を尊ぶ。第三期（1781～1866）に入ると、頼山陽・梁川星巖は明や清の詩、広瀬淡窓は唐の詩、広瀬旭荘は宋の詩を喜ぶ。

年 10 月 15 日、p. 172。

⁴⁷¹ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻 9、東京：株式会社同朋舎、1984 年 10 月 15 日、p. 158。

そして明治時代になり、明治初期においては、小野湖山(1814～1910)、大沼枕山(1818～1891)、森春涛(1818～1888)が枕・湖・春と並び称えされた。枕山は宋の陸游を宗年、湖山は宋の蘇軾を学び、春涛は清朝の袁枚や陳文述などの極新しい詩風を取り入れた。明治中期に入ると、森槐南(1863～1911)は清の呉偉業や陳文述を学び、国分青涯(1857～1944)は明の梨夢陽を範とし、本田種竹(1862～1907)は清の王士禎を奉じ、枕・湖・春について、時代を担って立った。⁴⁷²

2、「日本的」な漢文学とは何か

上記のように、中国文学史が日本において、再現された同時に、日本の漢文学は「日本的」な展開を行い、三つの盛期を迎えた。三つの盛期とは、日本漢文学史において、日本漢文学が平安時代、五山文学時代、江戸時代において、それぞれ発展のピークに達したことである。芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎の日本漢文学史に関する論述に基づき、本論はその三つ盛期において、平安朝の漢文学を宮廷文学、五山時代の漢文学を禅林文学、江戸時代の漢文学を士民の文学としてそれぞれ栄えたと主張する。その故に、「日本的」な漢文学とは日本漢文学史上、日本という本土において、独自の平安時代、五山文学時代、江戸時代という日本漢文学発展の三つの盛期をなした特色を有する漢文学であると思う。

(二) 時代区分から見る日本漢文学史論とは何か

芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学史に関する時代区分論に基づき、本論は日本漢文学史論とは飛鳥時代が漢文学の黎明期、奈良時代が漢文学の少壮期、平安時代が漢文学の第一盛期、五山文学時代が漢文学の第二盛期、江戸時代が漢文学の第三盛期、明治時代が漢文学の衰滅期ではないという六つの発展時期、及び平安前期、五山時代の南北朝時代、江戸時代の第二期即ち元禄元年(1688)～安永末(1780)という三つの盛期である。

飛鳥時代は漢文学の黎明期である。従来多くの学者は飛鳥時代より前、大体紀元三世紀にあたる応神天皇の治世に百濟から『論語』と『千字文』とが博士王仁によってもたらされたという伝説により、漢文学の黎明期をこの時代に擬する。本論は神田喜

⁴⁷² 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、pp. 180～181。

一郎の「純文学論」と分権考証に基づき、飛鳥時代になっても、純文学に属する作品もほとんど現れなかったのも、ただ漢文学の黎明期であると主張する。

奈良時代は漢文学の少壮期である。奈良朝時代の漢文学の主流をなすものは詩である。奈良朝時代は、中国文学史のうからいうと、いわゆる盛唐の時代で、中国文学の精華である詩が全盛を極めた時代である。つまり、奈良時代はこの盛唐の時代にあたる。多くの研究者は奈良朝の漢文学が盛唐文学の影響を受けていたと考えられた。それに対して、本論は神田喜一郎の論述を踏まえ、奈良朝時代の漢文学は『離騷』『文選』『庾信集』という中国文学の古典、第二種類は『太宗文皇帝集』『許敬宗集』というような唐の宮廷を中心とした当時の新文学を範とし、一種の台閣体を主流とし、「典雅」「莊重」という初唐の格調を重視すると主張する。それにもかかわらず、奈良朝時代の代表的な漢文学作品としての『懷風藻』に見える作家は、わずか 64 人に過ぎなく、その作品も 120 篇を数えるのみである。神田喜一郎の言っている「奈良朝時代の漢詩が、まだまだ幼稚なものであった」⁴⁷³ように、本論は奈良朝時代がまだ盛期に達していないので、漢文学の成長期あるいは少壮期であると思う。

平安時代は漢文学の第一盛期である。平安前期は奈良朝時代のあとを受け、日本漢文学がますます隆盛の運に向い、日本漢文学の第一盛期を迎えた。平安時代の代表的な漢文学作品として、『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』という勅撰三集と空海(774-835)の『文鏡秘府論』のようなものがある。『懷風藻』には五言詩が大半を占めているのに対し、この三つの三集には七言詩が圧倒的に多くなっている。空海の『文鏡秘府論』は日本における最初の文学論であり、「その中國文學批評史や中國修辭學史の上に遺した功績は大きい。」⁴⁷⁴とにかく、奈良朝時代の作品に比べ、長足の進歩をしていて、日本漢文学史上の第一盛期とする。平安後期になると、白居易の詩文が流行した。日本の漢文学はほとんど白居易一色に塗りつぶされてしまった。

五山文学時代は漢文学の第二盛期である。南北朝時代から室町時代にかけて、いわゆる五山版として、杜甫、韓愈、柳宗元、蘇軾、黄庭堅、陸游らの集が印刷された。五山文学は京都五山禪僧を中心、南北朝(1336~1392)に隆盛、室町時代(1393~1573)

⁴⁷³ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.144。

⁴⁷⁴ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.153。

中期にかけて、虎関師錬、雪村友梅、中巖円月、義堂周信、絶海中津のような大家が輩出した。本論は南北時代を日本漢文学史上の第二盛期とする。虎関には詩文集『济北集』、雪村友梅には詩集『岷峨集』、中巖円月には詩文集『東海一漚集』、義堂周信には『空華集』(20巻)、中津絶海には『蕉堅稿』などの漢文学作品がある。

江戸時代は漢文学の第三盛期である。第一期(1596~1687)は五山文学の後を受けて宋王朝の理知的詩風を学ぶ。第一期(1596~1687)は秦漢盛唐の詩文を尊ぶ。江戸漢文学の先駆である木下順庵(1621~1698)は盛唐のか格調の高い詩を理想とし、護園派の荻生徂徠(1666~1728)は明の李攀龍・王世貞の「文必秦漢、詩必盛唐」(格調論)を祖述し、古文辞学を提唱し、漢魏盛唐の詩を極力学んだ。この荻生徂徠の護園派には天下の人材が集まって、一時の盛を誇ったのみならず、その流れはずっと後世までも長く絶えなかった。⁴⁷⁵というので、この時期を日本の漢文学の第三盛期とする。第三期(1781~1866)においては、頼山陽・梁川星巖は明や清の詩、広瀬淡窓は唐の詩、広瀬旭荘は宋の詩を喜ぶ。

明治時代は漢文学の衰滅期ではない。明治初期においては、小野湖山(1814~1910)、大沼枕山(1818~1891)、森春涛(1818~1888)が枕・湖・春と並び称えされた。枕山は宋の陸游を宗年、湖山は宋の蘇軾を学び、春涛は清朝の袁枚や陳文述などの極新しい詩風を取り入れた。明治中期に入ると、森槐南(1863~1911)は清の呉偉業や陳文述を学び、国分青涯(1857~1944)は明の梨夢陽を範とし、本田種竹(1862~1907)は清の王士禛を奉じ、枕・湖・春について、時代を担って立った。

(三) 独自の発展

日本の漢文学は中国文学からの影響を受けながら、日本という本土において、独自の発展を迎えた。その中には、空海の漢文学作品である『文鏡秘府論』と『性霊集』、五山禅僧の漢文学は日本漢文学の独自の発展の結果であると言えるのであろう。

1、空海とその『文鏡秘府論』

平安時代の漢文学において、特に注意すべきものは空海の『文鏡秘府論』である。中国の『文心雕龍』をはじめとする修辞書を参酌して作った『文鏡秘府論』について、

⁴⁷⁵ 神田喜一郎：『日本の漢文学』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p.172。

芳賀矢一は「奈良時代には作家も少なく、作品も残ってゐないが、平安朝に至つては修辭の書まで出て居るのは、面白い事である」「此の文鏡秘府論が支那で尊ばれて居る」⁴⁷⁶と評価した。その『文鏡秘府論』に対し、岡田正之は「大師の編著に係る書として最も尊ぶべく、最も後學に嘉惠したるもの」⁴⁷⁷と評した。大師もこの『文鏡秘府論』を非常に高い位置につけた。神田喜一郎も「日本における最初の文學論で、その中國文學批評史や中国修辭学史の上に遺した功績は大きい」⁴⁷⁸と空海の『文鏡秘府論』を高く評価した。上述したように、弘法大師空海に対し、三人とも高く評価し、特に大師の『文鏡秘府論』に対して非常に高く評価した。

確かに、空海の『文鏡秘府論』は高く評価すべき優れた文學論であり、中国に向かつて最も誇りうる書の一つであり、中国においても、梁の劉勰の著した『文心雕龍』を除けば、前後一つもないものである。⁴⁷⁹

2、禪林文学である五山禪僧の漢文学

五山の漢文学は南北朝(1336～1392)から、室町時代(1393～1573)中期にかけて京都五山禪僧を中心とした禪僧の間に發達した文學である。五山文學時代において、五山禪僧の手により、中国宋元より新しい文明をもたらして、五山文學の隆盛を促す一方、後の徳川時代の漢文學のために、基礎を作っておいた。

「緇流文學時代も亦これに類するものあり。鎌倉時代は初唐に擬すべく、南北時代は盛唐に比すべし。そして室町の前後期は中晩の二唐に配すべし。唐詩の權威は盛唐に在る如く、緇流文學を代表すべきは南北朝を擧げざるべからざるなり」⁴⁸⁰の言っているように、岡田正之は五山時代の緇流文學發展の流れを中国の最も盛んな時代における最盛期の文學スタイルである唐詩の初、盛、中、晩という時期にたとえる。また、「南北朝・室町の學風の新に宋學に傾き、詩文の格は大に王朝を凌駕し、而も漢文學

⁴⁷⁶ 芳賀矢一『日本漢文學史』富山房 1928年、p. 86。

⁴⁷⁷ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文學史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日發行、p. 130。

⁴⁷⁸ 神田喜一郎：『日本の漢文學』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』卷9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 153。

⁴⁷⁹ 神田喜一郎：『日本の漢文學』、『墨林閑話』、『神田喜一郎全集』卷9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日、p. 154。

⁴⁸⁰ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文學史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日發行、pp. 279～280。

を地方に普及せしめ、徳川時代の文運を挑発したること」⁴⁸¹と指摘した。

南北朝時代において、虎関師錬、雪村友梅、中巖円月、義堂周信、絶海中津のような大家が輩出した。神田喜一郎の考えでは、南北時代を日本漢文学史上の第二盛期である。虎関には詩文集『済北集』、雪村友梅には詩集『岷峨集』、中巖円月には詩文集『東海一漚集』、義堂周信には『空華集』(20巻)、中津絶海には『蕉堅稿』などの漢文学作品がある。

これまでの日本の漢文学が宮廷中心のものであったのを、新しく禅林中心のものに変化したことも、日本の漢文学の歴史の上に大きな変革をもたらしたものと言わなければならない。また、禅僧を中心とし、漢文学発展史上の重要な時代を担って立ったのは世界文学史の上においても、特殊的な存在であると思う。

二、研究成果

本論は芳賀矢一、岡田正之、神田喜一郎三氏の日本漢文学に関する著作を対象とし、その漢文学に対する定義、漢文学の黎明期、衰滅期及びその盛期に関する主張を含む時代区分論、各時代における代表的な漢文学者及びその漢文学作品について、分析、整理し、考証した。「近代以降日本漢文学史論」という研究内容をふまえて、2017年度中国教育部人文社会科学研究若手プロジェクトとして、専門家に認められ、助成金を獲得した。⁴⁸²

三、今後の課題

今後の課題としては、一つは引き続き安井小太郎、牧野謙次郎、久保天随、市川本太郎、戸田浩暁、緒方惟精、猪口篤志、中村幸彦、三浦叶など及びその漢文学の論点について考察し、近代以降日本漢文学史論がもっと充実しているようにしたいと思う。

もう一つは、テーマごとに、例えば日中漢文学の比較研究、そして詩人、文人などを研究対象として頑張っていきたいと思う。

⁴⁸¹ 岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行、p.424。

⁴⁸²2017年度中国教育部人文社会科学研究若手プロジェクト プロジェクト番号：17YJC752026。
<https://www.sinoss.net/uploadfile/2017/0727/20170727071654997.pdf> ご参照ください。

また、五山僧侶について、芳賀矢一から猪口篤志の『日本漢文学史』はそれぞれのように叙述したかより深く究明していきたいと思う。

主な参考文献

序章

高等学校外语专业教学指导委员会日语组編：『高等院校日语专业基础阶段教学大纲』、大連：大連理工大学出版社、2001年出版。

三上参次、高津鋏三郎：『日本文学史 上巻』、東京：金港堂本店、1890年出版。

中村光夫、臼井吉見、平野謙：『現代日本文学全集 別巻1 現代日本文学史』、東京：筑摩書房、1959年。

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日。

芳賀矢一著、佐野保太郎編：『日本漢文学史』『芳賀矢一遺著』、東京：富山房、1928年発行。

陈福康：『日本漢文学史』上巻、上海：上海外语教育出版社、2011年。

陈福康：『日本漢文学史』中巻、上海：上海外语教育出版社、2011年。

陈福康：『日本漢文学史』下巻、上海：上海外语教育出版社、2011年。

岡田正之：『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。

王向遠：「我国的日本汉文学研究的成績と問題」『東北亜外語研究』、2013(1), pp. 43～51。

第一章

久松潜一編：『明治文学全集 44 落合直文 上田萬年 芳賀矢一 藤岡作太郎集』、東京：筑摩書房、1984年。

佐野保太郎：『日本漢文学史』の「凡例」、東京：富山房、1928年。

芳賀矢一著、佐野保太郎編：『日本漢文学史』『芳賀矢一遺著』、東京：富山房、1928年。

浮田真弓：「大正期の漢文科存廃問題に見る漢文観：明治期における漢文科存廃問題との比較を通して」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第41号、2010年、pp. 1～8。

芳賀矢一：国文学史十講、東京：富山房、1899年12月31日発行。

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』巻9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日。

神田喜一郎：『岩波講座日本文学史第16巻 一般項目 日本の漢文学』東京：岩波書店、1959年1月10日。

鹿持雅澄：『萬葉集古義』首巻、東京：国書刊行会、1898年7月1日発行。

風巻景次郎：『中世の文学伝統：日本文学論』、1948年4月10日初版発行。

内藤湖南：『内藤湖南全集』第9巻、1997年7月22日初版第4刷発行。

久曾神昇：『伊達本古今和歌集』、東京：笠間書院、1995年。

西下経一：『日本文学史第4巻 平安時代前期』上、東京：三省堂、1942年11月30日初版発行。

紀貫之著、木村正中校注・訳：『新編日本古典文学全集 13 土佐日記』、東京：小学館、1995年10月10日第1版第1刷発行。

斎藤拙堂：『拙堂文話』一の巻一、古香書屋版。

青木正児：『青木正児全集第二巻 支那文学芸術考』、東京：春秋社、1970年7月20日第1刷発行。

日本史用語研究会：『必携日本史用語』、東京：実教出版、2016年2月1日五訂版第2刷発行。

- 樋口達郎氏：『継承と超克：賀茂真淵の老子受容を巡って』、求真（20）、2014、pp. 15-34。
- 小島憲之 [ほか] 校注・訳：『新編日本古典文学全集 2 日本書紀①』、東京：小学館、2006年8月20日第1版第6刷発行。
- 辻善之助：『増訂海外交通史話』、東京：内外出版株式会社、1930年5月15日発行。
- 宋范曄撰、唐李賢等注：《後漢書》、北京：中華書局、1965年5月第1版。
- 塙保己一編：『群書類従』第十六輯、東京：経済雑誌社、1901年12月再翻刻。
- 小島憲之 [ほか] 校注・訳：『新編日本古典文学全集 3 日本書紀②』、東京：小学館、2006年8月20日第1版第6刷発行。
- 千田稔（2007）：「天皇」号成立推古朝説の系譜——もう一つの邪馬台国論争の状況。日本研究, 35, pp. 405~419。
- 津田左右吉：「天皇考」『津田左右吉全集第三巻 日本上代史の研究』、東京：岩波書店、1963年12月17日発行。
- 五味文彦等：『詳説日本史研究』、東京：山川出版社、1998年9月20日第1刷発行、2006年12月20日第11刷発行。
- 沖森卓也：『日本の漢字 1600年の歴史』、東京：ベレ出版、2011年10月25日初版発行。
- 沖森卓也：『日本語全史』、東京：筑摩書房、2017年4月5日。

第二章

- 斯文会編：「雑録・故岡田正之先生年譜」『斯文』9（10）、1927年10月。
- 瀧川亀太郎：「『日本漢文学史』序」『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。
- 岡田正之：『近江奈良朝の漢文学』、奈良：養徳社、1946年。
- 西村時彦：「古典科師友寿讌記」『碩園先生遺集』第3巻、大阪：懐徳堂記念会、1936年10月1日。
- 町田三郎：『明治の漢学者たち』、東京：研文出版、2009年4月10日第1版第2刷発行。
- 三上参次：「『日本漢文学史』序」『日本漢文学史』岡田正之著、東京：共立社書店、1929。
- 長沢規矩也：岡田正之著、山岸徳平・長沢規矩也補『日本漢文学史』増訂版、東京：吉川弘文館、1954年12月10日発行。
- 魏徴、長孫無忌等撰：「列傳第四十六 東夷 倭國」『隋書』巻81、[出版地不明]：汲古閣蔵本、順治13[1656]。
- 『新訂増補国史大系 第1巻下 日本書紀』、東京：吉川弘文館、1967年02月28日発行。
- 范曄：「列伝巻七十五 東夷」『四部叢刊史部 百納本二十四史 後漢書』巻八十五、北京：商務印書館、1931年8月初版。
- 高松寿夫：『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊、2013。
- 宿久高、尹允鎮：「『懐風藻』与中国古典文学的関連」『日語学習与研究』、2005年第3期、pp. 57~63。
- 土佐秀里：「文武天皇の漢詩—その歴史的背景と文学史的意義をめぐって—」『日本漢文学研究』3、2008-03、p. 37。
- 小島憲之校注：『日本古典文学大系 69 懐風藻、文華秀麗集、本朝文粹』、東京：岩波書店、1964年。
- 小島憲之：『上代日本文学と中国文学——出典論を中心とする比較文学的考察——』、東京：塙書房、1971年10月15日再版発行。
- 孫久富：「『古事記』の天地開闢と中国古典」『相愛大学研究論集』（通号 11）1995-03、pp. 218~197。
- 『新訂増補 国史大系第2巻、続日本紀』、東京：吉川弘文館、1966年09月30日発

行。

齋藤拙堂：『日本藝林叢書第四卷 拙堂文話』、鳳出版、1972年。

頼山陽著、児玉旗山輯録：『山陽先生書後』卷中、京都：若山屋茂介、天保7年（1836）。

吳承学：「關於唐詩分期的幾個問題」『文学遺産』、1989（3）、pp.100～104。

高 棟：『唐詩品彙』、上海：上海古籍出版社、1988年7月第2版。

久松潜一：『日本文学史 中世』、東京：至文堂、1959年11月25日。

第三章

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』卷9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日。

東方学会編：『東方学回想V 先学を語る（4）』、東京：刀水書房、2000年5月20日。

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』卷5、東京：株式会社同朋舎、1993年1月20日。

吉川幸次郎：『吉川幸次郎全集』卷25、東京：筑摩書房、1986年6月。

与謝野寛等編：日本古典全集『懷風藻、凌雲集、文華秀麗集、經國集、本朝麗藻』、東京：日本古典全集刊行会、1926年5月3日。

經濟雜誌社 編：『国史大系 古事記・祝詞・風土記』7卷、東京：經濟雜誌社、1898年8月6日。

小島憲之校注：『日本古典文学大系 69 懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』、東京：岩波書店、1964年6月。

王克讓：『河嶽英靈集注』、成都：巴蜀書社、2006年7月第1版。

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』卷6、東京：株式会社同朋舎、1984年4月30日。

猪口篤志：『日本漢詩鑑賞辞典』、東京：角川書店、1980年7月10日。

江村北海：『日本詩史』 岩波文庫、2005年。

浅野梅堂：『寒檠瓊綴』。

中根香亭：『香亭雅談』、吉川弘文館、1920年。

兪樾、佐野正巳：『東瀛詩選』、汲古書院、1981年6月發行。

内藤湖南：『日本文化史研究（上下）』、東京：株式会社講談社、1976年11月10日。

内藤湖南：『内藤湖南全集』第九卷、東京：筑摩書房、1997年12月8日。

連清吉：『日本近代的文化史学家：内藤湖南』、台北：台湾学生書局、2004年10月初版。

内藤湖南：『内藤湖南全集』第1卷、東京：筑摩書房、1970年1月10日。

青木和夫校注：『日本思想大系 1 古事記』第1卷、東京：岩波書店、1982年。

（梁）沈約：『宋書』、北京：中華書局、1974年。

庾信撰、（清）倪璠注：『庾子山集注（全三冊）』、北京：中華書局、1980年。

国史研究会編『国史叢書 古事談 續古事談 江談抄』、東京：友文社、1914年。

神田喜一郎：『明治文学全集 62 明治漢詩文集』、東京：株式会社筑摩書房、1983年。

終章

芳賀矢一著、佐野保太郎編：『日本漢文学史』『芳賀矢一遺著』、東京：富山房、1928年10月15日發行。

岡田正之著、山岸徳平、長澤規矩也補：『日本漢文学史』（増訂版）、東京：吉川弘文館、1954年12月10日發行。

神田喜一郎：『神田喜一郎全集』卷9、東京：株式会社同朋舎、1984年10月15日。

岡田正之、佐久節：『国訳漢文大成 文学部第二卷 文選 上卷』、東京：国民文庫刊行会、1921年6月5日發行。

吉川幸次郎：『吉川幸次郎全集 第一卷』、東京：筑摩書房、1984年3月15日。

芳賀矢一：『国文学史十講』、東京：富山房、1899年12月31日發行。